

---

~ 永遠の追憶 ~ Days of recollection

TAKA丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠の追憶 Days of recollection

### 【Nコード】

N4336A

### 【作者名】

TAKA丸

### 【あらすじ】

永遠の追憶は第一部、第二部で描かれなかった、涼達の中学生時代の物語です。その為、第一部、第二部での回想シーンと（若干の違いはありますが）重複する物語も含まれておりますが、こちらのみをお読みになる方の事を考慮した為ですので、予めご了承下さい。

## 第一章（前書き）

『永遠の追憶』第一部は、

```
http://www.digbook.jp/products|
info.php/products?id/7351?oscs
id=ff3d8bd5d83f041e11a60f121f4
83d8a
```

第二部は、

```
http://www.digbook.jp/products|
info.php/products?id/7448?oscs
id=ff3d8bd5d83f041e11a60f121f4
83d8a
```

にて販売致しております。

## 第一章

チーン……と余韻を残す仏壇の鐘の音を聞く度に、宇佐奈涼は不思議な気持ちになる。

どんなに心がささくれ立っている時にも、誰かに「まあまあ、落ち着けよ」と諭されているような気がして、何故か気持ちが軽くなるのだ。

「父さん、俺も今日から中学生だよ。しっかりやるから、安心してくれ……」

目を閉じたまま手を合わせ、今は亡き父、保の遺影に向かって涼は呟いた。

涼が小学三年生の時に交通事故で保が亡くなってから、こうして毎朝手を合わせるのは日課になっている。

それ以外にも事ある毎に、涼はこうして仏壇の前に座り、保に話しかけたりしている。

時々、保の声が聞こえたような気がして振り返ったりする事が今もある。

「父さんの母校なんだよね、翔峡中学……。勉強の方は自信無いけど、とにかく頑張るよ」

普段は寝癖が付いていたりしてボサボサの髪も、今日はちゃんとクシを入れて整えてある。

真新しい制服にはシワも汚れも無い。

小学生の時には毎日喧嘩や遊びで服を汚したり破ったりしてばかりだったが、さすがに中学進学初日には綺麗で当たり前前である。

もっとも、それもいつまでもつか怪しいものだが……。

「さて、そろそろ行くか。初日から遅刻じゃ格好つかないからな」涼が腰を上げた時、涼の母、環が仏間のドアを開け、

「ああ涼、丁度良かったわ」

と、顔だけを覗かせて言った。

腰まで伸ばした黒髪はツヤツヤとしていて、しっかりと手入れされているのが見て取れる。

中学生の子供を持つ母親としては、少し派手に思える服を着ているが、実際、環はまだ若い。

涼を身籠ったのが十九歳の時なのだから、それも当然である。

「母さん、何？」

「雛子ちゃんが迎えに来てるわよ」

「ヒナが？」

涼が『ヒナ』と呼んだのは、幼馴染の佐伯雛子の事である。

佐伯家は宇佐奈家のお隣さんであり、母親同士仲の良さも手伝って、家族ぐるみの付き合いが、もう十年以上になる。

まあ、早い話しが涼と雛子の付き合いも、生まれた時から現在まで続いているという事だ。

「何でいちいち迎えになんて来るかな、あいつは……」

「またそういう言い方する」

環は渋い表情を浮かべた。

「わざわざ来てくれてるんだから、ありがとって言って、一緒に行けばいいでしょうに」

「母さんには解ないんだろっなあ〜。こっつ……何て言うかさ、

微妙な男心っていうか、そういう類の物がさ」

「はあ？ つまんない事ゴチャゴチャ言っでないで早く行きなさい。

雛子ちゃん、玄関で待つてるんだから」

「嫌だよ。中学生にもなって、ヒナと一緒になんて行けるかよ。

行くなら勝手に一人で行って……」

涼が全て言い終わらない内に、つかつかと仏間に環が入って来たかと思うと、まさに目の覚めるような一撃が涼の後頭部に入り、パシーン！ と小気味良い音を立てた。

「いつてえ〜……。何すんだよ、いきなり！」

「お黙り！」

環は一喝すると、

「何て冷たい事を言うんだ、お前は！ この恩知らずっ！」

と、更に一撃を加えそうな勢いで言った。

「何がだよ！」

叩かれた後頭部に手をやりながら、涼は言った。

涼にしてみれば理由も告げられず、いきなり叩かれたのだから納得のしようが無い。

だが、環の『口撃』は涼の抗議で止むどころか、更に激しさを増して行く。

「何がじゃない！ お前ね、夏休みも冬休みも宿題が終わらないって泣きを入れた時、誰に助けてもらったんだ！ わたしが地方講演で家に帰れなかった時、風邪ひいてウンウン唸ってたお前を一晚中、一睡もしないで看病してくれたのは誰だ！ お前が大喧嘩して全身傷だらけになって帰って来た時、泣きながら心配してくれたのは誰だ！ 感謝と尊敬の念を持って、その人の名を言うてみいっ！」

「そ、そりゃあヒナだけど、それとこれとは話が……」  
「違うない！」

環は更に一步前へと踏み出し、涼の顔に思い切り自分の顔を近付けると、

「中学最初の登校よ？ 記念すべき第一歩よ？ それをお前みたいな、ごく潰しのロクでなしと一緒に踏み出してくれようってのよ？

心の底からありがたいと思いなさい！」

と、本心から言った。

「そ、それが実の息子に向かって言う言葉があっ!？」

「何が実の息子だ。 お前みたいなのがそうかと思うと、母さん情け無くて涙が出そうだね。 お父さんも草葉の陰で泣いてることだらうね！」

「そこまで言うか？ 普通……。 とにかく、俺はヒナと一緒になんて行かな」

最後の一言が涼の口から出る前に、ゴン！ という鈍い音と共に、環の一撃が再び涼の頭を襲った。

今度はグーでの攻撃だった為、先程の物とは威力が段違いである。  
「いててて……。ぼ、暴力反対！」

「わたしが優しく言ってる内に、さっさとお行き」

「どこが優しいんだ、どこが……」

涙目で頭を摩りつつ、精一杯の抗議を試みる涼の頭の中には、生  
前の保が言っていた『母さんを本気にさせるな』という言葉が  
蘇っていた。

もうそろそろ逆らうのをやめにしないと、確実に今よりも痛い思  
いをする事になるだろう。

「……行って来ます」

「うむ、よろしい。最初からそうやって、素直にしていればいいの  
よ」

ふふんと勝ち誇る環とは対照的に、涼の方は頭を押さえたまま、  
苦虫を噛み潰したような表情になっている。

悔しいとは思っても、例えば涼が全力を出そうが不意を突こうが、  
環には全く歯が立たないのだ。

若い頃には地元のチンピラに『無敵の鬼神』とまで言われて  
恐れられていた保でさえ、環には逆らう事が出来なかったというの  
だから、環の本気がどれ程の凄まじさか、想像に難くない……。

「あ、あの……」

「ん？ あら、雛子ちゃん」

環が振り返ると、仏間の入り口から申し訳無さそうに中を覗き込  
んでいる雛子の顔が視界に入った。

黄色いリボンでポニーテールに結い上げた髪は、小学生の頃から  
の雛子のトレードマークだ。

元々身長が低いのに、身体を縮めるようにしているので更に小さ  
く見える。

「えと……涼ちゃんがなかなか出て来ないから、何かあったのかと  
思っって心配になって、その……」

ちよっとタレた感じがする大きな瞳が、涼をじっと見ている。

先程まで雛子と一緒に行くのを嫌がっていた涼だったが、その視線に捉えられると、何故か嫌だと言えなくなってしまうた。

子供の頃からいつでもそうだった。

雛子が瞳をウルウルさせて『ごめんね』 などと言った日には、涼は一切の抵抗力を奪われてしまうのだ。

「ごめんね、いつまでも待たせちゃって。このグズが朝っぱらからわたしに甘えるもんだから」

そう言うと、環はとびきりの笑顔を浮かべて雛子に抱き付き、スリスリと頬擦りを始めた。

これは雛子が子供の頃からされている、恒例の『ご挨拶』である。

小さい頃の涼は、環が雛子にばかりこれをやるので、少しヤキモチを焼いた程だ。

「こんな馬鹿の事を気にかけてくれるなんて、何て優しい子なんでしょう。環ちゃんは感動の涙で前が見えなくなりそうだわ……」

「お、おば様ったら……」

「何が環ちゃんだ。前が見えないのは老眼だろ」

涼としたら聞こえないくらいの小声で言った筈なのに、環の耳にはしっかりと届いていたようで……。

「……なあに？ 涼。若くて優しくて、その上こんなに美しいママに、何かお話ししたい事があるのかな？」

「行くぞヒナ！」

「え？ あ！」

につこりと微笑む環に最高の恐怖を感じ取った涼は、即座に雛子の手を引いて仏間から飛び出した。

何が何だか解らないまま涼に手を引かれながらも、

「おば様！ 行って来ます！」

と、雛子はきちんと挨拶をした。

生真面目な性格は、どんな場面でも発揮されるようだ。

「はい、行ってらっしゃい」



環はその様子を、優しいな笑みを浮かべつつ見送っていた。

そろそろ中学校が見えるくらいの場所まで、二人は歩いていた。と言っても、家から学校までは然程離れていないので、大した距離ではない。

しかし、それでも数分は経ったというのに、涼はまだ自分の頭を摩り続けていた。

どうやら相当に環のゲンコツが堪えているようだ。

「ちくしょう……まだ頭が疼くぞ。くそババアめ、本気で殴ったな？」

「またそういう言い方する……。『お母さん』でしょ？」

軽く涼をたしなめる雛子の、ポニーテールに結った髪がピヨンと揺れた。

歩くのが速い涼と歩調をあわせようとすると、どうしても雛子は早歩き状態になってしまふのだ。

「本人の目の前では言えないんだから、せめて離れた場所くらい言わせてくれよ」

「もう……。でも、さすがの涼ちゃんも、おば様には勝てないんだね」

「あの豪傑親父がビビったくらいだからな、俺なんかが太刀打ち出来る訳ねえよ」

「そうなの？ わたし、優しいおば様しか見た事無いなあ」

「ああいうのを外面がいいって言うんだ」

「悪いよ、涼ちゃん」

雛子は楽しそうに、クスクスと笑った。

何だかんだと言いながらも、涼が本心では環を嫌っていないという事を知っている雛子には、その悪態も可愛い物に思えた。

生前の保に対しては、涼は平然と『くそじじい！』と言いつつ放っていたものだが、保に比べて環が強いからというばかりでなく、

息子から母親に対する、一種の『遠慮』という物もあるのだから。

「ねえねえ！ ちょっといいかな？」

二人が校門に差し掛かるうかという時、同じ制服を着た男子生徒が話し掛けて来た。

涼よりも少し背が高く、体つきもガツチリした感じだ。

髪質が硬いのか、短く刈られた髪がツンツンと跳ねている。

「ん？ 何だ？」

「いや、君じゃなくて、そっちの可愛い女の子」

男子生徒は、雛子を指差して言った。

「わたし？ えと……何ですか？」

「見たところ同じ学校の生徒みたいだね、これも何かの縁だと思わない？」

「は？」

どうやら雛子をナンパしているらしい。

実際、雛子の見た目は平均レベルを上回っているのだろう。

本人が落ち着いた性格の為か、実年齢よりも上に見られるらしく、街中でもしよつちゆう声をかけられたりしている。

普段なら、こういう手合いは問答無用で殴り飛ばしているところだが、不思議と涼は、この男子生徒に嫌悪感を感じなかった。

「お前さ、校門の近くに立ってて、その台詞は変じゃねえか？ この時間帯にここへ来るのなんて、この学校の生徒に決まってるし」

「あのね……俺は君じゃなくて、この子に用なの。 ちょっと黙っててくれない？」

「……だとさ」

「はあ……。それで、ご用件は何ですか？」

「名前教えて」

ニコニコしながら男子生徒は言った。

何となく憎めない、まるで子供のような、屈託の無い笑顔だった。「他人に訊ねる前に、自分が名乗るのが礼儀じゃねえかな？」

「これから同じ学校に三年間通うわけだし、楽しい学校生活を送る為には、友達をたくさん作る事が大事だと思わない？」

「お前の場合は、それ以上に敵を作りそうな気がするな、うん」

「ついでには住所やら電話番号やら、色々と交換し合うというのも、また大事なコミュニケーションだと……」

「俺は思わないけどな。少なくとも初対面の馬鹿に、そんなに気軽に教えられる訳も無い」

それでも涼にはその男子生徒の行動が面白くないのか、結局、男子生徒が雛子と話しをするのを邪魔している。

最初は涼を無視して雛子に話しかけていたのだが、やはりいちいち何か言う涼が邪魔なのだろう。

身体ごと涼の方に向き直ると、

「お前、さっきから本当に煩いな……。喋りたくても喋れないようにしてやるのか？」

指をボキボキと鳴らしながら男子生徒は言った。

先程までのにこやかな顔が嘘のように、表情が無くなっている……

…まるで別人だ。

しかし、涼にとってはいつも通りの展開なので、ニヤリと笑って、  
「……ふうん？ 面しれえ冗談だな、お前ギャグのセンスあるぜ」

と、更に男子生徒を挑発し始めた。

既に拳は軽く握られていて、戦闘態勢は整っている。

「こらっ！」

涼が先制の一撃を繰り出す寸前に、雛子はその拳を押さえた。

長年、涼のケンカを見て来た雛子には、涼の拳動は手に取るように判るのだ。

と言うより、涼が全く進歩していない事の証明と言った方が早い  
か。

「涼ちゃん、喧嘩なんてしちゃ駄目！ せつかくの入学式なのに、制服汚したらどうするの？」

「え？ 涼ちゃんって……」

涼を抑えた雛子を見て、男子生徒の顔は、何か憑き物が落ちたように穏やかになった。

「下がってるヒナ。お前に下らねえチヨツカイかける奴は俺がブチのめすっ！」

「涼ちゃんっ！」

「あ……なぐんだ、そうだったのかあ。いや、ごめん！」

そう言つて、男子生徒はペコツと頭を下げた。

その顔は、最初に声をかけて来た時よりもニコニコしている。

「へ？ な、何だよ急に。調子狂うなあ……」

「いやいや、二人がそういう仲とは知らなかったもんだからさ」

「あの、そういう仲って……？」

雛子も、男子生徒の変わり様に面食らったのか、大きな目をパチパチして訊き返している。

「恋人にチヨツカイ出されりや頭に来るよな、悪い悪い」

「こっ、恋人おっ!？」

涼と雛子は、同時に驚きの声を上げた。

確かに小学生時代に散々冷やかされたりはしたが、『恋人』という単語を使われたのは、これが初めてだったのだ。

「おお！ 見事なユニゾン！ こりゃあ、かなり長い付き合いと見た！ ク〜ツ……羨ましいぜ！ 俺も早く彼女作るうっつと」

「ま、待て！ 誤解するな！ ヒナは彼女じゃねえっ！」

「そ、そうだよ！ わたし達、幼馴染なんだから！」

「何と！ じゃあ、小さい頃からず〜つと一緒ってか？ んでもって、これからもず〜つと一緒と……ますます羨ましい〜っ！」

「人の話を聞けっつーの！」

「はははははは！ ちゃんと聞いてるって、冗談だよ」

「まったく……」

すっかり毒気を抜かれてしまった涼は、ただ頭を掻くしかなかった。どうもこの男子生徒の相手は調子が狂ってしまつた。

言っている事が本気なのか冗談なのか、区別が付け難いのだ。

「そうそう、まだ名前を言ってなかったっけ。確かにお前の言う通り、自分から名乗らなきゃな。俺、掃部関真一郎ってんだ、よろしく！」

「宇佐奈涼だ、よろしくな」

「佐伯雛子です。よろしくね、掃部関君」

「雛子ちゃんか……可愛い名前だね。あ、俺の事は『真』って呼んでくれればいいよ」

「真君ね？ わかった」

気付いてみれば、すっかり真一郎のペースで事が運ばれている。

だが涼にとつて、それは決して不快な物ではなかった。

むしろ面白い奴だと好感を持ったくらいである。

こんな事は初めてだった……。

「んじゃ行こうぜ、涼！」

「おいおい、いきなりかよ」

「宇佐奈君って呼んだ方がいいか？ それとも雛子ちゃんと同じく、涼ちゃんで行くか？」

「……気持ち悪いから涼でいいよ。俺も真って呼ばせてもらうから」

「そうしてくれ。何だか、お前とは心の友になれそうな気がするな」

「心の友って……」

「プツ……」

思わず吹き出した雛子につられて、涼と真一郎も笑ってしまった。

穏やかな春の陽射しが、三人を優しく包んでいた……。

## 第二章

朝の学校の廊下には、授業が始まるまでの間、生徒達の会話に花が咲いているものである。

クラスが分かれてしまった友達や、新しく交友関係の出来た者同士など、様々な内容の会話がそこにはある。

「ねえねえねえ！ 俺、一年二組の掃部関真一郎ってんだけど、君は何組の誰子さん？」

……まあ、中にはこういった物もある。

「はあ？ あたしが何組だって、あなたには関係無いでしょ？ それに、何で初対面の人にあんなに名乗らなきゃいけないのよ」

「いや、もしかしたら俺達は運命的な出会いをしたのかもしれないよ？ こうして俺が廊下で出会った君に声をかける事は、遥か古の昔から決められていた事なのかも……そう考えると、何か浪漫テイツクな物を感じない？」

「……バツカじゃないの？」

女生徒は真一郎を無視して、スタスタと歩いて行ってしまった。

その背中には『声をかけるな』と張り紙でもされているような感じで、冷たい空気が纏わりついている。

「おっかしいなあ……」

真一郎は立ち去る女生徒の背中を見送りながら、

「昨日はこれで笑いが取れたんだけど……」

と、腕組みをして考え込んでしまった。

「……朝っぱらから何やってんだ、お前は」

背後から声をかけられて真一郎が振り返ると、そこには呆れ顔の涼が立っていた。

「おう、ぐつもくにん！ 我が心の友よ」

「まさか、またナンパしてたんじゃないやねえだろうな？」

「ん……まあ、大きくジャンル分けすれば、そうなるかな？」

「かな？　じゃねえっつーの。　みつともねえからやめろって言うたろうが。　大体、何で学校でやるんだよ……」

「お前はいいよ、雛子ちゃんがいるから。　俺だって彼女の一人くらい欲しいじゃんか」

「だから！　ヒナは彼女じゃねえって言ってるだろうが！　何度言わせんだよ！」

「へいへい、そうでした」

「まったく……俺は日本語で話してるんだから、ちゃんと理解しろよな」

入学式から何日かが過ぎ、そろそろ親しい友人も何人が出来た頃なのだが、真一郎は未だに女の子を対象に声をかけまくっていた。

最初の内はそのキャラが受けて、何人かの女の子が真一郎と仲良く話していたのだが、そのあまりの節操の無さにやがて呆れてしまい、今では『軽いお調子者』というレッテルが貼られている。

それとは対照的に、普段、真一郎と一緒にいる事が多い涼に対しては、何か近寄り難い印象を持たれているようで、決して評判は悪くないものの、あまり女子は積極的に話しかけて来ない。

「真……お前さ、自分がどういう立場に立たされてるか解ってるか？」

「噂を鵜呑みにするような子はハナから対象外。　俺様はな、俺様の真実の姿を理解してくれる子を求め、日夜流離っているのだ」

「真実の姿ねえ……」

そのまんまという気がしなくてもないのだが、涼は敢えてそれは言わないでおいた。

「そう……例えるなら雛子ちゃんのように、人を外見だけで判断しない、どんな話もちゃんと聞いてくれる、そんな子が理想だ」

「……まあ、頑張れよ」

涼としては、もうこれ以上真一郎に何か言っても無駄だと悟る以外に、今感じている頭痛を治める方法が無い……。

「あ、ところでさ、昨日いい店を見つけたんだ。　今日の帰りにで

も寄らねえか？」

「いい店？」

「喫茶店なだけどさ、コーヒーが美味いんだ。 雰囲気もいいし、お前も気に入ると思うぜ？」

「コーヒーが美味いという所に、涼も興味を引かれた。」

涼の父、保も大のコーヒー好きだった為、涼もその影響を受けて「コーヒー好きなのだ。」

母の環はあまりいい顔をしなかったが、小学生の頃からずっとである。

「ふうん……ま、別に用事もねえし、いいぜ」

「なあ、雛子ちゃんも誘っていいだろ？」

「え？ ヒナもか？」

「いいだろ？ な？ たまには一緒に遊んだってバチは当たらないぜ？ お前から言つといてくれよ」

「でもなあ……俺、あんまり学校とかで、ヒナと一緒にいたくねえんだよな……」

とにかく、小学生の頃には散々冷かされていたのだ。

幸いにも雛子と涼のクラスは違ったのだが、それでも囃し立てる連中はいて、涼はその度に大喧嘩していたものである。

それでも雛子に友人が無くならなかったのは、雛子の人望の厚さの成せる技であろう。

「かゝっ！ 小せえ小せえ！ 冷かされるから嫌だつてんだろ？」

そんなもん、普通は雛子ちゃんが気にする事だろうが……男のクセに情けねえ」

「ヒナは鈍いんだよ、だから気にならねえんだ」

「鈍いのはてめえだ、この馬鹿……」

「あ？ 何か言ったか？」

「何も言つてねえよ。 じゃ、いいな？ お前が何をどう言おうと、俺様は雛子ちゃんを連れて行くからな！ 文句があんなら腕で来い」

「！」



「解ったよ……」  
そんな事で真一郎と喧嘩をするつもりが無い涼は、渋々、真一郎の提案に賛同した。

放課後になり、涼と真一郎は揃って昇降口から校庭へと出た。

勿論、これから真一郎の言っていた喫茶店へと向かう為である。

「涼、雛子ちゃんは？」

「掃除当番だつてよ。それが終わってから来るって言ってたぜ」

「じゃあ、終るまで待つてるか」

「あとで来るって言ってるんだから、別にいいだろ。店の場所は、

お前から聞いて教えてあるんだし」

「ったく……お前は少し優しさが不足しとるな。女の子には、も

っと優しく接するもんだぞ？」

「それはお前に任せるよ」

涼の言葉に『やれやれ』と、真一郎が両手を広げた時、

「いいかあつ！ お前ら新入部員は、二年になるまでは人間扱いしねえつ！ 解ったな！」

剣道部の道場から、何やら不穏当な声が聞こえた。

どうやら上級生が新入部員に対して、洗礼を浴びせているようだ。

「お〜お〜、やだねえ……後輩イビリってやつか？ セコイね〜」

真一郎は剣道場の方へ顔を向けたまま、眉を顰めて言った。

「どうやらこういいうノリは嫌いなようである。」

それは涼も同様のようで、

「実力もねえ奴に限って、ああいう事言うんだよな」

と手厳しい。

「そうそう。俺ら可愛い一年坊には、もっと優しくして欲しいよな」

「……可愛いきゃな」

「おお、珍しく意見が一致したな」

涼は皮肉を込めた目で真一郎を見ながら言ったのだが、真一郎には届かなかったようだ。

皮肉とは、それが通じる相手に対してだけ、効果を発揮する物なのである。

「しかし、可愛いか……よし！」

そう言つと、真一郎は剣道場へ向かつて歩き出した。

どうやら『可愛い』という部分にだけ、鋭敏に反応したようだ。

「おい、真！ どこ行くだよ！ ……つたく！」

仕方なく、涼もあとへ続いて歩き出した。

「何やつてんだよ、サ店に行くんじゃないのか？」

「いやいや、可愛いかどうか、ちよつと確認をな。その結果如何

によつては、連れて行くメンバーが増える可能性もあるぞ」

「男だろ？」

「いや、今年から女子部も出来たんだよ。クラスの女子も何人か入ってるんだ」

「ハア……お前は凄いや……」

そんな事まで調べているのか……と、涼は再び頭痛を感じた。

「お褒めに預かり恐縮で……つと、ビンゴ！ 結構可愛い子が……ん？」

溜息混じりに言う涼の言葉を意に介さず、真一郎が道場の格子窓の間から中を覗くと、先輩部員を相手に一年生部員が稽古をしているのが見えた。

だが、どこかおかしい……みんながみんな、先輩部員に一撃される度に蹲ってしまうのだ。

「……？ おい涼、うちの剣道部って、こんなに強かったっけ？」

「そうじゃねえよ、よく見てみな」

「ん？」

涼に言われて目を凝らすと、先輩部員の誰もが、防具で護られていない部分に竹刀を入れているのが真一郎にも判った。

「あ！……きつたねえ〜！ あれじゃ、やられた方はたまらんぜ」  
中にはどう見ても素人のような者もいるというのに、それでも容赦無く打ち込んでいるのだ。

心得のある者と無い者とは、力の差は歴然である。

「あつっ……！」

突きを入れられた一年生が倒れ込み、喉を押さえてのた打ち回る。段々と、それを見ている真一郎の顔付きが変わって来た。

「……シャレにならんぜ、こいつら。俺は薄汚ねえ真似する奴が一番嫌いなんだ……！」

「先輩！ いい加減にして下さいっ！」

小柄な一年生が正座をしたまま、面を外した先輩に向かって言った。

先程、真一郎が可愛いと目を付けた子だ。

線も細く、整った顔立ちをしているが、短く切った髪が凜々しさを際立たせている。

「ああ？ 何だと？」

「みんな剣道が好きで、剣道がしたくてここに来たんですよ？ それなのに……あんまりじゃないですかっ！」

「さつき言つたらう？ 二年になるまでは、てめえらは人間じゃねえんだよ！」

「そんな事、誰が決めたんですっ！」

「伝統だ！ ウチの剣道部のな！」

そう言つと、先輩部員は正座をしたままの一年生を竹刀で小突き回す。

しかし、その一年生は微動だにせず、臆する事無く意見を続けた。  
「そんな物、伝統でも何でも無いですよ。そういうのは悪しき慣習と言つんです！」

「お前……さつきから、その反抗的な態度は何だっ！」

先輩部員は益々力を込めて、その一年生の頬に竹刀を押し付けた。しかし一年生部員は怯むどころか、先輩部員から目を逸らしもし

ない。

「先輩……竹刀は、そんな事をする為の道具じゃありませんよ」

「……何だと？」

「竹刀が泣いています！先輩には聞こえないんですか！」

真つ直ぐ目を見ながら言う一年生に対し、先輩部員はワナワナと肩を震わせている。

しごくまっとうな意見を言われて反論出来ないのが悔しいのか、或いは下級生に意見された事が腹立たしいのだろう。

了見の狭い人間の典型的なパターンである。

「おほ〜！言うねえ、あの子。俺様は俄然あの子が気に入ったぜ！このまま恋に落ちてもいいか？」

「お前がいつて言うなら、そりゃ構わねえけどよ、無事に済むかな……ヤバいんじゃないか？」

涼の言う通り、先輩部員は顔を真つ赤にして下級生に一步近付いた。

どうやらかなり頭に血が上っているようだ。

「それに先程のは稽古じゃありません、リンチです！素人同然の者に突きを入れるなんて、中学生の部活じゃありません！」

「生意気な事をぬかすなあっ！」

打ち下ろされた竹刀を一年生部員が正座をしたまま軽くいなすと先輩部員はその勢いで派手に転がった。

それを見た他の一年生数名が、先輩部員に解らないようにクスクスと笑っている。

「大丈夫ですか？ちょっと床を磨き過ぎたかもしれませんね」

「てめえ！ふざけた真似しやがってっ！」

その一言を皮切りに、他の先輩部員も小柄な一年生を取り囲んだ。「お前、いい度胸してるな……ああ？」

「こういう奴には、上下の関係をしっかりと教えとかないなあ……」  
ぞろぞろと顔を揃えた先輩部員の数は、ざっと二十人は居るだろう。

その内の三人が片手に竹刀を握っている。

「お前は特別待遇だ。俺達が直に稽古をつけてやるぜ！」

「お前は体捌きがいいみたいだから、それに磨きをかけてやろう。」

……正座のまま動かなくなっ！」

三本の一斉に竹刀が振り下ろされると、さすがに今度は捌ける筈も無く、竹刀に打たれる音が道場内に響き渡った。

「グッ……！」

あっと言つ間に小柄な一年生部員の顔に蚯蚓腫れが浮き出した。少し切れたのだらう、薄っすらと赤い筋が下に向かって伸びた。

それまで静観していた真一郎だったが、さすがに腹に据えかねたのか、木製の窓格子をグシャリと握り潰すと、

「もう我慢出来ねえ……あの野郎共、ブちのめすっ！」

そう叫んで、道場の入り口に向かって駆け出した。

すっかり頭に血が上っているようで、あまり周りが見えていないようだ。

「待てよ、真！……やれやれ、あとでガツカリするぞ」

何故か涼は呆れ顔で、真一郎の後を追った。

「痛い……！」

「ほれ、竹刀を貸してやるぜ。今度は打ち込みの稽古だ！」

カシャンと音を立てて、一年生の前に竹刀が転がった。

仮にも先輩部員である自分が、下級生に負けるなどとは露程も思っていない顔だ。

だが、転がる竹刀を見た刹那、小柄な一年生の目つきが変わった……。

「竹刀を投げるとは……貴様に剣道をやる資格は無いつ！」

「その生意気な口を閉じやがれっ！」

先輩部員が踊りかかろうとした時、小柄な一年生部員は素早い動作で目の前に転がる竹刀を掴むと、先輩部員の喉元に向かって竹刀を突き出した。

反撃を全く予想していなかったのか、竹刀の切っ先は先輩部員の喉にまともに入った。

そこへ……。

「こらあ！ てめえら一步も動くな！」

と、勢い込んで飛び込んだ真一郎の前に、先輩部員が転がって来た。た。

見ると、その口からは泡を吹いている。

「わわっ！ ……何だ？ どうなってんだ？」

「へえ……やるな、あいつ」

涼は感心したように言くと、愉快そうに笑った。

「どうです先輩、突きつて苦しいでしょう？」

先程の一年生が竹刀を構え、転がっている先輩部員に言った。

その姿は雄雄しく、体の小ささなど微塵も感じさせない。

どうやら相当の腕を持っているようだ。

「このガキ！」

「ふざけやがって！」

しかし、そんな事を理解出来る筈も無い先輩部員達は一斉に飛び

掛り、一年生を羽交い絞めにして顔面を殴った。

多勢に無勢、一年生は一方的にやられ始めた。

いや、何故か抵抗しようという素振りさえ見せていない。

「うっ！」

「てめえら一年は、黙って俺らの言う事を聞いてりゃいいんだよ！」

「調子くれやがって！ おらあつ！」

拳が、蹴りが、容赦無く一年生に入れられると、見る間に口の端が切れ、血が流れ出す。

他の一年生部員は為す術も無く、それを見ているだけだ。

いや、それでも何人かは止めようとして立ち上がったのだが、小柄な一年生は首を左右に振ってそれを制止した。

（ここは剣道をする場所だ、喧嘩をする場所ではない。 手を出しちゃいけないんだ……みんな、それでいいんだよ……）

相手が無抵抗なのをいい事に、先輩部員達の攻撃は止むどころか、更に激しさを増して行くように見えた。

「涼、俺は行くぞ……！ この場を黙って見過ごしたとあっちゃ、掃部関真一郎の名が廃る！」

「しょうがねえなあ……俺は付き合わねえからな。行くなら一人で勝手に行け」

「ピラフにコーヒー付ける！ だから加勢しろ！」

「んじゃ、五人までな」

「足元見やがって……ええい！ サラダもおまけするっ！」  
「乗った」

「商談成立！ 出前は迅速っ！」

真一郎はダツシュすると、先ずは一年生を羽交い絞めに行っている先輩部員に、

「延髄切りっ！」

と叫び、後頭部に蹴りを放った。

たまらず先輩部員は一年生から手を離し、自分の後頭部を抑えて振り返った。

「イテテ……。 な、何だお前らっ！」

「悪党に名乗る名前など無いっ！ だが敢えて言うなら……そう、愛と正義と真実の人とでも言っておこうか！」

真面目な顔をして腰に手をあて、そっくり返りながら真一郎が言う。

おまけに 『はっはっは』 と高笑いまでしている……。

「き、緊張感が萎える……」

と言いつつ、涼は手近にいた三人を殴り倒した。

何だかんだと言いながら、身体が勝手に動いているようである。

だが、突然乱入して来た涼と真一郎を歓迎していないのは、やられていた一年生部員も同じのようで、

「……お前達、どういっつもりだ。ここは部外者が暴れていい場所ではないぞ！ 出て行け！」

と、厳しい口調で真一郎に向かって言った。

「いかなん？……女の子がそんな乱暴な口を利いたらいかんよ、うん」

言いながら、真一郎も二人を蹴り倒す。

「こちらも身体が勝手に動いているようだ。」

「はあ？ 何を言つとるんだ、お前は」

「うーん、ちよいとハスキーだけど、なかなかいい声だねえ。ね、

あとで一緒に飯食いに行かない？ 当然、俺の奢り！」

「そういう話しをしている場合ではなからう？ いいから、さっさと出て行かんか。お前達まで面倒に巻き込まれる事は無い」

「多勢に無勢とは卑怯千万！ そんな場面を黙って見過せるほど、

俺は根性腐つてないの」

「しかし、これは部活内の問題であつてだな……」

「あんなもんが部活つて言えるかよ、あれは単なるシゴキだ。あんな事してたら、日本伝統の剣道が汚れるつてもんだ。違つかい？」

「お前……」

小柄な一年生部員は、目の前の大柄な男子生徒の顔をじつと見つめた。

今まで出会つたどのタイプの人間とも違う……。

こんな男もいるのかと、一年生部員は思った。

「だからさ、これが片付いたら飯食いに行こうよ、ね？」

「お前は話が反復横跳びするんだな……まあ、別に構わんが」

「やった！ 絶対に約束だからね？」

「あ、ああ……」

「じゃあ、さっさと片付けようか」

と思つたのだが、既に涼が残りの全員を倒してしまつていた。

何の事は無い、無抵抗な相手にだけ強気な連中だつたのだろう。

それでは、この二人の相手になどならない。

何しろ、子供の頃から喧嘩に明け暮れていたと言つても過言では



ないのだから。

「割に合わん……。真！ 明日もお前の奢りだからな！」

「おお、いいぜ！ 俺様は今すこぶる機嫌がいい。あ、そうそう、俺、掃部関真一郎。で、あっちにいる乱暴者が宇佐奈涼ってんだ」

「誰が乱暴者だっ！」

「俺は浦崎琢磨だ」

「……え？」

「くっくく……」

ポカンとしている真一郎を見て、涼は笑いを堪えている。

「どうかしたのか？ それ程珍しい名前でもなかるう」

「わははははは！」

堪え切れずに腹を抱えて爆笑する涼を見て、ようやく真一郎は自分の勘違いに気付いた。

「涼！ てめえ……気付いてやがったなっ！」

「まだまだ修行が足りないみたいだな、真」

「不覚……！」

「何だかよく解からんが……。しかし、これでは部活どころじゃないな」

先輩部員は伸びたままだし、気付いてみれば、新入部員は全員逃げ出していた。

恐らく彼らは二度と部活に顔を出さないだろう。

「とりあえず先輩達を保健室へ運ばなければな……。お前達も手伝ええ？ 俺らも？」

真一郎は不服そうに言ったのだが、

「当たり前だ、お前達が叩きのめしたんだらうが。このまま放つて行く事など出来まい」

そう言つて、琢磨は先輩部員を一人抱き起こすと、すたすたと道場の外へと出て行ってしまった。

「……どうするよ、涼」

「どうするってたって、あいつの言う通りにするしかねえだろ。確

かにあいつの言う通り、このまま放つとく訳にもいかねえしな」  
元々売られた喧嘩という訳でなく、涼達が勝手に乱入して暴れたのだ。

やりたい放題やった拳句に知らぬ顔では、さすがに夢見が悪かるう。

涼も琢磨に倣って先輩部員を担ぎ起こした。

「……ま、しゃあねえか」

あまり気乗りしない風ではあるが、真一郎も二人の先輩部員を肩に担ぎ、保健室へと向かった。

その後、何往復かして全員を保健室へ運び終わると、琢磨は深い溜息を吐いた。

何度も保健室へ気絶した生徒を運び込んだのだから、当然、養護教諭は目を丸くして驚く。

一体何事があったのかと説明を求められ、止む無く全て説明する破目になったのだ。

とりあえずこの場合は治療を優先させるという事で、三人には後日改めて事情を聞くという事になった。

「さて……掃部関と言ったな、行こうか」

「どこへ？」

「それは、お前に任せる。出来れば、ご飯物がある所が良いんだが」

「何の話しだ？」

「さつき食事をしに行くと言ったろう。まさか、男が一旦口にした事を翻すつもりじゃあるまいな？」

「真、観念しろよ。こいつの腕前は見ただろ？ 半端な上級生達とは違うぜ。本物の剣道の心得のある奴が竹刀を持ったら怖いぞ？」

「うっ……。じゃあ行きましようか、皆さん……」

琢磨が着替えるのを待って三人が道場から出ると、丁度遅れて来た雛子とばったり会い、そのまま一緒に学校を出る事になった。

道場で何をしていたのか、どうして真一郎の元気が無いのか、一緒にいる琢磨とは、どうして親しくなったのか。

雛子の疑問は尽きる事が無かったが、どれ一つとして、まともな答えは返って来なかった。

何故か店まで無言のまま、右手と右足を同時に出しながらギクシヤクと歩いていた琢磨だったが、店内に入り、席に案内されるや否や、

「お……お、おおおおお俺は、ううううううう浦崎琢磨だよ、よよよよよろしく！」

直立不動の状態で雛子に向かい、いきなり自己紹介を始めた。

あまりにも突然の事で、涼も真一郎も目を丸くしている。

「う、う、う、浦崎君……？ 変わった名前だね……」

ここに来て、初めて琢磨が自分と同じクラスだと知らされた雛子は、かなり驚いた。

クラスの全員と話したつもりでいたのに、琢磨とだけは今までに一度も話した事が無かったばかりか、その存在すら記憶に無かったのだ。

どうやら普段の琢磨は極力女子との係わりを避けていて、その視界の内に入る事さえ避けているらしい。

「ヒナ、そこでボケるな。単にどもってるだけだろ」

「何を緊張してんだ？ お前は」

チビチビと水を飲みながら訊く真一郎に対し、琢磨は顔面を真っ赤にしたまま、

「お、俺は女性の前に立つと、上手く言葉が出て来ないんだ……」と、今にも消え入りそうな声で言った。

「面白い奴だな、真とは正反対だ。こいつは女の前に立つと、言葉が溢れて止まらなくなるんだぜ」

「羨ましいな、それは……」

水を一息に飲み干して何とか落ち着いていたのか、琢磨はようやく席に腰を下ろし、大きく溜息を吐いた。

「ところで琢磨、お前、明日からの部活どうすんだ？」

ボリボリと氷を齧りながら真一郎が訊いた。

「いきなり名前を呼び捨てか？ まあ、いいか……勿論出るさ、俺は剣道が好きだからな」

「けど、出辛くないか？ あんな事になっちまって」

「あんな事？ 涼ちゃん、あんな事って？ 何かあったの？」

「え？ あ、いや、大した事じゃねえよ。 ちよっとゴタゴタしただけだ。 な、琢磨」

「お前もか……。 親しげなのと無礼なのと紙一重だな、お前達は」

「俺らはフレンドリーな関係を作るのが基本形なんだ。 な、涼」

「そりやお前だけだって……」

その後、お互いの呼び方について話し合いが持たれた（琢磨が煩く言った）のだが、どうにも琢磨が呼び方について拘っていて、

「い、いや、俺は……さ、さ、佐伯さんと呼ぶのが正しいだろう」

と、一歩も譲らない姿勢を見せた。

「え……？ でも、それじゃ何だか堅苦しいよ。 真君みたいに、

名前と呼んだ方が親しみ易くない？ わたしも琢磨君って呼ぶから」

「そうだよなあ……。 ただでさえどもりまくってるのに、そんなにしゃつちよこばってたんじゃ、いつまで経っても馴染めないぜ？

誰にでも気軽に声をかけられる真一郎にしてみれば、それ程の事でも無いように思えるのだろう。

「だ、だが、俺は今まで女性の事を 『ちゃん』 付けて呼んだ事など無いし……うおおっ！ 想像しただけで汗が吹き出る！」

「難儀なやつちやな……」

「いつその事、雛子って呼び捨てにでもしたらいいんじゃないかな？ ヒナ、どうだ？」

「わたしは別に構わないけど……」

「ふふふふふふざけるなっ！ そ、そんな大それた真似が出来るかあっ！」

ダン！ とテーブルを叩き、飛び掛らんばかりの勢いで、琢磨は

涼の提案を却下した。

「なら、雛子さんはどうだ？」

「わたし、それは少し抵抗を感じる……」

普段の会話ならともかく、遠くから呼ばれた時の事を考え、それは雛子が却下した。

しかし、これではいつまで経っても話が纏まりそうに無い。

「じゃあ、佐伯にしるよ。それくらいなら、琢磨でも抵抗無く呼べるだろ。ヒナも、それでいいよな？」

「し、しかし、それでは失礼に……」

「構わないよ、琢磨君。早く慣れてもらわないと、わたしも話し難くなっちゃう」

「そ、そういう事なら……」

何とか互いの呼び方についてはこれで治まったらしく、琢磨も若干落ち着いたようだ。

しかし、何ともじじむさい奴だと、涼も真一郎も苦笑していた。ややあって、それぞれの前に注文した品が置かれ、雑談が始まった。

だが、話題の中心になるのは琢磨の事ばかりで、芸能レポーターよろしく真一郎が矢継ぎ早に質問するものだから、琢磨の方はそれに対して答えるのに精一杯になってしまった。

どうも琢磨は生真面目な性格が災いして、適当に誤魔化すといった事が出来ないようだ。

やっとそれが一段落したところで、あまりにも煩い真一郎の事が気になったのか、

「まったく……。俺達はもう中学生になったのだから、少しは常識という物を弁えてだな……」

と、琢磨の説教が始まったのだが……。

「そうそう、知ってるか？ 涼。二年生にすっげえ可愛い先輩がいるんだぜ？ 明日はその人に声かけてみようかと思ってるんだ」

真一郎はまるで聞いていない。

「真君、少し控えた方がいいよ？ 最近、真君の事があちこちで話題になつてゐるみたいだから」

「懲りねえ奴だな、お前は……。何でも勝手にやれよ、もう俺は何も言わん」

「俺の話しを聞かんかつ！」

「おい真、琢磨が怒つてるぞ」

「ああ、わりいわりい。で、何の話だっけ？」

琢磨は軽く咳払いをすると、

「そもそも、昔は元服と言えば十五歳だったんだ。然るに、俺達くらいの年齢になれば、大人としての自覚を持って行動するのが、寧ろ当然とも言える訳で……………」

「それでな、涼。俺様としてはだ、年齢なんてのは気にしても意味が無いと思つてるんだ」

「何で？」

「ただ単に何年生きてますつてだけの、単なる目安じゃんか。それよりも女性は性格！ これに尽きるぜ。ね、雛子ちゃん」

「見た目は？ 真君、面食いでしょ？」

ストローでジュースの氷をクルクルと回しながら雛子が言つと、真一郎はちつちつと人差し指を振りつつ、

「おつとつと、誤解しないで欲しいな。俺は外見で女性の価値を決めたりしないぜ？ 俺の好みは一途な子だからね、容姿は関係無いの」

と、何故か偉そうに胸を張つて言った。

「真君、偉い！」

「そうでしょそうでしょ」

「……俺の話しを聞けと言つておるだろうがっ！」

すっかり琢磨を無視して雛子と盛り上がっている真一郎を見ながら、琢磨は拳を硬く握り、ワナワナと震えている。

「おい真、琢磨が怒つてるぞ」

「ああ、わりいわりい。で、何の話だっけ？」

「お前……わざとやっているな……?」

「まあ、古典的なボケだな。一応、琢磨も突っ込みの基本は出来るみたいで、良かった良かった」

「お前とは、いずれじつくりと話し合う必要があるそうだ……」

翌日、涼、真一郎、琢磨の三人は朝一番に職員室へと呼び出され、教師一同から厳重注意を受けた。

だが、幸い大した怪我をさせた訳でもないという事で口頭での注意に止められ、日頃の真面目さもあつた琢磨は、そのまま剣道部に残る事が許された。

一頻り説教をされて職員室から出ると、さすがに少しやり過ぎたかと、涼と真一郎も思った。

何しろ勝手に部活の場に入り込んで大暴れしたのだし、結果的に琢磨まで説教される破目になってしまったのだから。

「……悪かったな、琢磨。お前まで呼び出し喰らわせちゃって……この通りだ」

真一郎が長身を折り曲げて琢磨に言った。

「俺も、ちつとばかり調子に乗り過ぎたな。悪かったよ、琢磨」  
涼も真一郎に倣って頭を下げた。

それを見て、琢磨はキョトンとした顔をしている。

「お前達、何を謝つとるんだ?」  
「え?」

「お前達が謝るべきは俺ではなく、怪我をさせてしまった先輩達に  
だろう。一緒に来い」

「一緒につて、どこへ?」

歩き出した琢磨を追いながら、真一郎が言った。

「決まっているだろう、先輩達の所だ。理由はどうあれ怪我をさせたのは事実だからな、謝罪はしなければならん」

「先輩達のとつて……今から二年の教室へ行くのか?」

「当たり前だ、放課後まで待っていてどうする。謝罪は早くするに限る」

真一郎は涼の顔を振り返ったが、涼は軽く頷くだけだ。やはり、ここは琢磨の言う通りにする以外に無いだろう。

これから先も剣道部に所属する琢磨の事を考えれば、少しでも雰囲気穏やかにしておく必要があるだろうし。

「気は乗らねえけどな……」

多少不満は残るが、苦笑しながらポンポンと肩を叩く涼に促され、真一郎は階段を上った。

だが、二年生の教室へ到着した琢磨が先輩部員を呼び出してもらおうと、教室の前にいた男子生徒に声をかけた途端、

「う……浦崎!?!」

「はい、剣道部の浦崎琢磨と申します。申し訳ありませんが、副主将を……」

「ひょっとして、お前の後ろにいるのは、宇佐奈と掃部関か……?」

「え? あ、はい、そうですが……それが何か?」

「お、おい、大変だつ! 浦崎達が来たぞつ!」

と、男子生徒は大慌てで教室の中へ駆け込んで行ってしまった。

「……彼は何を慌てているんだ?」

「さあな。おい、早くしないと授業が始まっちゃうぞ? 嫌な事はさっさと済ませちまおうぜ」

真一郎は先頭に立って、ズンズン教室内へ入ってしまった。

「あ、おい、真! ……やれやれ、勝手な奴だ。あまり大勢の前で謝られては、先輩達も却って気を遣ってしまうだろうに」

「はは……まあ、それはねえと思うけどな。俺たちも行くこうぜ琢

磨。こうなっちゃ仕方ねえだろ」

「……それもそうだな」

だが、涼が琢磨と共に教室内へ入ると、剣道部副主将である二年生男子生徒が、何故か真一郎から逃げ回っている。

「てめえ! 何で逃げやがんだ、こらっ!」



「お、お前が怖い顔で迫って来るからだろうが！」

「何を？ この超絶美形な俺様を捕まえて、何て事を言いやがる！ いいからそこでじっとしてろっ！」

「出来るかっ！ 大体、何で朝っぱらからこんな所まで来るんだよっ！」

「だから、謝りに来たって言うてんだろっ！ 素直に詫びを受けろ、この野郎っ！」

「それが謝るって人間の態度かーっ！」

ガシャガシャと机にぶつかりながら逃げる二年男子を、これまた真一郎がラッセル車の如き勢いで追いかけて回すものだから、教室の中は見る間に滅茶苦茶になって行く……。

「涼……あいつは謝罪するという言葉の意味を、どんな風に曲解しているんだ？」

「俺に訊くなよ……。とにかく、あの馬鹿を抑えないと」

その後、涼と琢磨の二人がかりで何とか真一郎を押さえ付け、どうにか大人しくさせる事には成功したものの、騒ぎを聞きつけた担任教師に再び説教される破目になってしまった……。

「まったたく……。どうして謝罪に行つて説教されねばならんだ……」

「しかも今回、俺と琢磨は、とぼっち喰らつたようなもんだしな……」

それぞれの教室へと戻る途中で、涼と琢磨は文句たらたらである。

しかし、言われている当の真一郎はと言つと、

「まあまあ、全部丸く収まったんだからいいじゃんか。　　終わり良ければ全て良し！」

と、まるで気にしていないようである。

やれやれという感じで苦笑しつつ、けれど涼も琢磨も、こいつはどこか憎めない奴だと思つた。

その後、この一件でやたらに目立った真一郎は、何かトラブルな

どがあると相談を持ちかけられる事が多くなった。

勿論、その解決には涼や琢磨も借り出される事になる訳で……。

後に三人は 『翔峡中学三軍神』 と称される事となる。

### 第三章

「悪いな涼、つき合わせちまって。雛子ちゃんも有難うね」  
歩道を歩きながら、真一郎は言った。

隣りを走る国道は、今日もひっきりなしに車が行き交っている。

「いいさ。どうせ今日は何の予定も無かったし、こんな天気の良い日に家で燻ってるのもつまんねえしな」

「わあ……おっきいねえ。ここで真君の友達が走るの？」  
快晴の日曜日。

涼、真一郎、雛子の三人は、市営競技場へとやって来ていた。  
と言っても、三人とも何の目的も無しにここに来ていては無い。

今日は、陸上部に所属している真一郎の友達が、地区予選の決勝戦に出るといので、三人はその応援に来ているのだ。

当然、琢磨にも声をかけたのだが、生憎と今日は祖父の道場で剣道の稽古があるとの事で、断られてしまった。

琢磨の祖父、浦崎弦磨は『浦崎流剣術』の創始者であり、琢磨の剣の師匠なのだそうだ。

涼も真一郎も聞いた事の無い流派だったが、琢磨に言わせると、弦磨は達人級の使い手らしい。

出来たばかりで歴史は浅くても、凄い物は凄いのである。

「ああ、今日勝てばいいよ次は全国だ。全くすげえ奴だよ」  
「わたし達と同じ一年生だもんね、凄いなあ……」

どこにでも一人は飛び抜けた才能を持つ者がいるようで、真一郎の友人も入部してすぐに頭角を現し、こうして大会に出場するまでの存在になったのだそうだ。

ただ、やはり『一年生のくせに』と先輩部員にやつかまれ、嫌がらせなどもされたそうだが、結局は実力の世界である。

自分達よりも力が上だと見せ付けられ、上級生達も黙ってしまっ

たらしい。

「おい真、どつちに行けばいいんだ？」

キヨロキヨロしながら涼が訊ねた。

競技場はやたらと広い上に、どこもかしこも似たような造りになっている。

案内板は設置されているが、慣れていない者にとっては、どこに何があるのか今一つピンと来ない。

「ん？ ああ、こつちだ」

「……迷路みてえな造りだな、ここは。ヒナ、ちゃんと付いて来いよ？ ウツカリしていると迷つちまうぞ？」

「方向音痴の涼ちゃんに言われたくないなあ」

「ははは。そうかあ、涼は方向音痴だったのか」

真一郎は、何やら嬉しそうな顔で涼を見た。

どうやら、涼に関するネタが入手出来て喜んでるようだ。

「ヒナ……あんまりこいつに余計なネタを提供するなよ」

「ごめんなさい……」

スタートの合図と共に、歓声が競技場全体に響き渡った。

一瞬の内に、選手達は一陣の風となり、トラックを駆け抜けて行く。

観客席の真一郎は、夢中になって友人に声援を送っていた。

「よっしゃ、二着でゴール！ これで準決勝進出だぜ！」

「はやくい……。わたしだったら、まだ真ん中辺りを走ってるかも……」

雛子は手にした飲み物を飲むのも忘れ、目を丸くして驚いている。

「雛子ちゃんって足遅いの？」

「う……。えへへ、実は小さい頃からかけっこは……と言っより、運動は苦手なの……」

「ま、誰でも苦手な物の一つや二つ……って、あれ？ 涼は？ さ

つきまでそこにいたと思っただのに」

「トイレだって。ずっと我慢してたみたいで、慌てて走って行ったよ」

「何だよ、応援もしないでトイレなんて……ま、俺様と雛子ちゃんの応援があれば、涼の応援なんぞ無くても楽勝だ！」

「真君つたら」

まるで子供のように大騒ぎする真一郎を見て、雛子はクスクスと笑った。

「ヤツベ〜……完璧に迷っちゃったな」

その頃、涼は完全に席に戻る道を見失っていた。

素直に来た道を戻れば良かったのだが、変に歩き回ってしまった為、その道も判らなくなってしまったのだ。

筋金入りの方向音痴である。

「だからって、まさか帰り道が不安だから付き合ってくれなんて頼めねえしな……特に、真の場合は」

……それはもつともだ。

「誰かいねえかなあ……ん？」

ふと顔を巡らせると、ストレッチをしている女の子が目に入った。

ショートカットの髪に、スラリと長く細い足。

顔は……少し厳しい表情をしているが、かなり可愛い。

しかし、今の涼にはそんな事まで理解する心の余裕は無く、まさに地獄に仏とばかりに女の子に向かって小走りに近付いた。

「すみません！ ちょっといいですか？」

「……」

しかし、女の子は返事もせずに、今度は靴の紐を締め直し始めた。

「あれ？ 聞こえなかったのかな？」

更に数歩近付いてから、涼は改めて声をかけ直した。

「……あの、ちょっと訊きたい事があるんですけど？」

「……」

女の子はまたも答えず、反対側の靴紐を締め直す。

さすがにここまで無視されると、涼としても気分が悪い。

別に何も悪い事をしていないのに、こんな対応をされたのでは、涼でなくても腹が立つだろう。

「あのさあ、人が話し掛けてるのに、その態度は無いんじゃないかな？」

「あゝもうっ！ うるっさいわねっ！」

そう言つと、女の子はベンチから立ち上がり、腰に手を当てて、キツと涼を睨みつけた。

何だか知らないが、涼に対して怒っているようだ。

「あんだねえ、わたしが何をしてるか判んないの？」

「……靴紐を結んでるように見えるけど？」

「ハア……これだから素人は……」

心底呆れ返つたような顔をして、女の子は涼に言った。

だが、涼にしてみたら見たままを言っただけなのに、素人呼ばわりされた上に呆れられても困ってしまう。

……実際、素人だし。

「わたしはね、今、精神統一してたの！」

「精神統一？ 何で？」

「何でつて……あなた、ここがどこで、わたしがどんな格好してるか、合わせて考えれば馬鹿でも判るでしょ？」

女の子は自分の頭に人差し指を当ててクルクルと回し、その指を涼に向けて言った。

完全に涼を馬鹿にしている。

「バ、バカとは何だ、バカとはっ！」

その仕草にカチンと来た涼は、思わず声を荒げてしまった。

先程まで無視され続けた上に、今度は馬鹿呼ばわりされたとおっ

ては、さすがの涼も頭に来るだろう。

「知らなきゃ教えてあげるわよ。あんたみたいなのを馬鹿って言うの」

女の子は余裕の表情をしながら、フフンといった感じで、更に涼を挑発するように言った。

「あ……頭来た!」

「何よ、やる気? 相手になってあげるわよ……っつ!」

何かの構えをとった瞬間、女の子の顔が歪んだ。

いくら何でも、涼とて本気で女の子とやり合うつもりなど無い。

それより、その一瞬苦痛に歪んだ顔が気になった。

「どうかしたのか?」

「な……何でもないわよ。早くどっか行きなさいよ」

「いや、そうしたいのは山々なんだけど、道がさ……」

「あ! こんな所にいたの?」

声のした方を見ると、ジャージ姿の女性がこちらに向かって歩いて来た。

二十代後半くらいだろうか? 短めの髪で、いかにも快活そうな印象を与える人だ。

スマートな割にはしっかりとした体躯をしているという事は、恐らく何かスポーツをしているのだろう。

「さ、もうすぐ出番よ、準備して」

「……はい!」

「もしかして走るのか?」

涼の質問に、女の子は目を見開いている。

明らかに、これは涼の事を本物の馬鹿だと思っている表情だ。

「当たり前でしょ? まだ解ってなかったの?」

「いや、そうじゃなくてさ……」

「君、悪いんだけど、あとにしてもらえるかな? そんなに時間が無いのよ」

「……こいつ、いい選手なんすか?」

涼は、どうやら先生（恐らく、陸上部の顧問だろう）と思  
われる女性に問い掛けた。

「こ、こいつとは何よ！ 失礼ね！」

「そうね、我が部の期待の星ってところかしら？ 将来有望よ」

顧問の先生はにこにこしながら涼の質問に答えた。

本人の前でここまで言い切るといのは、この女の子が本物だと  
いう証だろう。

「ふうん……だったら、走らせない方がいいっすよ」

涼は、ごく普通に、当たり前前の事を言うように言った。

「え？ 君、それってどういう意味？」

「な、何言い出すかと思えば！ あんた、さてはライバル校のスパ  
イね！」

いささかの外れな女の子の指摘を無視して、

「こいつ、どこか……多分、足首だと思っけど、怪我してるから  
と、涼は続けた。

先程、女の子が顔を歪めたのは、構えを取って足に体重をかけた  
時だ。

子供の頃から喧嘩ばかりしている涼は、相手がどれくらいダメ  
ージを負っているか、無意識に測る癖が付いているのだ。

「何ですって！ 本当なの！？」

涼に言われて、顧問らしき女性は女の子を見やった。

その目は、先程とは打って変わって厳しい物になっている。

「う……嘘ですよ！ こんな奴の言う事なんか……」

「見せてみなさい」

「先生、大丈夫ですってば！ わたし、どこも怪我なんて……」

「いいから見せなさい！」

そう言っつて、嫌がる女の子を通路のベンチに腰掛けさせ、無理矢  
理両方の靴下を下ろすと、右の足首にはアンカーテープがこれでも  
かと言うほどガッチリ巻かれていた。

「アンダーラップもしないで……しかも、スターアップとホースシ



ユーを併用してゐるって事は、余程酷く痛めてゐるわね？」

通常テーピングをする時には皮膚を保護する為、自着性の無いアンダーラップを粘着スプレーを吹き付けて巻いておく。

そうする事で『かぶれ』などを防止するのだが、スプレーの量が少ないとアンダーラップがずれ、テーピングの効果が落ちる。

本来スターアップは捻挫の予防に、ホースシューは足の関節が左右にぶれるのを防ぐ目的で使用するのだが、ここまで固めるように巻いているという事は、既に痛めてしまっているという何よりの証拠だ。

顧問が軽く足首に触れると、女の子は瞬間的に方目を閉じて痛そうな顔をした。

「やっぱり……いつ痛めたの？」

「……最初の競技の時です。ゴールしたあとに隣の選手と接触して、それで……」

「それなのに準決勝まで……今回は棄権しなさい、いいわね？」

「あと一回走るだけなら大丈夫です！ やらせて下さい！ せめて決勝にくらい残らないと……！」

顧問の言葉を聞いた瞬間、女の子は慌てて言った。

しかし……。

「だめよ、これは命令です。従えないのなら、もう部に出なくて結構よ」

返つて来たのは厳しさを含んだままの声だった。

それは教師として、そして顧問として当然の命令だったろう。

「先生……そんな……」

「また次があるわ。じゃ、手続きをしてから着替えておきなさい、いいわね？」

「はい……」

女の子としては、それ以外の返事は出来ないだろう。

「着替えたら、そのままロッカールームで待ってて」

先生はそう言い残すと、どこかへ歩いて行ってしまった。

その背中を見送ってから、涼は重大な事に気が付いた。

（あ！ 道訊きそびれたじゃねえか！ 何だよ、こいつに訊くしかねえのか？）

チラリと、ベンチに腰掛けたまま項垂れている女の子に目をやった。

重い……果てし無く雰囲気重い……。

例え真一郎でも、この状態の女の子には話しかけないだろうと思わせる空気だ。

（しょうがねえ、こうなりや適当に歩いて行くしかねえか。全部回ればどれか一つは当たりだもんな。 はは……今日中に帰れるかな、俺……）

涼が絶望的な気分になると……。

「恨むわよ……！」

顔を伏せたまま、女の子がボソッと言った。

「ん？ 何か言ったか？」

「あんな……恨むからね！」

「何で？ 人がせつかく……」

涼がそう言つと、今まで伏せていた顔をキッと上げ、目に涙を一杯溜めた女の子はベンチから立ち上がり、涼に挑みかかるように怒鳴り始めた。

「やっとここまで来たのに！ ずっと頑張つて来たのに！ あんたのせいで台無しよっ！ どうしてくれるのよっ！」

必死に堪えているのだろうが、溜まった涙が一つ、二つと、その頬を伝った。

だが、女の子は決して、そのまま泣いてしまうような事はしなかった。

きつと涼に泣き顔を見せるのが嫌なのだろう。

「一年のくせにして先輩に嫌味言われたって、先生に取り入ったって陰口言われたって、ずっと我慢してやって来たのにっ！ 結果を残せなかったら何の意味も無いじゃない！ わたしは実力で選ばれ

「ただだって証明出来ないじゃないっ！」

「……何だそりゃ」

気色ばんで怒鳴る女の子に対し、涼はつまらなそうにそう言い放った。

その態度でまた頭に來たのか、女の子の表情は更に険しくなった。

「な、何だとは何よ！ わたしがどれだけ頑張つて來たかも知らないくせにっ！」

「下らねえ。お前、一体何の為に走つてんだ？」

「そんなの……そんなの、走るのが好きだからに決まってるでしょっ！」

「へえ〜。今の台詞からだ、そうは思えねえけどな。俺はまた、その先輩つてのを見返してやるうとかつていう、安いプライドの為かと思つたぜ」

まるで女の子を小馬鹿にするように、涼は続けた。

何故か意識的に女の子を煽っているようだ。

「あ……あなたなんか解るもんかっ！」

「解つて欲しいとも思つてねえだろ？ それじゃ誰にも解んねえよ」

「うるさい！ どっか行け！ 馬鹿っ！」

「いや、だからさ、俺も行きたいんだけど……スタンドまでの道順、教えてくれないかな？」

「ふざけないでよっ！」

（マジなんだけどなあ……）

涼は頭をポリポリ搔くと、今度は一転して真面目な顔になった。

「ところでさ、お前はどこまで走るんだ？」

「何言つてんのよ……意味が解んない……」

涼が、今度は自分を馬鹿にして言っているのではない事が解つたのか、女の子は先程よりも静かに言った。

「この大会がゴールなのか？ つて訊いてんだよ」

「……え？」

涼が言わんとする事が解らず、女の子はキョトンとした顔になつ

た。

「違うんだつたら先の事考えろよ。高校でも、大学でも、婆さんになつたつて走れるんだぜ？今ここで無理して大好きな事が出来なくなつたら、それこそつまんねえだろうが」

「……」

そんな事は解っていた……いや、解っていたつもりだった。

だが、意地を張って無理をしていた自分に気付かされ、女の子は少しバツが悪い思いがしていた。

「期待の星なんだろう？ また頑張れるさ。お前、根性ありそうだし」

涼は笑いながら言った。

しかし今度は馬鹿にするのではなく、親愛の情を込めてだ。それが伝わったのか、

「あ、あのさ……」

「あ？」

「……さっきはごめん。ちょっと言い過ぎた」

女の子は、きちんと頭を下げて涼に詫びた。

自分のミスで負傷したのに涼に八つ当たりしてしまった事を、今更ながら悪いなと思ったのだろう。

「ま、いいんじゃないの？ イラついてただけなんだろうし、気にすんなよ」

「……ありがとう……」

「あ？ 聞こえねえよ、何だった？」

「何でもない！……ところで、いつまでここに居るつもり？」

「だから……道教えてくれて、さっきから言ってるだろ？」

「は？……もしかして、ホントに迷ってるの？」

疲れ切つたように言う涼を、女の子はポカンとして見つめた。まるで万華鏡のように、女の子の表情はくるくると変わる。

涼はそれを見て、面白い奴だなと思った。

けれど、今はそれどころではない……。

「これ以上無いってくらいに迷ってて、気分は遭難だ……」

涼は、肩を落としながら言った。

「……五分待てる？」

「待てるけど？」

「着替えたら案内してあげるから、そこにいて」

「あ……ああ、悪いな」

「いいわよ。じゃ、勝手に歩かないでよ？ もっと迷ったって知らないからね？」

「わーっただよ！ ここにいればいいんだろ？」

何となく風向きが変わったような気がして、涼は暫くの間、その場でボケっとしたままだった。

「まあ、一週間もすれば腫れも完全に引いて、また走れるようになりますよ。ご心配無く」

「そうですか。良かった……有難うございました」

顧問の女性教師は先程までの厳しかった表情が和らぎ、心底ホッとしたように安堵の息を漏らした。

「但し、この一週間の間は安静にしている事。練習は禁止ですよ？」

「はい。ありがとうございました」

「お大事に」

女の子は丁寧に医師に頭を下げると、先に立って医務室のドアを開けた。

「本当に一人で大丈夫なの？」

「はい。それに、みんなと顔をあわせるのが、ちょっと……」

「そう……解ったわ。あなたの家はここからも近いし、いいでしょう。但し気を付けて帰るのよ、いい？ 寄り道なんてしないで。」

「ご両親へは先生から連絡を入れておきますからね」

「はい」

女の子の返事を聞くと、先生は階段を上って行った。

それを見送り、先生の姿が完全に見えなくなったところで、

「待たせちゃったわね」

女の子は振り返り、廊下の柱に向かって声をかけた。

女の子が言うと、柱の影から涼が顔を出した。

別に隠れる必要は無いのだろうが、何となく先生と顔を合わせるのに気が引けたのだ。

「どうだった？」

「うん、一週間もすれば大丈夫だって」

「そっか、良かったな」

「友達が待つてるんでしょ？ 行こう」

「ああ」

女の子は、涼の先に立って歩き出すとすぐに、『学校はどこ？』

『家はどこ？』 『好きな物は何？』 などの質問をぶつけて来た。

普段、雛子以外の女の子と話す事など滅多に無い涼は、その矢継ぎ早の質問にしどろもどろになり、まともな答えを返せなかった……。

「あ！ 涼ちゃん、こっちこっち！」

スタンドの階段を上り切った所で、キョロキョロしている涼を見つければ、雛子は手招きをした。

さすがに子供の頃から聞いている雛子の声はすぐに聞き分けられるのか、涼はすぐに雛子を見つけて歩み寄って来た。

「おい涼！ お前、どこまで用足しに行ってたんだよ！ もう俺のダチの出番終わっちゃったぞ！ ったく……このアホたれ」

道案内よりも、先に治療をするように涼が言った為、スタンドに上って来るまでに大分時間が経っていたらしい。

結局、涼は真一郎の友達の応援は出来ずじまいだった。

「わりい、迷っちゃまってさ。で、結果は？ どうだったんだ？」  
「惜しかったんだけどさ、決勝で四位だった。全国はお預けだな」

「そっか……まあ、また次があるさ」

大会が年に何度あるか知らない涼は、取り敢えずさっきの顧問が言っていた台詞を言った。

それに、まだ一年生なのだし、この先いくらでもチャンスはあるだろう。

「お前の熱い声援があれば、もしかしたら勝てたかもしれない……」

「んな訳あるか。 そんなんで勝てたら誰も苦労しねえよ」

と、涼が苦笑すると、

「ねえ、やっぱり先にこっちに来た方が良かったんじゃない？」

今まで涼の陰になっていた女の子が、涼の横からヒョイと顔を出して言った。

「あれ……？ 涼ちゃん、その子、誰？」

涼の交友関係はそれ程広くないので、幼馴染の雛子は殆どの友人の顔を知っていたのだが、その女の子の顔に心当たりが無かった。

真一郎の友人という訳でもなさそうだし……。

「ん？ ああ、こいつはさ……」

「初めましてえ〜！ この人の彼女で〜っす！」

そう言うとき女の子は、涼の腕に自分の腕を絡ませた。

一瞬、三人の周囲の空気が凍り付いたようになり、その直後、

「えええ〜っ!？」

「何い〜っ!？」

「な……何だとおっ!？」

会場の声援に勝るとも劣らない程の驚きの声が、三つ同時に上がった。

その涼達のリアクションに、女の子の方が驚いている。

「あ〜、ビックリしたあ。 何もそこまで驚かなくても……」

「涼！ てめえ……応援そつちのけでナンパしてやがったのか！  
しかも、こんな可愛い子を……。 お前だけは信じてたのにっ！」

真一郎は腕を目に当てると、大袈裟に天を仰いで叫んだ。

「ナンパなんてしてねえっ！ 俺がそういうの嫌いだって知ってる  
だろ！」

「涼ちゃんがナンパ……。涼ちゃんが……！」

雛子はヨロヨロと後退りつつ手を口に当て、首を左右に振りながらイヤイヤをする。

「こ……こら、ヒナ！ 汚物を見るような目で俺を見るなっ！」

涼は慌てて女の子の腕を振り解き、雛子の肩を掴もうとするのだが、雛子は真一郎の後ろに回りこみ、涼から逃げ回る……。

「素直に白状しちゃえば？ わたしとは深あくい絆で結ばれちゃったって」

「お前は！ そこで話をややこしくすんなっ！」

結局、涼が必死に説明して真一郎と雛子を納得させるのに、十五分かつた……。

「そっか。 まあ、話しは解った。 俺様は最初から涼を信じてたからな」

「そ……そうだよ、涼ちゃんがナンパなんて、する訳ないよね」  
心底ホっとしたように、雛子は笑顔で頷く。

「お前ら、さつきは思いつきり疑ってたクセに……」

涼はイヤそうな目で、雛子と真一郎を交互に見た。

「しかし、いきなり『彼女でっす』 はねえだろ？ ド肝抜かれたぞ……。 何しろ相手が涼だからなあ」

「そんなに変？」

「変とかじゃなくて、今まで涼ちゃんにそんな事無かったからビツクリしちゃって……」

「そう言えば、この子の事 『ヒナ』 って呼んでたよね？ この  
子があんたの彼女なんだ？」

女の子は雛子を品定めするように、ジロジロと見ながら言った。



と言つても悪意のある物ではなく、本当に興味津々といった感じだ。

「いや、ヒナは友達だ。それに、俺には彼女なんていねえよ」

「ふうん……じゃあさ、わたし立候補してもいい？」

「えっ!？」

突然の事に固まる雛子。

その隣りで、真一郎は目が点になっている。

「お、おいっ! 何でそうなる!」

「ん? あんたの事が気に入ったから……かな? 一目惚れってやつ?」

「嘘吐けっ! 散々馬鹿呼ばわりしてたじゃねえか!」

「あ、わたし過去には拘らない性格なの。つまらない事は忘れるのが一番よ、うん」

『あはは』とわらいながら、女の子はサラリと言つてのけた。

こういう所が何となく誰かに似ている……テンパった頭の片隅で、涼はそんな事を考えていた。

「……」

雛子は何か言いたそうにしながらも、その様子を黙って見つめていた。

駄目だと言いたいのだろうか?

それとも、良かったねと言いたいのだろうか?

雛子は、自分の中で色々な感情が渦巻いているのを感じた。

けれど……。

「んじゃ、決定! あんた不束者だけど、よろしくしてあげるから感謝しなさい」

「決定じゃねえっ! それにお前、日本語がメチャクチャだぞ!」

「お前って言ふな! わたしには、高梨利恵って立派な固有名詞があるんだから!」

「お前こそあんたって言ふな! 俺にだって、宇佐奈涼って名前があるっ!」

「じゃあ利恵って呼んでよ、そしたら涼って呼んであげるからさ」  
「呼ばんでいいっ！　っーか呼ばんっ！」

「何でよっ！　わたしじゃ不満だとても言うのっ！？」

二人は席から立ち上がると、さっきよりも激しく言い合い始めた。  
雛子も真一郎も啞然として、その光景を見守るしかなかった。

いや、口を挟もうにも何をどう言っただけ良いのか判らないし、下手をすればこちらに飛び火しそうな雰囲気だからかもしれない。

「不満とか、そういう問題じゃねえだろ！　おい真！　ヒナも！  
黙ってないで何とか言ってくれよ！」

「……この状況で俺らに何言えっっーの、お前」

半ば呆れた顔をして、真一郎が首を横に振った。

真一郎にしてみたら、可愛い女の子に好かれて嫌がっている涼の  
気持ちが見え不出来なのだ。

「……とりあえず、ゆっくりお話ししてみたら？」

「やっくん、ヒナちゃん大好き！」

「お、おい、ヒナ！　俺を見捨てる気かっ！」

「そんな事しないよ。　ただ……ちゃんと、お話ししなくちゃいけ  
ないと思う」

雛子は真面目な顔で言った。

少なくとも、利恵は悪い子ではない……そんな確信があったのだ。

そして、利恵なら自分の願いを叶えてくれると……。

利恵は、そんな雛子の耳に口を近付けて、

「まずは、わたしが先制させてもらったからね」

と、片目を閉じて言った。

「えっ！？」

「さ、こんな所で立ち話しも何だから、どこかで落ち着いて話しま  
しよ」

「そっだな。　んじゃ、俺様が取っておきの店に案内してやるよ」

真一郎が腰を上げながら言った。

その顔は、明らかに喜んでる顔だ。

どうやら真一郎の中では、この状況を楽しむという結論が出たらしい。

「お、おい、お前ら！ 何を勝手に話し進めてんだよ！」

「じゃさ、ついでに立会人になってよ。あとで涼が言い逃れ出来ないように」

「お前、本気で言ってたのかつ！？」

「わたしは、いつでも本気で全力なの。　憶えといてね、涼」

この日から、運命の歯車は静かに回りだしたのだ……。

## 第四章

「じゅ……」

ゴールデンウィークも間近に迫った、とある土曜日の午後。

高梨利恵は、佐伯雛子の部屋にいた。

いや、ただいるだけでは勿論ない。

「な、何？ 利恵ちゃん。その疑惑に満ちた眼差しは……」

「くんくん……嘘の臭いがする。 貴様、わたしに嘘を吐いているな？」

利恵の興味は、ある一点に集中されているらしく、ここに来てからというものの、ずっとそれを追求し続けているのである。

もつとも、今日は雛子の方から誘ったのだが、まさかこんな事になるとは思ってもみなかった。

「だ……だからね、何度も言ってるでしょ？ わたしと涼ちゃんは、本当に何でもないんだから……」

「だから何度も言ってるでしょ？ わたしに嘘を吐いてはいけない。

わたしに真実を告げると、賞品として漏れなくキスが付いて来るぞ？ どうだ？」

キス……？

一瞬、呆けたように利恵の唇を見てから、雛子はハッと我に返った。

そんな趣味は無いのである。

「はい！ もうその話は終わり！ お茶淹れて来るから……何がいい？」

「涼は何が好きなの？」

「大抵何でも飲むけど、一番はコーヒーだよ」

「じゃ、わたしもコーヒーで」

「かしこまりました」

雛子はクスッと笑うと、コーヒーを淹れる為に部屋を出て行った。

その背中を見送って、利恵は『ふう……』と、溜息を吐いた。  
「何である子は平気な顔で笑ってられるのかな？ 絶対に涼の事、好きだと思っただけどなあ……」

市営競技場での会話でも、その後のケーキショップでの会話でも、その言葉の端々に、涼に対する雛子の気持ちが見え隠れしていたように利恵には感じられた。

他の人間ならともかく、恋する相手に関わる事だけに、そのアンテナは感度が鋭くなって当然である。

「……それにしても可愛らしい部屋だなあ」

何だか女の子の子した部屋で、利恵はちよつとムズムズするようないきがしていた。

自分の部屋とは全然雰囲気が違う。

まあ、実際に使っている人間が違うのだから、部屋の雰囲気が違っても当たり前なのだが……。

「淡いブルーのカーテンに、ピンクのドレッサーはまだしも、このヌイグルミの数々は……ん？」

ふと、机の上に置かれているフォトスタンドに目が行った。

二人の人物が写っているのが判る。

「ほぐら、やつぱり」

利恵は四つん這いになって近付き、そこに写っている人物を確認してみた。

「……あれ？」

しかし、そこに写っているのは子供である。

悪戯小僧を絵に描いたような男の子と、いかにも大人しそうな女の子だ。

男の子の方は髪がボサボサで全身に細かい傷がたくさんあり、女の子の方は可愛らしい服を着て、大きなリボンで髪を結い上げている。

「あの子の子供……な訳ないか。この背景の家は、ここと似てる

けど……屋根の色が違うわね」

「涼ちゃんの家だよ」

突然背後から声をかけられて、利恵は思い切りビクリして振り返った。

「ず、随分早いよね」

利恵は軽く咳払いをしつつ、元いた場所へと戻った。

「サイフォンごと持って来ちゃったからね」

「あ、そ、そうなんだ、本格的なんだね。　　うちは大抵インスタントだな」

「涼ちゃんが来た時に、インスタントだと困っちゃうからね。』

「こんなもん、コーヒーじゃねえ!』　　とか、ブーブー文句言うから」

「何て我侂な……」

「涼ちゃんが遠慮無く本音を言える人って、そんなにいないから。」

だから、ここに来た時くらいは言わせてあげる事にしてるの」

「涼って……そんなにしょっちゅうここに来てるの?」

これは怪しい……と、利恵の疑惑の眼差しが再び雛子を捉えるが、

「わたしの部屋には入らないけどね。　　おば様と喧嘩した時とか、

ご飯が無い時なんか避難して来るんだ」

雛子はクスッと笑いながら言うと、足元のクッションをどけて、

サイフォンを置いた。

「ヒナちゃん、涼の家ってどこなの?　　涼に訊いても全然教えてく

れないんだもんなあ……」

利恵が散々食い下がっても、涼は頑として口を割らなかつた。

ターゲットを真一郎に変えても、横から涼が邪魔をして来て、結局聞き出せないままだった。

涼がトイレに立った隙に聞き出そうとしたのだが、真一郎は「今はやめとけ」　　と笑って言うばかりで、やはり教えてもらえなかつたのだ。

「そこまでして隠さなくてもいいと思わない?　　別に悪い事しようって訳じゃないのにさ」

「涼ちゃんの家は、わたしの家のお隣さんだよ。ほら、その窓から見えるのが涼ちゃんの部屋」

サイフォンをセットしながら事も無げに言う雛子の言葉に、利恵は思わずコケそうになった。

「何してるの？」

「そ、それはこっちの台詞よ！ それじゃ、わたしを招待なんてしたらマズいじゃない！」

「どうして？」

「どうしてって……だって、本人が内緒にしようとしてるのに、思い切りバラしちゃってるし！」

「隠す方がおかしいんだよ。だって、もう仲良くなったのに……」  
コポコポと音を立ててフラスコの湯が徐々にロートに上がり始めると、そこからはコーヒーの良い香りが立ち昇ってくる。

二人は暫し無言のまま、湯気を見つめていた。

「……ねえ」

「ん？」

「ヒナちゃんてさ、わたしの事どう思う？」

「え？ 利恵ちゃんの事？」

突然の質問に戸惑いながらも、雛子は「うん、そうだなあ……」

……と、ちょっとだけ考えて、

「元気一杯で明るくて、正直な子……かな？」

と、感じたままを述べた。

「あらうん、ありがとう。……いや、そうじゃなくてさ、好きか嫌いかでジャンル分けしてみても」

「好きだよ？」

「か、間髪入れずに即答したわね……」

「だって、本当だもん」

にこにこ笑う雛子を見て、利恵は内心『負けた』と思った。

これは自分の想像以上に、雛子が涼の事を信じているから出来る事だ。

そうでなければ、ここまで落ち着いていられる訳が無い。

「くそ……同点に追い付かれてしまった。せつかく先制の一撃を入れたのに……!」

「先制の一撃？ あ、そう言えば利息ちゃんて、少林寺拳法やってるんだよね」

「え？ あ、うん」

「真君、かなりビックリしてたね」

「いきなりスリーサイズなんて訊くからよ。あの人、どういう人なの？」

嫌がる涼を無理矢理引き摺り、競技場近くのケーキショップへ行った時、最初は大人しかった真一郎であったが、やはりそれが最後まで続く筈も無く……。

「ただ話してるだけじゃ面白くないな……よし！ ここはひとつ、俺様の華麗なる芸の数々をお見せしようではないか！」

と、突然ストローで皿回しを始めたり、ダスターや紙ナプキンで作った人形で寸劇を始めたりしていた。

とにかく利息にとって、真一郎は奇妙な生物のように見えたのだ。「わたしもそんなに知ってる訳じゃないけど、とってモいい人だよ。優しくて、凄く楽しくて面白い人。でもね……」

「でも？」

「時々、ふっと寂しそうにしてる時があるの。わたし達の前ではそういう顔は見せないようにしてるみたいだけど、偶然見ちゃった事があって……」

「ふうん……根っからの能天気小僧って訳でもないのね」

言いながらカップに淹れられたコーヒーを一口飲み、利息は驚いたような顔をした。

「何？ この美味しさ……。ねえヒナちゃん、これって滅茶苦茶いい豆使ってない？」

「ううん、近所で買って来たお徳用の豆だよ」

「それでどうしてこんな味が出るの？」



「ローストし直してみました。ちなみに数種類の豆をブレンドしております」

「あんた何者だ……？」

「一緒に出されたクッキーも食べてみる。」

「……美味しい。」

今まで食べたどんなクッキーよりも、遥かに美味しい……いや、比べるのが申し訳なく思えるくらいだ。

「これ美味しいね。メーカーどこ？」

「あ、それ、わたしが作ったの」

「ハンドメイドですか……」

雛子作のクッキーは適度に甘味を抑えてアツサリとしているが、それでいて、ちゃんとお菓子としての体を成している。

どうしてこれで商売しないのか不思議に思える。

ロクに料理の出来ない利息から見れば、雛子はまさしく雲の上の人である。

「神だ……ここに神がいる！」

「なあに？ 神って……」

「いや、こつちの話。でも凄いな、ヒナちゃんて何でも出来ちゃうんだ」

「何でもって事は無いよ。まだまだ作った事の無い物はたくさんあるし、おば様に比べたら、わたしなんて足元にも及ばないもん」

「そうなの？ じゃあ、ヒナちゃんの伯母さんは達人だね」

「あ、違うの。おば様っていうのは、涼ちゃんのお母さんの事だよ。色々と教わったんだよ」

「何と……」

まあ、家が隣同士というのなら、雛子と涼の母に交流があっても不思議ではない。

それに雛子の両親は留守がちだというし、きっと母親の代わりに近所付き合いをしているのだろう。

「でもさ、短期間でこんなに上手になるなんて、やっぱりヒナちゃ

んは凄いよ」

「そんなに短期間でもないよ？ ちっちゃい頃からの事だからね」

「ちっちゃい頃？ ちょ、ちょっと待って。じゃあ、ヒナちゃんと涼って……」

「うん、幼馴染」

それは考えて然るべき事だったのに、どうして頭に浮かばなかったのだろうか？

もしかしたら、無意識の内に考えないようにしていたのだろうか？

「あのさ……もしかして、あの机の上の写真って……」

「ああ、あれ？ わたしと涼ちゃんの子供の頃のだよ。涼ちゃんのお父さんが撮ってくれたんだ」

やっぱり……。

「ヒナちゃん、涼のお母さんと仲いいみたいだけど、やっぱり涼のお父さんとも仲いいの？」

「え？ ……そうだね。おじ様は、いつでもわたしに優しくしてくれたから……」

そう言うと、雛子は両手で持ったカップをユラユラと揺らしながら、視線を落してしまった。

懐かしく思い出しているといった雰囲気ではない。

何か、思い出すのが辛いとか、触れてはいけない部分に触れてしまったような、そんな感じだ。

「……どしたの？ 急に元気なくなっちゃったみたいけど」

「おじ様はわたしが……わたしのせいで……」

「え？」

急に雛子の表情が曇ったのを見て、利恵は何か悪い事を言ってしまったかと考えたのだが、別にここまでの会話でそれを言った覚えは無い。

だが、それも一瞬の事で、

「……ううん、何でも無い。あのね、おじ様は、わたしが小学校三年生の時、交通事故で亡くなったの」

雛子はすぐに、また先程までと変わらない調子で言った。  
もう少し突っ込んで訊こうかとも思ったが、利恵はすぐに思い直した。

話せる事ならば、今この場で雛子は話すだろう。

まだ自分には雛子の中へ立ち入るだけの資格は無い……。

「あ、そうだったんだ……聞いたと良かった。知らずに涼に言っちゃったら、また怒られちゃうところだったよ」

「大丈夫だよ。涼ちゃん、そういう事では怒らないから……」

「でも、涼って何かと言うとわたしに怒るんだもん……ヒナちゃんには優しいくせにさ」

口を尖らせて言う利恵をみて、雛子はクスクスと笑いながら、

「わたしには、おば様がついてるからね。涼ちゃんも、おば様には逆らえないんだよ」

「……涼ってマザコン？」

「そういう訳じゃないよ。ただ、おば様を怒らせたならご飯抜きにされちゃうし、何より強いからね。涼ちゃんでも歯が立たないくらいなんだよ」

「へえ……。あ、じゃあ、わたしも涼のお母さんを味方に付ければいいんじゃないか！ そうとなれば……行くわよ、ヒナちゃん！」

「行くって……どこへ？」

まだここへ来てから然程時間も経っていないのに……と、雛子が疑問に思っていると、

「決まってるでしょ？ 涼の家よ！」

利恵はすつくと立ち上がって宣言した。

「え？」

「さあ、早く！ ヒナちゃんが紹介してくれなきゃ、訪ねて行けないでしょ！」

「ちよ、ちよつと待って利恵ちゃん！ きゃあ！」

強引に手を引かれて転びそうになりながら、雛子は利恵に引き摺

られるようにして、宇佐奈家へと行く破目になった……。

「高梨利恵と申します！ 今後とも、よろしくお願い致しますっ！」  
「ほほお〜……涼も隅に置けないわね。 はいはい、わたしが涼のママ、宇佐奈環ちゃんです」

ニヤニヤする環とは対照的に、仏頂面の涼は今にも席を立ってしましそうだ、そこは環がシツカリと抑えているので、それは出来ない。

不貞腐れた様子で居間のソファに座っている以外、今の涼には行動の自由は無いのだ。

「……何しに来やがったんだ、お前は」  
目を背けたまま、呪詛にも似た言葉を吐くのが精一杯である。  
しかし、それも……。

「女の子にはもっと優しく接しなさい」  
という環の一言（ゲンコツのオマケ付き） によって、あつという間に木っ端微塵にされてしまう。

「あ、本当にヒナちゃんの言う通りなんだ……」  
「ん？ 利恵ちゃん、何かな？」

「あ、いえ、何でもありません。 やっぱり、お付き合いをするに当たって、お母様にご挨拶をしないとイケないと思って、こうして参上した次第です」

「誰が付き合うつて言ったんだ、誰がっ！」  
「シャ〜ラップ！ 今はわたしと利恵ちゃんが話してるの。 お前は黙っといで」

「けど、俺はこいつと付き合っなんて一言も……」  
「お黙り」

「いや、だって……」  
「……」

「……解りました」

こうなると、もう完全に環のペースである。

これで涼は一切の発言をも認められなくなった。

(くっそお……ヒナ、恨むからな!)

じつと雛子を見る涼の視線を、雛子は顔を背けて、気付かないフリでやり過ごす。

もっとも、例え雛子と目が合ったところで、今の涼には成す術も無いのだが……。

「さてさて！ 詳しい経緯を聞くと共に、わたしとしては宴会でも開きたいと思いますが、何か異存のある人はいますか？」

環が言つと、涼は恐る恐るといった感じで小さく手を上げた。  
が……。

「ふむ……どうやら異議申し立てが無いようなので、これからわたしが腕によりをかけて、お料理を作ります。 さあ！ 宴会だ宴会だ〜！」

環は完全無視である。

「すみませ〜ん！ 一名、手を上げている人がいます！」

「あ、申し訳ありませんが、部外者の方は発言権がありませんので、ご遠慮下さい」

「何で俺が部外者扱いなんだよ！」

「ほら、いつまでも座ってないで、お前の友達も呼びなさい」

「何でっ!？」

「おめでたい席だから」

「ふざけんなよ！ こんな所に呼べるかよっ！」

「こんな所とは失礼な。 ここは、お父さんが頑張つて働いて建てた、お父さんの血と汗と涙の結晶とも言える家だぞ？」

「意味が違つだろ、意味が！ 俺が言つてんのは、そういう事じゃなくて！」

「やいやいと言ひ合う涼と環を、利害は啞然として見つめている。

「ヒナちゃん……この二人って本当に親子？」

「どうして？」

「何だか痴話喧嘩を見てるような気がして……」

自分も時々は両親と口論になったりするが、目の前で繰り広げられている光景とは若干趣が異なる。

特に父親の場合、こんな掛け合いのような感じにはならない。

「そう？ わたしは昔から見てるから、当たり前前の光景にしか見えないなあ……それよりも……」

「何？」

「……利恵ちゃんと言いつける時と同じに見えるよ」

「わたしと？ わたしって、そんなに老け……いやいや、大人っぽい？」

「そういう意味じゃないよ……。あ、おば様、わたしもお手伝いします」

利恵が何か言おうとする前に、雛子はソファから立ち上がり、キツンへと小走りに行ってしまった。

当然、環も一緒に行ってしまったので、必然的に居間には涼と利恵の二人が残される事になる。

しかし、涼はブスっとしたまま、利恵と目を合わせようとしてもしない。

「あの……涼、もしかして怒ってる？」

「当たり前だろうが。いきなり押しかけて来やがって……何考えてんだ、お前は」

「そんなに怒っちゃ駄目だよ。わたしだって悪気があった訳じゃないんだから、ね？」

「悪気でやられてたまるかつ！ 妙な自己弁護をすんなっ！」

「……やっぱり、ヒナちゃんの方がいい？」

「え？」

涼は思わず利恵を凝視した。

予想していたリアクションと全く違う。

利恵ならここで、もっと実力行使に近い行動を取るとばかり思っ

ていたのだが、何かしょげ返ったような感じで俯いてしまっている。  
「そうだよね……わたしなんて、すぐに叩いたり蹴ったりするんだもん、ヒナちゃんとは全然違うよね……」

「い、いや、別に俺は、お前とヒナを比べてる訳じゃ……」  
「料理も全然出来ないし、ちっとも女の子らしくないし……魅力なんて、どこにも無いよね……」

俯いたままの利恵の肩が小刻みに震えている……これはどう見ても、泣いているとしか思えない！

これは涼としては不本意な状況である。

小さな頃から 『弱い者イジメはしない』 『女の子は泣かさない』 をモットーとしてやって来たのだから。

「ちよつと待って！ 誰もそんな事言っていないだろ！？」

「いいんだよ涼、そんなに無理しなくても……わたしが嫌いなら嫌いって、ハツキリ言っ……いいんだよ……」

「いや、好きとか嫌いとかって話じゃなくてだな……そもそも、そういう話の流れじゃなかったら！？」

「わたし、もうこの場にいられない……お邪魔しましたっ！」

「あ、おい！」

「冗談ではない。」

今ここで利恵に帰られてしまつては、あとで環にどんな目に遭わされるか解つたものではないのだ。

……いや、確実に解っている。

恐らく向こう一週間は、まともに自力で歩けなくされてしまうだろう。

「とりあえず落ち着け！ まずは落ち着いて話し合おう！」

ベッドの上でウンウン唸っている自分を想像して、涼は青ざめたまま利恵を必死に引き止めにかかった。

「もう話す事なんて無いよ！ そこまで言われて、わたしに何を話せて言うの！？」

「そこまでって……お前が一人で勝手に喋ってただけで、俺は何も

言ってねえだろうが！」

「何も言わないって事は認めたと同じだもん！ 涼はわたしの事が嫌いなんだあっ！」

「声がでけえよ、お前はっ！ 頼むから落ち着いてくれ、な？ とりあえず座れ、話はそれからだ」

「だから、話す事なんて無いってば！」

「事態を解決の方向へ持って行くって事を知らんのか、お前はっ！ うるさいもん！ 涼の声の方が大きいじゃないかあっ！」

「だーっ！ いいから座れっ！」

利恵の両肩を掴んで何とかソファに座らせると、また逃げ出されずには敵わないので、涼もその隣に腰掛けた。

利恵は相変わらず少し俯いたままだ。

「……で？ 何を話そうっていうの？」

「何をって……」

正直、何も考えていなかった。

取り敢えずこの場を収める事だけを考えていたので、改まって言われると何を話して良いものやら、サッパリ頭に浮かばない。

「え、えーっと、そうだな……んじゃ、まずは趣味とか、その辺から……」

「つまらないからパス」

「この野郎……」

「じゃあさ、涼がわたしの質問に答えるっていうのはどう？」

パッと顔を上げると、利恵はウキウキした様子で話し出した。

「何だよ、俺に何か訊きたい事があるのか？」

「だから質問するんじゃない。あんた馬鹿じゃないの？」

「……お前が男だったらブン殴ってるところだ」

「ね、涼の好みは？」

どうやら先程までの嘘泣きだったようで、利恵はケロっとした顔で涼に質問し始めた。

「好み？ そうだなあ……」



しかし、涼はそれに気付かないのか、利恵の質問に対して真剣に考えているようだ。

「飲むならコーヒー、食うなら甘い物以外。あとはそれなりに適当だな」

「うわ、本気で馬鹿だ」

「お前、絞め殺すぞ……！」

涼のこめかみ辺りがピクピクと痙攣しているが、そんな事にはお構い無しで、

「わたしが訊きたいのは女の子の好みだよ。どんな女の子が趣味？」

と、利恵は質問を続けた。

「無し」

「嘔吐くと泣くぞ。正直に言え」

「無し」

「……暴れるぞ？」

「無い物は無い！ それ以外に答えようも無い！ 以上！」

「つまり節操無し……と」

「お前の性格だけをブッとばす方法ってのは無いもんかな……」

頭を抱える涼に対して、利恵はにこにこしている。

涼が相手をしてくれているのが嬉しいようだ。

そんな二人の様子を、環はコッソリと廊下から覗いていた。

宇佐奈家のキッチンと居間の距離はそれ程離れていないので、こっぴつた芸当も可能なのである。

「あらま。なかなか上手く涼を操縦するわね、あの子。これは侮れないな……」

うんうんと頷き、環は再びキッチンへと戻った。

そこでは雛子が料理の下ごしらえをしている。

野菜を洗う為の金属製のボールを棚から下ろすのに、背の低い雛子は悪戦苦闘していた。

「あ、お婆様、メインはお魚にしようと思うんですけど、ヒラメと

鯛のどつちにしますか？」

「そうねえ……今日は鯛で行きましょうか。ところで雛子ちゃん」

「はい、何ですか？」

「……いいの？ 利恵ちゃんに涼を任せちゃって」

「え？」

思わずボールを思い切り引つ張ってしまった為、キャッチする間も無くボールは床に落下し、派手な音を立てた。

「どうした！ ヒナ、何かあったか！」

その音を聞きつけるとほぼ同時に、涼が即座にキッチンまで飛んで来た。

こういつた反応は意識してやっている訳ではない。

小さい頃から染み付いている、いわば習性のような物なのだ。

「な、何でもないよ涼ちゃん。ちよつとボールを落としちゃっただけ」

「何だよ、脅かすなよな。ヒナらしくもない……気を付けるよ？」

「う、うん、ごめんね」

「大体、母さんが付いてて何だよ。ヒナに怪我なんてさせるなよな？」

「はいはい、解ったからあっちにお行き」

シツシツと犬を追い払うような手つきをする環を横目で睨みながら、涼はぶつぶつ言いつつも居間へと戻って行った。

「自分が何を言ってるか解ってるのかね、あの馬鹿は」

「おば様……」

「雛子ちゃん、後悔しない？」

「……しません。利恵ちゃんなら、きっと涼ちゃんを支えてくれますから」

「そう……」

「わたしは涼ちゃんが笑っていてくれれば、それだけでいいんです。それだけで……」

この子は、まだ気に病んでいるのか……と環は思った。

保が亡くなったあの日から、ずっと、ずっと……。

環は思わず雛子を抱きしめたい衝動に駆られたが、それをグッと堪え、

「さあ！ 雛子ちゃん、今日は二人でとびっきりの物を作るわよ！ 予算は無制限だ！」

と、腕まくりをしながら言った。

「はい！」

もう桜の季節も終る頃のこと……。

散らす花弁も無い桜の木は、しかし、その幹まで枯れてしまっ訳ではない。

けれど……。

## 第五章

「おはようございませ〜す！」

宇佐奈家の前で、元気な女の子の声が響いた。

ゴールデンウィークに入ってからというもの、毎日聞こえる声である。

勿論、ただ玄関の前で叫んでいる訳ではない。

ちゃんとインターフォンを押して、対応に出て来た環に向かって言っているのである。

「あら、利恵ちゃん、おっはよん。毎日ご苦労様ね」

「お母様、いつもお騒がせしております！ 涼は起きて……ませんよね？」

「いつもの通りよ。どうぞ、自由にやってちょうだい」

「ではでは、お邪魔させて頂きます」  
休日というと、涼はいつも昼過ぎまで惰眠を貪る事を常としている。

無論、今日もまだ夢の世界で幸せを謳歌している真っ最中だ。

トントンと軽やかに階段を上る利恵の足音も、部屋のドアを開ける音も、涼の耳には全く届いていない。

口を半開きにして寝ている涼の顔を覗き込んで、全く起きる気配がない事を確認すると、利恵は腕組みをしながら考え始めた。

「う〜んとお……一昨日は濡れタオルを顔に乗つけたし、昨日はいきなり上に乗ったから、今日は違った事をしたいなあ……」

……徐々に過激になって行くように思えるのは、果たして気のせいだろうか？

「そつだ！ 今日はこちらで行こう！」

妙な寝苦しさを感じて、涼は寝返りを打った。

まだ意識は覚醒していないが、それでも『何かが違う』という漠然とした感覚がある。

「うーん……」

どうしても、いつものように快適な眠りによる心地良さが感じられない……それどころか嫌な圧迫感を感じる。

それは意識がハッキリするつれて、段々と大きくなって行くような感じだ。

「ん……」

何となくいい匂いがする……そして仄かに感じる温もり。

それに、何やら腕に柔らかい物が当たっている感触がある……。

(……何だ？ これ)

まだ寝ぼけたままの頭では正常な思考も出来ず、涼は反射的に『それ』を手で触って確認してみた。

『ふにふに』とした感触がある『それ』は、いつかどこかで触った事がある物のような……。

「……？」

目を閉じたまま、思わずギュッと掴んでみた。

と同時に、

「いたた。痛いよ、涼」

聞き覚えのある声が涼の耳に飛び込んで来て、今まで閉じていたとは思えない程、涼の目は思い切り大きく開いた。

そして、涼の目に映ったのは、

「おはよー、マイ・ダーリン」

と、優しく微笑む利恵の顔のアップだった……。

「うわああああーっ！」

寝起きとは思えない素早さで跳ね起きると、涼は部屋の隅まで一気に転がって行った。

「お、お、お前っ！ 何やってんだっ!？」

「もう、乱暴なんだから……もつと優しくしてくれなきゃダメだよ」

ちよつとふくれたような顔をして、ベッドの中から利恵が言った。

「ふざけんなつ！ 何でお前がここにいるんだよっ！」

「いい加減に慣れてよ、初めてじゃないでしょ？」

「な、何がっ!？」

「だって、連休の初日から来てるんだし」

「あ……そつちの意味か……」

「何？」

「何でもねえっ！」

そうだった。

このところ、毎日こうして朝っぱらから利恵に起こされ、その日一日、利恵に引つ張り回されているのだ。

連休中には真一郎や琢磨とどこかへ行こうと話していたのだが、未だその約束は果たされていない。

利恵と一緒にの所を真一郎に見られるのは嫌だったし、ましてや琢磨などは堅物が生真面目の服を着て歩いているようなものなので、  
「よもや、いい加減な気持ちではあるまいな……？ 不実な真似は赦さんぞ！」

とでも言いそうである。

素手の時ならいざ知らず、激昂した琢磨が木刀でも持ち出したら手が付けられない。

そうになったら、もう利恵とは無関係だと主張する事も不可能になつてしまつに違いないのだ。

「お前さ、毎日毎日こんな事してて楽しいか？」

「うん」

「……少林寺拳法の稽古だつてあるんだろ？」

「連休中は休む事にしたの」

「遅れを取り戻すのは大変なんじゃないのか？」

「大丈夫。ちゃんと自主トレはしてるから」

「そうですか……」

駄目だ。

こんなノンビリした流れでは、利息を追い出す事など出来る訳がない。

何かもつと他の話題を考えなければ……何か無いか？

しかし、ただでさえ話題の無い涼の事。

更には寝起きの頭で、そこまでの事が考え付く筈も無かった……。

「無駄な足掻きだったか……」

「何ぶつぶつ言ってるの？」

「何でもねえ……それより、いい加減ベッドから降りろよ。こんな場面をお袋に見られたら、また何を言われるかわかったもんじゃねえ……」

涼が頭をガシガシと掻きつつ、未だベッドで布団に包まったままの利息に言つと、

「ええ……？ でも、恥ずかしいなあ……」

掛け布団で顔を半分隠しながら利息が言った。

「何で恥ずかしいんだよ？」

「だって、わたし服着てないし」

ふと見ると、その言葉の通りに利息の服は綺麗にたたまれて、椅子の上に置かれている。

「何で脱いでんだよっ！」

「皺になっちゃうから」

「だったらそんな真似しなきゃいいだろうに……って！ もしかして、さっき俺が握ったのは……！？」

感触を思い出したのか、涼は自分の手をじっと見つめながら、背中を汗が伝って行くのを感じた。

「えっち」

「うわあああああーっ！」

涼はこの瞬間、神様なんていないんだ……と思った。

「まったく……何が『えつち』だ！」

ダイニングで朝食を摂りながら、自分が先程掴んだのは利恵の肩だと聞かされて、涼は大いに不機嫌だった。

いや、別に『本物』に触れなかったから不機嫌なのではない。

騙されたのが癢に障るのだ。

当然、その席には環も利恵も一緒にいて、同じ物を食べている。

「涼だったら、そんなに残念がらなくてもいいじゃない。それは、また今度ね」

「誰が残念がるか！俺は呆れてるんだっ！」

「はいはい、二人とも。食事は楽しくしなさい」

「はい、お母様」

「何がお母様だ……」

不貞腐れ気味にトーストに噛り付きながら、涼はブツブツと文句を言い続けていた。

「涼、お前もいい加減、朝っぱらから大声出すのやめなさい。ご近所にご迷惑でしょ？」

「何で俺が文句言われなきゃなんないんだよ！？原因はこいつだろ！」

「こいつなんて言い方があるか！ちゃんと『利恵ちゃん』と呼びなさい！」

「あ、利恵でいいよ、涼。もしくはハニととか」

「全部嫌だっ！」

「何て我俣な……」

「ごめんね、利恵ちゃん。わたしが甘やかして育てたもんだから……恥ずかしいわ」

「俺には甘やかされた記憶なんて無いぞ……？」

足腰が立たなくなる程の鉄拳制裁を喰らったり、意識が遠のく程締め上げられた事なら鮮明に記憶に残っているが……。

「本当に気が利かないし、馬鹿だし、ロクでなしだし。こんなボ



ンクラ、そうそういないわよ?」

「それも含めて涼ですから、わたしは全然気にしません」

「何ていい子なのかしら……。涼! 利恵ちゃんに謝れ!」

「おかしい……。何で俺が悪者になってるんだ……。?」

何とも複雑な表情を浮かべる涼を見つめつつ、利恵は出されたコーヒーを一口含んだ。

と……。

「あれ? この味……」

先日、雛子が淹れてくれた物と同じ味だ。

そう言えば、雛子の料理の師匠は環だと言っていたし、きっと雛子の味付けは環の物が基本になっているのだろう。

「ん? どうかした?」

「あ、いえ……。ヒナちゃんの家で飲んだのと同じ味だなと思って」

「ああ、コーヒーね。まあ、雛子ちゃんに分けてもらった豆だからね」

「へ?」

「涼の好みのブレンドになってるのよ。お父さんの影響かしらね、やたらと味の好みが煩くて。雛子ちゃん、随分苦労してこの味を出したのよ」

「そうなんですか……」

「あの子は努力家だから。最初に出したコーヒーを涼が貶したもんだから、もう意地になってね。』絶対に美味しいって言わせてやる!』って。……小学五年生くらいの頃だったかしら? それから三ヶ月くらいは、うちからコーヒーの匂いがしなかった日は無かったわね」

大人しいだけの子かと思っていたのに、雛子にはそんな頑固な一面もあつたのだと、利恵は感心した。

やる時には徹底してやるというのは、利恵も好きな性格だ。

「お母様がヒナちゃんの料理の師匠だっというのは聞いてましたけど、これは初耳でした」

「お料理に関してはもつと凄いわよ？ 何たって幼稚園の頃からだから。『おばちゃん！ ヒナにお料理教えて！』 って言ってるね。最初は気まぐれで言ってるのかな？ って思ってたなら、殆ど毎日欠かさずに通って来たからね、ここに」

「今もですか？」

「ん〜……今はそうでもないわね。それに、もう自分で色々工夫して作る段階よ。いつまでも師匠にベツタリじゃ進歩が無いもの」

「同い年とは思えない……」

料理をしようとすら考えた事の無い利恵にとって、雛子のそれは非常に衝撃的であった。

同点に追い付かれたという考えは間違っているのではないだろうか？

それどころか、まだまだ雛子に追い付けない気がする……。

「いかん……このままでは更にリードを広げられてしまう……！」

しかし、今から料理の修行をしたとしても、雛子に追い付く頃には、既に手の届かない域にまで雛子が行ってしまったているだろう。

同じ事をしていたので駄目だ。

もつと自分ならではの事をしないと……。

「おい……今度は何を企んでるんだ、お前は」

食事の手を止めて考え込んでいた利恵を、涼は訝しげな視線で見つめて……いや、これは睨んでいるのだろう。

「人聞きの悪い。わたしは何も企んでません」

「本当だろうか？」

「しつこいなあ……少しはわたしを信用してよ」

「自分の普段の行動を考えてから言え！」

涼はコーヒーを飲み干すと、そそくさと席を立ち、二階の自分の部屋へと階段を駆け上がった行ってしまった。

「落ち着きの無い子ねえ……利恵ちゃん、コーヒーのおかわりは？」

「あ、もう結構です」

と、環の勧めを断って、

「あの、お母様に一つお訊きしたいんですけど……」

妙に神妙な面持ちで、利恵は言った。

「何かな？」

「わたし、これからどんな風に涼と接したらいいでしょうか？」

「あら、どうしてそんな事を考えちゃったのかな？」

「こんな事してても、ヒナちゃんには敵わないと思って……」

幼い頃から一緒にいる雛子には、涼の事がよく解っている筈だ。

「飲食物の好みはもとより、どんな場所が好きかなど、細かい所まで知っているだろう。」

けれど、自分には何も無い……涼の事を何も知らないのだ。

「……考えなさんな」

「え？」

「利恵ちゃんは利恵ちゃん、雛子ちゃんじゃないの。自分に出来る事だけすればいいわ」

「でも……」

「女は気合と度胸と根性よ。思い込んだら一直線、余計な事なんて考えなくていいの」

環は、につこりと微笑んで言った。

「あの子には心を許せる相手が必要なの。何も考えずに自分を見せられる相手がね」

「でも、それならヒナちゃんとか真君とか……」

「まだまだ子供なのよ、涼は。そのせいで、色々つまらない事に気にし過ぎる傾向があるわ。だから利恵ちゃんみたいな子が必要なのかもね」

「それってどういう……？」

「何も知らないままでもいいんじゃないかしら？ 手探りでお互いの事を知り合って行けば。その方が深く理解出来ると思うんだけど、どう？」

「……」

環の言っている事は、何となく解るようできて、その実、全然解らない気もする。

けれど、少なくとも道筋は示してくれたと思えた。

「頑張りなさい、応援してあげるから」

「……はい！」

「……という訳で、今度の土曜日、涼はわたしとデートする事に決まりました」

「何でだよ……」

ベッドの上で転がっていた涼は上半身を起こし、再び室内に侵入して来た利恵に向かって言った。

「俺はそんなもん了承した覚えはねえぞ？」

「じゃあ了承して」

「嫌だ」

即答して再びベッドに横になると、涼は利恵に対して背中を向けてしまった。

完全拒否の姿勢である。

「……うんと言え」

「い・や・だ」

「どうしてえ？ わたしと一緒に出かけるの、そんなに嫌？」

ゆさゆさと涼の身体を揺さぶりながら、利恵はちよつと甘えた感じで言ってみた。

だが……。

「面倒臭い。もうゴールデンウィークに入って散々出かけたんだから、これ以上はゴメンだ。だいいち、お前と出かける必然性が無い」

涼の対応はいつもの通り。

『どうやら利恵の『甘えた作戦』は失敗のようだ。』

「だからデートだって言ってるだろ！」

利恵もメゲずに、甘え作戦が無駄だと悟れば、すぐに普段の調子に戻す。

いつもなら、このまま利恵のペースに巻き込めるのだが……。

「だから了承してねえって言ってるだろ！」

「ちょっとくらい、わたしに付き合ってくれたっていいじゃんかあ！」

「ちょっとどころじゃねえっての！ 三日連続で付き合ったんだから、もう充分だろ！」

「安心しろ。 ゴールデンウィークは、まだ残り五日もある」

「ふざけんなよ！ 俺のプライベートタイムを全部食い潰す気が、お前は！」

どうやら今日の涼は、テコでも利恵の言いなりにはならない覚悟らしい。

顔だけ利恵に向けると、あくまでも休日自分の為だけに使うのだと宣言した。

「むう……！」

暫くの間、恨めしそうに涼を睨んでいたかと思うと、

「いいもん！ 涼なんかそのままベッドの上でミイラになっちゃえ！」

と、手近にあったクッションを涼の顔めがけて投げ付け、利恵は涼の部屋を飛び出して行ってしまった。

「これでやっとな静かになっただな」

涼は投げ付けられたクッションを床に放り投げると、いつもの通り昼過ぎまで眠ろうとして目を閉じた。

これで十分もしない内に眠りに落ちる……筈だった。

だが、どうしても眠気が差して来ない。

おかしい……どうして眠れないのだろう？

大騒ぎし過ぎたせいで神経が昂ぶっているのだろうか？

「……あいつ、本当に帰ったのか？」

ベッドの上に乗半身だけ起こしてドアの方を見て見るが、利恵が戻って来そうな気配は無い。

さっきの展開なら環が怒りに来そうなものだが、その様子も無い。「静かだな……」

何となく、自分の部屋にいらるといふのに落ち着かない気分だ。

こんな事は初めてだった。

「……つたく」

涼は乱暴に枕の上に頭を落とした。

そのままボクッと天井を見ている。

「何が楽しいんだかな、あいつは……」

自分がそれ程面白味のある人間でない事は自覚している。

何しろ遊び歩く事をしないのだから、話すにしたって話題も無いし、当然プレイスポーツの一つも知らない。

だから琢磨とは話しが合うのだが、どうにも真一郎とは今一つ会話のテンポが合わない。

そんな自分と利恵が上手くやって行けるとは、涼にはどうしても思えなかった。

「……って、俺はあいつと付き合う気なんかねえっての」  
それでも……。

「……あんなに邪険にする事も無かったかな？ 悪気が無いってのは本当だろうし……いやいや、そこで甘い顔するから付け上がるんだって！」

涼がそんな事を考えていると、いきなり電話が鳴った。

電話で話す事が好きでない涼は、環が留守をしている時でもない限り電話を取る事は無い。

普段なら、それを知っている環が電話を取るのだが、何故か今回は電話を取らないらしく、ずっと呼び出しのベルが鳴り響いている。「何だよ、母さんいないのか？」

このまま放っておいてもいいのだが、さすがにしつこく鳴り続ける電話のベルが煩かったのだろう。

涼は渋々ベッドから降り、子機を手に取った。

「はい、宇佐奈ですけど？」

いかにも面倒臭そうな声で言う涼を圧倒するように、受話器から飛び出したのは、

『さつさと出るよお前は！』

と、涼よりも更に不機嫌そうに言う真一郎の声だった。

「何だ、真か」

『何だじゃねえ！俺様からの電話には音速を超えて出るっ！』

「うるせえな……番号が表示されねえんだから、誰からかなんて判らねえつての。で？何か用か？」

『用があるから電話したんだろっが、タコ。なあ、お前さ、今度の土曜日ヒマか？』

「今度の土曜日？」

今度の土曜日……。

そう言えば、利恵も土曜日にデ・トしろと言っていたな……と、涼はふと思った。

『おい、ヒマなのかヒマじゃねえのか、どっちだよ』

「え？……ああ、ヒマだけど？」

『じゃさ、ちよつと付き合ってくんねえかな？行きてえ所があるだよ』

「別に構わねえけど……どこへ行くんだ？」

『ちよつとした買い物をしたくてよ。ちつとばかり時間かかるかもしんねえけど、いいか？』

「ああ」

『この間建った駅ビル知ってるだろ？あそこの駅の改札で、十時くらいに待ってるからよ、じゃな』

真一郎にしては珍しく、用件だけ言って電話は切れた。

いつもならこのあと、延々とどうでもいい話が続くのだが、それに付き合わされるのは嬉しくないの、これはこれで構わない。

涼は子機を充電器に戻すと、再びベッドの上に横になった。

「今度の土曜か……どうせヒマだったんだから、あいつに付き合っ  
てやつても良かったかな？」

ついいつもの調子で利息の誘いを断ってしまったが、プライベート  
タイムと言っても大した事をする訳でなし、ただゴロゴロしてい  
るだけなのだ。

それなら利息に付き合ったとしても、特に問題は無い……。

「いやいや。これはこれで、俺の大事な時間なんだ」

涼は再び寝返りを打つと、今まで付き合い合わせた真一郎の買い物  
について思い起こした。

真一郎の買い物と言えばゲームかパソコン関係のパーツか、もし  
くは最近こり始めたガーデニング関係の品物が……。

とにかく多趣味の真一郎の買い物に付き合っていると、やたらと時間を  
食う上に、目に付いた物にいちいち興味を示すので、移動範囲が無  
駄に広くて疲れる。

今回も、多分それと同じような物だろう。

それに比べれば、利息と出かける方が疲労感は少なくて済む。

適度に休憩を入れるし、ずっと隣りで上機嫌にしているので気分  
的にも楽だ。

「あいつはあいつなりに、色々と気を遣ってくれてるんだろうな……」

今更言っても始まらない。

既に断ってしまっているのだから。

そしてその後、利息は一度も宇佐奈家を訪ねて来なかった……。

土曜日。

涼は真一郎に言われた通り、駅の改札口で真一郎を待っていた。

「……遅いな、真の奴」

約束の十時から、もう二十分も経過しているというのに、真一郎



は一向に現れなかった。

生憎と、涼はただでさえ電話嫌いの為、携帯電話などは持ち合わせていないので連絡の取りようが無い。

近くに公衆電話はあるのだが、いざ涼が場所を離れてから真一郎が到着した場合、涼の方が遅刻をしたのだと言い掛かりをつけられてしまう可能性が高い。

「それで飯でもたかられたんじゃ、たまんないからな……」  
「お〜い！」

涼が再び腕時計に目を落とした時、聞き覚えのある声が聞こえた。声の方向へ顔を上げると、真一郎が笑いながら走って来るのが見えた。

「わりいわりい！ 遅くなっちまったな」

「まったく！ お前が呼び出しておいて遅れて来るってのは、どういう訳だよ！」

「そんなに怒るなよ、悪かったって言ってるじゃんか。ほれ、この通り」

相変わらず罪悪感の欠片も無い、それでいて、こちらもつられて笑ってしまいそうになる笑顔だ。

それに素直に詫びられてしまうと、涼としてはあまり強くも言えない。

「……で？ 買い物って何だよ」

「ま、とりあえずは電車に乗って、目的地を目指そうじゃないか」

「あ、ああ……」

どうにも真一郎が相手だと、怒るにしても調子が狂ってしまう。まあ、涼も本気で怒っている訳ではないので、ここは苦笑して終わりである。

言われるまま切符を買い、真一郎に付いて電車に乗り込むと、夕イミング良く、電車はすぐに走り始めた。

「いや、今日は天気が良くて最高だな、涼」

「そうだな」

涼はドアの部分に凭れ、小窓の外を流れて行く景色に目をやりながら言った。

「これなら一日中外にいても、かなり楽しいと思わんか？」

「何だそりゃ。ただ外をほつき歩いて楽しいかよ？」

「いやいや、勿論それだけじゃないさ。こつ……何て言うかな、気の合う者同士で何かするとかさ」

「ああ、そりゃ楽しいだろうな」

「だろ？ そうだよな？ いや、やっぱりお前とは気が合うな！」

日頃から変な奴だとは思っているが、今日の真一郎はいつにも増して変である。

そのまま真一郎の話を適当に流しながら電車に揺られる事十数分、窓の外には遠くに観覧車が見え始めた。

そこには当然の如く遊園地がある。

「さて、次で降りるぜ」

「ああ」

二人が電車を降りて駅を出ると、やたらにカップルや家族連れが目についた。

どうやら向かっている先は、先程目に入った観覧車のある遊園地のようだ。

「みんな楽しそうな顔してるな、涼」

「そうだな。実際楽しいんじゃないかねえかな？ 家族や恋人と出かけるってのはさ」

自分にはあまり経験の無い事だが、きつとそういう事の楽しさという物は理屈ではないのだろうと涼は思った。

一緒にいるだけでも楽しいという事があるのだと、以前、雛子も言っていたような気がする。

「ま、俺には縁の無い事だけだな」

「十代の言う台詞かよ……んじゃ、行くべか」

そう言って、真一郎は涼の先に立って歩き始めた。

「利恵ちゃん、いつまでここに立ってなきやいけないの？」

雛子は手持ち無沙汰にしながら言った。

「遊園地の前で立ったままって、何となく恥ずかしいんだけど……」  
「それもその筈で、突然の電話でここへ呼び出され、到着したと思  
ったら暫く待っていると言ったきり、利恵は黙ったまま雛子の隣り  
立っているのだから。」

その状態が、もう既に三十分近く続いている……。

「ねえ利恵ちゃん、何も無いなら帰ってもいいかな？ わたし、色  
々とやる事があるの」

学校が休みだからといって、雛子が暇を持て余す事は殆ど無い。

予習復習や宿題をするのは勿論の事、洗濯をしたり掃除をしたり、  
夕食の買い物にだって行かなくてはならない。

何しろ雛子の両親は仕事が忙しく、家族が揃う事も滅多に無いの  
だ。

したがって、家事全般は必然的に雛子がやらなければならない事  
になる。

「利恵ちゃんてば……」

「もうそろそろね……。ヒナちゃん、勝負だ！」

突然、利恵が雛子に向かって言った。

「勝負？ 勝負って、何の？」

「わたしとヒナちゃん、どっちが涼を取るか」

「何それ」

「真剣勝負だからね……！」

「わたしは、そんなのする気無いもん」

「ええい！ 四の五の言わずに勝負だー！」

「そんな事だったら、わたしはもう帰るからね」

と、雛子が歩き出そうとすると……。

「こんな所で何を買うつてんだ、お前はっ！」

と文句を言いながら、真一郎にブルブルと引き摺られてこちらに近付いて来る涼が雛子の視界に入った。

「予定変更だ。たまには快晴の空の下、遊園地で遊ぶというのも乙なもんだろ」

「何が乙だ馬鹿野郎！ てめえ、ハナから俺をここに連れて来るつもりだったんだな！」

「おお！ お前にしては鋭い！ じゃあ、そのまま納得しちまえ」

「出来るかっ！ 俺は遊園地は嫌いだって、何度も言ってるだろうがっ！」

「涼ちゃん……？」

足を止めてポカンとしている雛子の横で、

「真君、こっちこっち！ 遅かったじゃない」

と、利恵がにこにこしながら言った。

「利恵ちゃん、これってどういう事……？」

「見たまんま」

「解んないよ！ ちゃんと説明してよ！」

「だから、わたしとヒナちゃんの真剣勝負よ。立会人は真君」

「ふざけないでよ！ 涼ちゃんは物じゃないんだから、そんな賭け事みたいな真似出来る訳ないでしょ！」

「……何でお前らがここにいるんだ？」

真一郎に羽交い絞めにされたままの涼が、いつのまにか傍まで来ていた事に気付かなかった雛子は、突然そう言われ、

「えっ!？」

と驚いて振り返った。

しかし、利恵は相変わらずににこにこしたまま、

「いい天気だね、マイ・ダ〜リン」

などと言つて、涼の神経を逆撫でしている。

「誰がダ〜リンだっ！ ……そうか、さてはお前らグルだなっ!？」

「まさか。 たまたま偶然涼を連れて来たら、これまた、たまたま

偶然に二人がいたつてだけの事だ」

「そうそう。わたしと真君がグルの訳ないじゃない。ね〜？」

実にわざとらしい二人の態度を見て、涼は確信した。

こいつらは間違いなくグルだ。

「ヒナ、まさかお前まで一緒になって……」

「そんな訳ないでしょっ！」

涼が言い終る前に、雛子は烈火の如く怒ったように言った。

丁度、利恵の行動に腹を立てていたところへの涼の一言は、雛子の怒りのツボを直撃したようだ。

普段、怒鳴る事など滅多に無い人間が怒鳴ると、結構な迫力があるようで、

「そ、そうか……そうだよな……ごめん」

今まで怒っていた筈の涼は、急に勢いが無くなってしまった。

どうも子供の頃から雛子が怒ると、涼はそれ以上強く出られなくなってしまうのだ。

「ほ、ほらほら、せっかくこうして集まったんだし、どうせなら楽しく行こうぜ。ね？ 雛子ちゃんも」

「……」

真一郎のフォローもあまり効果が無いらしく、雛子はムスっとしたままである。

と……。

「そう言えば、お前ら何か言い合いしてなかったか？」

涼が急に思い出したように言った。

「え？」

「ほら、さっき俺が引き摺られて来るまでにさ。なんか、ヒナが怒ってみたいに見えたけど……喧嘩でもしてたのか？」

「う、ううん、別に怒ってなんかはないよ？ ね、利恵ちゃん」

「あ、当たり前じゃない。わたしとヒナちゃんは、すっごく仲良しなんだから。ね〜？」

二人は互いに腕を取り合うと、これ以上無いくらいの笑顔を作っ

た。

そこからは言い合いをしていたような様子は見えない。

「そうか？ でも……」

「ま、細かい事は置いてだ。まずは絶叫マシンの駆けつけ三杯と行こうぜ！」

「何っ！？ い、嫌だ！ 真、それだけは勘弁しろ！」

今まで大人しかかった涼は、急に真一郎の腕から逃れようとして暴れ出した。

絶叫マシーン……子供の頃に一度乗ったきり、二度と乗るものかと心に決めた乗り物である。

「あれ？ 何だよ涼、お前ああいうの苦手か？」

「ああ……どうも自分の思い通りにならない乗り物って苦手なんだよ……」

「それは大変だな。よし、早く行こうぜ」

「てめえっ！ 俺の話しを聞いてなかったのかっ！」

「雛子ちゃん達も早く行こうぜ！」

「この野郎っ！」

涼が嫌がれば嫌がるほど、それは真一郎にとって楽しい事へと変化する。

じたばた暴れる涼を小脇に抱え、真一郎はウキウキした足取りで遊園地の中へと消えて行った。

「元気だなあ、真君……ヒナちゃん、わたし達も行こうよ」

「……」

「ヒナちゃん？」

「わたし、利恵ちゃんと勝負なんてしないからね……それだけは覚えておいて」

真っ直ぐに利恵を見つめながら、雛子は言った。

その顔には、何かを決意したような色が浮かんでいる。

「どうして？」

「理由なんか無いよ。ただ、わたしはそんな事したくないだけ」

「じゃあ、わたしが涼を取っちゃおうよ？ それでもいいの？」

「それは涼ちゃんが決める事だから……」

「自信满满的な感じだね」

嫌味ではなく、利恵は言った。

「自信ならあるよ。涼ちゃんは、絶対に利恵ちゃんを選ぶ……」

「え？ 何？」

「……何でもない。さ、行こう。せっかく来たんだし、やっぱり遊んで行く」

雛子は利恵の手を取り、遊園地の門をくぐった。

今日一日は笑っていよう……これは自分で決めた事なのだから。

きつと、この胸の痛みも、いつか忘れてしまう物なのだと雛子には思えた。

きつと、それは思い出の中に、いつか埋もれてしまう物なのだと……。

## 第六章

喫茶店 『らんぶる・ろつく』。  
そこは涼達の憩いの場である。

無論、彼らにとつてそこだけが居場所という訳ではないが、比較的足を運ぶ回数が多い事は事実である。

そして必然的に 『常連』 という事になるのに、それほど時間はかからない。

涼と真一郎、それに雛子と琢磨に加え、最近では利恵もよく顔を出すようになってきている。

そしてゴールデンウィーク最終日の午後。

店の一角には、お馴染みになっている真一郎と利恵の顔が見えるのだが……。

「利恵ちゃん」

「……嫌」

「高梨ちゃん」

「もつと嫌」

「利恵ぴよん」

「殴りたい？」

何故か今日は二人だけで、他の人間の顔が見えない。

真一郎と利恵だけでここに来ているというのも、ちょっと珍しい光景だ。

「琢磨並に拘る奴だなあ……」

真一郎は疲れたように、コーヒーに口をつけた。

「呼び方なんてどうだっていいじゃんか。『ちゃん付け』 だろ  
うが 『さん付け』 だろうが、んなもんに拘る奴、珍しいぜ？」

「だって……なんか真君に呼ばれる時って、色んな含みが入ってる  
みたいで素直に受け止められないんだもん」

「……どういう意味だ、こら」



「別に捻らなくていいからさ、ストレートな感情を込めて呼んでよ」  
「どうやら真一郎の、利恵に対する呼び方について話しているようだ。」

真一郎は少しだけ考えると……。

「利恵にや〜」

「……蹴るぞ」

「利恵つち、利恵ポン、高リン」

「そんな呼び方したら一生口きかない」

どれも利恵のお気に召さないようである。

「面倒くせえなあ……もう『高梨』でいいだろ？俺もその方が楽な気がするし」

「ねえ、利恵様は？」

「そんな呼び方させるなら一生口きかない」

「あははは」

「……なあ」

真一郎は残っていたコーヒーを一息に飲み干すと、

「そろそろ本題に入れよ。何か話があって俺を呼び出したんだろ？」

急に真剣な表情になって言った。

「……真君、結構鋭いね」

「当たり前だ。だいいち、こんなどうでもいい事で人を呼び出す程、お前が馬鹿とも思えねえしな」

「どうでもいいとは失礼な。これも大事な用件だぞ？」

「へいへい。で？」

「うん……。涼とヒナちゃんの事なだけどさ……」

目の前に置かれているジュースの氷をストローで突付きながら利恵は言った。

カラカラと音を立てる氷を見ながら、ちよつと考えて、

「真君から見て、あの二人ってどう見える？」

と、ストレートな質問をぶつけた。

「仲のいい幼馴染」

「それは二人の関係を知ってるからでしょ？ そうじゃなくてさ…

…」

「同級生のお友達」

「おい……」

「どう見えるかなんて訊かれても、どう答えりゃいいのか解んねえよ。そもそも、お前は俺に何を訊きたいんだ？」

「だからあ、二人がどう見えるかだってば」

「仲のいい幼馴染」

「……話が進まないでしょ！」

毎度の事とは言え、真一郎の言う事は本気なのか冗談なのか判別が付け辛い。

普段一緒に行動している涼や雛子も、こんな感覚を味わっているのだろうか？ と、利恵は思った。

「そうだな……ま、俺には雛子ちゃんと涼は、お似合いのカップルに見えるよ」

「わたしの前でそれを言う？」

「言っただけだったんだろ？」

「別に欲しくは無いわよ……」

「けど、事実、学校でもそんな評価が多いな。何しろ一言で涼を大人しくさせられる女子なんて、校内では雛子ちゃんだけだからよ」

「そうなの？」

「普通の奴から見たら、涼は充分怖いからな。俺と違ってギャグは言わねえし、喧嘩はバカ強いし、クラスの連中とは殆ど喋ってねえみてえだしな。何つつても無愛想ってのが一番問題だな。そのせいで、入学したばかりの頃なんて露骨に涼を避けてるのがいたくらいだよ。ま、最近じゃ少しずつ馴染んでるみてえだけだな」

入学してからというもの、毎日のように真一郎の突っ込み役をしているおかげで、周囲の人間の涼に対する評価は微妙に変化しているらしい。

しかし、それでも涼が怖いという生徒は多い。

「やっぱり上級生二十人を瞬殺したってのは、インパクトでか過ぎだったんだろうな」

「一体学校で何してるのよ、涼は……」

「勉強」

「今の話しの流れで、それを信じているというのは無理があるでしょう……」

真一郎は「ははは」と笑うと、水を一口飲んで、

「……涼は不器用なんだろうな、きつと。自分の気持ちを表現するのが下手なんだ。で、それを雛子ちゃんが上手く代弁してるって感じかな？ それで何とか周りと馴染めてるんだと思うぜ？ それが無かったら、あいつはきつと一人ぼっちになっちまうよ……いい奴なのにさ」

急に真面目な顔になって言った。

それは涼の事が本気で心配だからなのだろう。

「……」

「何となく解るんだ……俺もそうだったからな。でも、俺には雛

子ちゃんみたいないな存在がいなかったから、すっげえ苦労した」

「そんな風には見えないよ？」

クラスに一人は必ずいるムードメーカー。

明るくてノリの良い存在。

利恵の真一郎に対する評価は、まさにそれだったのだが……。

『時々、とつても寂しそうにしているの。わたし達の前ではそういう顔は見せないようにしてるみたいだけど、偶然見ちゃった事があって……』

雛子の言った言葉が利恵の頭の中で聞こえた。

見た目に反して、真一郎も色々な物を抱え込んでいるのかもしれない。

「真君は、わたしの中で『スチャラカ大明神』として認知されてるからね」

「そりやどうも……」

真一郎はグラスの氷をボリボリと齧りながら言った。

「ねえ……涼はわたしの事、何か言っていたりする？」

「いや？ 特に何も言わねえな」

「何も？」

特に何も言わないとは、どういう事だろうか？

あんなに鬱陶しそうにしているというのに、それについて愚痴の一つもこぼさないのだろうか？

「じゃあ、ヒナちゃんの事は？」

「それも同じ。そもそも、あいつの口から女の子の話題なんて出ないって」

「何でかな？」

「興味無いみたいだな。大抵俺がネタ振って、それにリアクションしてるだけだし」

「興味無いのか……」

これはある意味、嫌われるよりもダメージが大きい。

何と言っても『眼中に無い』というのは、利害にとっては悲しい事なのだ。

「でもよ……あ、すみません、コーヒーお願いします」

ウェイトレスにコーヒーのお替りを頼むと、真一郎は再び利息に向き直って続けた。

「……お前とか雛子ちゃんのは、それとは違うと思うぜ」

「違うって？」

「何て言うのかな、もう『いるのが当たり前』って感じになってるんだと思う」

「ヒナちゃんは解るけど、わたしは……」

幼馴染どころか、知り合ってまだ間もない。

それが『いるのが当たり前』な存在になど、なれるのだろうか……？

「お前……マジで涼に惚れたな？」

「わたしは最初から真剣だったぞ？」

「だからだろ？ きつと。涼だつて一応は普通の人間なんだからよ、それなりの感情もあるだろうし」

「何だよお、その言い方は。わたしのダ〜リンだぞ？」

ぷう！ つと頬を膨らます利息を見て、真一郎は苦笑しながら続けた。

「無口なのはネタがねえからだし、話し下手なのは相手に気を遣い過ぎるからだし、怒鳴るのは大抵照れ隠しだしな。そんな素直じゃねえ奴は、ハッキリ面と向かって何かを言ったりなんて出来ねえもんさ。だから、きつとお前にも雛子ちゃんにも、言えない言葉つてのはあるんだろ」

「すごい……。真君、プロファイリングでも勉強してるの？」

「ちよつと涼と親しくなったら、この程度の事はすぐに誰でも判るだろ？ 何しろ判り易いからな、あいつは。現に、お前にだつて判つてるだろ」

「うん……」

「だから余計に気になるんだろ？ 自分が涼にどう思われてるかつてさ」

真一郎のカップにコーヒーが注がれ、ウェイトレスさんが他のテーブルへ行くのを見送ってから、真一郎はおもむろにカップを手に取り、

「俺はよ……正直に言わせてもらつと、涼と雛子ちゃんにくついてももらいてえんだ」

と、微妙な顔で言った。

「え……？」

「あ、誤解すんなよ？ 別にお前が気に入らないとか、そういう事じゃねえんだ。ただよ……上手く言えねえんだけど、何となく……な。だからつて、お前にどうこう言つつもりなんか無いからな？ お前はお前で好きなようにすりゃあいいんだ。俺は反対しねえし」

「……………」

「そんな顔すんなって、反対しねえって言ってるだろ？ 言い方悪かったかな……賛成だよ、俺も」

「でも、真君はヒナちゃん派なんですよ？」

「誰派とか、そんなもん俺の中にはねえよ。こうしてダチの話を聞いて、アドバイス出来る事はして、相談に乗れる事は乗る……それだけだ」

そこまで一気に言うと、真一郎はコーヒーを一口飲んだ。

何も入れないブラックは、真一郎と涼の共通した好みだ。

二人は仄かな苦味を旨いと感じる……だが、苦手な人には耐え難い物に感じられるだろう。

(こいつ、本質的には雛子ちゃんと同じなんだな……)

真一郎は静かにカップを置くと、話しを続けた。

「この間、遊園地行つたろ？」

「うん」

「そんな時、雛子ちゃんにも同じ事訊かれたんだ。『涼ちゃんと利

恵ちゃん、真君にはどう見える？』って」

「……………」

「似合いのカップルに見えるって答えたよ。そしたら雛子ちゃん、満足そうに笑ってた」

「何で…………？」

「さあな。でも、きっとそれは雛子ちゃんの本音だぜ？ だから

俺は、お前と涼の事も賛成するし、応援もする」

「……………」

『わたし、利恵ちゃんと勝負なんてしないからね……それだけは覚えておいて』

雛子はそう言った。

そして環は、『頑張りなさい、応援してあげるから』と言った。

手探りでお互いを知り合って行けと……。

「だからさ、それでいいんじゃないかな？ 変に気を遣ったらギクシヤクするぞ？ それじゃ勿体無いじゃん、せつかく知り合ったのにさ」

「わたし、別に気を遣ってる訳じゃないんだ。たださ、何となくこう……」

「ま、色々思うところもあるだろうけど、人間なるようにしかならねえんだし、流れに乗ってりゃいいんじゃないの？」

「アバウトだな、真君は」

「何でもハツキリさせりゃいってもんでもねえしな」

真一郎は笑って、

「ハツキリさせるのは、何か結論が出てからでいいのさ」と言った。

「結論を出すのが、ハツキリさせるって事なんじゃないの？」

「ところが違うんだな」

そう言つと、真一郎はいつものように紙ナプキンを使って何か作り始めた。

もう話は終わ리と言つ合図なのだろう。

大概これをやり始めると、真一郎は真面目な話しをしなくなる。

それはそれで、いつもの通りの真一郎とも言えるのだが、一層真剣に何かを考えているようにも利恵には見えた。

「……じゃ、今のままでいいか」

「そうそう、今のままでいいって」

「うん、今のままでいいね……」

「もし、どうにもならなくなったら、その時は言えよ」

真一郎は完成した紙人形を手に持つと、

「その時はこの俺様が一肌も二肌も脱いでやるぜい！ 何しろ俺様は利恵ちゃんが大好きだからな！」

と、ポーズをつけさせつつ言った。

「……その呼び方はやめて」

「じゃあ、利恵っぺ」

「ふざけんな」

「利恵べ〜」

「泣かずぞ……!!」

それから二人は小一時間ばかり、取るに足らない雑談だけをお互に交わっていた。

「ヒナ、これで全部か？」

近所のスーパーを出た所で、両手一杯の荷物を抱えた涼が言った。

「うん、もう買う物は無いよ。ごめんね涼ちゃん、付き合わせちゃって」

「いいよ、気にすんな。お前一人じゃ、こんなに持てないだろ？」

「うん、ありがとう。重くない？ 少し持とうか？」

「これくらい平気だよ」

肉体派の真一郎ほどではないが、涼も腕力には結構な自信がある。

スーパーでの買い物程度の荷物など、どうという事は無いのだ。

「……ねえ、涼ちゃん」

「ん？」

「わたしの時には、こうやってすぐに付き合ってくれるのに、どうして利恵ちゃんの時には、あんなに嫌がるの？」

「え？ だって、そりゃそうだよ。ヒナの場合は、ちゃんとしていた理由があるけど、あいつの場合は思いつきで引っ張り回すだけだからな。そんなもん、いちいち付き合ってたら疲れちまうよ。」

それに、周りに変に誤解されたら困るだろ」

「誤解って？」

「いや……俺があいつと付き合ってるとかさ……」



「違うの?」

「あいつが勝手にそう思ってるだけだ。ほら、行くぞ」

一度、荷物の形を整えるように揺さぶって、涼は雛子の前を歩き出した。

雛子もそれに続いて歩き出す。

「誤解されたら困るって、涼ちゃん困るような事ある?」

「いや、困るって言うか……ほら、あいつが困るんじゃないかと思つてさ。こういうのって微妙だろ? だから……」

「利恵ちゃんが言い出した事なのに、それで困る訳無いと思つんだけどな? そう思ってるなら、涼ちゃんの家になつて来ないだろうし」

「まあ、それはそうかもしれないけどさ……」

「好きなら好き、嫌いなら嫌いって、涼ちゃんがハッキリ言うのが一番早いと思うんだけど?」

「な、何言つてんだお前は! そもそも、好きも嫌いもねえだろ? 俺は、あいつの事なんか何も知らねえんだし……」

「訊かないからだよ。訊けば何でも答えてくれると思うよ?」  
「……」

確かに、それはそうなのだろうと涼も思った。

しかし、それで利恵の事を知ったからといって、その後、何がどうなるというのだろうか?

「利恵ちゃんの気持ちはハッキリしてるんだし、これは涼ちゃんの決める事なんだよ? 解ってる?」

「一応……」

「一応じゃ駄目ですよ! ちゃんと解ってる?」

「……はい、解ってます」

「なら、わたしはもう何も言わないから、あとはちゃんとしてあげてね? いい?」

「何でお前がそこまでムキになるんだ?」

「当たり前でしょ! 利恵ちゃんわたしはわたしの友達なんだから!」

「何だよ、そんなに仲良くなつてたのか？ お前ら」

「勿論。毎日電話してるもん」

電話嫌いの涼には信じられない話である。

毎日電話なんてして、一体どんな会話を交わしているのだろう？  
そもそも、用も無いのに電話したりする事自体が信じられないと  
いう男である。

「よく飽きねえもんだな。 会話のネタなんか、そんなにあるもん  
なのか？」

「たつくさんあるよ？ 今日は何があつたとか、今何してるとか」

「日記かよ……」

「でもね、それだけじゃないと思うんだ。 きっと利恵ちゃん、わ  
たしを気遣つてくれてるんだよ」

「ヒナを？」

「ほら、うちつて大抵わたし一人でしょ？ だから、色々心配し  
てくれてるんだと思う」

「あ……」

自分では普段、無意識にしている事なので気にしていなかったが、  
考えてみれば雛子は家に一人でいる事の方が圧倒的に多いのだ。

雛子の両親は製薬会社に勤務しており、しかも新薬の研究開発チ  
ームの責任者だ。

その忙しさは半端ではなく、家族が揃う事など年に数回といつた  
ところだろう。

「優しいんだよ、利恵ちゃん。 そんな事少しも口に出さないで、  
わたしの話を聞いてくれたり、色んな話をしてくれるんだ」

「……」

「わたし、利恵ちゃん大好きなんだ……だから……」

「……解つたよ。 俺もちゃんと考えるから」

「本当？」

「その代わり、時間かかるからな？ 俺は今まで、こつこつのを考  
えた事ねえんだから……」

「じゃあ、その間待っててって、利恵ちゃんに言っとくね」

「言わんでいいっ!」

「じゃあ、涼ちゃんが言う?」

「言わんっ! はい、もうこの話題は終りっ!」

雛子はクスクス笑うと、涼の肘の部分を軽く摘んだ。

「ん? 何だ?」

「ちよっと……暫くこのまま歩いてもいい?」

「別に構わねえけど、急に引っ張るなよ? 荷物が落ちちまうからな」

「うん……」

後悔だろうか……?

雛子は自分の心の中に、何故か小さな穴が空いたような気がした……。

## 第七章

「すすすすすみませんっ！　ちよっ、ちよっとよろしいでしょう  
かっ！」

丁度教室を出たところで突然声をかけられた女生徒は、多少ビツ  
クリしながらも、

「いいけど……何かな？」  
と笑顔で答えた。

それは目の前の男子生徒が、小柄だが顔立ちも良く、パッと見が  
可愛らしかった事も大きいだろう。

「お、俺は、う、う、浦崎、た、琢磨と言います！　出席番号二番  
ですっ！」

「はあ、それはどうも……」  
女生徒はキョトンとした顔で答えた。

「ご、ご記憶にありませんか？」

「あなたの事？　どこかで会ったっけ……？　あれ？　でも『浦  
崎』って、どこかで聞いた事があるような……？」

「お、俺は、あなたと同じクラスなんです！　そ、それで……」  
「ああ、転校生なの？」

「い、いえ、違います！　っ、つまり、あなたと同級生で……」  
しかし、琢磨の言う事が今一つ理解出来ないのだろう。

女生徒は首を傾げながら、不思議そうな顔をしているだけだ。

……まあ、それはそうだろう。  
ここまでもりつつ、かつ要領を得ないのでは仕方ない。

女生徒は直立不動で汗をかいている琢磨に向かい、

「ごめんね、わたしちよっど忙しいんだ。　じゃ」  
と言いつつ、そのまま廊下を歩いて行ってしまった。

「っ、疲れた……」

女生徒を見送り、琢磨はホっとしたように汗を拭い、全身で息

を吐いた。

「駄目だ駄目だ駄目だっ！ 琢磨、そんなんじゃ話しにならねえだろうが」

疲労困憊といった感のある琢磨の背後から、真一郎の容赦無い声がかかった。

「もつと自分を強烈にアピールしなきゃ、話しかけた意味がねえだろ？」

「い、いや、しかし……俺は、こういった事は不得手で……」

「しかしじゃねえ！ いつまでもドモるわ緊張しまくるわじゃ、女の子の友達が出来んだろうがっ！ これから先、高校、大学、社会人になつたって、どこにでも女性はあるんだぞ？ 女性の相手が苦手なままで、将来どうすんだよ！」

「俺は別に、異性の友人がいなくても困りはしないが……」

「困る困らないの問題じゃねえっつーの！ だいたい、あの雛子ちゃんにさえ存在を認識されてなかったんだぞ？ もつと存在感を出せ！」

「そうは言うが……。そもそも俺は、目立つ事をするのが苦手なんだよ……」

「そういう問題でもねえっ！ いいか？ 学生時代つてのは、不特定多数の人間と知り合う絶好の機会なんだぞ？ それを逃がして何とするか！」

どうやら、いつもひっそりと身を隠している琢磨の事を、真一郎が表舞台に引つ張り出そうとしているらしい。

琢磨本人は今のままでいいと思っているようだが、真一郎にはそれが気に入らないらしい。

「一緒にいるこっちだって、お前がそんなんじゃ困るんだよ。みんな一緒にって企画が立て難いだろうが」

……成る程。

「し、しかし……」

「いいからやれっ！ 今日中に、最低でも三人以上の女の子と仲良

くなるんだ！」

「む、無茶を言うな！ 俺は女性に声をかけるだけでも、物凄い精神力を消費するんだぞ！ それを仲良くなるなど……不可能だ！」  
「不可能を可能にするのが男というものだ。俺様の遠いご先祖様も、DNAの中でそう仰っておられる」

「お前には遺伝子情報の声が聞こえるのか……？」

「ほれ、慣れるのには丁度いい感じの女の子が出て来たぞ。 琢磨、行け」

「うわあっ!？」

いきなり真一郎に強制的に振り向かされ、ドン！ と背中を押された琢磨は、つんのめるような格好で、女の子に抱きつく形になってしまった。

当然、いきなり抱きつかれた女の子は驚く訳で……。

「きゃっ！」

「あ……」

ふわりと琢磨の顔に柔らかい物が触れた。

仄かに良い香りがする……。

「あ、何だ琢磨君か……驚いちゃった。 どうしたの？ いきなり「さっ！ さ、さ、さ、佐伯っ!？」

琢磨は慌てて雛子から離れると、滝のような汗を流しつつ、オロオロとしている。

先程感じた柔らかい物体の正体……それは目の前にある二つの膨らみに他ならない。

琢磨の血液は、一気に顔面へと集中した。

「琢磨君も、こんなお茶目するんだね。 ちょっと意外だったな」「す、すまん！ ワザとじゃないんだっ！ 突然、真が押したものだから……決して俺の意思ではないんだ！ 許してくれっ！ 信じてくれっ！ 何ならこの場で腹を切ってもいいっ！」

「そ、そんなに謝らなくても……ちゃんと解ってるから大丈夫だよ、琢磨君」

雛子は苦笑しつつ言った。

これが他の男子生徒なら悲鳴の一つも上げるところだが、相手が琢磨では子供にされたのと変わりない程度でしかないのだ。

何しろ琢磨に厭らしい考えが全く無い事など、既に雛子は知っているのだから。

「あー！ 浦崎君が女の子襲ってるーっ！ やらしい、卑猥い」  
「し、真っ！」

真一郎の決して小さくない声で、周囲にいた生徒達が何事かと視線を送り始めた。

中には当然、琢磨の事を知っている者もいる訳で、ヒソヒソと琢磨の名を出して話しているのも聞こえる。

「いや〜ん！ 真面目な人だと思ってたのに、そんな事するなんて不潔だわ〜！」

「真……貴様、わざとやったな……？」

「これじゃ嫌でも目立つちゃうね〜。 誤解を解く為に、みんなと話さなきゃいけないね〜。 今日から大変だね〜……頑張ってるね」

「お前の言う事を真に受けた俺が馬鹿だった……！」

琢磨は即座に教室に入ると、掃除用具入れのロッカーからモップを取り出し、先端部分を取り外して……。

「叩き斬るっ！」

と、一目散に逃げる真一郎を追いかけ出した。

「真！ 待たんかあーっ！」

「何だよ、お前の女性恐怖症克服の為に協力してやったんだろ？」

それに、自分が馬鹿だったって、さっき言ったじゃんか」

「お前を斬り捨てたあと、俺も腹を斬る……俺と共に死ぬっ！」

「お前と心中なんて嫌だよ。 可愛い子となら少しは考えてもいいけど」

「お前を生かしておいては後顧の憂いが残る……後々の安寧の為に、ここで成敗してくれるっ！」

「せんせ〜い！ 浦崎君が痴漢行為をした挙句、学校の備品を壊し

て廊下を走ってまゝっす！」

「おのれはっ！ まだ言うかつ！」

ブンブンとモップの柄を振り回す琢磨をからかいながら、真一郎は廊下を全力疾走して行く。

その様子を、雛子はやれやれといった表情で見送りつつ、とりあえずその場にいる生徒達に、今のは真一郎の悪戯であって、決して琢磨が変な事をした訳では無いのだと説明し始めた……。

「ははは。 そりゃあ災難だったな、琢磨」

放課後、 『らんぶる・ろつく』 に立ち寄った涼は、昼間の出来事を雛子から聞かされ、琢磨に同情しつつも笑いを堪えられなかった。

「涼ちゃん、笑ったりしたら悪いよ」

「まったく……佐伯が説明していてくれなかったら、俺は教室へ戻れないところだったぞ」

「気にし過ぎだって、琢磨」

真一郎は琢磨の怒りなど全く無視して、

「いっその事、そのまま変態キャラを定着させるってのはどうだ？」と、更に琢磨の神経を逆撫でしている。

「ふざけるなっ！」

「真君、もうやめなよ……。 琢磨君も、あんまり真君のペースに乗せられちゃ駄目だよ？ 思う壺なんだから」

「む……そ、そうだな……。 お、俺も些か冷静さを欠いていたかもしれない。 そのせいで、真に一撃も浴びせられなかった」

「いきなりモップの柄なんか振り回しやがって、危ねえだろうが」

「お前がそうさせたのだろうが……。 真、今度あのような真似をしたら、俺は容赦せんからな」



「ははは、無理無理。俺にだって、あのくらいならかわせるぜ」  
怒りと恥ずかしさで我を忘れた琢磨は、ただ闇雲にモップの柄を振り回していただけなので、その程度ならば怖くないと真一郎は思ったのだが……。

「今度は心を静めて振るう。 的は外さん……」

静かに紅茶を飲むと、琢磨はポツリと言った。

物静かな言い方なのだが、何故かそこからは、えもいわれぬ迫力が感じられて、真一郎の全身に鳥肌が立った。

「……あの、琢磨さん？　つかぬ事をお伺いしますが」

「何だ？　真」

「今日、俺に向かつて何か技とか出しました？　ほら、剣道でも色々あるじゃないですか、横面とか何とか」

「いや、ただ振り回していただけだ。 あんな所で技など出したら、無関係な人まで巻き込んでしまうからな」

「……？　いや、何となく俺の質問と、その答えは微妙に違うような気がするんですけど……？」

「お前を相手にするのに通常の技では甘過ぎる。　一撃必殺の奥義を叩き込まねばな」

「お、奥義って……」

そう言えば……と、真一郎は思い出していた。

確か琢磨は『浦崎流剣術』　という、オリジナルの剣を振るうのだ。

それを琢磨に伝授している琢磨の祖父は達人級の使い手だと、以前琢磨に聞かされた事があった。

「お前、何歳から剣道やってんだっけ？」

「三歳からだ。　一年間みっちりと基礎をやらされて、四歳の時から浦崎流剣術の稽古が始まった。　それから半年後には抜刀術も叩き込まれたよ」

「で、でもよ、奥義と違って、そんなに簡単に身に付くもんじゃねえだろ？」

「その通りだ。 今まで稽古中に何度意識を失ったか知れん」

琢磨は軽く首を左右に振ると、紅茶を一口飲んで続けた。

「だが、その甲斐あって、今では七つの奥義が使える」

「な、七つ？」

通常、奥義などという物は一つ、多くても二つくらいのも物だと思っ  
っていた真一郎は、本気でビックリしている。

「だが究極奥義は封印しているからな、実質使えるのは六つだ」

「きゅ……究極奥義？ ちょっと待て！ 普通、そんなのは最後の  
最後で教わるもんじゃねえのか！？」

「俺は最初にそれを教わったんだ。 祖父にも考えがあつての事だ  
ろう。 今は他の奥義を習得中だ」

「のっけから覚えちまう、お前もお前だよ……」

天才……真一郎の頭には、その言葉が浮かんだ。

恐らく琢磨には、剣にかけては超一流の才能があるのだろう。

これは琢磨を本気で怒らせるのはやめておいた方が無難だな……  
と真一郎は思った。

今後、琢磨をからかう時には、慎重にする必要があるだろう。

いや、からかわなければ何の問題も無いのだが……。

「俺や真とは違つて事だな」

「いや、お前達もかなりの物だと思つぞ？ 無手勝流であそこまで

とは、正直驚いた」

剣道場での乱闘の事を言っているのだろう。

あれだけの人数を相手に、二人とも決して本気を出していた訳で  
ない事は、琢磨には判っていた。

何しろ暴れた直後だというのに、息も切らせていなかったのだから。  
ら。

「俺はガキの頃から喧嘩ばっかしてたからな。 涼はサラブレッド

だしよ」

「サラブレッド？ 涼のご両親は、何か武道でもやっておられるの  
か？」

「いやいや」

真一郎はクスクス笑うと、涼に視線を送った。

「俺の親父は学生時代、美浜って人と二人でかなり暴れてたんだよ。美浜さんは、今でも地元の街じゃ顔が通ってるくらいなんだ」

「涼の親父さんにゃ 『無敵の鬼神』 って異名が付いてたんだってよ」

「ほう？ それは凄いな……まあ、俺のような一般人には無縁の世界のようだが。それで、お前のお母さんというのは？」

「……親父がただ一人、完膚無きまでに叩きのめされた相手だ。親父の生涯戦歴で、唯一の黒星だとさ」

「何と……」

「で、でもね、琢磨君。おば様はとっても優しいんだよ？ わたしにお料理を教えてくれたし、何だって出来るんだよ？」

このままでは、環は単なる 『強い人』 になってしまおうと思ったのが、雛子はすかさずフォローに入った。

事実、雛子は環の優しい顔しか見た事が無いし、いつも甘えさせてくれるのだから尚更だ。

「強くて優しく、その上料理上手か……まさに理想の女性像だな」  
「琢磨……お前、自分で言ってる、何か変だと思わねえか……？」

どうも琢磨と真一郎では、色々と感じる所が違っらしい。

「さて、俺はそろそろ失礼させてもらおうよ」  
「何だよ琢磨、もう帰るのか？」

自分の分の代金を置いて立ち上がった琢磨に、真一郎が言った。  
「今日も稽古があるんだ。これから祖父の道場まで行かねばなら

ん

「そっか。 んじゃ、またな」

「琢磨君、またね」

「ああ。 お前達も早く帰れよ？ いつまでもウロウロしてはいかんぞ？」

笑顔でそう言うと、琢磨は店を出て行った。

「帰り際、最後の一言があれだもんな〜……」

真一郎は、しかし愉快そうに笑いながら言った。

「ま、琢磨らしいよ」

涼の中でも、琢磨に対する評価は『生真面目』 となっているらしく、それに関しては問題にしていないうだ。

「それはそうと……真君」

「ん？」

「もう琢磨君に悪戯しちゃ駄目だからね？ あのあと大変だったんだから」

「大変って？」

「琢磨君、いつも静かにしてるからみんなの印象が薄くて、まずは琢磨君の事を説明して回らなきゃならなかったの……」

雛子は心底疲れたように言った。

それはそうだろう。

まずは琢磨がクラスメイトだという事から始まり、その人となりまで説明しなければならなかったのだから。

「ははは、それはご苦労様でした」

「笑い事じゃないよ、もう……。でも、みんなちゃんと解ってくれたけどね。あ、それでね」

「まだ何かあるの？」

何故かクスクスと笑っている雛子に真一郎が訊ねると、

「代わりに真君の評判が落ちちゃった。そんな真面目な人を陥れるなんて酷い！ って、女子の間でね。今までの真君の苦労は、全てリセットされました」

そう言って、雛子はぺろっと舌を出した。

「嘘っ!？」

「本当」

「勘弁してよ雛子ちゃん……」

「ま、自業自得だな、真」

しかし、真一郎ならそれくらいはすぐに挽回するだろうと、涼も

雛子も笑いながら思っていた。

「はあああつ！」

「む！」

玉砂利が敷き詰められた庭の池には鯉が泳ぎ、その傍には石灯籠があつて、手入れの行き届いた松ノ木が見事な枝を広げている。

これでもかと言うほどに和風な庭で琢磨と手合わせしているのは、琢磨の祖父であり、また剣の師匠でもある浦崎弦磨その人である。

綺麗に撫で付けられた頭髮も、見事に蓄えられた髯も真つ白だが、その年齢を感じさせない動きだ。

「甘いつ！」

琢磨の木刀を弾き、弦磨の木刀が一閃する。

手にしているのは紛れも無い木刀だというのに、その気迫の為か、触れたらたちまち腕を切り落とされそうな雰囲気のある一撃だ。

「何のっ！」

しかし、琢磨はそれを巻き込んでいなすと、再び弦磨へと一撃を繰り出す。

「どうした琢磨、今日は普段にも増して剣が冴えておるではないか……何か良い事でもあつたか？」

「はい！ 俺にも友と呼べる存在が出来ました！」

小学生の頃は、いつも静かにしていた上に、独特の喋り方や考え方の為に友人らしい友人もいなかった。

それに一緒に遊ぼうにも、琢磨にはこうして稽古をする時間が優先されていた為それのままならず、結局、自然と独りになって行ったのだ。

「ほう？」

「昨日までは単なる知り合い程度でしかありませんでしたが、今日

ハッキリと解りました。　彼らは、俺の生涯の友となってくれと  
！」

「そうか、それは良い事だ……友は大事にせい。　いずれ、お前の  
力になってくれよう」

「はい！」

「では、その友を護れる男になる為にも精進せい、琢磨！」

「はい！」

目にも留まらぬ速さで打ち合いながら、二人は会話を交わしてい  
る。

それは祖父と孫の会話というより、やはり師匠と弟子のそれに近  
いだろうか。

「ならば琢磨、ワシから一つ祝いをやろう。　……しかと刻み込め  
！」

弦磨は木刀を一旦脇に納めると、その柄に手を掛けた。

その瞬間、琢磨の身体中に危険を知らせるシグナルが駆け巡った。  
このまま正面に立っていたら殺される！　そう感じた琢磨は瞬時  
に脇へと飛び退いた。

と同時に、

「浦崎流抜刀術秘奥義！　火閃龍斬撃一刀之舞　（かせんりゆうざ  
んげきいつとうのまい）　！」

弦磨の繰り出した一撃は石灯笼を真っ二つに切り裂き、その剣圧  
で池の水面をも割った。

驚いた鯉が跳ね上がるのを見て、琢磨は一瞬恐怖を感じた。

それは技の威力に対してだけでなく、自分と弦磨の間にある、圧  
倒的な力の差を感じての事だった。

「研ぎ澄ました技はここまでの威力を持つ……使い所を誤るでない  
ぞ？」

「……はい」

「ワシは今以上をお前に見せるつもりは無い。　あとは自分で技を  
磨き、習得せい……いいな？」

「はい」

「……少し疲れた。今日はここまでにしよう」

弦磨は琢磨と正対して一礼すると、ゆっくりと歩き出し、縁側に腰を下ろした。

「お祖父さん、お加減が悪いのですか……？」

弦磨の隣りに腰を下ろし、琢磨は心配そうに弦磨の顔を覗き込んだ。

このところ、弦磨は酷く疲れ易くなっているように琢磨は感じていた。

年齢から来る物だけでなく、どこか病的な物に思えて仕方が無かった。

「案ずるな、まだ暫くは死なんよ。そうさな、お前の子……いや、せめて嫁の顔を見るまではな」

「よ、嫁!？」

「恋は良い物だな、琢磨。人を生き活きとさせる」

「な、何を仰っておられるのか、俺には解りません……」

「良き伴侶を得られるように、自分をしっかりと磨け。さもなく

ば、せつかく見つけたお相手にも逃げられてしまっぞ?」

「な、な、な……!？」

「はっはっは! お前は何かも顔に出過ぎじゃ」

どうやら琢磨が誰かに恋をしているのを、弦磨は見抜いたようだ。

今まで見せた事の無かった琢磨の表情を見て、弦磨は祖父の顔で笑った……。

## 第八章

ドン！ ドン！ と、快晴の空に花火の音が響き渡る。

六月第一週の土曜日。

今日は、涼達の通う中学校の体育祭である。

「へへへ……楽勝だな、我が一年二組は」

真一郎は余裕の表情で得点ボードを見ていた。

三種目が終わった時点で、真一郎のクラスが首位に立っているのであった。

しかしながら、底無しの運動能力を持つ涼、真一郎、琢磨の三人のおかげで、各クラス共にそれ程の点差はついておらず、非常に面白い展開になっている。

「何の！ まだ体育祭は始まったばかりだ、これから逆転する機会は幾らでもある！」

「琢磨の言う通りだぜ。このまま独走出来ると思うなよ、真。

四組にや俺がいるって事を忘れんな」

「次は俺様がアンカーで出る混合リレーだぜ？ お前らに勝ち目はねえよ」

調子と勢いに乗っている真一郎は、涼と琢磨を盛んに挑発している。

どうやら二人をカツカさせて、自分のペースに引き込もうとしているようだ。

「余裕じゃねえか、真。俺達もアンカーだって事、忘れてねえか？」

「侮ると手痛い目に遭うぞ？」

「かっかっか！ せいぜい吠えてろ、弱者共め」

腰に手を当てて、そっくり返った状態で真一郎が言うと、

『次は、クラス対抗男女混合リレーです。選手の皆さんは所定の位置に集合して下さい』



競技案内のアナウンスが流れ、各選手はそれぞれスタート位置に集合した。

涼達も選手の控える椅子に腰掛け、自分の番が来るのを待つ。

そんな中、何とも情けない顔をした選手が一人、オドオドしている……。

「琢磨くうくん、どうしよお……わたしきつとビリだよお……」

「だっ……大丈夫だ佐伯！ い、一生懸命頑張って走れば、それでいいんだ！」

どうやら琢磨のクラスの第一走者は雛子のようにだ。

とにかく走るのが遅い雛子にとって、体育祭は子供の時から一年で一番憂鬱な日である。

「でもお……。わたし遅いのに、どうして選ばれちゃったんだろ……」

「さ……参加する事に意義があるのであって、速い遅いは関係無いっ！ そ、それに、わ、我がクラスには陸上部もいる！ あああ安心しろ！」

ここまでどもりながら言われると、普通は余計に不安になるものだが、そこはそれ。

琢磨の性格を知っている雛子には、ちゃんと琢磨の励ましは伝わっている。

伝わってはいいるのだが……。

「で、でもおお……」

雛子は既に泣きそうな顔である。

「あああ後の事は俺が何とかする！ 心配するな！ 問題無い！」  
そんな雛子を、琢磨は顔を真っ赤にしながら更に励ました。

琢磨にとって、これは全力疾走と同じくらいのエネルギーを要する事だ。

「わかったあ……頑張る……」

「おおおおお応援してるからな！ ぜ、全力を尽くせ！ それだけを考えろ！」

「うん……」

トボトボとスタートラインへ向かう雛子を見送りながら、琢磨はホッと息を吐き、選手の控え席へ戻った。

各クラスの一選手がスタートラインに並ぶと、ただでさえ小さな雛子は一際小さく見える。

「お？ 琢磨んところは、雛子ちゃんが一番手か」

「大丈夫かな、ヒナの奴……」

『バン！』と号砲一発、各選手が一斉にスタート……したと思つたら。

「キャツ！ ……いた〜い」

雛子は、他の男子選手にぶつかられて転んでしまった。

と言つても、それ程派手に転んだ訳でもないのだが……。

「あつ……！ か弱い雛子ちゃんに対して何て事しやがるっ！」

「てめえっ！ ふざけんな！ ツラ憶えたからな、この野郎！」

「貴様っ！ 自分よりも力の弱い者に対して、労わる気持ちが無いのかっ！ 叩き斬るぞっ！」

三人に一斉に怒鳴られた男子選手は、足がすくんで上手く走れなくなつた。

だがその隙に、雛子はその選手を抜く事が出来た。

他の選手も何事かと振り返ってペースが落ちる中、雛子は顔を下に向けたまま全力疾走である。

（もぉ〜！ みんなつたらあ……恥ずかしいよぉ！）

一刻も早く引つ込みたい雛子は、いつもよりも速く走れた。

まさに怪我の功名である。

しかし、コーナーに差し掛かったところで、雛子はまた抜き返される。

さすがに一周二百メートルの距離は、雛子には辛かったようだ。

「あ〜、抜かれたか……ヒナにしちゃ頑張ってたんだけどなあ」

「応援してあげたいけど、俺と雛子ちゃんは今は敵同士だからな……」

「が……頑張れ、佐伯……」

「あのな……そんな小せえ声で聞こえる訳ねえだろに。もつと腹から声出さんかい！」

「す、すまん、真。これが限界だ……」

「剣道の時みたいにかねえのかよ……不便なやつちな」

「琢磨にしちゃ出来だよ」

そうこうしている内にレースは進み、いよいよアンカーにバトンが回る。

満を持して最初に登場したのは……。

「掃部関君、お願いっ！」

「よっしゃあつ！ 任されて！」

トップでバトンを受けた真一郎は、物凄い勢いで駆け出した。文字通りの爆走である。

「行け！ 浦崎！」

それから少し遅れて琢磨にバトンが渡る。

比較的運動部員が多くいる琢磨のクラスは、既に雛子の遅れを挽回していた。

女子とのバトンタッチではスタートの際に遅れてしまう為、琢磨のクラスだけは男子からのバトントスである。

「押忍！ 一年一組、出席番号三番！ 浦崎琢磨、参るっ！」

「琢磨君！ 頑張れっ！」

「さ、佐伯！ ……うおおおおっ！」

琢磨が走り出した後、二人の走者がバトンタッチを終えて駆け出す。

その直後、ようやく涼にバトンが渡った。

「宇佐奈君！ ごめん！」

「気にすんな！ ……行つくぜええ、真！ 琢磨！」

『ギョんッ！』といった感じで涼が走り出すと、あつと言つ間に前の二人を抜き、琢磨に追い付いた。

まさに『韋駄天』という形容がピッタリ来る走りっぷりであ

る。

「や〜ん！ 宇佐奈君、カッコいい〜っ！」

「宇佐奈く〜ん！ 頑張って〜っ！」

ルックスは申し分無く、少々乱暴だとの噂は流れているが、女子に対してはあくまでも紳士的に接する涼の評価は、ここ最近高まり始めている。

ましてや最下位からスタートし、凄まじい追い上げを見せているアンカーともなれば、嫌でも涼に注目が集まる。

だが……。

「自分のクラスの応援しなよ……。 琢磨君、一生懸命走ってるのに……。」

涼に黄色い声援が飛ぶと、雛子は途端に不機嫌になった。

「だって、あたし達が声援送ったら、浦崎君倒れちゃうよ？」

琢磨が女性に弱い事は、既に全校生徒が知っている。

それもあつてだろう、琢磨に対する声援は、圧倒的に男子生徒からの物が多い。

「そ、それはそうだけど……。 だからって、何も他のクラスの応援しなくてもいいじゃない……。」

普段の雛子ならそんな事は言わないのだが、今日は色々と虫の居所が悪いようだ。

そんな応援席でのやり取りに気付く事も無く、コース上では琢磨と涼が激しく競り合っていた。

「くっ……！ 涼め、さすがに速い！」

「どけどけ琢磨！ 邪魔だ〜っ！」

「何のっ！ 抜かせん！」

琢磨も涼に合わせて加速すると、各クラスの応援席は、まるでゴール前の接戦であるかのような盛り上がりを見せ始めた。

それもその筈。

二人がグングン加速していたお蔭で、かなりのリードをしていた真一郎の背後に肉迫していたのだ。

「ゲツ！ こいつら、もう追い付いて来やがったのかよ！」

「捉まえたぜ、真！」

「このまま抜き去ってくれろ！ 覚悟！」

「そうは行くか！」

三人のデッドヒートに、全校生徒が大歓声を上げる。

その盛り上がりはオリンピッククサナからである。

「三人ともすごい……」

雛子は瞬きするのも忘れて、三人の競り合いに釘付けになった。

だが、それを見つめる先生方の中には、あからさまに引き攣った顔をしている人もいて……。

「宇佐奈は、どうしてあれで体育の評価がそこそこんなんですかね？」

「あの野郎…… 普段の授業では手を抜いてやがるな？ 次の授業の時、地獄に叩き込んでやる！」

どうやら涼は、体育教師に目を付けられてしまったようだ……。

そしてゴール！

さて、結果は…… 一位は真一郎。

二位は琢磨、惜しくも涼は三位だった。

「くそお、三位かよ！」

涼は悔しそくに得点ボードを見上げた。

僅差とはいえ、これでまた若干、真一郎のクラスとの点差が開いてしまった。

「アブねえアブねえ…… ゴールがあと五メートル先だったら抜かれてたぜ」

「無念！ クラスの期待に応えられんとは……！」

琢磨も悔しそくに、胸の前で自分の掌を拳で叩いた。

「けど点は僅差…… トリのあれでケリ着けるからな、真！」

「望む所だぜ…… かがって来いや！」

「…… 次は負けんぞ！」

その後、順調に各プログラムが消化されて行くにつれて、何故か男子生徒のテンションが異常に上がって行く。

それは各競技の最中にも表れ始めていて、あちらこちらで小競り合いが発生している。

「ね、ねえ……何だか男子が異様な雰囲気になってない？」

「うん……言われてみれば、みんな殺気立ってるような気がするね」

「ねえ雛子、最後まで確か騎馬戦だよな？」

友達に訊かれて、雛子はプログラム表を広げてみた。

「え〜っと……これ何だろ？」

「何？ 雛子、何て書いてあるの？」

「ばとるろいやる騎馬戦だって」

「バトルロイヤルウ！？」

「ばとるろいやるって何？」

格闘技の類に興味の無い雛子には、それが何を意味する言葉なのか解っていないようだ。

「敵味方関係無しに、最後の一人になるまで戦うのよ。 いわゆる

サバイバルマッチね……男子限定なのはそのせいかな」

「えええーっ!？」

雛子が驚いてグラウンドに目を移すと、既に集合を終えていたどの騎馬も目が据わっている。

どう見てもこれから騎馬戦をするようには見えない……まるで喧嘩の前だ。

「おらあつ！ オメエらシツカリ踏ん張れよ！ 俺が落ちたら負けなんだからな！」

真一郎は自分の騎馬に喝を入れる。

既にかなりテンションが上がっているらしく、いつものお調子者の雰囲気は微塵も無い。

「やっぱ最大の敵は涼と琢磨だな……真っ先に潰す必要ありか」

真一郎の視線の先で、琢磨も味方の騎馬に声をかけていた。

「みんな！ 真と涼さえ堕としてしまえば、あとは雑魚だ！ まず奴らを潰すぞ！」

どうやら琢磨の考えも真一郎と同じのようだ。

普段は温厚で優しい筈の琢磨の目に、殺気を孕んだ光が宿った。

「先んずれば制す！ 怪我をしても恨まんでくれよ……涼！ 真！」

一方、二人から標的にされている涼はというと、

「みんな！ 最初からガンガン飛ばして行くぜ！」

やはりやる気満々のようで、指をボキボキと鳴らし、早くも臨戦態勢である。

「おう！ お前だけが頼りだからな、頼むぜ宇佐奈！」

「けど、掃部関と浦崎が厄介だぜ？ あいつら、宇佐奈とどっこいの強さだからな」

「宇佐奈！ やっぱ、まずはあいつら潰そうぜ！ どっちからやる？」

「そうだな……琢磨は、ああ見えて体力があるから、長期戦はこっちが不利だ。となれば短期決戦あるのみっ！ 速攻だ！」

「了解！ 狙うは浦崎だな……！」

「……行くぜ！」

涼も真一郎と琢磨が曲者だと考えていた。

だが、何をして来るか解らない真一郎よりは、正攻法で来るであろう琢磨の方が攻め易い。

涼のチームは、琢磨を標的に据えた。

そして、『バンッ！』と運命のピストルの音が響くと、修羅の群れが一斉に飛び出した！

「行くくぜええーっ！ 俺様の騎馬に当たるとイテエぞーっ！」

「突貫！ 奴らに暴虎馮河の勇である事を思い知らせてくれる！」

「おらあああーっ！ どけどけどけーっ！ 宇佐奈涼様のお通りだあああーっ！」

三騎の騎馬が怒涛の勢いで校庭の中央に突進して行く。

あまりの迫力に他の騎馬が道を空けると、その直線上に涼と琢磨の騎馬が向き合う形になった！

「琢磨ああーっ！」

「来たか、涼っ！」

二人の乗った騎馬が激しくぶつかり合う。

騎馬は騎馬で蹴りを飛ばし合い、その上では、涼と琢磨が殆ど殴り合いの状態だ。

「往生せいっ！ 涼！」

「そりゃこつちの台詞だっ！」

だが、さすがに素手の殴り合いでは、喧嘩経験が豊富な涼が有利だ。

涼の攻撃は確実に琢磨にヒットするが、琢磨は思うように攻撃が出来ない。

「くっ……！ みんな、左へ……駄目だ、遅い！」

単身ならば思うままに動けるのだろうが、琢磨の反応速度に騎馬が付いて行けない。

これでは下半身を封じられているのと同じだ。

琢磨の騎馬は涼の騎馬の勢いに押されて、徐々にその体勢を崩されて行く。

「きゃあっ！ もう見てられないよお……！」

そのあまりの凄まじさに、雛子は両手で顔を覆ってしまった。

「死ねええっ！ 琢磨！」

「くっ……！」

涼は琢磨の顔を鷲掴みにすると、そのまま後ろへと押しやる。

涼の腕を押さえつつ、何とか腹筋の力で堪えている琢磨の背後へ、チャンス到来とばかりに真一郎の騎馬が突っ込んで来た。

「いったただきい！」

「うわあっ！」

真一郎は琢磨の襟首を掴むと、一気に後ろへ引き倒した。

えび反った体勢だった琢磨はその不意の攻撃に堪え切れず、実に呆気無く、琢磨の騎馬は崩れ落ちた。

「まずは一騎！」

「くそっ！ やられた……！」

敵は涼だけでなく、周囲の全員なのだ。



後方への警戒を怠った自分のミスであると、琢磨は地面を拳で殴り、悔しそくに真一郎を見た。

「さ〜て……次はオメエだ、涼！」

真一郎は『ビシ！』と涼を指差し、不適な笑いを浮かべた。「この野郎、様子を窺ってやがったな？」

「お前らみたいに正面から行ってたら体力が続かねえっつーの。頭使わんとな」

「撃碎されるならともかく、こんな負け方をしようとは……無念だ！」

「ホレホレ琢磨、敗者はとつとこの場を去れ」

真一郎が琢磨に向かって、『シツシツ』と犬を追い払うような仕草をしていると……。

「バカ！ 掃部関、何やってんだ！」

「え？」

「油断大敵だぜ、真！」

「うぐおっ!？」

真一郎が余所見をした瞬間を逃さず、涼が速攻を仕掛け、その左頬に拳を食い込ませた。

大きな真一郎の身体が後ろに仰け反ったところを見ると、どうやら一切の手加減をしていないらしい……。

「いつてええーっ! ……てめえ! マジでやったなっ!？」

「オラオラ! もう一発行くぜ！」

今度は反対側だ。

たまらず真一郎が騎馬に距離をとらせると、その鼻先を『ブンッ!』と涼の拳がかすめ、風圧で真一郎の前髪が揺れた……。

「バ、バカ野郎! ちつとは手加減しろい！」

「甘つちよろい事言ってんじゃねえっ！」

「わわわわ! 一時後退っ! 体勢を整えるぞ！」

「逃がすかタコ助! みんな、頼む！」

涼の騎馬は巧みに真一郎の騎馬の退路を断つ。

それに呼応して、他のクラスの騎馬も涼に加勢し始めた。そもそもこれはバトルロイヤルの形式を取っているので、自分以外は全て敵である。

少しでも不利な状況に追い込まれた者は、他の全員から標的にされて当然なのだ。

「ちくしょう！ 右だ！ 右に回れ！」

「させねえって言ってんだろぅが！」

涼の手が伸びて、背後から真一郎のシャツの裾を掴んだ。

「つつかまゝえた」

「うわあっ！ 気持ち悪いっ！ 笑うなっ！」

「何だと……？ そういう失礼な事を言う奴は……こうだ！」

そのままシャツを捲り上げると、涼は平手で思い切り真一郎の背中を叩いた。

パチーン！ と、素晴らしい音が校庭に響く……。

「いってええええーっ！」

見る間に真一郎の背中に綺麗な紅葉が浮き出した。

……少々大き目だが。

「ホレッホレッホレッ！」

「いてっいてっいてっ！ やめるバカ！」

「……バカ？」

涼の眉がピクツと動く。

「あ、ウソです！ ごめんなさい！」

「もう遅い！」

涼は、そのまま真一郎のシャツの裾を頭の上で結んでしまい、真一郎はバンザイの格好のまま動きを封じられてしまった。

こうなってしまうっては、いくら真一郎が怪力でもどうしようもない。

「必殺、茶巾寿司。……あんまり旨そうじゃねえな」

「こらあ！ ほどけーっ！」

「じゃあな、真。 ゆっくり休め」

そう言うと、涼は思い切り真一郎の脇の下をくすぐった。

真一郎は笑いながら倒れて行く……。

「うっしやあ！ 完全勝利！」

「ぐぞお〜……！ こんなみつともない負け方をすると……無念！」

「はっはっは……ん？」

茶巾状態のまま悔しがっている真一郎を見下ろしながら、涼が勝利の余韻に浸っていると、いつの間にか涼の騎馬の周りには他の騎馬が結集していて、その視線が全て涼に集中していた……。

「あとは宇佐奈だけだ……」

「いくら宇佐奈が強くても、全員で一斉にかかれば……！」

「こいつをやっちまえば……」

ジリジリと騎馬群が涼との間を詰めて来る。

さすがにこれだけの数を相手にしては、涼とて勝ち目が無いのは明白である。

「ちょ……ちょっと待て！ 男だったらサシで勝負しろ！」

「甘い事言ってんじゃねえっ！」

「総員かかれっ！」

「おおおおっ！」

「わあああーっ！ お前ら汚ねえぞーっ！」

食べ物に群がる餓鬼の如く襲い掛かる騎馬群で、完全に涼の姿が見えなくなってしまった。

混戦の中からは色々な音が漏れ聞こえて来る……まさに地獄絵図である。

「ね、ねえ……宇佐奈君、死んじゃうんじゃない？」

「……ふう……」

「きゃあっ！ 雛子すっかりしてー！」

雛子は失神してしまい、そのまま保健室へ運ばれて行った……。

そして結果は……。

総合優勝は真一郎のクラス。  
二位は涼、三位は琢磨のクラスだった。

「イテテ……まさか全軍一斉にかかって来るとは思わなかった」  
「まあ、涼は有名人だからな」  
「琢磨も人の事言えないって。それより、雛子ちゃん大丈夫かな？」

「別に怪我した訳じゃねえんだし、大丈夫だろ」

三人は騎馬戦での怪我の治療の為に保健室に来ているのだが、体育祭の後と言うより大喧嘩のあのような感じで、あちこち包帯や絆創膏だらけだ。

「そっか。ま、今回は俺様の一人勝ちだな」

「ちよつと待て、真！ 個人タイトルは俺の方が多いのだから、勝つたのは俺だろう！」

「おい琢磨、それを言ったらMVPは俺だぜ？」

「ちつちつち、言い訳はダメ！ 優勝したのはウチのクラスなんだからな。さくって、どんな願いを叶えてもらうかなあ？」

「それを言われちゃ、しょうがねえか……」

「口惜しい……。だが！ この借りは、いずれ必ず返す！」

「ま、また俺の勝ちだろうけどな。とりあえず……今日は琢磨に飯でも奢ってもらおうとすっか」

「……約束だ、仕方ない」

どうやら三人で、敗者は勝った者の言う事をきくという賭けをしてきたようだ。

普段こういった事はしない琢磨だが、真一郎や涼が相手となると話は別のようだ。

琢磨も大分この二人に感化され始めているのだろう。

「涼にはもつと別の事を考えてるから、楽しみにしててくれ」

「……すっげー嫌な予感がする」

「あ……涼ちゃん、大丈夫？」

目を覚ました雛子が、カーテンを開けて顔を出した。

起きたばかりなのか多少フラフラしているようだが、それ以外に怪我などは無いので、暫くすれば元に戻るだろう。

「お前こそ大丈夫か？」

「うん……。わあ、真君も琢磨君もボロボロ……痛いでしょう？」

「げくんぶ涼がやったんだよ」

「まったく血の気の多い奴だ。乱暴者め」

「違うだろ！最後の乱戦に巻き込まれたただけだろうが！まったく

……ヒナ、送ってやるから帰ろうぜ」

「うん」

「んじゃ俺らも行くこうぜ、琢磨」

「……あまり高い物は頼むなよ？」

それぞれ校舎を出ると、正門の所で二人と別れ、涼と雛子は自宅に向かって歩き出した。

頬の絆創膏をしきりに気にする涼を見て、

「涼ちゃん、痛くない？」

と、雛子は心配そうに涼の顔を見た。

「はは、いてえよ。でも楽しかったからいいや」

「ええ？あんなに怖い目に遭ったのに、楽しかったの？」

「ヒナは楽しくなかったのか？」

「え？うん……」

雛子は、ちよつと考えてみた。

大抵、普段の涼は真一郎や琢磨とばかり行動しているので、こんな風に送ってくれる事など滅多に無い。

それに何となく気恥ずかしくて、雛子から一緒に帰ろうと誘う事も無い。

そついう意味でなら……。

「ちょっとだけ……嬉しいかも」

「はあ？ 俺は楽しかったかって訊いたんだぞ？」

「似たようなものだからいいの」

「そっかあ？」

雛子の憂鬱だった筈の一日は、いつの間にか楽しかった思い出になつたようだ。

## 第九章

「これでどうだ！」

「どれどれ？」

とある日曜日。

高梨家のキッチンで、利恵の差し出したカップを受け取った雛子は、その黒い液体を口に含み、

「……違う」

と、首を左右に振った。

「え〜？ おつかしいなあ……ヒナちゃんに教わった通りに淹れたつもりなんだけど……」

「淹れ方よりも、ローストとブレンドの具合だと思う。見てあげるから、もう一度煎ってみて」

「豆の分量はこれでいいんだよね？」

「うん。二割くらい目減りするから、その分を計算してね」

利恵は袋から豆を取り出すと、慎重に分量を測り、それを手網に乗せた。

「ロースター使ってもいいんだけど、家庭用電源だと熱量不足になっちゃうんだよね。とりあえずはテストローストだから、それで具合を覚えて」

「了解しました」

「いわゆる『直火焼き』だから焦がさないようにね。火に近

付け過ぎないように」

「はい、師匠」

コンロの火を調節し、利恵が真剣な眼差しで豆の具合を見つめつつ、炎から10cmくらいの距離を保ちながら網を振り続けると、徐々に生豆の表面からチャフが飛び始め、次第に白っぽくなる。

「そのまま十二分二十秒、休まず振り続けて。ここで充分な水分抜きをしておかないと、渋みの残った生臭い味になっちゃうから」

「はい！」

雛子は利恵の手元とストップウォッチを交互に見ながら、これまた真剣な表情で教えている。

次第に豆がきつね色に変色し始めると、キッチンには香ばしい香りが漂い出す。

「色の変化に気を付けて。そろそろ一八ゼだから、少し火と距離を取って。パチパチ音がして黄土色に変色するから、一気に八ゼないようにして」

「黄土色？ え〜と……よく判んない……」

「膨らみ始めるからよく見て。あ、そうそう、一〜二分したら音が鳴り止むけど、そのあと大きく膨らんで二八ゼに入るから、結構大きな音がするよ」

「さっきの音が……」

最初に雛子が実演して見せた時、予想もしなかった音がして、間近で見ていた利恵は少々ビックリしたのだった。

「涼ちゃんの好みは『フルシテイ』と『フレンチ』の間だから結構深煎りなんだけど、『イタリアン』まで行っちゃうと駄目だからね」

「し、師匠！ わたしには師匠のお言葉が理解出来ません！」

「ローストの具合は浅煎りから順に、『ライト』『シナモン』

『ミディアム』『ハイ』『シテイ』『フルシテイ』『フ

レンチ』『イタリアン』って言うの。深く煎るほど苦味の強い味になるんだよ。……さ、そろそろ火との距離を離し気味にして。豆の変化が早いから気を付けてね」

「お、押忍！」

雛子の言った通り、こげ茶色になった豆は、あっという間に膨れ上がった。

「ヒ、ヒナちゃん、かなり黒くなっちゃったよ！ これって焦げてるんじゃない!？」

「まだ！ もうちょっと黒くなるまで！ 火との距離空けて！」



「は、はい！」

「……よし、OK！」

雛子の合図で、利恵はパ！　と火から網を退けた。

その出来上がりを見た雛子が笑顔で頷いているところを見ると、  
どうやら上手く行ったようである。

「じゃ、今の要領でこっちのも。酸味を出すには浅煎りの方がいいんだけど、それだと苦味が出ないからね。その分はブレンドでカバーします」

「コ、コーヒー淹れるのも楽しくないのね……」

まあ、物事は拘りが強ければ強いほど、大変になって行く物である。

その後、何とか雛子から及第点を貰ったコーヒーを淹れ、二人は居間へと移動した。

そこには利恵の母である祥子と、父の洋二がいるのだが、何故か洋二は面白くなさそうな顔をしてソファに座っている。

「ん……いい香りね、あなた」

祥子は目を閉じて、漂うコーヒーの香りを楽しんでいるのだが、  
「そうだな」

祥子に同意を求められ、それを認めながらも何が気に入らないのか、やはり洋二は素っ気無い返事を返している。

「あの……コーヒーお嫌いでしたか？」

それに気付いた雛子は、コーヒーを乗せたトレーをもったまま洋二に問い掛けた。

一応、コーヒーや紅茶を淹れるのも特技の内に入る事なのだが、嫌いだという人にまで勧めるほど雛子は無神経ではない。

「お父さん！　ヒナちゃんに気を遣わせてどうするのよ！」

「え？　あ、ああ、済まない！　そういう訳じゃないんだ……」

利恵に叱られて、洋二はようやく普段の顔を取り戻した。

「ちよつと、ぼんやりしてしまっただね。いや、申し訳無い」

「まったくもう……」

利恵は軽く洋二を睨みつつ、テーブルにカップを置いた。

洋二がそれを手に取り、口を付けるのを見て、祥子もクスクスと笑いながら一口飲んだ。

利恵と雛子も洋二達の対面に座り、それぞれカップに口を付ける。

「美味しい……」

祥子はお世辞でなく言った。

それ程コーヒー好きという訳ではないが、これは格別の味だと判る。

今まで行ったどの喫茶店でも、こんなにホっとする味には出会った事が無い。

「これ、本当に利恵が淹れたの？」

祥子は思わず利恵に向かって言ってしまった。

普段キツチンに入る事など無い子が、いきなりこんなに美味しいコーヒーなど淹れられるのかしら？ というのが正直な感想なのだ。

「失礼な。ヒナちゃんに指導されたとは言え、ちゃんとわたしが淹れたんですぅ〜！」

「でも、ちゃんと指示通りに出来るのも凄いんだよ？ 利恵ちゃん。

初めての人なんて、失敗して当たり前なんだから」

「ありがと、ヒナちゃん。ところで……」

利恵は無言のままの洋二に視線をやり、

「お父さんからは賛辞の声が聞こえないんですけど？」

と、感想の催促をした。

それを見て祥子は、相変わらずクスクスと小さく笑っている。

「ああ、旨いよ」

「なに？ それ。もっと感情を込めて言ってよ」

「とっても美味しいな〜」

「すつごく不自然なんですけど……何かご不満でも？」

堪え切れず、祥子は完全に笑い出した。

「お母さん、どうしたの？」

「お父さんはね、利恵が自分の為に淹れてくれないから拗ねてるの

よ

「何それ」

「これって涼君の好みの味なんでしょ？ だからよ」

「そ、そんな事は無いぞ！ わたしはそんなに小さい男じゃない！」

「何だかなあ……。練習なんだから、目標があつた方がやり易いでしょうに。お父さんには失望したわ」

「やれやれといった感じで、利恵は雛子と顔を見合わせて苦笑した。この調子では、将来利恵が結婚する時などは一波乱ありそうである。」

「それにしても、雛子ちゃんは凄いわね。わたしが雛子ちゃんくらの歳の時には、何も出来なかつたもの」

「そ、それほどでも……」

お嬢様育ちではないが、比較的恵まれた家庭に育つた祥子は、家事など洋二と出逢つた頃から必死になつて覚えたくらいだ。

学生時代にもつとやつておけば良かったと、その時になつてえらく後悔した憶えがある。

雛子が家事一切を一人でこなしていると利恵から聞かされた祥子は、驚くと同時に非常に感心したのだつた。

「いくら手伝いなさいつて言つても、利恵は全然やらないから困つたのよ。これからはビシビシ鍛えてやつて頂戴ね？」

「え〜？ たまには手伝つてるじゃない」

「気まぐれで手伝われてもねえ……」

「あはは」

「ヒナちゃん、今、本気で笑つたでしょ……？」

「それはそうと」

洋二はカップを置くと、利恵をじつと見ながら、

「その〜、何だ。利恵も佐伯さんもまだ中学一年生なんだから、異性関係については興味もあるだろうが、あまり積極的にならないようにな」

「何よお父さん、いきなり。わたし達は男の子と仲良くなつちゃ

いけないって言うの？」

「いや、友達を作る事には反対しないが……まあ、色々と気を付けなきゃいけないという事だよ、うん」

「気を付けるって？」

「あなた、あまりつまらない事を言わないで下さい」

洋二の隣りで、祥子が『つんつん』と肘を突付いた。

「つまらない事じゃないぞ？ こういった事はきちんと覚えておかないと。親の務めだ」

「きちんと説明出来るならいいですけど、そんな抽象的な言い方で伝わるかしら？」

「伝わるさ。本気で相手を思う心は、いついかなる時でも相手に伝わるものだ。な？ 利恵、そうだろう？」

「ヒナちゃん、解った？」

「ううん、全然……」

「利恵達には伝わってないみたいですよ？」

「……」  
父親のヤキモチというのは、娘にはなかなか伝わらない物のようである。

「利恵、今度は涼君も連れていらっしやい。お母さんも会ってみたいわ」

「ううん……今の段階では、それはちょっとキツいかも」

と、利恵は腕組みをして考え込んでいる。

利恵が宇佐奈家へ訪ねて行っても涼はいい顔をしないのだ。

それを利恵の自宅へなど、素直に来るとは思えない。

「あら、何か問題でもあるの？」

「問題と言うか……ねえ、ヒナちゃん」

「あはは……そうだね、ちょっと難しいかな？」

「何も無理をして連れて来る事も無いだろう？ 佐伯さんが遊びに来てくれれば、それでいいじゃないか」

少しホットしたように、洋二はカップを口に運んだ。

娘の彼氏になど、会わずに済むならその方がいいのだ。

「あら、あなたは雛子ちゃんみたいなお嬢さんがお好みなのかしら？ 利恵、聞いた？ お父さんはわたし達よりも雛子ちゃんがいいんですってよ？」

「最近妙に冷たいと思ったら、お父さんはヒナちゃんに心変わりしてたのか」

「な、何を言ってるんだお前達は！ わたしはただ……」

「ただ……なあに？」

「いや、その……あ、コーヒーのお替りをもらえるかな？」

「あ、わたし淹れて来ます」

利恵や祥子が何か言う前に、雛子はサッと洋二のカップを受け取り、キッチンへと行ってしまった。

「速い……普段のヒナちゃんからは想像出来ない身のこなしだわ」

上げかけた腰を再び下ろし、感心したように利恵は言った。

「身に染み付いた動作ね。 ご家庭の事情もあるんでしょうけど、元々細かい事に気の付く子なのね、雛子ちゃんは」

「ご両親もお忙しいそうだな……随分と寂しい思いをして来たんだろう。 利恵、佐伯さんのいい友達になってあげるんだぞ？」

「当たり前じゃない。 ヒナちゃんはわたしの師匠でもあるんだから、大事にするわよ」

「打算の無い友情を得られるのは学生時代だけかもしれない。 一生付き合える友達を作れるように、お前も努力をしないとな」

「そうだね。 うん、頑張る」

明るい性格と付き合いの良さで、利恵には友人が多い。

しかし、果たしてその中の何人と、生涯に渡って友人としての繋がりを持っていていられるだろうか？

そんな事は今まで考えた事が無かったし、考える必要も無かったのだ。

まだ利恵は、毎日が楽しく過ぎて行くのが当たり前に感じられる年齢なのだから。

だが、洋二の言う事は理解出来るし、その通りなのだろうとも思う。

そう感じられるほどには、利恵も成長しているのだ。

利恵がそんな事を考えている内に、キッチンから戻った雛子が洋二にカップを手渡す。

「はい、どうぞ」

「ありがとう。……いい香りだ」

「さっきは何も言わなかったくせに……渡す相手が違つと香りも違つんでしょうかね、お父様？」

利恵が不満気に言つと、洋二は苦笑しながら、

「旨いと言つたらう？」

「心がこもつてなかったもん」

「おいおい、あまり苛めないでくれよ……」

「ふん！」

そう言いながら利恵も、洋二の隣りでそのやり取りを見ている様子も笑っている。

当たり前前の家庭の一角マを見て、家族つてこういう物なんだな……

…と雛子は思った。

勿論、自分も宇佐奈家で同様の経験は何度もした。

だがそれは、あくまでも疑似体験でしかないのだ……。

「ん？ ヒナちゃん、どうかした？」

「え？ ううん、どうもしないよ？」

つい考え込むような事をしてしまった雛子は、慌てて笑顔を作つた。

「そう？ 何か考えてたみたいだったからさ」

「ああ、そっか。 うん、利恵ちゃんとお父さん、仲良しだなんて思つて」

「ええ、そう？ そんなでもないと思うけどなあ？」

「そ、そんなに迷惑そうに言わなくてもいいじゃないか。 ちょっとショックだったぞ、今のは……」

「ほらほら利恵、その辺にしておきなさい。お父さんが拗ねると、あとで大変よ?」

「ひ、人を子供扱いするな」

利恵と祥子に続いて、今度は雛子も一緒に笑った。

「へえ……いい親父さんとお袋さんだな」

宇佐奈家のダイニングで、涼と雛子は差し向かいになり、夕食を摂っている。

今夜は環が地方講演で留守にする為、環に頼まれて雛子が支度をしたのだ。

今夜も当然の如く、雛子の両親は会社に泊まり込みだそうだ。

「凄く優しいご両親だったよ。でね、利恵ちゃんのお父さんって、結構カッコいいんだ」

「ふ〜ん。お袋さんは?」

「美人。利恵ちゃんが可愛いのも納得出来るよ」

「可愛い? あいつが?」

箸を持つ手を止め、涼は目を丸くしながら言った。

「あれ? 涼ちゃん、そう思わないの?」

「いや、見た目はともかく、あの強引な性格は可愛いとは思えないだろ、普通……」

涼がどんなに頑張ってみても、結局最後には利恵の意見が押し通されてしまうのだ。

涼からすれば、それは決して愉快な事ではない。

「じゃあ、少なくとも見た目は可愛いって思ってるって事だね」

「い、いや、あくまでも一般論としてだからな?」

「はいはい。おかわりは?」

「あ、ああ、もらっ……」

茶碗を差し出しつつ、何となく雛子が明るくなった事を涼は感じ

ていた。

きつと利恵の影響を受け始めているのだろう。

以前までの雛子とは、その言動も若干違って来ているように思える。

「はい」

「サンキュ。なあ、ヒナ」

「ん？」

「あいつとさ、その……一緒にいて、楽しいか？」

「あいつって？」

「あいつって言ったら、あいつしかいないだろ。今までの会話の流れで、それくらい解れよ」

「あのさ、涼ちゃん。ちゃんと名前を言ってもらわないと、誰の話なのか判んないよ？」

「だから……もういいや、何でもない」

どうやら涼は、意地でも利恵の名前を呼びたくないらしい。

雛子はクスクスと笑うと、

「利恵ちゃんと一緒にいると楽しいよ。グイグイ引っ張ってくれ  
るから、わたしも行動が楽しだね」

「お前、解つてて訊くなよな……」

「名前を呼ぶくらいいいじゃない。どうしてそんなに嫌がるのか、  
わたしには解んないなあ」

「俺のプライドが許さないんだ」

「何それ。つままない物は捨てちゃいなさい」

最後の一口を食べてしまうと、雛子は「ご馳走様でした」と  
手を合わせ、箸を置いた。

「いただきます」と「ご馳走様」は、作ってくれた人にも  
そうだが、食材に対して行う物なのだと、子供の頃、環に教わった。  
私達は命を頂いているのだと。

だから、食材に対して感謝の心を忘れてはいけないのだそうだ。

「っ、つままないとは何だ！ 男がプライドを無くしたら終わりだ



ろうが」

「あはは、真君みたいな事言ってる」

「失礼な……俺のどこが真に似てるってんだ？」

「利恵ちゃんの名前を呼べないところなんて琢磨君みたいだし。

涼ちゃんも随分二人から影響受けてるみたいだね」

お茶を淹れながら、雛子は楽しそうに言った。

二人で夕食を摂るのはこれが初めてではないが、昔はこんなに友達達で盛り上がれなかった。

大抵は雛子が一日の出来事を話し、涼がそれに相槌を打つ程度だったのだ。

環がいればそれなりに話題も広がったが、涼と二人きりの時には殆ど雛子が喋っていたようなものである。

それでも、雛子にとって楽しい一時であった事に変わりはないのだが。

「しかし、そんなにいい両親に育てられたってのに、何であいつは、ああなのかな……」

「ああつて？」

「俺の都合なんてお構い無しで引つ張り回すし、やたらと喚き散らすし、手は出る足は出る……やりたい放題だろ？」

「涼ちゃんが怒らないって知ってるからね。甘えてるんだよ、きつと」

「いや、俺はいつも怒ってるぞ？ おかげで血圧が上がろうだ」「本気じゃないでしょ？ わたしやおば様に言うのと同じで。だからだよ」

「……」

そうだったのだろうか……？

涼としては、殆ど手が出る寸前の勢いで怒っていたつもりだったのだが……。

「女の子って、誰にでも甘える訳じゃないんだよ？ いくら甘えさせてくれるって言っても、それなりの相手を選ぶんだから」

「そう言われてもな……」

涼としては複雑である。

そりゃあ誰かに好かれる事自体は嫌な事ではないのだが、利恵の場合は少々事情が異なる。

何しろいきなり『彼女になる！』と一方的に宣言されただけなのだから、そんな経験など全く無い涼には対応が難しいのだ。

かと言って、利恵が悪い子ではない事が判るだけに、あまりそんなに扱うのも気が引ける。

ましてや、最近は雛子とやたらに仲が良いのだ。

自分の対応が原因で雛子の友人が減ってしまう結果になるのは申し訳無いし、不本意である。

「厄介だなあ……」

涼は頭をガシガシと掻いた。

困った時や考えがまとまらない時にやる、昔からの癖である。

「あ、そうだ。今度遊びに来なさいって」

「あ？ 誰が？ どこへ？」

「涼ちゃんが、利恵ちゃん家に」

「……やだよ。代わりに真でも連れて行け」

熱いお茶を冷ましつつ、涼は本気で嫌そうな顔をして言った。

「利恵ちゃんのお母さん、涼ちゃんに会うの楽しみにしてたよ？」

「本人抜きでそういうのを話題にすんなっつーの」

「男の人って、どうしてこうなのかなあ？ 利恵ちゃんのお父さんも、涼ちゃんと会うの乗り気じゃないみたいだったし」

「親父さんとは気が合いそうだ……」

とは言いつつ、やはり利恵の家に行く気など無いのだが……。

利恵の事については、ちゃんと考えると雛子に約束した。

しかし、何をどう考えたものだろうか？

まあ、友達付き合いをするには良い相手のようにも思えるのだが。

「いい加減な事は出来ねえしな……」

「何？ 涼ちゃん、何か言った？」

「いや、何でもねえ。ごっそさんでした」

涼も一応、食事の前後にはこうして手を合わせてはいるが、こちらには習慣でやっているだけである。

「で、他には何か変わった事とか無かったのか？」

「そうだなあ……あ、そう言えばね、今日は二人でコーヒを淹れたんだけど……」

二人でお茶を啜り、何気無い一日の出来事を振り返って話す。

昔から当たり前のようにして来た、当たり前のよう存在していたこの日常は、やがて形を変えて行くだろう。

今から何年か後、ここでこうして涼と話しているのは誰だろうか……。

その日、雛子はいつよりも長く宇佐奈家に居た。

## 第十章

「何だよ、てめえは」

「てめえも俺らに小遣いくれんのかあ？」

「繁華街の一角で、『いかにも』な風体の三人組が凄んで見せた。」

「まだ幼さの残るその顔を見ると、高校生になるかどうかといったところだろう。」

「何やら険悪な空気が渦巻いているのだが、言われている当人は全く怯む様子を見せないばかりか、

「小遣いが欲しけりゃ、お家に帰ってお手伝いでもしろ。ガキの内から楽しんで金貰おうなんて考えてると、立派な大人になれねえぞ？」

と、意に介してもいない。

「美浜恭一……その名前を先に聞いていたら、もしかしたら三人は手出ししなかったかもしれない。」

「君、危ないから俺の後ろにいた方がいいよ」

「あ……は、はい！」

「恭一に護られるようにしているのは、少し線の細い、大人しそうな男の子だった。」

「どうやらこの三人に脅されていたようなのだが、そこへ偶然、恭一が通りかかって……という図式である。」

「こんな大人しそうに相手に、カツアゲなんてセコい真似してんなよ、みつともねえぞ？」

「なに正義の味方気取ってんだクソが。三人相手に何か出来るとでも思ってたのか？」

「三人揃って一人前か？ 随分とまあコストパフォーマンスが悪いな……。一人で三人分出来るくらいになれよ、お子ちゃま達」

「この野郎！」

と、一人が飛び掛ったまでは良かったが、実にアツサリと避けられ、足を引つ掛けられて転ばされてしまった。

「足腰弱いな……ちゃんと運動してるか？ 老化は足腰から始まるんだそうだぜ？」

「ふざけやがって！」

残る二人も恭一にかかつて行くが、

「とう！」

「あいてっ！」

殆ど遊んでいるとしか思えない恭一のチョップが一方の頭に、そしてもう一方には、

「ブレイン・クラッシュ！」

「いてっ！」

デコピンが炸裂した……。

「話しにならねえな」

この手の連中の相手など、恭一にとっては準備運動にもならない程度の事らしい。

パンパンと手を叩きながら、恭一は倒れた三人の傍にしゃがみ込み、

「あのな、お前ら。こうやって誰彼構わずに噛み付いてると、その内とんでもねえ事になっちまうぞ？」

と、三人の頭を撫でながら言った。

「……なに余裕カマしてんだオッサン……もう勝ったつもりかよ」

男の一人がポケットを探ろうとした手を、恭一はグッと掴み、

「出すなよ……俺もマジになっちまうぞ？」

と言いながら、その手に力をこめた。

その優男的な外見とは裏腹に、恭一の力はかなりの物らしく、男の手は全く動かす事が出来ない。

「それから俺はオッサンじゃなくて、美浜さんだ。もしくはお兄

さんと呼べ」

「み、美浜!？」

「もしかして、あの『何でも屋』の……?」

「はい、その君、正解。ご褒美は何がいい?」

「あわわわっ!」

「す、すんません!」

そう言い残すと、三人は脱兎の如くその場から駆け出して行ってしまった。

「あらら……。あれだけ走れるなら、こんな事してねえで陸上でもやりやあいいのに。なあ、君もそう思うだろ?」

と恭一が振り返った先には、しかし、誰もいなかった……。

「助けてやったつてのに、礼も言わずに消えちゃうなんてなあ……世も末だ」

ハア……と切ない溜息を一つ吐き、恭一は肩を落として歩き出した。

「あはははは!」

「笑うなよ環、俺は傷付き易いんだぞ?」

宇佐奈家の居間で恭一の話が聞かされた環は、もうかれこれ五分ほど笑いつぱなしである。

最初是一緒に笑っていた恭一だったが、さすがにここまで笑われると少々気になって来る。

何だか自分が笑いのネタにされているような気がするのだ。

いや、実際そうなのだろうが……。

「ごめんごめん。でもさ、恭一も普通の子から見たら怖いんだなっと思ってたら、何だか可笑しくて」

「どういう意味だよ、まったく……」

恭一は軽く環を睨むと、コーヒーを一口啜った。

「……昔から変わらねえな、この味は」

「まあね。あの人の好きな味だから」

「そうか……」

涼の父親である保と、母親の環、そして恭一は幼馴染の関係にある。

学生時代、恭一とコンビを組んで暴れまわっていた保を、環はよく諷めたものだった。

まあ、『無敵の鬼神』とまで呼ばれていた保を、大人しくさせるだけの実力が伴っていたからこそ出来た事だが……。

「ところで恭一、今日はどうしたの？ 急に訪ねて来るなんて珍しいじゃない」

「ん？ ああ、ちょっと近くまで来たもんでな。 久し振りに涼のツラでも見てやるうかと思ってよ」

「ふふ。 あの子、最近変わったわよ？」

「変わった？」

「うん。 何て言うのかな……少し丸くなったみたい」

「へえ……」

と、恭一が言うと同時に、

「だから！ 何度も言わせんじゃねえよ、お前は！」

「いーや！ 涼が正直に白状するまで、俺様は何度でも訊くぞ！」

「いい加減にせんか、真。 本人が嫌がる事をしつこく訊ねるものじゃない。 人間、心に秘めておきたい事はあるものだ」

「琢磨も誤解を招くような事を言うなよ！ 俺には隠し事なんてねえっつーの！」

玄関の方で騒々しい声が聞こえた。

「どうやら涼が帰って来たようである。」

「もー、みんな煩いよお……あれ？ 涼ちゃん、お客様みたいだよ？」

「客？」

「ほら、この靴。 涼ちゃんのじゃないでしょ？」

「あ、ほんとだ」

「お客様がみえているなら、俺達はお暇した方が良くはないか？」

「おいとまって……琢磨、お前はいつの時代の人間だ？」

「ま、俺の部屋に行つてればいいさ。気にせずによかれよ」と、涼が靴を脱ぎ始めると、

「おい、愚息！ 帰つて来たならこつちへ来て、愛するお母様とお客様にご挨拶しろー！」

と、居間から環の声がかかった。

「誰が愛するお母様だ……恐怖の大王め」

「今の台詞、もう一度言う度胸はあるかー!?」

「な、なんちゅう地獄耳……。しゃあねえ、ちよつと顔出すか。

ヒナ、先に二人と俺の部屋へ……」

涼が雛子にそう言おうとすると、

「いつまで玄関先でグダグダやってやがんだ、こらっ！」

という言葉と共に、いきなり涼の目の前に拳が飛んで来て、鼻先で止まった。

あまりに突然で反応する事も出来ずに、両目を大きく見開くだけの涼に、

「そのくらいパツとかわせないようじゃ、まだまだだな、涼」

と、恭一は笑いながら言った。

「きよ、恭さん!？」

「よ、久し振りだな。雛子ちゃん、相変わらず可愛いね」

「相変わらず口が巧いんだから。美浜さん、ご無沙汰してます」

ペコリとお辞儀をする雛子に、恭一は、うんうんと頷きつつ微笑を返すと、

「おい涼、そこで豆鉄砲喰らつたような顔して突っ立ってるのは、お前の友達か？」

呆けたようになってる真一郎と琢磨を見ながら言った。

「え？ ああ、そうだよ、同じ中学なんだ。こつちのデカいのが掃部関真一郎で、その隣りにいるのが浦崎琢磨。こちら美浜恭一さん、うちの親の幼馴染だ」

何度か涼から聞かされた事がある。



この人が美浜恭一か……と、琢磨も真一郎も恭一の顔をじつと見ていた。

サラサラとした栗色の髪、身体の線の細さ、柔和で端正な顔立ちのどれを取っても、驍名を馳せている男とは思えない。

まあ、それを言ったら自分達も同じような物なのだが……。

「そうか。涼が世話かけてるだろうが、これからもよろしくしてやってくれ」

「初めまして、浦崎琢磨と申します。以後お見知りおきを」

「どーも！ 掃部関真一郎です！ いつも涼のお世話をしております！」

「ふざけんなよ、この野郎。琢磨を見習って、もうちつとまともな挨拶が出来るようになりやがれ」

「ははは、面白い連中だな。まあ、こんな所で立ち話もなんだ、上げられがれ……つとと、俺の家じゃなかったな、はは」

さて、涼達が居間へ入ると、真一郎と琢磨が環に挨拶をしたのだが、どうにも環のご機嫌が悪い。

どうやら自分を差し置いて、先に恭一に挨拶をしたのが気に入らないようだ。

涼は危険を察知して、みんなを連れて自分の部屋へ避難しようとしたのだが、瞬時に環に回り込まれ、無理矢理ソファへ座らされてしまった。

「いい加減に機嫌直せよ環、ガキじゃあるまいし……」

「うるさい。だいたい、この家の主はわたしだぞ？ 何で恭一が仕切ってるんだ」

「いいじゃねえか別に……細かい事に拘るなよ」

「ふん！ いいもん、わたしは雛子ちゃんと遊ぶから。お前らは男同士で、暗くジメジメとスケベな話しでもしてろ」

「悪意に満ちた表現だな……」

環は自分の隣りに座らせた雛子を抱きしめつつ、恭一に向かって『べ〜』と舌を出したりしている。

「な、何ともこの場に居辛いな……」

琢磨が小声で、隣に座る真一郎に言った。

どうにもご機嫌斜めの女性を目の前になると、何を言って良いものか琢磨には解らないようだ。

まあ、元々口下手な琢磨の場合、女性の前に出ると言葉に詰まるので尚更なのだろう。

「はは。でも可愛いじゃんか、涼のお袋さん。俺は感情をストレートに出す人も好きだよ」

当然、真一郎も小声で言っていたのだが、環の地獄耳はしっかりとその言葉をキャッチしていたようで、

「ん？ ん？ 真ちゃん、今何て言ったのかな？ もう一度言ってみそ？」

と、何故かニコニコしている。

「え？ ああ、感情をストレートに出す人も好きだって……」

「違う！ その前！」

「可愛いって言いましたけど……気に触りました？」

「おーっほっほっほ！ いいわよ真ちゃん、その調子でもっと崇め奉りなさい！」

「……ちよつと怖いかもしれない」

「あ、あの、わたしお茶淹れて来ます。みんな、何かリクエストはある？」

何とか場の雰囲気を変えようとしたのだろう、雛子が環の両手を掻い潜り、ソファから立ち上がって言った。

「はいはい！ 俺様はコーヒーを所望します！ ミルクと砂糖は抜きでね」

「俺は出来れば梅昆布茶が欲しいんだが……大丈夫かな？」

「梅昆布茶？ また今時の男子中学生とは思えないような物を……」

「うるさいな真は。だから、可能ならばと言っただろう」

「梅昆布茶ならあるわよ？ この間、出先でもらったのが棚に入ってるから、雛子ちゃんよろしく」

「はい」

各自の注文を受け、雛子はキッチンへと小走りに消えた。

「そう言えば……佐伯は涼のリクエストを訊かなかったようだが？」  
通常、こういった事は家の者がやるのが本当なのだろうが、涼も環も何も言わないので、とりあえず琢磨はそれには拘らない事にした。

「俺の好みは訊かなくても知ってるからな。黙っててもピッタリ合った物を出してくれるんだよ、ヒナは」

「そうか、涼と佐伯は幼馴染だったな」

成る程、それなら互いの好みも知っているだろうと、琢磨は納得した。

「けど、他人の家だつてのに、雛子ちゃんもよくサッと動けるもんだな。どこに何があるのかとか、全部頭に入ってるってか？」

「ヒナにとつちや、この家は自分の家も同然だからな」

「は？ どういうこつちや？」

お隣同士の幼馴染だというだけで、そこまで詳しくなれるもんか？ と、真一郎は首を傾げた。

それを受けて環は、

「あの子はわたしの一番弟子だから。それに、この家の事は雛子ちゃんに任せてるって一面もあるのよ……申し訳ないんだけどね」

と、苦笑しながら言った。

「任せてるって？」

「お袋は講師をしている関係で、何日か地方へ出かけたたりする事もあ  
るからな。そういう時にはヒナが全部やってくれるんだよ。飯

の支度とか、掃除、洗濯なんかな」

身内でもない雛子に家の事をさせるなど、本来ならばとんでもない事なのだが、雛子が小さな頃の面倒をずっと見て来た事もあつてか、せめてもの恩返しだといって、雛子の両親も公認の状態なのだと涼は言った。

「ふ〜ん……。涼、お前も少しは出来るようにしておかねえと、

いざって時に困り果てて首括る破目になるぞ？」

「何でそこまで飛躍するんだよ、お前は……。まあ、俺もそう思わないでもないけどな」

「んなら、おばさんにも雛子ちゃんにも教えてもらいいんだ。二人とも、家事にかけちゃ一級品なんだろ？ さもなきや高梨にでも……」

「ちよつと待て！ 真一郎……。今、何て言った？」

不意に環が先程と同じような台詞を言った。

しかし、真一郎に対する呼称と雰囲気若干違う。

「え？ いや、家事に関しては一級品だって……」

「違う！ その前！」

「教えてもらいいって……」

「そのちよいと前」

「おばさんにも雛子ちゃんにでも？」

「……。ちよつとそこに立ってくれる？」

「あ、はい」

真一郎が素直に環の言う通りに立ち上がると、環はゆっくりと真一郎の背後に回り込み、真一郎の肩や腕をポンポンと叩いた。

「ほほう？ 随分と立派な骨格してるわね。身体は頑丈な方？」

「自慢ですが、鋼鉄の身体は百万馬力です」

「それなら安心ね」

と、微笑みながらスルスルと環の手足が動き、真一郎の身体に巻き付いたかと思うと……。

「……。誰が『おばさん』だ、こら」

あつという間にコブラツイストの体勢になった。

「いてててて！ 折れる折れるっ！」

「やくねえ、わたしは『おばさん』でしょ？ そんな力がある

訳ないじゃない。

「いだけだだだっ！ 腰が砕け散るっ！ 涼、助けてくれえっ！」

「いや、無理だから。諦めて死んでくれ、真」

「環に対しては言葉を選んだ方が身の為だ。 浦崎君、覚えとけよ？」

「は、はあ……」

冷静なまま言う恭一の言葉に、琢磨はただ頷くしかなかった。

そここうしている内にも、真一郎の身体はどんどん横方向へ傾けられ、かなり苦しそうな形にされて行く。

「お、俺様の力でも外せねえなんて……そんな馬鹿な！」

自慢するだけあって、真一郎は自分の腕力にかなりの自信があったのだが、渾身の力を込めて抗っているというのに、環には全く通用しない。

それどころか、逆らおうとすればする程、環の手足には力が籠められて行き、益々苦しい体勢にされてしまう。

「すみません！ ごめんなさい！ もう二度と言いませんから赦して下さい！」

「どくしよつかなあ？ 環ちゃんたら傷付いちゃったしい……うりうり」

「おおあああ〜っ！ 背骨背骨っ！ ミシミシ言ってますって！」

「はい、お茶が入りましたよ……っ、真君、何してるの？」

トレーを手にした雛子は、居間に入るなりキョトンとした顔をして真一郎に訊ねた。

まあ、雛子にとっては見慣れた光景なので、大して問題にも思えないのだろう……。

「雛子ちゃん、俺にその質問をするのは間違ってますよ……」

「冷めない内に飲まないと美味しくないよ？ おば様も座って下さい」

「仕方ない、今日はこれくらいにしといてやるか。 以後気を付けるよ？」

「はい、環さん……」

やっと開放された真一郎は腰を摩りつつ、大きな身体を丸めるようにして琢磨の隣りに腰を下ろした。

「し、死ぬかと思った……」

「上手い具合に関節を押さえられていたからな。あれではいくらお前に力があつても、容易には抜け出せんだろうな」

「そこまで分析出来てたんなら助けに来いよ」

「馬鹿を言うな。女性相手に男が二人でなどと、そんな恥晒しな真似は出来ん」

「いつもながら変な所で固いな、琢磨は……」  
「ところで」

淹れたてのコーヒーの味と香りを堪能しつつ、恭一が言った。

「お前達、さつき玄関で何をもめてたんだ？」

「あ、そうだ！ 聞いて下さいよ美浜さん！」

「え〜っと、掃部関君だったか？ 何だい？」

「涼の野郎、親友であるこの俺様に隠し事してやがるんですよ！」

「またその話かよ……いい加減しつげえな、お前は」

雛子の淹れたコーヒーに口をつけながら、涼は嫌そうな目をして真一郎を見た。

琢磨も梅昆布茶を一口啜ると、

「真、よせと言ったろう。いくら友人にでも話せない事はあるものだ。秘密を暴くなどというのは誉められた行為ではないぞ？」

と、諭すように言った。

「だから！ 琢磨の言い方は誤解を招くつての！」

「話が見えねえな……涼、ちつと黙ってる」

おもむろに席を立ったかと思うと、恭一は涼の背後から口を押さええてしまった。

当然、涼はそれを振り解こうとするのだが、さすがに恭一が相手では涼も歯が立たない。

「いいぞ掃部関君、話してみる」

「こいつ、可愛い女の子と仲良くなってる筈なのに、それを俺様に報告しやがらねえんですよ」

「ほう？ それは俺も初耳だな。相手は学校の女子か？」

「琢磨は稽古で来られなかったからな。俺のダチが陸上の大会に出た時に応援に行つてさ、その時に知り合つたんだよ」

「ああ、あの時か。ならば隠し立てするような事でもあるまい？人と仲良くなるのは良い事だ」

自分と同じように、友人を作るのが不得手に思える涼が他人と交わりを持つ事を、琢磨は喜んでるようだ。

「ば〜か、それだけじゃねえっつーの。ダ〜リン、ハニ〜の関係だぞ？」

「何だそれは」

「早い話しが恋人同士つてこつた」

「何っ！？ そうなのか、涼！」

「んー！ んんーっ！」

涼は必死に首を振つて否定しようとするのだが、恭一にしっかりと抑えられているので、その意思は琢磨に伝わらない。

「でもよ、何故かその後の進展具合の報告がねえんだよ。上手く行つてるなら隠す必要ねえし……な？ 怪しいと思うだろ？」

「涼、よもや疚しい事があるのではなからうな……？ もしもそうなら俺は許さんぞっ！」

「モガモガ！ んーんー！」

「ほほう？ 涼もそういう年頃になったのか、いい事だ」

涼を押さえ付けながら、恭一は感慨深げに言った。

こうなつてしまうと、もう涼の意思などは完全無視である。

真一郎の話は、涼と利害が恋人同士であるという前提の下に進められて行く。

「それで？ 掃部関君、相手はどんな子だ？」

「細かい事は俺も知りませんが、俺らと同年で、見た目は平均以上つすね。性格は真つ直ぐな子だと思います。ただ……」

「ただ？」

「性格と同じで、行動パターンもストレートです。扱いにしくじると、パンチや蹴りが飛んで来ます」

「……誰かと似たような感じだな」

恭一は、相変わらず雛子を自分の物のように隣に座らせている環を、横目でチラリと見ながら思った。

そして、おもむろに涼の口を押さえていた手を外すと、それを涼の頭に乗せ、

「お前は保と良く似てやがるからな……同じタイプの相手を選んで  
も不思議じゃねえか」

「？」

「不器用なくせに、何でも一人でやっちまおうとする。その割には、それに付いて来る奴が多い……そんな所も保と似てるよ」

と言いながら、グシャグシャと乱暴に動かした。

「自分に惚れてくれる女は大事にしろ……いいな？ 涼」

「恭さんに言われてもな……」

昔、保から聞かされた話では、恭一はかなり女癖が悪いらしい。

いや、単に女性関係がだらしないのではなく、その全てとの関係が良好だというのだ。

涼にとっては、にわかには信じ難い話である。

「ははは、確かにな。……じゃあ、俺はそろそろ帰るよ」

「あら、恭一ったら、もう帰るの？」

大して名残惜しくもなさそうに環が言った。

「この後、片付けなきゃならねえ仕事の一つあってな。またその

内ゆっくり寄り寄らせてもらうよ」

「別に無理して来なくてもいいわよ」

そう言って笑いながらソファから立ち上がると、環は恭一を見送りに玄関へと向かった。

涼と雛子も一緒に行こうとしたのだが、今度は環はそれを制した。そして、玄関に着くとすぐ、

「確かに変わったな、涼は」

靴を履きながら恭一が言った。

「一頃の刺々しさが無くなった……いい傾向だ」



「でしょ？ いい友達も出来たみたいだし、いい女もゲットしたみたいだしね」

「そのいい女つてのは、どこの誰なんだ？ お前は知ってるのか？」  
玄関から外に出ると、恭一はすぐに煙草に火を点けた。

宇佐奈家は禁煙なので、ヘビースモーカーの恭一としてはホっとする瞬間である。

「お母様って呼んでくれてるわよ。 とっても可愛い子」

「そうか……雛子ちゃんどっちが上だ？」

「比べないでよ。 雛子ちゃんが出した答えなんだから、それを尊重するのがわたし達の務めでしょ？」

「強いな、あの子は……」

フーッと煙を吐き出しながら、恭一は言った。

恭一にも、雛子が涼をどう思っているかは判っているのだ。

何しろ赤ん坊の頃から涼と雛子を見ているし、二人を連れて遊びに行つた事も何度もあるのだから。

保亡き後、涼の父親代わりを自任している恭一としては、二人の事は常に気になっているのだ。

「護ってくれる人が増えたからかもしれないわね。 涼から聞いた話だと、真ちゃんも琢磨君も腕にはかなりの覚えがあるみたいだし。

それに、あの二人は優しい男の子みたいだしね」

「そのせいか、涼がピリピリしなくなつたのは……。 今までは自分一人で雛子ちゃんを護るんだつて、躍起になつてやがつたからな」

「あの人との約束だからつて言つてね。 そういう所まで保とそっくりなのよ、あの子……」

「保との約束か……」

「涼には言わないでね？ 今はまだ……」

「解つてるよ」

上着のポケットから携帯用の灰皿を出すと、恭一はその中で煙草を揉み消し、再びポケットへとしまった。

「ねえ、今日の仕事つて、また揉め事の始末？」

「ああ、そうだ。そんな仕事ばかり多くてな、ちよつと食傷気味だよ」

「ふん……。ね、わたしも一緒に行つていい？」

「お前が？ うん、けどなあ……」

「いいじゃない。ちよつと待つてて」

環は玄関のドアを開けると、中に向かつて、

「涼！ わたし、ちよつと恭一と出かけてくるからねー！ 夕飯は済ませて来るから、あんた達は何か適当に食べてちよつだい！」

と、それだけ言つと恭一に車のドアを開けさせ、さつさと中へ乗り込んでしまった。

やれやれといった表情で恭一も運転席に乗り込み、エンジンをかけた。

「付いて来るのは構わねえけど、あんまり派手にやらないでくれよ？ 後々の仕事にも差し障りがあるからな」

「何をシヨボい事言つてんのよ。ほら、ゴチャゴチャ言つてないで、とつとと車出しなさい。祭りだ祭り！」

「あとで山ほど請求書が来るなんてのは、ぞつとしねえな……」

「晩御飯作つてあげるから、ね？」

「……しようがねえか、お前は昔から言い出すと聞かねえからな」  
恭一の心を表すように、車は嫌々走り出したように見えた……。

「素直にゲロつちまえ、涼！ いつまでも隠し立てすると友達無くすぞー！」

恭一と環がいなくなつてすぐ、居間では真一郎の涼に対する追及が再び始まり、

「涼、正直に言え。俺も鬼ではない。話しの内容如何によつては味方になつてやる事も出来る」

と、日頃こつこつ話には興味を示さない筈の琢磨まで会話に加わつて来た。

「お前らしい加減にしろよ……。そもそも俺は、あいつと付き合

うなんて言った憶えは無いつての」

「お前はそうでも、高梨はその気になつてんじゃねえのか？」

「涼、その気も無いのに妄りに期待を持たせるものではないぞ？  
それは罪というものだ」

「だから……」

「はいはい、真君も琢磨君も、もうその話は終わり。涼ちゃん困つてるでしょ？」

テーブルの上を片付けながら雛子が言った。

勿論、片付けているのは恭一と環の使ったカップである。

「けどさあ、雛子ちゃん。あんま半端な真似は良くないと思わない？」

「涼ちゃんも色々と考えてるんだよ。だから、わたし達は余計な事は言わないの、ね？」

「考えるねえ……。お前、本当にちゃんと考えてんのか？」

「デツケエお世話だよ」

「まあ、何にしても相手のある事だ。結論は早めに出すべきだぞ、涼」

「コーヒーを啜っている涼に対して、琢磨が真面目な顔で言った。  
「……ああ」

真一郎と違い、単に面白がっているのではない琢磨に言われると、涼も素直に頷けるようだ。

「しかし何だな、涼の家の近所には遊べるような所が無いんだな」  
真一郎が急に話題を変えた。

いつもの事ながら色んな事に興味を持ち、すぐに反応する真一郎はネタの振り方が唐突である。

「俺ん家の近所には、カラオケやらゲーセンやら結構多いんだけどな」

「この辺には商店街くらいしかねえよ。あとは公園と本屋、それにコンビニくらいだな」

「それでよく退屈しねえな、お前は。休みの日に何やってんだ？」

真一郎は両手を頭の後ろに組み、ソファの背凭れに身体を預けながら言った。

テーブルに足を乗せたいところだが、それは雛子や琢磨に怒られそうなのでやらない。

「お前らと出かけない時にはゴロゴロしてるな。これといって趣味もねえし」

それ以外は利恵の襲撃を受けて連れ回されているのだが、ここではそれは言いたくない。

せっかく収まった真一郎の追求が、再び始まってしまつのが目に見えているからだ。

「健全な若人の休日じゃねえな、それは」

「ならば本を読み、涼。色々な知識を吸収する事は人間を大きくする。俺も稽古の無い休日には、本を読む事に行っているんだ」

「本ねえ……俺の趣味じゃねえな。漫画だったら、たまに読むけどな」

涼は、どちらかと言えば身体を動かす方が性に合っている。

とは言え、ただ目的も無く運動するのも面倒臭いという、どうにも建設的とは言えない男である。

「こんなのと十年以上も付き合わされてるのか……雛子ちゃんも大変だね」

「あはは、もう慣れちゃったよ」

赤ん坊の頃からの付き合いです。

それなりに扱い方も心得ている雛子には、それが当たり前になっているのだ。

「うるせえな……それで真に何か迷惑かけたかよ？」

「これからかけられそうなのがする。今の内に俺様に謝れ」

「馬鹿か、お前は」

「何も無理に出かける必要もあるまい。こうして話しをするだけでも良いものだ」

「爺むさいな、琢磨は……そんな調子じゃ、あつという間に老け込

んじまうぞ?」

「いつまでも子供のままというのも考え物だがな」

「ぐ……!!」

「はい、琢磨君の勝ち」

琢磨の手を取って上に掲げながら、言い返せなくなってしまった真一郎を見て、雛子は笑った。

知り合って、まだたったの二ヶ月。

しかしそれでも、彼らとはきつと永い付き合いになるのだろうと雛子は思った。

この先ずっと……。

## 第十一章

「それじゃあ真一郎、戸締りはしっかり頼むぞ」

「解ってるっつーの。もうガキじゃねえんだから、いちいち言わなくてもいいって」

真一郎はそう言うと、玄関先に立っている父親に向かって、鬱陶しそうに右手を左右に揺らした。

まだ夜も明けきらない早朝、父親の傍にトランクがあるところを見ると、旅行にでも行くのだろうか？

「親父こそ、何か忘れ物とかしてんじゃねえの？」

「お前じゃあるまいし。ああ、食事の事なんだが、出前をとるなり外へ食べに出るなりしてくれ」

「一週間だろ？ 一人で適当にやるよ。 外食なんかして無駄に金使う事ねえし、余り物で何か作れるから」

「どうやら真一郎の父親が出張に行くらしい。」

その言葉を聞いた真一郎の父は、

「そうか……お前は何でも出来るんだったな……」

と、少し寂しそうな顔で言った。

「ああ、一人で何でも出来るさ。 ……心配要らねえよ」

「……行って来る」

「氣い付けてな、親父」

静かに玄関のドアが閉まると、真一郎は一人になった部屋の中を見回した。

然程広くも無い室内には、装飾品と呼べるような品が一つも無い。「ま、男二人で暮らすアパートの部屋なんて、こんなもんなんだろうな……」

先日遊びに行った宇佐奈家には、いかにも女性が暮らしているという雰囲気醸し出す品が、一つや二つ目に付いたものだが……。

「お袋……今頃何してんだらうな……」

真一郎が小学四年の時、両親は離婚した。

大好きな母親が突然家の中から消えた事は、幼かった真一郎にとつてかなりのショックだった。

そのせいで真一郎はかなり荒れた。

とても小学生とは思えない喧嘩も数え切れない程した。

年齢が年齢だけに警察沙汰にこそならなかったが、監督不行き届きだとして、真一郎の父は何度も警察署へ呼び出されていた。

「結局、引越す破目になっちまったもんな……親父にも悪い事したよな」

今でも時々思い出す……近所の住人の、あの自分を蔑むような目を。

だが、父はいつでも自分を庇ってくれた。

真一郎を『母親のいない子』にしてしまった引け目を感じていたのだろうか……。

「この子は、したくて喧嘩してた訳じゃないんですよ。全部、わたしが悪いんです……か」

必死になって頭を下げる父親の背中がやけに小さく見えて、真一郎はたまらなくなった。

やっちゃいけないんだと理解していた。

でも……それでも真一郎には、暴れる以外に自分を表現する方法が無かった。

「ガキの言い訳でしかねえけどな……」

ポットにお湯を入れてコンセントを繋ぐと、少しの時間を置いてシューシューとお湯を沸かす音がし始める。

「さて、パンでも焼いて……と、ハムはあったかな？」

冷蔵庫を開けると、卵が数個と使いかけの野菜。

それに、いつ買って来たのか忘れてしまったハムが数切れあった。

「賞味期限大丈夫かな、これ……」

くんくんと匂いを嗅いでみる。

膾えた臭いはしていないので、真一郎は大丈夫と判断した。

まあ、多少古くなった物や痛みかけている物を食べても、頑丈な内臓を持っている真一郎は、今までに中つた事が無いのだが、

「念の為に火を通しましょう。これで完璧！」

一般人は真似をしない方が得策であろう……。

「買い物もしねえとなあ……。けど、料理なんて滅多にしねえし、何買ったらいいんだ？」

焼いたパンの間に野菜、それに炒めたハムと半熟の卵を挟んで頬張りながら、真一郎は考えた。

あまり日持ちのしない物ばかり買ってしまつては、結局無駄にになってしまう。

かと言って、何度も買い物に出るのも面倒だ。

趣味や遊びに使う物を買うなら遠い場所でも苦にならないが、興味の無い物を買うに出るといふのは、さすがの真一郎も気が乗らない。

しかし、一週間もの間、ずっとインスタントの物ばかりというでは、さすがに味気無い。

「ま、こういう時にはプロに相談するのが一番だな、うん」

言いながら、丁度沸いたお湯でインスタントのコーヒーを淹れ、一口飲んで、

「……雛子ちゃんのコーヒーの味を知っちゃうと、インスタントが許せなくなるな。涼の気持ち解るぜ」

と、苦笑した。

「食材の買出し？」

登校してすぐ、真一郎は雛子の元を訪れた。

成る程、今回の件に関してはベストチョイスであろう。

「うん。普段は親父が料理担当なんだけどさ、一週間出張しちまうんだ。その間、自炊しなきゃなんないんだよ。それで、どん



な物を買ったらしいのになって思ってたさ」

「何を作るのか決めなきゃ、ただ買っても駄目だよ真君」

「でも、俺は料理なんて殆ど出来ねえしさ。ま、適当に炒めたり煮たりすれば、何とか食える物が出るでしょ」

「アバウトだなあ……。じゃあ、わたしが一緒に行ってあげるよ」  
「へへ、そう言ってくれるかな。って、実は少し期待してたんだけどね」

「変な遠慮しないで、最初から頼めばいいのに」

クスクスと笑いながら、雛子は言った。

その笑顔を見る時が、目下の所、真一郎が一番安らぐ瞬間であると言っていていいだろう。

自分と同じ年で少し幼い感じのする雛子が、真一郎には何故か時々母親を連想させる事がある。

いつも自分に優しく微笑みかけてくれた母の面影が、どこか雛子と重なる瞬間があるのだ。

どんなに求めても、もう二度と手に入らない 『昔』 を思い起こさせる瞬間が……。

「真君、どうかした？」

「え？ いやいや、いつ見ても雛子ちゃん笑顔は癒されるな。って思ってた」

「おだてても何も出ないぞ？」

「はは。じゃあ、放課後になったらよろしくね、雛子ちゃん」

「うん」

そして放課後。

雛子と真一郎は朝の約束通り、食材の買出しの為に連れ立って学校を出た。

と言っても二人だけではなく、

「……つたく、何で俺まで借り出されなきゃなんねえんだよ」

と、仏頂面をして、ぶつぶつ文句を言う涼と、

「まあ、そう言うな、涼。こうして買い物をするのも勉強だ。いざ自分一人でしななければならなくなった時の為になる」

と、涼を宥める琢磨も一緒である。

「いいじゃねえか。琢磨はともかく、涼は真っ直ぐ帰ったって暇なんだろう？」

「何だよそりゃ、勝手に決めんな」

「忙しかったか？」

「いや……暇なんだけどな……」

「じゃあ問題無い。黙って俺様の為に役立て」

「やれやれ……」

結局、最後には真一郎のペースになってしまふのは、もう最初に出会った頃からのお決まりのパターンである。

「一週間分、いつぺんに買っちゃっていいの？ 真君」

「ああ。いちいち出るのも面倒だしさ、その度に付き合せる訳にもいかないでしょ」

「わたしは構わないけど？」

「俺が構うの。雛子ちゃんの大事なプライベートタイムを、何度も俺の為に割かせるのは申し訳無い」

「俺と琢磨のプライベートタイムの事は考えないのか？」

「それは俺様の中で、問題にすべき事として認識されていない」

「この野郎……」

と言いつつも、以前に比べると遥かに付き合いの良くなった涼は、真一郎の頼み事を断る事は殆ど無い。

どんなにつまらない用事でも、面倒臭そうにはしながらも引き受けたりする。

確実に涼の中での真一郎は、ある意味別格の存在として認識され始めているのだろう。

「佐伯、買い物はどこでするんだ？」

「駅前まで出ようと思って。あそこなら安く買えるし、品揃えもいいからね」

「わざわざ駅前まで出るのかよ、面倒だな……」

涼は面倒だと言うが、駅前まではバスを使って十五分ほどで到着するのだから、それほど大した時間がかかる訳でもないのだ。

座っているだけで駅前まで運んでくれるのだから、面倒に思う理由など無いのだが……。

「お前、本当に面倒臭がりだな……そんなんじゃデートの時とか困るだろ？」

「そんなもん、しないから関係無い」

「これだよ……。たまには出かけるよ、老け込むぞ？」

「デツケエお世話だ」

相変わらずの会話をしつつ停留所からバスに乗り込み、駅前で降りると、すぐ目の前には買い物客で賑わうアーケード街がある。

駅周辺は、日本でも一、二を争う大企業『登内グループ』が開発に乗り出しており、広範囲に渡って用地買収が進められているが、経営者の意向なのだろう、古くからある商店街はそのまま残されるようだった。

然したる揉め事も無く、スムーズに開発が進んでいるところを見ると、どうやら経営者はかなりの手腕を持っているようだ。

「で、とりあえずは何を買うんだ？ ヒナ」

「ちよつと待ってね。え〜と……」

雛子は鞆の中から何やらノートを取り出すと、びっしりとレシピの書き込まれたページを開いた。

「……ヒナ、それ何だ？」

「今日、休み時間に考えたの。真君一人でも作れそうなお料理と、それに使う材料」

「料理の手順まで書いてあるのか」

ノートを受け取った真一郎は、感心しながらそれを見ていた。

詳しい作り方はもとより、簡単な図解も描き込まれていて、素人

の真一郎にも解り易くワンポイント・アドバイスが書いてある。

「これを見ながらだったら、ちゃんとバランスの取れた食事が作れるでしょ？」

「さすが雛子ちゃん、感謝感謝」

それぞれ買う物の書かれたメモを手にとつと、各人が担当する物を買う為に散って行った。

ほぼ毎日の事なので、雛子は何の苦勞もせずに淡々と買い物を進めている。

琢磨も几帳面な性格が幸いしているのか、順調なようだ。

ただ、どうにも涼と真一郎がいただけない……。

「食前酒は何にしようかな？ 親父の酒を呑じまうと、あとで煩せえからなあ……」

「コーンスターチって何だ？ コーンってくらいだから、とうもろこしだよな？ とうもろこしって野菜売り場にあるのか？」

と、こんな調子で、目的の物を買うまでに、二人ともかなりの時間がかかりそうである。

「ま、とにかくその辺ウロウロしてれば見つかるだろ」

普段、雛子と一緒に買い物をしていると言っても、涼の担当は専ら荷物持ちなので全然知識が蓄えられていないようである。

こんな調子だから方向音痴も一向に改善されないのだ。

「……ん？」

歩き出した涼がふと目を留めた先に、小さな女の子が背伸びをしながら棚の上に向かって手を伸ばしているのが見えた。

見た目で判断するに、恐らく小学生だろう。

顔を赤くして必死になっているようだが、その指先は目的の物には全然届きそうも無いばかりか、今にも他の商品を崩してしまいうで、危なっかしい事この上ない。

涼はその女の子の背後から手を伸ばし、ヒョイと品物を手に取る  
と、

「はい、これでいいのかな？」

と、女の子の前に差し出した。

女の子は、ちょっと驚いたような顔をしながら、

「あ、はい、これです。ありがとうございます……」

と、涼に礼を言った。

「他には？ 何か取る物があれば、ついでに取ってあげるよ」

「あ……じゃ、じゃあ、その隣りのもお願ひします」

「え〜っと……これ？」

「いえ、それじゃなくて、その隣りです」

「これだね、はい」

涼が品物を女の子の買い物カゴへ入れると、女の子は嬉しそうに笑って、涼にペコリと頭を下げた。

左右に分けて結んだ長い髪が、それに合わせてピヨコンと揺れた。

「ありがとうございます！ 他の大人の人は、みんな助けてくれなくて困ってたんです……店員さんも近くに来なかったし……」

少し舌足らずな感じで、女の子は言った。

「まあ、みんな自分の買い物に専念してて気付かなかったんだよ、きつと」

本当のところはどうだか知らないが、わざわざ世の大人の評価を下げる事もあるまい。

「お兄さん優しいですね〜」

「そう？ 俺は君が困ってたみたいだから手伝っただけで、別に特別優しいって事も無いと思うけどな？」

「それが優しいって事なんですよ。あたしファンになっちゃいます〜」

「はは、ファンか。何だか芸能人みたいだね」

面白い子だな、と涼は思った。

こちらが身構える前に懐深くへと飛び込んで来て、あつという間に馴染んでしまう……そんな子だった。

こういう所は利恵とも似ているだろうか？

そう考えてから、涼はブルブルと首を振った。

「何であいつの事が頭に浮かぶんだよ……」

「お兄さん、どうかしましたかあ？」

「え？ あ、いやいや、何でもないんだ」

「買い物の事などすっかり忘れ、涼が女の子と話し込んでいると、

「おい、涼！ 何やってんだよ」

と、後ろから真一郎に声をかけられた。

その手には買い物籠があるのだが……酒瓶しか入っていない。

勿論、空き瓶ではなく、中身が入っている。

「お前の担当、終わったのか？」

「あ、いけね。 まだ何も買ってねえや」

「アホか！ もう雛子ちゃんと琢磨はレジ済んじまってるぞ？ 早

くしろよ」

「ゲ。 俺、まだ買い物しなきゃなんないんだ、じゃあね」

「あ、はい。 ありがとございましたあ！」

手を振りながら離れて行く涼と真一郎を見送りながら、

「カッコいい人だなあ……。 涼っていうんだ……」

と、女の子は一人呟いた。

「襟章のマークに翔峡って書いてあった。 あの人、翔峡中学の人

なんだな……。 よし！ アタシも来年、翔峡中学に入るぞ！」

女の子は、グ！ と拳を握ると、何かを決意したような表情に

なった。

「そして先輩後輩の仲から、いずれはラブラブな関係を構築するの

だ！ ふっふっふ……。 完璧なプランだね。 アタシったら賢い！」

たんまりと買い込んだ買い物袋（と言っても、雛子の荷物は少  
なかつたが）を持って掃部関宅までやって来た四人は、そのまま  
荷物を降ろしたり片付けたりしている内に、なし崩し的に真一郎と

共に夕食を摂る運びとなった。

勿論、調理担当は雛子であるが、その際にはキッチリと真一郎に手解きをするのを忘れなかった。

そして、出来上がった夕食を食べている最中、

「しかし小学生をナンパするとはなあ……ありや犯罪だぞ、涼」と、真一郎は先程の買い物中の出来事を話題に上げた。

少し脚色して……。

「な、何っ!? 涼、お前は一体何を考えとるんだ! 事もあるうに小学生に……見損なつたぞ!」

「誰が小学生をナンパなんぞするかっ! だいいち俺はナンパはしねえって知ってるだろうが! 琢磨もいちいち本気にすんなよ!」

「涼ちゃん、何かあつたの?」

さすがに涼がそんな真似をしないと判っている雛子は、琢磨のような反応はしない。

この辺りは、まだまだ付き合いの長さの差があるようである。

「いや、棚の上の方に手が届かなくて困ってる子がいたから、品物を取ってやったんだよ。で、お礼を言われてる所に真が来やがってさ」

「ナンパの邪魔して悪かつたな、涼」

「てめえは! 何でもネタにするんじゃないやねえ!」

「涼ちゃん、昔からちっちゃい子に人気あるからね」

昔から同級生や年上の子達には恐れられていた涼だが、何故か自分よりも小さな子にはすぐに馴染まれ、よく遊び相手をさせられていた。

まあ、自分よりも弱い者に手をあげようものなら、即座に保に半殺しにされただろうが……。

「小さい子にとっては、涼は頼れる兄貴分といったところなのかもしれない」

琢磨はクスッと笑うと、真一郎の自信作に箸を伸ばし、口に運んだあと、少し後悔した……。

「おかげでガキ大将みたいに祭り上げられて、何かっつーと親父に怒られてたけどな」

「環さんじゃなくてか？」

先日の様子だと、涼に制裁を加えるのは環の役目のように、真一郎には思えたのだが……。

「親父が生きてた頃は、お袋はそんなに煩くなかったな。いつつも笑ってるだけで、どっちかって言うで見守ってるって感じだったよ」

「ふうん……」

（やっぱお袋つてのは、どこでもそんな感じなのかな……？）

真一郎の母親も、そんな感じであった。

元気の有り余っている真一郎は、いつも大抵外で泥だらけになつて帰つて来た。

それを優しく迎えて、服を脱がせて風呂へ入れる。

真一郎が風呂から上がると、テーブルの上には大好きなおやつが置いてあったものだ。

（お母ちゃん……か）

「真、これは本当に佐伯の指導の通りに作ったのか？ 塩味が濃過ぎるぞ……」

琢磨は何とか口の中の物を、お茶で流し込みながら言った。

「いや、若干アレンジしてみましたか？」

「どうして余計な事をするんだ……きちんと佐伯に教わった通りに作ればよからう？」

「それじゃオリジナリティが出ないだろ？」

「出さんでいい！」

「ま、真が食うんだから、本人の好みでいいんじゃないか？ 琢磨」  
そうは言いながら、涼は真一郎の作った物には手を出そうとしない。

「それが雛子の作った物なのか、涼にはちゃんと判別出来るらしい。しかし、これでは身体に悪い。 血圧が上がるぞ」



「じゃあ、その分は糖分を摂ってチャラって事にしよう」

「なるかつ！」

「これは、放っておいたら病気になっちゃいそうだなあ、真君……」  
結局、真一郎の父が出張から戻るまで、毎日のように雛子が通って食事の支度をする事になってしまった。

まあ、雛子も人に手料理を振舞う事が好きだという事もあり、何の問題も無いのだ。

涼も、そして稽古の無い時には琢磨も加わり、毎日賑やかな食卓だった。

悪い仲間と外で食事をしていた頃とは、まるで別次元の賑やかさ、楽しさがそこにはあった。

手放してはならない宝物がまた一つ、真一郎の中に増えた。

## 第十二章

鬱陶しかった梅雨の時期も終り、いよいよ夏本番が目前に迫った或る日の事。

登校して来た涼が教室に入ろうとしたところで、

「おい、涼！ ちょっと待て」

と、満面の笑みを湛えた真一郎に、後ろから声をかけられた。

「何だ、お前か。相も変わらず、朝っぱらからテンション高いな」

梅雨の最中には、毎日 『梅雨明けはまだかー！』 と煩くして

いたのだが、梅雨が明けたら明けたで、今度は 『夏休みはまだか

ー！』 と、結局煩いままの真一郎に、最初の内はいちいち突っ込

んでいた涼だったが、もういい加減疲れるので諦めた。

「なあなあ、お前さ、夏休みの予定って、もう決まってるか？」

「いや？ 特に何も決めてねえけど？」

日がな一日ゴロゴロして、無駄な時間を浪費する。

そして夏休みが終る間際になって、終らない宿題を抱えて雛子に

泣きつくのは、昔から続いている涼の悪習である。

本当なら見捨ててしまるのが一番本人の為になるのだろうが、雛

子もそこまで鬼にはなり切れないようだ。

「だったらさ、一緒に海に行かねえか？ 二泊三日くらいで」

浮かれまくりの様子で真一郎は言った。

もっとも、それはいつもの事なので、涼とすればもう慣れっこで

ある。

逆に今ではこれが無いと、真一郎の体調でも悪いのかと思うくらいになった。

「海か……いいな」

街中で感じる陽射しよりも、海で思い切り浴びる方が、涼としても好みである。

昨今は紫外線の害が色々と報告されているが、今では有効な対策

もあるし、ましてや涼はそんな物には無頓着である為、全然気にならない。

「プールでもいいんだけどよ、どうせなら遠出したいと思ってさ」

「ああ、そうだな。市営のプールじゃ家族連れが多くて、まとも泳げねえし」

「だよな。 やっぱどうせ見るなら、お母様方やチビっ子よりもお姉様方だもんな」

「……お前、海に何しに行くんだ？」

「海水浴だ」

「自分で自分の言葉を否定してるって事に気付いてないのか……？」

涼は苦笑しながら言った。

「それで面子なんだけどさ、琢磨と雛子ちゃんは当然誘うとして、あと何人が声かけてみようかと思ってるだけだ」

「おい、あんま大勢にしちまうと何かと面倒だぞ？」

「んな事言ってもよ、女の子が雛子ちゃんだけじゃ却って可哀相だぜ？」

「ああ、それはあるか……」

いくら親しいとは言っても、やはり男の中に女の子が一人だけというのでは、雛子もつまらないかもしれぬ。

真一郎の言う通り、誰か雛子と仲の良い女の子を誘う必要があるだろう。

「そこで、だ。雛子ちゃんと仲がいいって言えば、やっぱ高梨だろ？俺らとも馴染みだしさ」

「……」

利恵の名前が出た途端に、涼は複雑な表情になった。

別に利恵を嫌っている訳では無いのだが、どうもあのペースに巻き込まれてしまうのが困るのだ。

いつの間にか利恵の思うままにされてしまうのが、どうにも面白くない。

これで真一郎とタッグでも組まれたら、海でも同じパターンにな

ってしまうのではないか。

「嫌か？」

「別に嫌っていうんでもないけど……」

「まあ、お前がいくら嫌がっても、既に高梨は行く気満々だからな。今更ダメだなんて言ったら、あとが大変だぞ？」

真一郎は楽しそうに言うと、ポンポンと涼の肩を叩いた。

「も、もう声かけてやがったのか！？」

「当たり前だ。可愛い女の子が参加しないで、何の為の海か。

ま、他にも何人が当てがあるから、俺の方でやっつくよ」

事イベントとなると、真一郎の真価は遺憾無く発揮されるようだ。

「……そっちは適当にやってくれ」

とりあえず、誘ってしまったものは仕方ない。

他の心当たりというのも甚だ怪しい（どうせ女子にしか声をかけないだろうし）が、たまには大人数で騒ぐのもいいだろう。

「ま、俺があいつの相手をしなくて済むなら、それでいいさ」

利恵の相手は雛子がしてくれるだろうし、どうせ真一郎は水着観賞してばかりだろうから、海へ行ったら琢磨と一緒に行動すればいい。

勿論一人でいても構わないが、せっかく海に行くのだから思い切り身体を動かす方が楽しい。

琢磨となら運動能力も互角だし、何をするにもハンデが要らない分、楽しめそうだ。

涼はそう考えていたのだが……。

「……行けない？」

昼休みになり、一年一組に琢磨と雛子を誘いに行った真一郎は、ポカんと口を開けたまま呆けたようになってしまった。

「ああ。夏休みの間、俺は祖父の知り合いの禅寺へ行く事になっているのでな」

「禅寺つて……お前、坊さんにもなる気か？」

「そんな訳があるか」

琢磨は苦笑しつつ、

「精神修行だ。 剣を振るう者は精神も鍛えなければならん。 技

の稽古だけでは、剣の腕は上がらんからな」

と、普段と変わり無い様子で言った。

「まさか夏休みの間中ずつとって訳じゃねえんだろ？ 空いてる日は？」

「いや、そのまさかだ。 俺は夏休みの間、ずっと禅寺に籠る。

こちらには八月三十一日に戻る予定だ」

「三十一日つて……夏休み最後の日じゃねえか！」

「そういう事になるな。 まあ、お前達だけで楽しんで来い」

そう言うと、琢磨は机の中から次の授業の教科書を取り出し、パラパラとめくり始めた。

勿論、琢磨とて行きたくない訳ではない。

だが、自分は『浦崎流剣術』を継ぐ者として、果たさなければならぬ勤めがある。

遊びを優先させる訳にはいかないのだ。

「そっかあ……残念だなあ」

真一郎にしてはアツサリと引き下がったが、これは琢磨の性格を考へての事だ。

行けるのであれば、琢磨はちゃんと承諾してくれる。

それを断るのだから、本当にどうにもならないのだ。

「済まん、真。 せっかくの誘いを断ってしまった」

「仕方ねえさ、お前にも都合があるしな。 けど、来年の夏休みの

予定は空けとけよな？ 今から予約だ！」

「おいおい、もう来年の夏の話しか？」

「あ、その前に今年の年末な。 初詣がてら、スキーにでも行こうぜ！」

「気の早い奴だな。 だが良かろう、予定は空けておく。 但し寒

稽古があるから、それ以外の日でだ」

「よし！ 約束したからな！ あ、ひくなこちゅわあ〜ん！」

琢磨に約束を取り付けるとすぐ、某有名な大泥棒の三代目の真似をしつつ、真一郎は雛子の所へスキップしながら行ってしまった。

「何とも落ち着かん奴だな……」

大袈裟に色々なポーズをしながら雛子を誘う真一郎を見て、琢磨はクスリと笑った。

「惨敗だ……」

放課後。

いつものように『らんぶる・ろっく』へと立ち寄った真一郎は、情けない顔をしながら言った。

当然の如く、そこには涼も一緒にいて、

「人望ねえな、お前は」

と言いながら笑っている。

「みんながみんな予定が埋まってるってんだもんなあ……。こんなのでアリかよ？ これはきつと、誰かの陰謀に違いない！」

「お前の邪魔して、何かメリットがあるとも思えんけどな」

そう言うつと、涼はカップを手に取り、コーヒーの香りを楽しみつつ、一口飲んだ。

いつ飲んでも、このコーヒーは旨い。

豆をケチらず、手間を惜しまずに淹れているからこそその味だ。

「ま、別にいいじゃねえか。大勢でなきゃ楽しめないってもんでもねえだろ？」

「そりゃそうだけだよ……」

対する真一郎は、まだ不満気である。

まあ、いきなり泊りがけでなどと言われても、やはり中学生。

ましてや女の子の身では、たとえ予定が空いていたとしても、気

軽に了解も出来ないだろう。

「何方様もご家庭の指導が行き届いてらっしゃるご様子で」

「琢磨ならここで、『当たり前だ。俺達はまだ未成年なのだぞ』  
くらい言いそうだな」

「ま、それはそれでいいや。結局メンバーは俺とお前、それに雛  
子ちゃんに高梨の計四名だ」

「で？ 交通機関は電車を使うとして、向こうでの宿はどうするん  
だ？」

「まさか一部屋でつて訳にもいかねえから、男女に分かれて二部屋  
だ。予約は俺が取っとくよ」

「高くつくけど、仕方ねえな」

予算については、涼にも若干の蓄えはあるが少々心許ない。  
帰宅したら環に頼んでみようと、涼は考えていた。

しかし、世の中というのは、なかなか自分の思った通りには事が  
運ばないもののように……。

「お断りの上に、不許可です」

と、環は言った。

資金援助どころか、海に行く事すら許さないというのだ。

「金の事はまだしも、何で海に行くのまで駄目なんだよ？」

「そんなの当たり前でしょう？」

環はテーブルの上の食器をまとめながら言った。

既に夕食は終り、今は片付けの真っ最中だ。

「あんた達はまだ中学生、しかも一年坊主でしょうが。子供だけ  
で泊りがけなんて、親としては気軽に『はい、そうですか』な  
んて言えないっての」

「何だよ、それ。ガキ扱いすんなよな」

「もうガキじゃないって突っぱねる程ガキなんだって知ってた？」

それに万が一何かあった時、お前と真ちゃんだけでどうにか出来る  
と思う？」

「何かあった時って何だよ。その辺のチンピラに、俺が負けるとでも思ってたんのかよ」

「バカ！ だからお前はガキだったのよ。わたしが言ってるのは、事故でもあった時の責任が取れるのかって事よ。どう？」

改めてそう言われると、涼としても返答のしようが無い。

よくよく考えてみれば、自分達には責任の取りようなど無い事が解る。

まだ子供として扱われる立場の人間では、社会的な信用も低いと言わざるを得ない。

「お前一人で行って、それで怪我するなり事故に遭うなりしても、それは自分の責任ってだけで済むけど、他の人が一緒にいる場合、その責任は果てしなく大きくなるって事を理解しな」

環が洗い物を始めたのだから、キッチンからはカチャカチャと食器の音が聞こえる。

しかし、これは困った。

環の言う事を無視して行くのは簡単だが、その後の事を考えれば、それは得策ではない。

たとえ海から無事に帰って来たとしても、それが意味の無い物にされてしまうからだ……。

「で、でもさ、母さん。もう約束しちまってるし、今更行けないなんていうのも何だしさ……ほら、みんなガツカリしちまうよ」

涼としては柔軟路線を敷き、なるべく穏やかな方向で環を説得するしかない。

「ヒナだって、夏休みの間じつと家に籠ってるなんて可哀相だろ？ だからさ……」

自分の事だけでなく、雛子の事も持ち出してみた。

環は雛子に甘い部分があるので、もしかしたらこれで上手く行くかもしれない。

最悪、駄目だった場合は、あとで雛子を連れて来て一緒に説得してもらおう手もある。



「……いかなもんでしょうか？」

涼はそれ以上は何も言わず、環の反応を待った。

あまりしつこく言っても逆効果になる可能性があるからだ。

やがてキッチンからの水音が止まると、タオルで手を拭きながら環が居間に戻って来た。

「お前……雛子ちゃんの事を持ち出せば、わたしを落せるとか思ったりやせんか？」

「と、とんでもない！ 俺は本気でそう思ってるんだから……」

涼は慌てて否定したが、どうも環は全てお見通しのようで、嫌な目をして涼を見ている。

「ま、保護者同伴という事なら認めてあげてもいいし、資金援助も考慮しましょう」

「マジで？ でも、保護者同伴って言っても、適当な人がいねえよ」

「暇人がいるじゃない、美浜恭一っていう遊び人が。それと、わたし」

「……はい？」

にこやかに自分を指さして笑う環を見て、涼は一瞬、呆けたようになった。

「大体、お前達だけで企画を立てるってのが間違いなよ。そういう楽しそうな事には、わたしも参加させなさい」

「い、いや、ちょっと母さん……？」

「拒否するなら、お前は夏休みの間中、家から一步も外に出さないから覚悟しなさいよ？」

「マジかよ……」

言わなきゃ良かった……。

涼は、「どんな水着にしようかな？」と浮かれている環を見て思った。

しかし、後悔してもあとの祭りである。

こうなってしまった環を止める事など、どんな超人でも不可能なのだから……。

そして嫌なテストも終り、見たくもない通知表を受け取ったあとは、待ちに待った夏休みの始まりである。

もともと、夏休みには大量の宿題というオマケも付いているが、今この段階ではそれは関係無い物として処理される。

後半になって苦勞するのは解っているのだが、今は自由を満喫するのが最優先事項なのだ。

そんな子供達の心を象徴するかのような快晴の空の下、利恵の父、高梨洋二は不機嫌さを露にしていた。

「まったく……わたしは納得いかんぞ」

「あなた、食事は和やかにしないと、消化に悪いですよ？」

祥子は苦笑しながら洋二を宥めるのだが、一向に効き目が無い。

いつものように朝食を摂っているダイニングは、まるで台風が通り過ぎたあとのように散らかっているが、勿論、祥子がこんなに散らかす訳も無く、犯人は利恵である。

「どうしてわたしに断りも無く決めてしまっただ？ 今日まで何日もあつたじゃないか、それなのに……」

「仕方ないでしょう？ 最近はおなたも残業が多くて、利恵と話す時間が無かつたんですから」

どうやら洋二だけが、利恵が涼達と海に行く事を知らなかったらしい。

自分だけが除け者にされたという事で、ヘソを曲げているようだ。もっとも、祥子にしても、最初に利恵から話を聞かされた時には反対の立場だったのだ。

理由は概ね環と同様で、子供だけで海に行くなど、とんでもないという事であった。

しかし、すぐに環から電話があり、監督者として同行するというのを聞き、了承した。

一度も会った事の無い人間をすぐに信用してしまうのもどうかという向きもあるのが、不思議と祥子は不安を感じなかった。

少し幼い感じもしたが、それは自分よりも五歳年下という事。

それに、受けた印象が、どこか利恵と重なったからだろうと思っ

た。  
明るく、初めて話す相手だというのに少しも物怖じしたり、緊張する様子も無い。

それどころか、どんどんこちらの中へと入って来る。

それでいて、全くと言って良い程不快感を感じさせない、不思議な人だった。

そんな人が育てた男の子ならば、利恵を任せても良いと思えたというのは、祥子の率直な感想だった。

「それにしたってだな、メッセージを残すくらいの事は出来ただろう？ 内緒にしてくせに、小遣いだけはしつかり筆り取って行って……」

「あら、利恵は要らないって言ったのに、あなたが無理やり持たせたんじゃないんですか？」

クスクスと笑いながら祥子は言った。

「どうやら洋二の行動は、全てお見通しのようである。」

「……そ、そんな事より！ こんなに散らかして、後片付けもしないまま行かせるのはどうかと思うぞ？」

「あまり皆さんをお待たせする訳にもいかないでしょう？」

「一体、利恵は何をしていたんだ？」

「涼君の朝ご飯を作るんだって言って、頑張っていましたよ」

「普段は料理なんてしないでくせにか？」

「食べさせる相手がいると、やる気にもなるんでしょうね」

「……」

祥子の一言で、洋二は更に不機嫌になった。

「しかし、宇佐奈さんと……美浜さんだったか？ お二人にだけお任せするのは気が引けるな」

「あなたは出張、わたしはお友達の結婚式と、予定が重なってしまっていますもの。これはこちらの都合で変えられませんからね」

「それなら海に行く日程を変更すればいいじゃないか……。夏休みは長いんだし、車はわたしの物を使えばいいんだから」

「利恵達にだって都合がありますよ。あなたが考えているほど、子供達は暇じゃないんですから」

祥子はコーヒーを飲み干すと、腕まくりをして席を立った。

雛子からもらったコーヒー豆は飲み口がスッキリしており、祥子の好みにピッタリだった。

たった数回、一緒にお茶を飲んだりしただけなのに、雛子はすぐに祥子の好みに合わせた物を作り上げた。

きつと、ああいう子と一緒にいれば、利恵も家庭的な事が上達するだろうと祥子は思った。

「いつまでもこの調子じゃ、もらい手が無くなっちゃうものね」

ちよつと困ったように微笑むと、祥子は利恵が散らかした物を片付け始めた。

洋二は相変わらず不機嫌な顔をしたまま新聞を広げ、

「来年は絶対に夏休みをとるぞ……！」

と、一人でぶつぶつと呟いていた……。

一方、海に向けて快調に走る車の中でも、朝食の時間が始まっていた。

途中で何か買うか、ファミレスにでも立ち寄ろうかという話しもあつたのだが、それでは時間が勿体無いという事になり、

「さあどうぞ、召し上がれ」

こうして雛子の作った朝食を、車内で摂る事になったのだった。

アルミホイルに小分けされたおにぎりと、タッパーに綺麗に詰められたおかずの数々は、馨しい香りと共に食欲をそそる。

「ほれ、恭一もお食べ」

「サンキユ。……うん、やっぱりコンビニのとは一味違うな」

恭一は助手席の環からおにぎりを一つ受け取ると、左手だけで器用にアルミホイールを開け、旨そうにパクついた。

車はATなので、こういった事をするには楽である。

ちなみに恭一の車では全員一度に乗れない為、今回は八人乗りのワンボックスをレンタルして来ている。

「真君はたくさん食べるからと思って大きめに握ったんだけど、食べ切れるかな？」

「楽勝楽勝！ それに、旨い物が入る場所が違うのだ！」

真一郎は雛子から包みを受け取ると、すぐさま開けて、

「いったただきま〜っす！」

と頬張り始める。

「そりゃアレか？ 甘い物は別腹とかいいうのと同じようなもんか？」

「おお！ おえああおいううおお、おうえうえいああああ！」

「……何言ってるんだか判んねえよ」

涼は苦笑しながら言った。

口一杯におにぎりを入れたまま、真一郎は何か言っているのだが、何が何だかさっぱり解らない。

「はい、涼」

向かいに座った利恵が、にこにこしながら包みを差し出した。

シートを倒せば対面式に座れる座席なので、こういったイベントの移動にはもってこいの車である。

さすがに恭一は心得ている。

「ん？ 何だこれ」

「朝ご飯に決まってるでしょ？」

「あれ？ ヒナが作ったんじゃないのか？」

明らかに雛子の物とは包みが違う。

それ以前に、利恵のデイパックから取り出したのだから、雛子が作った物でない事は明白である。

「涼のはわたしが作ったの」

「面倒な事を……。ヒナにまとめて作ってもらった方が楽だろう

に

それを聞いて、真一郎と雛子は同時に溜息を吐き、首を小さく左右に振った。

（何で解んねえかな、こいつは……）

（涼ちゃん、相変わらず鈍感だなあ……）

涼との付き合いが長い雛子と、まだ日の浅い真一郎の考えが一致するというのは、それだけ涼が解り易い性格という事だろうか？

「へえ……」

涼の開けたタッパーの中には、見た目には鮮やかと言って良い内容の物が詰められていた。

雛子の物ほどではないにしろ、そこそこ良い香りも漂って来る。

「なかなかやるな、お前」

「そ、そう？ 実は初めて作ったんだけどさ……」

「俺が詰めたんじゃ、こうは行かないからな」

「……詰め方を褒めたのか！」

「当たり前だろ？ まだ食ってないんだから」

「しかも、比較対象が涼っていうのが引かかるわ……」

「細かい事に拘るなよ」

言いながら、涼は小さめに作られた俵型のおにぎりを一つ手に取り、口の中に放り込んで、

「……」

そのまま言葉を失った……。

「ど、どうかな？」

「……ちよつと待て、今おかずも食うから」

感想を求める利息を制して、涼は再びタッパーに手を伸ばし、アルミカップで小分けにされたおかずを摘んで、口に運び、

「……」

やはり黙り込んでしまった。

「ねえ、どう？」

「俺は腹減ってるよな？ 今日、まだ何も食ってないんだから……」

…」

「は？ そんなの、わたしに訊かれても解んないわよ。 そんな事より、ちゃんと感想聞かせてよ」

「いや、感想を言う為には、ちゃんと食わないといけない訳で……」

「当たり前じゃない」

「俺は腹減ってるよな……？」

涼はタツパーを抱えたまま、何やら考え込むようにして動かなくなつた。

「何だよ涼。 高梨が感想を求めてんだから、何かコメントしてやれよ」

いつまでもブツブツ言うだけの涼に業を煮やしたのが、真一郎は、気の利かない奴だな」

と言いながら、ヒョイと涼の手に行っているタツパーからおかずを一つ摘んで、自分の口に放り込んで……。

「……解つた、俺が悪かつた」

と、涼の肩を軽く叩き、お茶をがぶ飲みした。

「真君、コメントは？」

「それは、審査委員長の宇佐奈涼先生にお任せします……」  
逃げやがったな……？ と、涼は恨めしそうに真一郎を横目で見

た。  
涼の正面では、コメントを今か今かと待っている利恵がいる。

ハッキリ言つて、利恵の作つた物はあまり美味しくない……ストリートな表現をすれば不味い。

しかし、それをダイレクトに伝えて良いものだろうか？

まあ、常識的に判断すれば、それはあまりにも失礼である。

何しろ初めて作つたというのだから、その辺りを考慮するのが人としての道だろう……。

「……じゃあ、コメントしてやる。 おにぎりは塩の付け過ぎで塩

辛い。 おかずも味付けが濃過ぎるし、鮭は焼き過ぎてて硬い。

要精進、三十点。 以上」

あくまでも事務的に、抑揚を抑えて涼は言った。

変にフオローなどしても、真一郎と違って口下手な自分では却って変な風になってしまっただろう。

涼にとっては、これがベストの選択だったのだ。

「……………」

だが、涼のコメントを聞いた利恵は、黙り込んだまま下を向いてしまった。

(う……………やっぱ、コメントとしてマズかったか……………?)

鉄拳が飛ぶか、はたまた蹴りか?

涼が戦々恐々としていると……………。

「よっし！ インプット完了！」

と、利恵がニコニコしながら顔を上げた。

「ありがとね、涼」

「へ？」

機嫌を損なうどころか、逆に上機嫌な利恵を見て、涼は拍子抜けしてしまった。

「その場凌ぎで見え透いたお世辞言われるより、ハッキリ欠点を指摘してもらった方がいいもん。そうすれば、次はもっと上手に出来るでしょ？」

「そ、そんなもんか？」

「うん！」

元気に頷く利恵を見て、前向きだな……………と、涼は思った。

そう言えば、小さい頃の雛子も同じような感じだった。

まだロクに料理も出来ない頃に作った物を試食させられて、そのあまりの不味さにコメントに詰まり、当たり前障りの無い適当な事を言っただけで誤魔化そうとしたら、

「それじゃ参考にならないよ！」

と、雛子は物凄く怒った。

その時に、こういった事の感想は正直に言うものなんだなと思っただのを、涼は思い出した。



「じゃあ、それ貸して。しまっちゃんから」

「え？ 何でだ？」

「ヒナちゃんが作ったのを食べてよ。朝から美味しくない物食べたんじゃ、一日中調子狂っちゃんうかもよ？」

「……いいよ、これで」

そう言つと、涼は塩辛いおにぎりを口一杯に頬張り、もぐもぐと租借して……お茶で流し込んだ。

「無理して食べなくていいよ、涼」

「無理なんかしてねえよ。それに、無駄にしちまったら勿体無いだろ？ せつかく作ってくれたんだし、別に食べねえもんじゃねえんだから……」

「……」

「……あれ？ もうお茶がねえや。ヒナ、そこのお茶取ってくれよ」

「はい」

横のシートに置いてあつた段ボール箱から缶のお茶を取り出し、雛子は嬉しそうに涼に手渡した。

涼は昔からこうなのだ……ぶっきらぼうで無愛想、そのくせ他人に気を遣う。

判り難い気の遣い方だから、それが原因で喧嘩になつてしまう事もあるが、こういった事は解る人にだけ判ればいいのだ。

「何笑つてんだよ、ヒナ」

「別に？」

全然変わらない涼が、雛子には嬉しかった。

「……青春してるな」

後ろのやり取りを聞き、恭一はクスッと笑つた。

「うちの子達は可愛いわね」

「うちの子達って……お前の子供は涼だけだろうが」

「何言つてんのよ。雛子ちゃんも利恵ちゃんも、ついでに真ちゃんも琢磨君も、みんな可愛い我が子よ？」

「欲張りな奴だな」

「良い物は独り占めにする。それがわたしの哲学なのさ！」

「そりゃまた、随分と高尚な哲学をお持ちで……」

車は快調に、海に向かって加速して行った。

## 第十三章

どこまでも澄んだ青を湛えた空に、混じりつ気無しの純白の雲が  
気持ち良さそうに浮かんでいる。

波は穏やかに、ゆったりと寄せては返し、そして……。

「細かい事をごちゃごちゃ言う必要など無い！ 俺様は、これより  
海へと突入するのだ！」

真一郎は 『情緒』 という言葉とは無縁のようだ……。

チエックインまでにはまだ時間がある為、それまでちょっと海で  
遊ぼうという事になったのだが、浜辺近くの駐車場に到着するなり、  
真一郎はいきなり海へ入ろうとしている。

出発前に水着を着込んでいたらしく、ジーンズとTシャツを脱い  
ただけで準備完了。

散歩に出かける前の犬のように気持ちが逸っているのが、手に取  
るよつに判る。

「駄目だよ真君、ちゃんと身体をほぐしてからじゃないと。 途中  
で足でも攣ったらどうするの？」

「大丈夫だよ雛子ちゃん。 俺様の鋼の筋肉は、そんな事くらいじ  
やビクともしないって」

そう言って、真一郎は腕を曲げて力こぶを盛り上げて見せた。

確かに、鍛え上げられたその肉体は、かなり頑丈そうである。

打撃に対してならば、それは有効だろう。

「ヒナちゃんの言う通りだよ、真君。 ずっと車に乗ってたんだか  
ら、まずは少し身体を動かさないと。 いきなりじゃ対応出来ない  
んだから」

「そんなもんは気合で乗り切る！」

「乗り切れないって……。 いざとなったら、そんな気合なんてど  
こかへ行っちゃうんだから」

運動する前の準備をおろそかにするのがどれ程危険な行為か、利

恵は知識として知っているし、実際に目にしてもある。

だから尚更、真一郎の行動を黙って見ていられないのだ。

「ならば！ 俺様が、それを乗り切った初の男になってみせよう！」  
「馬鹿な事言ってるねえで、黙ってこいつの言う通りにしろっつーの」  
「ペシ！ つと真一郎の後頭部を叩き、真一郎と同じくトランクスの海パン姿の涼は、その場で軽く屈伸を始めた。

「何だよ。 やけに真面目だな、涼」

「運動関係については、こいつの言う事が正しいからな。 それに、何かあつてからじゃ遅いだろ？」

「ふむ……」

確かにそれは一理ある。

涼にまで言われると、真一郎としてもこれ以上は利恵の忠告を無視出来ない。

「しゃあねえ、いつちよ真面目にやるとすつか！」

「そうそう。 別に大した手間じゃねえんだから」

そんな涼の事を、利恵は「うん……」と言いながら腕組みして見ている。

何だか不思議な物でも見るような感じの顔付きである。

そんな利恵の視線に気付いたのか、

「……何だよ、俺の顔に何か付いてるか？」

涼は顔を上げて言った。

「うん、そうじゃないんだけどさ」

「じゃあ何だ？」

「ん？ いや……今日の涼は、いつもと何か違うなと思って」

「どこが？」

「どこがどうって言うんじゃないんだけどね、何となく」

曖昧に笑って、利恵は言った。

実際、利恵自身にも良く判らないのだが、本当に何となく、いつもの涼とは違うような気がしたのだ。

「変な奴だな。 さて、行くか……って、お前はいつまでやってん

だよ」

「いや、どうせやるなら徹底的にと思って」

涼の隣りでストレッチしながら、真一郎は言った。

屈伸どころか、全身くまなく伸ばしている真一郎を、行き交う人が何事かという目で見ている。

まあ、駐車場で入念過ぎるほどのストレッチをしていれば、注目を集めても仕方ないだろう。

「そこまでやらんでいいって。汗ビツシヨリじゃねえか」

「やり始めたらハマった」

「どこまでもアホだな、お前は……。ほら、行こうぜ。お前らも来いよ」

涼は雛子と利恵にも声をかけたのだが……。

「うーん……わたし、今は遠慮しとく」

「あ、わたしも……」

と、二人ともノリが悪い。

「何でだ？」

一瞬、水着を持って来るのを忘れたのかと涼は考えたが、そもそも海に行くという目的で来ているのだから、そんな事は無いだろう。

「これからが一番陽射しが強い時間帯だからね」

「だから？」

「紫外線が怖いでしょ？ シミとかソバカスとか出来ちゃったら嫌だからさ」

「何だよ、お前らそんな事気にしてんのか？」

「女の子の基本です。ね、ヒナちゃん」

「そうだね」

雛子はクスクスと笑いながら言った。

基本と言われても、涼にはピンと来ない話である。

もっとも、涼のような男がお肌を気に遣っているところを想像すると、ちょっと気持ち悪い……。

「という訳で、わたし達はいいから、二人は適当に楽しんでおいで

よ

「ふうん……。何だか判んねえけど、それじゃ俺達だけで行ってくるわ。恭さんも行かない？」

「ああ、そうだな。環、お前は どうする？」

「わたしも二人と一緒に車の中にいるわ。男だけで行っておいで」

「そうか。それじゃ、車のキーはお前に預けとくよ。一〜二時間遊んで来るから、その間自由に乗り回していいぞ」

ポイッと環に向かってキーを投げると、恭一は涼と真一郎と共に浜辺へと歩いて行った。

環は受け取ったキーを人差し指でクルクルと回しながら、

「さて、むさ苦しいのがいなくなったところで、わたし達はどこか涼しい所でティータイムとしゃれこみましょうか？」

と、夏の陽射しに負けないような笑顔で言った。

「さんせ〜い！」

「あ、あのお〜、おば様。移動は車じゃなくて、歩きにしませんか？」

ノリノリの利恵の隣りで、何故かおずおずと雛子が言った。

それほど汗かきでもない筈のだが、その顔には玉のような汗が浮いている。

「ん？ ヒナちゃん、どして？ 紫外線の直撃を受けながら歩いたんじゃ、海に入らなかつた意味無いよ？」

「う、うん……。それはそうなんだけど……」

「ほらほら、時間は限られてるんだから有効に使いましょ？ さ、しゅっぱ〜っ！」

「あ、利恵ちゃん！ ちょっと待っ……」

まだ何か言おうとしている雛子の背中をグイグイと押して車に乗せると、利恵も並んで座り、ドアを閉めてしまった。

「お母様、OKで〜っす」

「よっしゃあ！ それじゃ行くわよ〜！」

「利恵ちゃん、シートベルトしっかり締めてね……」

「え？ そりゃあ、ちゃんと締めるけど。 ヒナちゃん、どうかした……」

「後方確認良しっ！ そりゃあっ！」

利恵が最後まで言い終わる前に、車はバックの状態で、タイヤを鳴らして急発進した。

「えっえっえっ！？」

「環スペシャル！ リバース・ターン！」

タイヤが悲鳴と共に白煙を上げる。

暴れ馬の如く軋む車体を華麗にコントロールし、環は見事にスピン・ターンを決めて見せた。

そして……。

「Ready……Go！」

車が向きを変えると同時に、環は掛け声と共にアクセルを思い切り踏み込んだ。

進路を遮る車（と言っても、周囲の車はごく普通に走っているだけなのだが……）を右に左に避けまくり、怒涛の勢いで加速して行く……。

「きゃあ！ ちょっと、何事っ！？」

「利恵ちゃん！ 舌噛むから喋らない方がいいよっ！」

二人はお互いを抱きしめつつ、必死に体勢を整えながら運転席の環を見た。

すると……。

「おらおら、どけどけどけーっ！ 宇佐奈環様のお通りだあーっ！」

「な、何？ お母様に何が起こったのっ！？」

「おば様は、ハンドル握ると人格が変わるタイプなのーっ！」

「先に言っつてよーっ！」

ある意味いつも通りと言えなくもないが……。

環の運転する車は、海沿いの道を快調にすっ飛んで行った。

「いっやっほうー！」

「うわっ!?!」

かなり沖の方まで出た所で、真一郎は涼の肩を踏み台にして高く跳躍し、再び海の中へと頭からダイブした。

当然、いきなり踏み台にされた涼は、海の中へ潜ってしまう訳で

……。

「……ぶはっ！ てめえ、いきなり何しやがるっ！」

「いやいや、この間テレビでシンクロを観たもんでな。 ちよつと

真似てみたくなっただんだ」

「理由になるかっ!」

「騒々しいな、お前らは……。 ま、人も少ない事だし、少しくらいならいいか」

そのすぐ傍で、のんびりと海面に身体を浮かべながら恭一が言った。

仕事柄……と言うより、昔の因縁絡みで揉め事ばかりを扱っている恭一にとって、こうして何も考えずにゆっくりするのは久しぶりの事であった。

それに、周りには数は少ないとは言え、ちよつとセクシー系な水着姿のお姉さん達（恐らく二十台前半くらいだろうと思われる）がいるのだから、文句など言う筈も無い。

「ふむ……眼福眼福」

となれば、いつまでも恭一が大人しく浮かんでいる訳も無く、お姉さん達が乗っているゴムボートにス〜っと近付くと、

「やあ、こんにちは。 絶好の海水浴日和だね」

などと言いつつゴムボートの縁に手を掛けて、初対面の相手にも拘らず馴れ馴れしく話しかけたりしている。

通常、このような声のかけ方でナンパが成功する筈も無いのだが

……。



「……とまあ、そんな感じで、チエツクインまで暇潰ししてるんだけど、ちよつと時間を持って余し気味だね」

「あ、それじゃあわたし達と同じですね。わたし達も今夜、そのホテルに泊まるんですよ」

「へえ、そりゃあ奇遇だね。じゃあ、時間まで一緒に遊ばないかい？」

「ええ、いいですよ」

「実はわたし達も、女だけで退屈してたんですよ」

「これは嬉しいな。綺麗どころが三人もお相手してくれるなんて何故か上手く話が進んでいるようで、お姉さん達と和やかムードを醸し出している。

確かに外見上は問題無いどころか、美形に分類されていくくらいなのだから、お姉さん達が騙されても無理は無いだらう。

しかし、彼女達は知らない……。

美浜恭一という男の本当の姿、裏の顔を……。

「……おい、掃部関君。背後で俺の人格を疑われるようなナレーションを入れるの、やめてくれるか？」

「綺麗なお姉さんを独り占めしようとするからつすよ。どくも！ただ今ご紹介に預かりました、掃部関真一郎です！いつまでも子供の心を忘れない、そんな素敵にピュアな大人になる為、日夜修行に励んでます！」

ビシ！ つと敬礼をしながら真一郎は言った。

「あはは。この子おもしろい！」

「ねえ、あそこで怖い顔して、こつちを睨んでる人がいるんだけど……知り合い？」

お姉さん達の一人が指差す先には、海面に顔を鼻から上だけ出して、恭一と真一郎をジト目で見ている涼がいた。

その目には、二人の行動に呆れているという感情が色濃く出ている。

「お、い、涼。お前もこつち来て、一緒にお姉様方とお話しよう

ぜ」

「俺はいいよ……」

「え〜？ そんな事言わないで、君も何かお話してよ〜」

「あら、よく見たら結構カッコいいじゃない……ねえ、一緒にボート乗らない？ ほら、場所空いてるよ」

「お姉さん達と密着出来るチャンスだぞ〜？」

「い、いや、いいつすよ……」

「あ！ 赤くなってる！ 可愛い〜」

いつの間にか、お姉さん達の興味は涼に向いてしまったようで、恭一と真一郎を置いて、涼の方へとボートを移動させ始めてしまった。

だが……。

「……面白くねえな」

「そうですね……」

今度は恭一と真一郎の二人が、涼の事をジト目で睨んでいる。

「テトラポットに括り付けてやるうか？」

「それより、その辺の船の碇にでも縛り付けて、沈めちゃいません？」

「お？ いいな、それ。 そのあとは、そのまま外洋にでも出させちまうか……遠洋漁業の船はねえかな？」

二人の会話の内容がどんどんエスカレートして行く中、涼はお姉さん達にからかわれ、オロオロするばかりであった。

こんな時に琢磨がいてくれたら、自分の身代わりに差し出して逃げられるのに……などと、とんでもない事を考えながら。

「つ、疲れた……」

適度に冷房の効いた店内で、利恵はグッタリとした様子で席に座っている。

オープンしたばかりのケーキビュッフェ。

チーズケーキやムースの他にも、ピッツアやピラフなどのライトミールも取り揃えられており、ドリンクアイテムも多彩。

しかも入店から一時間の間は食べ放題という、まさにパラダイスとも言える場所なのだが、今の利恵はそれどころではないらしい。

「利恵ちゃん、大丈夫？」

「何とか……。ヒナちゃんは？」

「わたしは結構慣れちゃってる部分があるから」

「意外とタフなのね……」

絶叫マシンなどは平気なのだが、それはあくまでも遊具であるという前提があるからだ。

リアルで暴走マシンに乗せられては、さすがの利恵も精神的疲労を感じて当然である。

それに、帰りも環の運転する車に乗らなければならないのだから尚更だろう。

「はいはい、これでも食べて元気出さない！」

両手にケーキ満載のトレーを持った環が席に戻って来た。

零れ落ちそうになるケーキを押さえつつ、トレーをテーブルに置くくと、

「さあ、食べるぞ〜！」

と、環は気合充分で、ケーキに挑みかかるように食べ始めた。

「お母様！ そんなに食べると、あとが大変ですよ？」

「ん〜？ あとって？ 何が大変なの？」

「摂取し過ぎたカロリー、どうやって消費するんですか？」

「美味しく食べてる時に、そんなつまらない事を気にしてちゃ駄目よ。それに、今は制限時間内にどれだけ食べられるかが重要なんだから」

「……栄養学の講師してる人の台詞とは思えない」

「あはは……」

と言いつつも、利恵も雛子も甘い物は好物である。

美味しそうに食べている環を黙って見ているだけなどという事も

無く、手近な物から口に運び始めた。

「わ！ これ美味しい！」

「うん。あまり甘過ぎないし、後味がスッキリしてるね」

二人とも幸せ一杯の顔である。

そんな二人の様子を、環も幸せそうな顔で見ている。

何しろ涼は甘い物など殆ど食べないし、やはり息子とよりは、こ  
うして娘（本当のではないが）と一緒に飲むお茶の方が美味し  
い。

環が満ち足りた気分でいると、

「ねえねえ、君達どこから来たの？ このあと時間あるかな？」

何やら隣のテーブルから声が聞こえて来た。

十代後半くらいだろうと思いき女の子の二人組みに、やはり同年  
代くらいの男の子が声をかけている。

女の子の方でもまんざらでもないのか、にこにこしながら対応し  
ている。

まあ、夏の海での事である。

こうして出会う人達もいるだろうと、環も然して気に留めなかつ  
たのだが、

「昔はわたしも、ああして声の一つくらいかけられたもんだけどな  
……………」

と、過ぎし日の栄光を思い出した。

「お母様、結構モチたくちですか？」

「あつたりまえなのさ。わたしには親衛隊だっていたんだぞ？」

「さすがお母様！」

「あれ？ でも、美浜さんから聞いた話だと、おば様の場合、親衛  
隊と言うよりは軍だ……………」

「雛子ちゃん、あれは親衛隊と言うのよ？ いや、みんなわたしの  
ファンだったんだから、むしろ逆ハーレムと言っても過言ではな  
いわ！」

「そうだったかな……………」

雛子が小さい頃、環が出かけて留守をしていた時に、たまたま遊びに来ていた恭一が昔の写真を見せてくれた事があった。

そこには環を中心に、かなりの人数の怖そうなお兄さん達が、ひきつった笑顔を浮かべて写っていた。

その時、確か恭一が『これはな、おばちゃんの子分達なんだ。

ま、差し詰め環軍団ってところだな』と言っていたような気がするのだが……。

「む……雛子ちゃんには記憶の混乱が見られるわ。さあ、糖分を摂取して、脳を正常に動かしましょう！」

「ちょ……おば様、わたしそんなに食べられ……ん〜！」

口に無理矢理ケーキを押し込められながら、そう言えば恭一も、帰宅した環に『余計な事を教えた』という事で、かなり苛められてたな……と、雛子は思い出していた。

さて、それから二時間後。

約束通りに駐車場で男性陣と合流し、そのまま今夜の宿であるホテルでチェックインを済ませた一行は、食事の前に一風呂浴びてスッキリしようという事になり、大浴場前にいるのだが……。

「それじゃ、七時から宴会だからね。全員、遅れずに小宴会場に

集合する事、いい？」

「ああ……」

「……どうしたのよ恭一、随分大人しくなっちゃって」

「真君、何かあったの？」

海に入る前までは、あんなに元気一杯だったのに……と、環の横で雛子も心配そうにしている。

「大人しくもなりますよ……ねえ、美浜さん」

「そうだな……あそこまでやられちまうとな……」

と、普段は先頭に立って場を盛り上げる筈の二人に、まるで覇気が無い。

「何よ、あそこまでやられるって……。誰かと喧嘩でもして負け

たの？」

「そんな事だったら、俺もここまで落ち込まねえよ……なあ、掃部  
関君」

「そうっすね……。俺も、ここまでやられたのは初めてっすから  
……」

「俺も歳をとったって事なのかなあ……」

「俺もまだまだ修行が足りないって事なんですかねえ……」

「……さっぱり判らん」

環は首を傾げつつ二人の顔を見ているが、やはりどうして二人の  
元気が無いのかは判らないままだった。

「ねえ、涼。美浜さんと真君、何かあったの？」

利恵も二人の様子が気になるのか、涼の腕を突付いて小声で訊い  
た。

「え？ い、いや、別に何も……」

「そうかなあ？ だって、いつもの真君じゃないよ？」

「俺にも判んねえよ……」

そう言うと、涼は落ち着き無く頭をガシガシと掻いた。

これは涼が困った時にやる癖だ……。

「……なんか怪しいわね」

と、利恵は疑惑に満ちた眼差しを涼に向けた。

「な、何が？」

「妙にそわそわしてるし、わたしと目を合わせようとしな……  
何か隠してない？」

「別に、お前に知られて困るような事なんてねえよ」

「ほお？ じゃあ、何があったのか言っごらん？」

「何も話す事なんてねえっーの。さ〜て、風呂入って来ようっ  
と……」

「あ、こら！ 話はまだ終わってないぞ！」

しかし、涼は利恵の言葉には耳を貸さず、恭一と真一郎の背中を  
押しながら、とっとと男性用脱衣所へと入って行ってしまった。

利恵も一応は女の子なので、男子用の脱衣所へ突撃するような真似は出来ない。

いや、涼一人だけなら、お構い無しで入って行ったかもしれないが……。

「怪しさ炸裂……絶対に何かあるぞ、これは」

「ま、男共に何かあるうと、わたし達には関係ナツシング。さあさ、わたし達も汗を流してサツパリしましょ」

「……そうですね。ヒナちゃん、行こう？」  
「うん」

女性陣も脱衣所へと入って行った。

「まったく……二人とも何だよ、さっきのあれは」

大浴場に入ると、さっそく涼は先ほどの二人の態度について言及し始めた。

「あれじゃ勘繰って下さいって言うてるようなもんじゃねえか……」

「だってなあ……。せっかく俺らが仲良くなるうとしてるってのに、横からかつさらって行くんだもんなあ……」

「まったくだ。涼、お前には配慮してもんが足りねえんだ。少しは目上の者に対して気を遣え」

「そんな事言われても……」

どうやら昼間のお姉さん達との事を言っているようだ。

結局、お姉さん達は涼を気に入れてしまったらしく、恭一と真一郎が何をして、殆どリアクションしてくれなかったのだ。

「別に俺は、あの人達に好かれようなんて思ってたんだけど……」

「今時こんな無愛想な野郎がウケるなんて、間違ってますよね」

「まあ、それはさて置き……」

恭一はかけ湯を終えると、大きな湯船に入って手足を気持ち良さそうに伸ばしながら、

「涼、あとで彼女達の部屋へ遊びに行くぞ」

と、鼻歌混じりに言った。

「……え？」

「環達が寝静まってからの方がいいか？」

「何で俺に訊くの？ 行くなら恭さん一人で行ってよ」

「馬鹿野郎。 お前が招待されたつてのに、お前が行かねえでどうする」

「やだよ。 俺、あの人達に興味無いもん」

「そうは言つが、涼だつて健康な男子なのだから人並みに性欲だつてある。」

「しかし、今回の旅行には佐伯雛子に加え、高梨利恵も同行しているのだ。」

「迂闊な真似をして二人の評価を落しては、今後の楽しみが無くなつてしまうではないか……涼はそう考えていた。」

「おい……下らねえナレーション入れてんなよ、真」

「お前の気持ちを代弁してやったんだ。 気が利いてるだろ？」

「全部間違つとるわ！」

「この際お前の気持ちなんざ、どうでもいいんだよ。 要は俺と掃部関君が楽しめるかどうかだ」

「何だよそれ……。 とにかく、俺は行かないつたら行かない」

「ほう？ この俺に向かつて、そういう口をきくのか……上等だ」

「恭一は湯船から出ると、涼の隣りまで来てしゃがみ込んで、

「お前がそういう態度をとるなら、俺にも考えがある」

と、にやりと笑つた。

「な、何する気……？」

「昼間の出来事の全てを、残らず利恵ちゃんに報告してやる」

「残念だったね、恭さん。 そんなもん、あいつに知られたつて俺は全然困らないよ。 俺とあいつは、単なる知り合いつて程度の関係なんだから」

「さつきも言つたろ？ お前の気持ちなんざ関係無いつて。 お前が困るかどうかなんて問題じゃねえんだよ」

「ま、高梨としちゃ面白くないだらうからな……血の雨が降るか



もしれねえな、涼」

「……」

確かに、お姉さん達に気に入られた上、部屋に招待されたなどと  
利息が知ったらどうなる事か……。

しかも、今は恭一と真一郎がタッグを組んでいるのだから、何を  
どう脚色されるかわかったものではない。

そばにいてブロックしようにも二人いっぺんには出来ないし、か  
と言って利息とずっと一緒にいるのも抵抗を感じる。

「ここにいる間だけの事を考えてるなら、そりゃあ甘いつてもんだ  
ぞ、涼」

「むしろ帰ってから知らされる方が、高梨の怒りはでかいんじゃない  
えかな？ 却って疚しい事があつたつて思われるだろうな」

「……」

確かに真一郎の言う通りだ。

この場を上手く切り抜けても、この先ずっとこのネタで気苦労す  
る破目になるのは目に見えている。

しかし、涼としては自分に何の落ち度も無いのに、何故にここま  
でされなければならぬのかという気持ちもあつて、なかなか素直  
に領けない。

「大人しく俺の言う事を聞くなら、この場限りの事にしてやっても  
いいぞ？」

「俺様は仁義を重んじる男だからな。 友の頼みは聞き入れる用意  
があるぞ？」

「……」

「選ぶのはお前だ。 さあ、どっちを選ぶ？」

「どうせなら楽しく遊んだ方がいいのと違うか？ 涼」

「だ、だからさ、行くなら二人で行けば……」

「お前が気に入られたんだろうが……最後までケツ持てや、こら」  
「美味しいとこ取りした野郎が、何を無責任な事言つてやがんだ……

…シバくぞ、ボケ」

保に匹敵する強さの恭一と、剛力を誇る真一郎に左右から挟まれ、同時に耳元で脅されると、さすがの涼も戦う気が起きない。どうやら、どうやってもこの場を無事に切り抜けられそうも無いようだ。

涼は力無く頷く以外に無かった……。

それから少しして、風呂に入る前までとは一変してハイテンションになった真一郎が場を大いに盛り上げ、盛況の内に宴会は終わった。満腹の上にアルコールも入った環は、宴会終了間際には、既に殆ど眠っているような状態だった。

雛子と利恵も昼間の疲れが出たのだろう、大きな欠伸をしながら部屋へと歩いて行った。

「さて……そろそろいい頃だな」

「涼、行くぞ」

一旦、環達と一緒に自分達の部屋まで戻った三人は、時刻が二十三時を回ったところで行動を開始した。

勿論、お姉さん達の部屋へ遊びに行こうというのである。

「……やっぱ俺も行かなきゃ駄目？」

「往生際が悪いな、お前も。いい加減に観念しろ」

恭一は明らかに気乗りしていない涼を無理矢理立たせると、Ｔシャツの襟を掴んで部屋の外へと連れ出した。

そのあとに続いて真一郎も廊下へと出る。

前後で挟まれていては逃げる事も出来ないし、部屋のドアはオートロックな上に、鍵は真一郎がシツカリと握っている。

涼は諦めて歩き出した。

「涼、彼女達は何号室だったっけ？」

「え〜っと……確か、五〇三号室って言ってたと思う」

「お？ 美浜さん、丁度エレベーターが来てますよ」

「ほれ、神様も早く行けと仰られてるぞ」

絶対に違う。

これは悪魔が破滅へと導いてるんだ……と涼は思った。  
乗り込んでほんの数秒でエレベーターは五階へと到着し、静かな廊下に到着を知らせるベルの音が響いた。

エレベーターを降りて少し歩くと、目的の五〇三号室はすぐに見つかった。

部屋の前まで来て、涼は振り返って恭一の顔を見るのだが、恭一は早くしろという感じで涼の背中を突付くだけだ。

観念した涼がインターフォンを押そうとすると……。

「あれ……？」

ドアノブに何か小さな札がかかっているのに気が付いた。

「……恭さん」

「あ？ 何だよ、早くしろよ」

「いや、そうじゃなくて……留守みたいだよ」

「はあ？」

涼が指差す札を見て、恭一と真一郎は呆気にとられたような顔になった。

そこには『おでかけしてます。何か期待してた人、ごめんね』と書かれていた。

「ご丁寧に、メッセージの最後には小さなハートマークまで描かれている。」

どうやら彼女達は、本気で涼達を誘った訳では無いようだ。

「ふっふっふ……上等じゃねえか」

「俺ら完璧に遊ばれてますね……」

「おう、真一郎！ これから呑みに行くぞ！ てめえも付き合い合えっ！」

「うっす！ 朝まで付き合いますよ！」

「……俺はパスするよ、恭さん」

「付き合い悪いな、この野郎は……」

「へん！ お前なんか頼まれたって連れてってやらねえよ、この役

立たずめ！ 恭さん、行きましよう！」

「おう！」

肩を組み、大股でズンズンと廊下を進む二人は、エレベーターに乗り込んで階下へと降りて行った。

それを見送った涼は、

「俺のせいじゃないのに……」

と、一つ溜息を吐くと、階段を使って階下へと降りた。

そのまま一階のロビーまで下りて来ると、そこにはちらほらと人の姿があった。

さすがにこの時間では、まだ眠る人は少ないようだ。

ラウンジでは深夜一時の営業終了まで、いつでもスナックと飲み物が用意されているので、それを利用してのだろう。

涼には何の曲かは判らないが、BGMとして生のピアノが流れている。

「とりあえずフロントに頼んで、部屋の鍵を開けてもらわなきゃな。ったく……真の奴、部屋の鍵持ったまま行きやがって……ん？」

ふと視線をラウンジの窓際の席に移すと、そこにはどこかで見ただような顔が……。

「……何やってんだ？ あいつ」

ぼけっとした感じで窓の外を見ているのは、利恵であった。

先程、宴会の時には浴衣を着ていたのだが、今は私服に着替えている。

自然と、涼の足は利恵の元へと向かっていた。

「よう、何見てんだよ」

「……星」

「星？」

都会と違って光が少ない為だろう、一階のラウンジからでも空に瞬く星がよく見える。

「部屋の窓からだっただけに見えるだろ？ 何でわざわざ下まで降りて来たんだ？」

「ん〜？ 何となくね……。涼は何してんの？」

「いや、真と恭さん、二人して出かけちまったんだけど、真の野郎が鍵持ったまま行きやがってさ……。」「

「締め出されちゃったんだ？」

「フロントに頼めば開けてもらえるからいいんだけどな」

涼も椅子を引くと、利恵の向かいに腰掛けた。

その時、テーブルが少し揺れたのだろう。

利恵の前に置かれたアイスコーヒーの氷が、カランと小さく音を立てた。

「お袋とヒナは？」

「熟睡してるよ」

「……お前もさっき大欠伸してたろ？ 眠くねえのか？」

「少しうとうとしたんだけど、何となく目が覚めちゃった。涼は？」

「俺は、いつももう少し遅い時間に寝てるからな。今くらいの時間じゃ眠くならねえよ」

「そうなんだ。結構夜更かししてるんだね」

「そうか？ これくらいは普通だろ？」

「ね、普段夜更かしして、何してるの？」

利恵はテーブルに身を乗り出すようにして、涼に言った。  
星を見る事など、もうすっかり忘れてしまったようである。

「特に何もしてねえな。読みかけの漫画読んだり、テレビ観たり……かな？ 時々、真が電話して来て、それに付き合わされたりしてるけどな」

「ふうん、そうなんだ……。あ、何か飲む？」

利恵は手近にあったメニューを涼に向けて差し出した。

メニューとは言ってもそれほど品数は無く、数種類の飲み物と簡単なおつまみ程度の物の写真。

それに品物の名前が書かれてあるだけだ。

「そうだな……。じゃあスコッチと、何か適当につまみ」

「アルコールは駄目、未成年でしょうが」

「硬い事言うなよ」

「駄目ったら駄目！ アイスコーヒーにしなよ、結構美味しいよ？」

「煩い奴だな……解ったよ、それでいいよ」

そう言つと、涼はシャツの胸ポケットから煙草を取り出し、一本啣えて火を点けようとした。

だが……。

「こらっ！」

煙草の先に火が点く前に、利恵の手が素早く涼の口から煙草を奪い取つて行つた。

「お酒も煙草も二十歳になつてから！」

「いいじゃねえか別に。俺が何しようとか俺の勝手だろ？ それでお前に迷惑かけるでなし……」

「迷惑かけるとか、かけないとか、そういう問題じゃないの！ 駄目な物は駄目なの！」

「副流煙の問題つてか？」

「わたしは涼の為を思つて言つてるの！ 身体に悪いでしょうが」

「んなもん、未成年だろうが成人だろうが、身体に悪いつてのは変わらんのだろ」

「あのね……売れば売つただけ国は儲かるんだよ？ それでも国が

『未成年はいかん！』つて言つてるのには理由があるんだから、従つべき所は従いなさい」

「意外と理屈っぽいんだな、お前……」

まあ、こんな場所で利恵と議論しても仕方ない。

涼は言われるがままに、煙草をポケットにしまった。

「こらこら。しまわないで捨てちゃいなさい、そんな物。必要無いでしょ？」

「いや、物を粗末にしちゃいかんだろ？」

「身体を粗末にする方が問題です。いいから捨てなさい」

「別に捨てなくても……要は吸わなきゃいいんだろ？」

「捨てなさい」

「だから……」

「涼が捨てるまで、わたしは何度でも言うよ?」

「ちっ……解ったよ!」

これ以上言い合いをしても、時間が過ぎるばかりでちっとも建設的でない。

それに、あまり揉めていても周りに迷惑だし、何より旅行自体がつまらない物になってしまう。

涼は席を立つと、ヤケクソ気味に『可燃物』と書かれたダストボックスへと煙草を投げ込んだ。

「ほれ! これでいいんだろ!」

「そうそう、それでいいの。素直な涼が大好きよ」

「うるせえよ」

再びドツカリと席に腰を下ろすと、涼は相変わらずの仏頂面をした。

利恵はそれを見てクスッと笑うと、

「ねえ、お母様は知ってるの? 涼の飲酒と喫煙」

と続けた。

「さあな。俺は家じゃ飲んだり吸ったりしねえけど、臭いで判ってるんじゃないかな?」

「お母様、何も言わないの?」

「何でも自分で責任を取れる範囲でやれっるのが、お袋の流儀だからな。もしも俺がケツまくったら、その時には殺されるだろ」

「ふうん……」

要するに、人の道を外れさえしなければ、大概の事は黙認するという事なのだろう。

一見、放任主義のように思えなくも無いが、自己の責任を認識させるには良い方法かもしれない。

もともと、それも本人の自覚次第ではあるが。

「一応、いい事も悪い事も、一通りやってみなけりゃ解らない部分

つてあるだろ？ モロに犯罪者になるような事は別としてさ」

「まあね」

やって良い事、悪い事の判別も出来ないようなら、そこで環流の『教育的指導』が入るだろうし……。

「別に酒も煙草も、無けりや無いで困りやしねえんだ。ただ……」

「ただ？」

利恵が訊き返した時、注文したアイスコーヒーが運ばれて来て、二人の会話が一旦途切れた。

涼はアイスコーヒーに何もいれず、ストローも使わずに一口飲んだ。

「……うん、結構旨いな」

ちゃんと豆を挽いて水から出しているらしく、味がシッカリしていて香りも飛んでいない。

これなら合格だ……と涼は思った。

「で？ ただ……何？」

「別に何でもねえよ」

「あんまり話したくない事かな？」

「……そういう訊き方されると、返事に詰まっちゃうな」

「あ、ごめん……」

「いや、謝らなくてもいいって」

美味しいアイスコーヒーのおかげだろうか、涼は普段よりも素直に利恵の質問に答えた。

「親父がな、やっぱ俺くらいの歳で酒も煙草も覚えたって聞いてさ。で、この歳でそういう物を覚えるってのは、どんな感じなのかなって、そう思ったただけなんだ」

「……そっか」

「俺のやる事に大した理由なんてねえんだよ。だから、あんまし気にすんな」

「……ねえ、お父様ってどんな人だったの？」

「親父？ そうだな……お袋と同じで、ヒナにはやたら甘くて、俺



には滅茶苦茶厳しかったな。随分ゲンコツ喰らったし、延々と説教された事もあったしな」

「それは涼が悪い事したからじゃないの？」

「まあ、そうなんだけどな」

「あははは。じゃあ怒られてもしょうがないね」

「……はは、まあな」

笑う利恵につられて、涼も笑ってしまった。

何だか利恵の笑顔を見てみると、自然に自分も笑顔になってしまっただ。

楽しそうに話を聞いている利恵を見ている内に、何故か涼は、もっと利恵を笑わせてやりたいな……と思った。

「あ、そうそう。明日はわたし達も海に入るつもりなんだ」

「そうしろよ、気持ち良かったぜ」

「うん……だからさ、一緒に泳ごうよ」

「ああ、別に構わねえよ」

「ほんとっ！？良かった。また『やなこと』って言われるかと思っちゃった」

利恵はホッとして笑顔を浮かべた。

だが……。

「何でだよ。その為に海に来たんだから、泳ぐのは当たり前だろ」

この涼のリアクションで、一気に脱力したような顔になった。

「……微妙にわたしの真意が伝わってない気がするんだけど？」

「何が？明日は海で泳ぐんだろ？ちゃんと伝わってるぞ？」

「そうね……涼はそういう人だったんだよね……うっかりしてたわ」

何故かへこんでいる利恵を、涼は不思議そうな顔をして見ていた。

明日も晴れるといいな……。

涼も利恵も、そう思っていた。

## 第十四章

翌日。

今日も天気恵まれ、早朝から気温はグングンと上昇して行く。この分なら、絶好の海水浴日和になる事は間違い無いだろう。だが……。

「朝っぱらから覇気の無い顔を晒してるわねえ……」

朝食の席で恭一と真一郎の顔を交互に見ながら、環が呆れたように言った。

まあ、実際そう言われても仕方の無いくらいに、二人とも不景気な顔をしているのだが。

「あゝ、頭いてえ……」

香ばしい香りを放つ焼きたてのパン。

あつさりとしてながら、それでいてちゃんとお腹を満たしてくれそうな海鮮スープ。

取れたての卵を使ったスクランブル・エッグなど、どれをとっても美味しそうだというのに、恭一はこめかみを押さえたまま手を出そうともしない。

「二日酔いになるまで呑むなんて、馬鹿のやる事よ？」

「いや、久し振りに楽しい酒だったもんでな、つい……」

恭一と真一郎の二人は白々と夜が明ける頃になって、ようやく部屋へ帰って来たのだ。

長時間の運転に加え、海で遊んだ上に睡眠不足でアルコール漬けとあっては、いくらタフな恭一でもダメージが残って当たり前である。

「真、お前も二日酔いか？」

やはり自分の隣で大人しく座っている真一郎に涼が訊ねると、  
「違う……ただの胸ヤケだ……」

と言いつつも、大雑把にパンを千切って口に放り込んでいる。

「どうやら恭一とは違い、食欲は衰えていないようだ。」

「へえ。 お前、恭さんより酒が強いんだな」

「いや……。 『中坊が酒を呑むなんざ十年早えっ！』 って言われてさ、コーラで一晩中付き合わされたんだよ。 ……ゲフ」

「……お前も付き合いいいなえ」

それでも食事の手が進む真一郎を見て、タフな奴だなと涼は笑った。

食事を再開しようとして、ふと視線を前に向けると……。

「ねえねえヒナちゃん。 ヒナちゃんの日焼け止めって、いくつ？」

「え〜つとね……顔用はSPF50で、身体用はSPF15の水に強いタイプ。 PA++」

「あ、わたし30のしか持って来なかった。 顔用のやつ貸して」

「うん、いいよ」

何やら利恵と雛子が話しているのが聞こえた。

聞こえたには聞こえたのだが、涼の耳には異国の人同士の会話に思える。

「……なあ真、あいつら何の話してんだ？」

SPFだのPAだの、涼には何の事なのかサッパリである。

「SPFってのは紫外線Bを防ぐ指数だ。 数値が大きいほど防御効果は高くなる」

「PAってのは？ それに紫外線Bって何だ？ 紫外線にAとかBとかってあるのか？」

「お前、物知らなさ過ぎだぞ……。 PAってのは、紫外線Aを防ぐ指数だ。 +から+++までの三段階あって、+が多いほど防御効果が高い。 で、紫外線はその波長によってA波、B波、C波の三つに分類されるんだ。 でも、C波は殆ど大気中のオゾン層に吸収されちまうから、地表に届くのは日焼けの原因になるB波と、『シワ』とか『たるみ』なんかの、肌の老化の原因になるA波の二つだな」

「……お前よく知ってるな、そんな事」

「常識だ常識。　いいか？　女の子と出かける時には、そういうた事にも気を配らないといけないんだ。　よ〜っく憶えとけ」

「俺はそこまで気を遣うくらいなら、家の中で燻ってた方がマシだ」  
それくらい授業の内容も記憶していれば、テストの点も良くなるだろうに……と涼は苦笑した。

「恭一、あんた、そんなんで海に行つて大丈夫？」

「……まあ、何とかなるだろ」

環の問いに、恭一は力無く答えた。

まあ、そうは言つても普段から鍛えている恭一の事だ、回復までに然程の時間はかからないだろう。

「じゃあ、海までの運転はわたしがするわ。　その調子じゃシンドいでしょ？」

「……えっ!？」

利恵と雛子は同時にお互いに顔を見合わせ、

「美浜さん！　海までの運転なら大丈夫ですよ？　大した距離じゃないし!」

「そ、そうですね！　あ、何なら海まで歩いたつていいですし!」  
と、慌てて言った。

海に入る前にあの運転を喰らつたら、とてもではないが遊ぶ気になどなれないだろう。

「何よ二人とも、そんなに焦つて……」  
と、環が怪訝な顔をする。

「さすがの利恵ちゃんも、昨日の洗礼は堪えたみたいだな」

恭一は笑いを堪えながら、困つたような笑顔をしている利恵に言った。

「ええ、まあ……。　予備知識無しだったもんで……」

「大丈夫だよ、それまでには回復するから」

そう言つと、恭一はコーヒーを一口飲んだ。

それで多少はスッキリしたのか、いくらか顔に生気が戻つたように見える。

「昨日の洗礼って何だろ？ 涼、何か知ってつか？」

「多分、お袋の運転の事だろ。かなり荒っぽいから、普通の奴なら回復するのに二日はかかるぜ」

「ふうん……」

その割には利恵も雛子も平気な顔をしている。

いくら荒っぽいとは言っても女性の運転だ、涼が言っただけで凄まじい物でもないのだろう……と真一郎は思った。

その後、朝食を終えて身支度を整えた一行は、恭一の運転で昨日と同じ駐車場までやって来た。

先日と同じように、浜辺にはたくさんの海水浴客がいるのが見える。

沖合いの方にはジェットスキーを楽しんでいる人達もいて、真一郎は、それを見てはしゃいでいる。

「お〜！ ジェットスキーじゃん！ 俺も乗ってみてえんだよね〜、あれ」

「あれって、やっぱり免許要るんだろ？」

「ああ、特殊小型船舶操縦士の免許が要るんだ。十五歳九ヶ月以上から受講出来るよ」

「単車と同じか……んじゃあ、俺は単車の方がいいな。ジェットスキーじゃ、海とか湖じゃなきゃ乗れねえし」

「ま、そりゃそうだけだな。一応、そんなのも持っててもいいんじゃないねえか？ 色々と遊びの幅が広がるじゃん」

アウトドアもインドアも、とにかく真一郎は興味を惹かれる範囲が広い。

面白そうな物に対するアンテナは、常に何かを探しているのだ。

「あ〜あ、誰かのケツでもいいから乗りてえなあ〜……」

「じゃあ真ちゃん、わたしと一緒に乗ろうか？ 近くにレンタルしてくれるお店があるし」

「え？ 環さん、免許持ってるんですか？」

真一郎が驚いたように言うと、環は得意げに胸を反らした。

「あつたり前なのさ。こつ見えても一級小型船舶海技免状まで持っているのだぞ。どうだ、参ったか！」

「ほえ……」

「他にも色んな免許持つてるわよ。さすがに航空機までは手が回らなかったけど、戦車とか電車以外なら、大抵の物は運転出来るのだ！」

「恐れ入りました」

素直に感心している真一郎の様子を、利恵と雛子の二人は何やら複雑な表情を浮かべて見ている。

「ねえ、ヒナちゃん。お母様、全部あの調子で運転するのかな……」

「……」

「多分……」

「だよねえ……」

一瞬、真一郎に忠告してあげようかと思つた二人だったが、それで環のご機嫌を損ねてしまうのもマズい。

何しろ、既に環は大いに乗り気なのだから……。

「環さん、それじゃ早速レンタルしに行きましょうよ」

「OK！ この環ちゃんの腕前を見せてあげようぞ！」

「おお！ 頼もしいお言葉！ 涼、お前も一緒に行くか？」

「いや、俺は普通に泳ぐだけでいいよ」

「そつか、じゃあな。あ、涼！ 昼近くになったら、昨日シャワー使つた海の家に集合しようぜ！ 場所、判るだろ？」

「ああ、大丈夫だよ。恭さんもいるしな」

涼達に軽く手を振つて、環と真一郎は意気揚々とレンタルショップへ向かつて歩き出した。

「行つちやつた……大丈夫かな、真君」

「真君、迷わず成仏してね……」

無邪気に喜んでいる真一郎を見送りながら、利恵と雛子は心の中で手を合わせていた……。

「んじゃあ俺達も行こうよ、恭さん」

「ああ、俺はボートでも借りて来るわ。今日は泳ぐのはパスしてのんびりする」

「ヒナちゃん、わたし達も着替えに行こうよ」

「う、うん……あの、わたしも今日は美浜さんと一緒にボートに乗ってるから……」

「え？ 何で？」

一瞬、雛子が自分に余計な気を遣っているのかと思った利恵は、ちよつとムつとした感じになったのだが、

「実は、わたし泳げないの。だから……」

おずおずと雛子が少し恥ずかしそうに言うのを聞いて、

「なぐんだ。そんなの、わたしが教えてあげるわよ。大船に乗った気でいなさいって」

と、胸を叩いて言った。

そして、

「それにしても……幼馴染のクセして冷たいなあ、涼は腕組みをしつつ、涼に向かってイヤな視線を送った。

「何が？」

「何が？ じゃないよ。自分は泳げるくせして、どうしても今までヒナちゃんに教えてあげなかったの？」

「いや、何度も教えたよ。でも、どうしても水を怖がっちゃってダメなんだよ、ヒナは」

「水が怖い？」

小さい頃に宇佐奈家と佐伯家で海に出かけた時、大人達がちよつと目を離れた隙に涼と雛子の二人で勝手に海に入ってしまったい、雛子だけが波に引き摺られ、そのまま沖の方へ流されてしまった事があるのだ。

それ以来、雛子は水に対して恐怖心を持つようになってしまい、どうしても水に浸かると身体が強張ってしまうのだそうだ。

「プールでも駄目？ ヒナちゃん」

「う、うん……。とにかく、水の中に入るともう駄目。頭では大丈夫って思っても、身体が自由にならなくて……」

「成る程、身体が拒絶反応を起こしちゃうのね。それじゃあ、まずは水に慣れる事から始めないと駄目か」

「お風呂で顔を浸ける練習とかしてるんだけど、やっぱり息が詰まる感じがしちゃって」

「でもまあ、そんなに焦らなくてもいいじゃない。とりあえず、今回は水に馴染む事を目標にしようよ、ね？　そうと決まればレッツゴー！」

「あ、利恵ちゃん！　ちょっと待って！」

まだ少し抵抗を感じている雛子の足は躊躇いがちだが、それをもせず、利恵はどんどん雛子の手を引つ張って歩いて行く。

そんな二人の様子を見ながら、

「行つちまった……。変な奴だな、あんなに楽しみにしてたくせに」と、涼は不思議そうな顔をして呟いた。

「楽しみ？　何がだ？」

「いや、あいつさ、今日は俺と一緒に泳ぐんだって言って、昨夜やたらはしゃいでただけ……。忘れちゃってんのかな？」

「ほほお……。？」

どうやら涼が利恵の事を気にしていると見るや、恭一は途端にニヤニヤし出した。

だが、それを受ける涼は、やや不満気だ。

「……。変な目で見ないでよ。元々あいつが勝手に言い出した事なんだから、俺には関係無いって」

「はいはい。しかしまあ、利恵ちゃんも情に厚いと言うか、不器用と言うか……。可愛いな」

「何の話？」

「ま、それが解るようにならなきゃ、お前もいっぱしの男とは言えねえな。さ、俺達も行くぞ」

頭の上にたくさんの疑問符を出しながら、それでも涼は促される



まま、恭一と共に貸しボート屋へ向かうのだった。

「そうそう、その感じ。 何だあ、そんなに怖がってる風でもないじゃない」

利恵達四人は浜辺に近からず遠からずの場所で、早速雛子の泳ぎの練習を始めた。

ゴムボートの縁に付けられたロープに掴まりながら、今はバタ足の真っ最中である。

涼と恭一はボートの上で余計な口出しをせずに見守り、利恵は海に入って雛子のお腹を支えつつ、アドバイスをしている。

最初はどれだけ雛子が怖がるかと心配していた利恵だったが、意外にも普通に練習を始めたので、少し拍子抜けするような気分だった。

「い、一応これくらいは……。 ただ、手を放すと、あつという間に沈んじゃうんだけど」

「ああ、それは全身が強張って余計な力が入ってるからだよ。 ヒナちゃん、リラックスリラックス」

「頭では解ってるんだけど、これがなかなか……」

雛子の水に対する恐怖心は、どうやら相当強い物らしい。

「まあ、一朝一夕に泳げるようになるものでもないし、地道にゆっくりやろうよ」

「でも……中学生にもなつて泳げないなんて、恥ずかしくて……」

「これこれ、世の中には色々な人がいらっしやいますよ？ ロクに料理も出来ないわたしから見れば、ヒナちゃんは神にも等しい存在ですが？」

「でも……」

「他人と自分を比べるのはいいけど、その度にへこんでたら意味無いですよ？ 常に前向きで行かねばなんねえぞつと」

そう言つと、利恵は雛子のお尻をペタペタと軽く叩いた。

「ちよつ……！ やめてよ利恵ちゃん！ ビックリしたよお！」

「あはは。 なかなかぷりちゅですな」

「お……おやじ臭い……」

「何を？」

練習しているというより、何か二人でじゃれあっている感が強いのだが、まあ楽しそうなので、それはそれでいいだろう。

「こんなんで泳げるようになるのかね……？」

「ま、水泳選手になるうってんじゃねえんだから、楽しんでやってりゃいいさ」

涼は疑問視しているようだが、恭一は二人の様子を見て笑っているだけだ。

そして、ふと涼の顔に視線を移して言った。

「こうしてるとよ、昔の事を思い出さねえか？ 涼。 まだ保が生きてた頃の事を」

「……俺も今思ってた。 親父がヒナに泳ぎを教えたたっけね」

「あいつの教え方で何か出来るようになったら、そりゃあ教わる方が天才なんだ」

「はは。 親父は説明下手だったからね」

教わる度に理解出来ない事が多くて、涼が「解んないよ！」

と文句を言えば、「何で解んねえんだ！」と、保も癩癩を起こしていた。

これでは上達するのに時間がかかって当たり前である。

そんな風に、二人が思い出話に耽っていると……。

「ねえねえ、お姉ちゃん何してんの？」

いつの間にか小学生くらいの子供が二人、ゴムボートに乗って近くに来ていた。

兄妹と思われる二人は、じつと雛子の練習する姿を見ている。

「えっと……何と言われても……」

「バカだな、お前は。 泳ぐ練習に決まってるだろ？ さっきのはバタ足って言うんだぞ」

兄と思われる男の子は得意気に言った。

恐らく自分も習ったばかりなのだろう、知識をお披露目したくて仕方ないといった感じた。

「ふ〜ん……お姉ちゃんも泳げないの？　じゃあ、あたしと同じだね〜」

女の子は仲間を見つけた嬉しさからか、益々ニコニコしながら雛子を見つめている。

「あ、あのね、あんまり見られると恥ずかしいんだけど……」

「何で〜？」

「な、何でって言われても……」

「はいはい、お姉ちゃんは今忙しいのだ。　童達は他の場所で遊ばない」

素直に子供達の質問に答えようとして焦っている雛子に、利息が助け舟を出した。

だが……。

「こつちのお姉ちゃん、感じ悪い……」

「ほんとほんと〜。　海はみんなの物なんだから、どこで遊んだっていいんだぞ〜」

と、子供達の逆襲に遭ってしまった。

「う……こ、小憎らしい小童共めえ〜……!!」

さすがに子供に正論で返されてしまうと、利息としても何も言えない。

相手が涼や真一郎なら次から次へと言葉を繋いでやり込められるし、最悪、実力行使も出来るのだが、まさか子供相手にそれも出来ない。

「相手が子供じゃ、お前も形無しだな」

「何よ涼！　冷静に見てないで、少しはわたしに加勢しなさいよね！」

「やなこつた」

子供相手にムキになる利息を見ながら涼が苦笑していると、

「ねえ、何かこっちに来るよ?」

兄妹の兄の方の子が、涼達の背後、沖の方に向かって指差しながら言った。

「どうやらジェットスキーのようだ。」

「お袋達かな?」

「いや、環の運転にしちゃ穏やか過ぎだろ。それに、乗ってるのは一人みてえだしな」

「ねえ涼、こっちに突っ込んで来るような感じしない?」

「ん?」

確かに利恵の言う通り、通り過ぎるにしても、少しこちらとの距離が近いように思える。

まあ、それでもぶつかるといふような事は無いだろうが……。

「運転してる奴……:こっちに気付いてないなんて事はねえだろうな?」

「ヒナちゃん、すっかりつかまってた方がいいかも」

「うん」

雛子が利恵の言う通り、ボートの縁に付いているロープを握り直そうとした時、ジェットスキーはかなりの速度でボートの傍を通過した。

あまり運転が上手くないのか、それとも涼達に気付くのが遅れたのかは定かでないが、通り過ぎる直前にハンドルを切ったらしく、今まで穏やかだった海面は大きくうねった。

「うわつと!?!」

その大きなうねりは涼達のボートを翻弄し、ボートはかなりの角度で傾いた。

握り直そうとしていた雛子の手は簡単にロープから引き剥がされ、雛子とボートの距離が開いてしまった。

「ヒナちゃん!」

利恵は必死に雛子のサポートをしようとするのだが、自分自身も身体が思う通りに動かせない。

それでも何とか雛子が海中に没する事だけは防いでいる。

「涼！ そつち持てっ！」

恭一と涼は自分達と子供達のボートを押さえようとしますが、こちらも体勢が整わず、思うに任せない。

「お兄ちゃん！ 怖いよーっ！」

「しっかり掴まってる！ 手え放すなよっ！」

子供達の乗ったボートは涼達の物よりも小さい為、更に激しく揺さぶられている。

二人とも何とかバランスを取ろうと頑張っていたが、子供の身でいつまでも耐え切れる訳も無く、二人ともボートから振り落とされた。

「まずい！ チビどもが落ちたっ！」

まだうねりの収まらない海中に落ちたら、小さな子供ではそれに抗えない。

恭一は即座に海に飛び込み、子供達の救助に向かった。

「利恵！ ヒナを頼むっ！」

恭一だけでは二人も抱えられないと判断し、涼も続いて海に飛び込んだ。

利恵は沈みかけた雛子の身体を支えながら、そのままボートまで辿り着いた。

「ヒナちゃん、大丈夫！？ 水飲んでない！？」

「大丈夫！ それよりボートが流されないように押さえ……もう一台来たっ！」

今度は先程の物よりも大型で、更に速度が速いように思える。

あんな物が通り過ぎたら、今度はどんな被害を受けるか判らない。だが、それを運転しているのは……。

「わたしの身内に暴拳を働いて、ただで済むと思うなよーっ！」

「お、おば様！？」

「お母様！ そのままのコースはまずいですって！ もっと離れて下さーい！」

雛子と利恵は必死になって環にコースを変えるように叫ぶのだが、環の方はお構い無しに突っ込んで来る。

「どうやら先程のジェットスキーを追いかけるつもりのようなのだ。」

「心配するな娘達！ 真ちゃん、フォローよろしく！」

「了解であります！ 第一のコース、掃部関真一郎君！ 用意……ドーン！」

環の運転するジェットスキーが通り過ぎると同時に、真一郎が利恵達の方へ向かって飛び込んだ。

即座に発生するうねりを物ともせず、真一郎は二人を抱えるようにすると、そのまま二つのボートを掴んで自分の方へと引き寄せた。真一郎の豪腕に抱えられているお蔭で、雛子も利恵も波を食らっても沈む心配が無い。

まあ、かなり多目の飛沫を被ってしまうのは仕方ないが……。

「ありがとう、真君」

「なはは。合法的に密着出来るとは、役得役得」

「こら、スケベ大王！ いつまでもくっ付いてないで、涼達も何とかしなさい！」

「あの二人なら大丈夫だよ、ほら」

真一郎が引き寄せたボートの端には、しっかりと涼と恭一がつかまっている。

勿論、その腕に子供達を抱きながらだ。

「ナイスフォローだぜ、真」

「肝冷やしたぜ……おいチビども、大丈夫か？」

子供達をボートに上げると、恭一はホっとしたように言った。

「大丈夫。ありがとう、おじちゃん」

「おじ……。こういう時には、お兄ちゃんと言うのが礼儀なんだぞ？ 憶えとけ」

「何で？ おじちゃんは、おじちゃんだよ？」

「いや、物事には本音と建前というのがあってだな……って、言っ  
てて虚しくなるから、もういい」

確かに、子供達から見れば恭一は充分おじさんである。

利恵と雛子は恭一に悟られないように苦労しながら、クスクスと笑い合っていた。

その後、何故か子供達は涼の事が気に入ったらしく、昼過ぎになるまでずっと涼と遊んでいた。

夜になって、涼達は昨夜と同じ小宴会場に集まり、

「第二回！ 大宴会開催っ！」

と、環が言うように、夕食というよりは単なる宴会の席に着いていた。

今夜は疚しい考えを持っていないので、恭一も真一郎もしっかりと腰を落ち着けている。

ちなみに、お膳の中央にデンと構えている豪勢な舟盛りは、海で涼達のボートを転覆させたジェットスキーの運転者からの差し入れだ。

環は紳士的な話し合いの末に導き出した結論だと言っていたが、どうにも怪しい物である。

「恭さ〜ん……硬い事言わないで、一杯くらいいいじゃないっすか」

「ザけんな。中坊に酒なんか吞ませられるかよ。真一郎はコーラでも飲みながら、俺に酌してる」

「もうコーラはいいっすよ……見ただけで胸焼けしそう」

恭一の差し出したグラスにビールを注ぎつつ、真一郎は溜息を一つ吐いた。

「ま、お前らが二十歳になったら色んな所へ連れてってやるから、それまで我慢しろ」

普段は色々と無茶をやる恭一だが、意外と真面目な一面を見せている。

もつとも、今回は保護者として同行しているのだから、あまり不真面目では困るのだ。

「あらら？ もう無くなっちゃった……お姉さん！ お酒追加ね！」

「おい環、お前ピッチ早いぞ。もつとゆっくり呑めよ」

「黙れ、この軟弱二日酔い男め。わたしに意見するなんて十年早いわ！」

「うわばみめ……って、おい、真一郎！ お前は食い過ぎだ、こら！ 舟盛り抱えて食う奴があるか！」

「呑めない分は食うのが俺のジャステイス！ 油断していると餓死しますよ」

恭一と環は酒に、真一郎は美味しい食事にと、それぞれ舌鼓を打っている。

そんな中……。

「ねえ、確かに言ったよね、ヒナちゃん」

「うん……判んないなあ。わたし夢中でもがいてたから、周りの音なんて耳に入って来なかったし」

「何だよお、味方してくれなきゃダメじゃん」

「そ、そんな事言われても……」

何故か利恵だけ少々機嫌が悪い。

「お前の聞き間違いだよ。大体、俺がお前の名前なんて呼ぶ訳ねえだろうが」

「わたしの耳は感度良好なんだぞ？ 聞き間違いなんて絶対にしないもん」

「世の中に絶対なんて事はねえの。大方、耳鳴りでもしてたんだろ」

そう言つと、涼は刺身を一切れ口に放り込んだ。

勿論、自分の口にある。

さすがに海の傍だけあって魚が旨い。

昨夜は恭一と真一郎の二人にせっつかれていて、しっかり味わっ



て食べられなかったが、今日は思う存分堪能出来そうだ。

但し、今は利恵が煩いので、涼としてはこれを何とかしたいところなのだが……。

「いいえ！ 確かに『利恵』って呼びました！」

「しつげえな、お前は。呼ばねえったら呼ばねえよ」

この切り替えしでは話が進まないどころか、却って火に油を注いでいるようなものである。

「とにかく呼んだっただけなら呼んだの！ なので、今後もちゃんと呼ぶように。いい？」

「やなことだ」

「むう……どこまでも強情な奴め！」

しかし、何だかんだ言いながら利恵も楽しそうである。

思えば、こんなに涼とスムーズに会話したのは、これが初めてではないだろうか？

と、そこへ、

「こらあ、そこは何をモメてんだあ？」

一升瓶片手に環が乱入して来た。

いい具合に酔っ払っているようで、日焼けとは違う頬の赤みが目立つ。

「酒は楽しく呑め、若人達よ」

「俺達は素面だつーの」

「じゃあ呑め。呑んでしたたかに酔え」

「未成年に酒を勧めるなよ……」

「お？ お？ 普段は酒も煙草もやりくさる小僧が、なぐにを真面目ぶってんだ、こら」

そう言うと、環は涼をヘッドロックの体勢に捉えて、一升瓶の底で頭をグリグリとし始めた。

どうやら涼の思っていた通り、普段の涼の行動は全て環に看破されているようだ。

「いてててて！ やめろって！ 完全に酔ってるな、こりゃ……」

「宴会の席で遠慮はタブーじゃ。勧められた物は、例え劇薬でも口に入れる」

「無茶苦茶言うなーっ！」

「あー！ やっぱりお兄ちゃんだー！」

突然、小宴会場の襖が全開になったと思ったら、やたら元気な声と共に二人の子供が中に駆け込んで来た。

昼間、涼達と一緒にいた、あの兄妹だ。

恐らく涼の声を聞きつけたのだろう。

「おう、チビども、まだ起きてんのか。飯食ったか？」

「食った〜！ これからお風呂行くんだ」

「こらこら、チビっ子に汚い言葉を教えない！ 二人とも、こういう言葉は真似しちゃ駄目だよ？」

利恵がすかさずフォローを入れるが、子供は大体が下ネタや、少し乱暴な言葉を面白がる傾向がある。

それに関する注意や指導など、聞く耳持つちゃいないのである。

「このお姉ちゃんうるさ〜い」

「そんなだからオッパイが小さいんだぞ」

「な……何て生意気な！ わたしのは標準サイズなんです〜！ 決して小さくありません！」

「でも、こっちのポニテのお姉ちゃんは大きいよ？ な？」

「うん、お姉ちゃんの倍くらいあるよ。お母さんみたいなの」

幼い兄妹は雛子の胸を指差すと、二人同時にうんうんと頷いて見せた。

「本当！？ ヒナちゃん、ちょっと見せてみなさい！」

「利恵ちゃんまで一緒になって何言ってるの！」

最初は入り口の所で子供達を呼んでいた両親と思われる二人だったが、子供達が戻って来ないだろう事を悟ると、申し訳無さそうにしながら室内へ入って来た。

まあ、この場にいる全員が子供好きな事もあって、子供達の乱入に何ら問題など無いのだが、やはりそこは大人としてと言うより、

人の親としての常識が顔を出すのだろう。

すぐに子供達を連れて部屋を出て行こうとするのだが、子供達は涼達にすっかり懐いているらしく、テコでも動きそうに無い。

子供は一旦気に入ったおもちゃに対しては執着心が強いのだ。

「まあまあ、袖触り合うも多生の縁と言っじゃありませんか。どうです？ よろしければ一緒に」

「恭一は回りくどい！ はいはい、遠慮なんてしないでコップ持って！一緒に楽しく呑みましょう！」

すっかりいい気分になっている環は、相手が呑めるかどうかなどお構い無しにコップを持たせると、そこへ並々と酒を注いだ。

拒否する事など許されそうも無い勢いである。

「お、おい環、無理強いしたら却ってご迷惑に……」

「呑めなかつたら雰囲気酔ってればいいの！ 場を盛り上げるのは心配りだぞ！ 童達にはジュースでも持てい！」

「まったく……すみませんね、こいつ酔っ払うと見境がなくなるもんで……」

ぺこぺこ頭を下げる恭一に、子供達の両親は益々恐縮している。

涼としては頭を抱えなくなるような光景なのだが、環がここまでノってしまつと、最早誰にも止める術が無い……。

「真ちゃん、何かギャグは無いのか！ そろそろ取って置きを出さない！」

「仕方ありませんね……忘年会まで暖めておきたかったネタですが、環さんのリクエストとあれば、ご披露せねばなりませんまい！」

環の指名を受けた真一郎は即座に立ち上がり、何やらゴソゴソと準備を始めた。

言葉の通り、何か宴会芸を見せるつもりなのだろう。

「……子供に見せても大丈夫な芸なんだろうか？」

涼としてはかなり不安だったが、ここまで盛り上がってしまったと、もう流れに任せる以外どうしようもない。

「来年は絶対に琢磨と二人だけで来よう……」

もう周りを気にしない事に決めて、一人黙々と食事を続ける涼であつた。

さつさと済ませて、とつとと部屋へ避難しよう。

それが唯一選択出来る最善の方法である。

「でさあ、涼。 さつきの続きなんだけど……利恵って呼んだよね？」

「お前もしつこい！ 俺は飯食つてんだから邪魔すんな」

「食べさせてあげよつか？ あくんって」

「……頼むから飯くらい静かに食わせてくれ」

しかし涼の願いも虚しく、準備の整つた真一郎の宴会芸が始まると、場は一層の盛り上がりを見せ、更に煩さを増した。

そして、それは他の客から苦情が出るまで続いたのだった……。

「うん……もう食えないっすよ……。 涼、お前にくれてやる……」

そう言つと、真一郎は大きな身体をゆっくりと左に起こし……そのまま涼の上に着地した。

「痛っ！ ……この野郎、お前はもつとそつちで寝ろ！」

自分の上に乗って来た真一郎を恭一の方へに蹴り飛ばすと、涼は布団の上上半身を起こした。

「くそ……目が覚めちまつた。 今何時だ？」

枕元に置いた自分の腕時計を月明かりに透かして見ると、時刻は午前三時少し過ぎを指している。

部屋に戻って寝たのが午前零時くらいだったから、まだ三時間しか寝ていない事になる。

「ぐががが……やんのか、この野郎……俺に逆らうなんぞ十年早え……ぐう……」

「ん……何だとお？ 上等だ、こら。 ……ぐうぐう……」

「二人して夢の中で喧嘩してんのか……？」

涼が転がしたせいで、真一郎は恭一に覆い被さるような体勢になっている。

きつと、それで喧嘩の夢になってしまったのだろう。

お互いに顔を小突きながら寝ている。

「ここまでやって、何で起きないんだろうな、この二人は」

涼は苦笑すると、再び枕の上に頭を落した。

明日の今は、自分の部屋で一人で寝ているのだろう。

そう考えると、何だか不思議な気分だ。

普段はあまり他人に干渉される事を好まない涼であるが、こんなのもいいな……と思えた。

「親父が死んでから、あんまり大勢で騒いだりしてしなかったもんな……」

うつうつしながら考えている内、いつの間にか涼は眠っていた。

目覚めた時には憶えていなかったが、何となく楽しい夢を見たよ  
うな気がした。

## 第十五章

確かに真一郎の耳にはその音が聞こえていた。けれど、どうしてもそれが現実の物とは思えなかった。

……いや、信じたくなかったと言った方が正しいだろう。だから今もこうして、

「嘘だ……嘘に決まってる！ こんな事がある訳がねえ！」  
と、壁にへばり付くようにして、必死に抵抗しているのだ。だが、そんな物が通用する程、現実には甘くない。

「真、いつまでそうしているつもりだ？ もう予鈴が鳴ったのだから、早く教室へ行け」

「よれい？ 何ですか、それは。食べられますか？」

真一郎は本当にキョトンとした顔で言った。

しかし、それに対する琢磨は、

「……新学期早々、しかも朝からつまらん冗談に付き合わせるな」と、眉間の中央に皺を寄せている。

そう、今日から新学期。夏休みは昨日で終わったのだ。

なのに真一郎ときたら、朝から往生際の悪い事を言い続けている。その隣りには涼もいるのだが、さすがに真一郎のような真似はしていない。

「なあ、琢磨あ……お前だって普通に授業を受けてるより、休みの方がいいだろ？」

「どちらにも良い部分がある。一概には言い切れん」

「自分の心に嘘を吐くな！ 普通に学校に来るより、休みの方がいいに決まってる！」

「誰も彼もお前と同じだと思っな。さあ、いい加減に現実を直視しろ。時間はお前が考えているより、ずっと早く流れているんだ。無駄にするな」

少し疲れたような感があるが、それでも琢磨は毅然として真一郎

に言い放った。

「俺様は信じねえぞ！ あんなに楽しく、充実した日々が戻って来ないなんて……もう終わっただなんて！ また一年も離れ離れになるなんて！」

「シチュエーションによつちやあ良い台詞に聞こえなくも無いけど、ここでこいつが言うのと妙に腹が立つな……」

「涼、つまらん分析などしとらんで、さっさと連れて行け。夏休みボケした奴がウロウロしていると目障りだ」

さすがに琢磨は気持ちの切り替えがちゃんと出来ているようで、昨日まで夏休みだったなどとは微塵も感じさせない。

もつとも、ずっと精神修行していたと言うのだから、それも当然かもしれない。

規則正しい生活をしてきた者と、そうでない者の差がハッキリ出ている。

「琢磨には解らんのか！？ 愛しい人との別れにも似た、この切ない感情が！」

「皆目見当も付かん。特に、お前が言うのと戯言にしか聞こえん」「何と情緒の無い奴……見損なつたぞ！」

「そんな下らん事で引き合いに出されては、情緒もさぞ迷惑だろうな。さあ、教室へ戻れ。俺はもう付き合わんからな」

そう言うのと、琢磨は会話を切り上げて、さっさと教室の中へ入ってしまった。

きつと、この場で真一郎を説き伏せるのが面倒になったのだろう。……いや、不可能だと悟つたのかもしれない。

「くそ……」。悔しがらせてやろうと思つたのに、全然相手にされなかったぞ。遊んでた俺の方が負け組みみたいだ……」

本気で悔しがる真一郎に、涼は笑いながら、  
「琢磨と俺達じゃ精神構造から違うんだよ。あいつは鍛えてるか

らな」と言った。

まあ、真一郎の言いたい事も何となく解るような気がするのだが、人にはそれぞれ性格もあるし、どちらが正しい姿かなど決められはしないだろう。

「若者らしくないっ！ あいつはもつと感情を表に出すべきだ！」

「お前みたいに出しっ放しでも困るだろ。ほら、行くぞ」

まだ不満気な真一郎を引き摺るようにして、涼も教室へ向かって歩き出した。

「まったく……真にも困ったものだな」

自分の席に座ると、琢磨は『ふう……』と静かに溜息を吐いた。

「どうしたの？ 琢磨君。何だか元気無いみたいだけど」

「え？」

急に声をかけられて少し驚いたように琢磨が顔を上げると、そこには雛子が立っていた。

「あ、ああ……さ、佐伯か」

「何かあったの？」

「い、いや、別に何も無い。し、真の奴がつまらん事を言っていたので、少し疲れただけだ」

以前に比べれば大分話せるようにはなったものの、やはりまだまだ少どもつてしまう。

しかし、他の女子とは殆ど喋れないのだから、雛子に対してだけは、かなり進歩したと言えるだろう。

「真君？ 何の話だったの？」

「な、夏休みの楽しさを俺に説こうとしていたらしいが、逆に夏休みが終わった事を再認識して寂しがっていた。……時々、奴は理解に苦しむ」

琢磨は再び溜息を吐きつつ、提出する宿題のテキストを鞆から出し始めた。

勿論、琢磨だって歳相応に遊びたいと思う気持ちが無い訳ではない。



ただ、辞めようと思えばいつでも辞められる事を自分の意思で続けているのだから、それを途中で投げ出してしまふような真似をしたくないのだ。

「そう言えば、琢磨君はずっと禅寺に行ってたんだよね？」

「あ、ああ、そうだ。こ、子供の頃からやっている事だからな、もう当たり前になっっている」

「これからもずっとそうなの？ 毎年？」

「い、いや、そうとも限らん。先日、祖父とも話したのだが、来年からは自分の時間も作る事にした。……真とも約束したからな」

約束……来年は一緒に海に行こうという約束。

冬休みにも何か企画していると真一郎は言っていた。

それを思い出した琢磨は、自然に口元に笑みを浮かべていた。

「約束？ ああ、遊びに行こうって？」

「う、海に行こうと誘われたんだ。こ、今回は断ってしまったが、俺も海で泳ぐのは好きだからな。来年が楽しみだ」

琢磨がそう言うと、何故か雛子はクスクスと笑った。

「な、何だ、佐伯。俺は何かおかしな事を言ったかな？」

「うっん、違うの。何だかんだ言っても、やっぱり仲がいいんだなと思って」

「誰と誰がだ？」

「琢磨君と真君」

「……そうか？」

それ程意識した事は無いが、周りからはそう見えるのだろうか？  
それが良い事なのか、それとも憂慮すべき事なのか……自分の席に戻った雛子の背中を見ながら、琢磨は暫し考え込む事となった。  
と……。

「たあくまくううん」

「うわあっ!？」

いきなり耳元で囁かれ、琢磨の全身に鳥肌が立った。

普段ならば背後から近づく気配など簡単に察知出来るのだが、雛

子と話した直後だった為、注意力が散漫になっていたようだ。

「な、何をやっとするんだ真！ 教室に戻ったのではなかったのか！？」

「いや、お前に言い忘れてた事があつたもんでさ、戻って来た」

「後でも良かるう？ もうすぐ先生が来てしまふぞ？」

「お前さ、今日は時間あるか？」

琢磨の言葉などどこ吹く風といった感じで、真一郎は続けた。

これは意見するだけ無駄だと悟った琢磨は、取り敢えず真一郎の用件を聞いてしまおうと思った。

その方が進行が早い。

「ああ。今日は稽古は休みだし、特に用事がある訳でもないからな」

「んじゃさ、帰りに『らんぶる』行こうぜ」

「それがお前の用事か？」

『らんぶる・ろつく』に立ち寄る事など、今更用事と言う程の事ではないだろうに……と琢磨が言おうとすると、

「違う違う、ちっと相談があんだよ。あ、ところでお前さ、リズム感はいい方か？」

ニコニコしたまま真一郎は言った。

「どうだろう？ 特に考えた事も無かったが……ある程度の感覚は備わっていると思うぞ？ リズムを取る事は、剣道でも必要な場合があるからな」

「それを聞いて安心した。では、俺様は消えるとしよう……ふっふっふ……」

そう言つと、真一郎は身を低くして、何故か壁伝いに教室を出て行った。

それを見送った琢磨は、何だかやたらと疲労感に襲われている自分を感じていた……。

始業式と言えば、全員が元気な顔を見せ、宿題を提出してしまえば、後はやる事など無いのが普通である。

(もつとも、二学期制をとっている学校では、この限りではないが)

みんな心ここにあらずといった感じで、帰りはどこに寄ろうかなどという話で盛り上がっている。

中には宿題を終わらせる事が出来なかった者もいるようで、その処理に奔走する者もいるし、休みの思い出に浸っている者もいる。

まだ夏休み気分の抜け切っていない生徒達にとって、今日から学校が始まるなどという事は意識の片隅にしかないのだ。

いつまでも夏休み気分でしたら駄目だという担任の言葉など、耳には入っても頭までは行かない。

「やれやれ、みんな浮付いているな」

琢磨は帰り支度をしながら、クラスメイト達の様子を見て思った。そうは言っても、急に気持ちの切り替えを迫られて、「はいそうですか」と切り替えられる程、みんな人生を生きていないのだから仕方ない。

そんな事を考えているから真一郎に『ジジむさい』と言われしてしまうのだが、琢磨の中ではそれが通常の思考なのだから、これも仕方ない。

「さて……真の奴、一体何の用があると言っんだ」

稽古の無い時には真っ直ぐ帰宅しようと思っていた琢磨だったが、大事な用があると言うのでは顔を出さない訳にもいかないだろう。

琢磨は鞆を手にすると、机と椅子のポジションをきっちり直し、それから教室を出た。

校庭を横切つて敷地から外に出ると、そこには生徒である事を忘れてしまった者達がたくさん歩いている。

これからどこへ行こうとか、何をしようとか、そういった類の話が琢磨の耳にも届いて来る。

思えば自分もその内の一人なのだと気付くと、

「……そう言えば、俺はどうして素直に真の言う事を聞いているんだ？」

歩きながら琢磨は考え始めた。

本来ならば学校帰りに喫茶店に立ち寄る事などは校則で禁止されている。

勿論、琢磨は校則を破る事を良しとはしていない。

にも拘らず、琢磨は敢えて校則違反を犯し、涼や真一郎と行動を共にする事が多いのだ。

琢磨自身も、それが何故なのかよく解らなかつた。

いつもなら、そんな真似をする連中には意見して、そういった行為をやめさせている筈なのだが……。

「不思議と、あいつらにはそういった事を言う気にならん。それに……」

一緒にいる事が楽しい。

確かに涼はまだしも、真一郎にはイライラさせられる事が多いのだが、そういった事を差し引いても余りある程に楽しいのだ。

涼も真一郎も、ただの悪ガキとは違った何かを持っているように思えてしまう。

ただ、二人は学生として埒外な事もするし、決して褒められた行動ばかりでない事も事実だが……。

「お、来た来た。 琢磨、こっちだ」

琢磨が 『らんぶる・ろつく』 のドアを開けると、すぐに真一郎がそれに気付いて、奥の席から手を振った。

その向かいの席には涼の背中が見える。

「それで、相談というのは何……どうした涼、何かあったのか？」

真一郎の隣りに腰を下ろした琢磨は、涼の顔を見て言った。

「……何でもねえよ」

「そこまで不機嫌そうな顔をしていて、何でもない事は無かるっ？」

「お前もすぐに俺と同じ顔になるよ、きっと……」

「……？」

「ほい、琢磨にプレゼントだ」

涼の言っている事が理解出来ずにいる琢磨の目の前に、黒い棒が二本差し出された。

当然、それを差し出したのは真一郎のだが、何故かニコニコと機嫌良さそうに笑っている。

「真、これは何だ？」

「これか？ スティックって言ってな、ドラムを叩く時に使う物だ」

「ほう？ こういう形をしているのか。実物を見たのは初めて……ん？ どうしてこれを俺にプレゼントするんだ？」

「今日からお前が、これを使うからだ」

「……はあ？」

訳が解らず首を傾げる琢磨に向かって、

「……バンド組むんだってよ。つーか、もう組んでる事になってるんだよ、俺達で」

相変わらずの不機嫌さで涼が言った。

その態度から察するに、きっと涼もこの場で突然聞かされたのだろう。

「組んでいる事になっている……？ 涼、どういう事だ？」

「文化祭でバンドコンテストがあるの知ってるだろ？ あれに出るんだとさ」

「出るって……俺達がか！？」

「もう登録済みだつてよ。真の野郎、夏休み中に生徒会長に直接申し込んだんだと。……つーより、無理矢理捻じ込んだんだろうな」

既にバンドは組まれていて、出場登録済み。

そして今日から使えと、スティックがプレゼントされたという事は……。

「ちよ、ちよっと待て！ 俺はドラムなど触った事すらないし、ましてや人前で演奏など出来ん！」

男子だけならいざ知らず、そういったイベントならば女生徒だつ

て大勢見に来るだろう。

そんな多数の視線に晒されながら不慣れな事をやるなど、琢磨の想像を絶する行為だ。

「俺は辞退させてもらうぞ！」

「もうガツチガチに予定組まれちまつてるから、今更出ねえなんて言ったら生徒会から吊るし上げ喰らうぜ。……諦める、琢磨」

涼の方はとつくに観念してしまっているようで、特に真一郎に反対する様子も見られない。

まあ、言ったところで無駄だろうけれど……。

「し、しかし……！」

「二ヶ月もありや何とかなるって、大丈夫大丈夫」

焦る琢磨に、真一郎は呑気な顔をして言った。

本当に何とかなると思っっているのか、それとも単に何も考えていないのか……その顔色からは窺い知る事は出来ない。

「たった二ヶ月で何が出来ると言うんだ！ そんな短期間では、基本的な事を覚えるだけで精一杯だぞ！」

「お？ やる気満々じゃねえの琢磨、いいねいいね」

「俺が言っているのは、そういう意味合いの事ではないっ！」

「練習場所は体育館を抑えてあるから安心しろ。楽器も借りられるからタダだ。心置きなく練習しような、琢磨」

「だから！ どうしてお前は俺の話しを聞かないんだっ！」

「ほい、CD。これ聴いてイメージトレーニングしてくれ」

「話を聞けと言っとなるだろうがっ！」

だが、琢磨が何を言おうと真一郎が聞く耳を持っている筈も無く、結局、誰かに迷惑をかけてしまうよりマシだと、琢磨はそれを承諾する事になってしまった。

「……ただいま」

「お帰りなさい、琢磨」

力無く玄関の戸を開けた琢磨を、琢磨の母、華末砂（かずさ）が出迎えた。

だが、いつもの琢磨と様子が違う事に、少し戸惑っている。

「あら、どうしたの？ 何だか元気が無いみたいだけど……学校で何かあったの？」

「あつた……と言えば、あつたのかな？ 学校でじゃないけど……」  
「何？」

「友達に、文化祭の出し物を一緒にやろうと誘われたんだ」  
畳敷きの居間へ入ると、琢磨は制服を脱ぎながら言った。

だが、その動作は緩慢で、疲れているような印象を与える。

「まあ、素敵じゃない。それで？ どんな出し物なの？」

「バンドをやろうと言っただよ。でも、俺は今まで楽器なんて触った事も無いし、出来ないと断っただけど、結局、引き受けざるを得なくて……」

こめかみを押さえつつ、琢磨はやれやれといった感じで言った。  
「あら、いいじゃないの。やってごらんさい？」

琢磨の制服をハンガーに掛けながら、華末砂は言った。

「もしかしたら意外な才能が眠っているかもしれないでしょ？ それに琢磨は器用ですもの、きつとすぐに上手に出来るようになるわ」

「お母さんは気楽に言うけど、たった二ヶ月しか練習期間が無いんだよ？ いくら何でも……」

テーブルの前に正座すると、琢磨は溜息混じりに言った。

大まかに性格は掴んだと思っていたのだが、やはり真一郎の行動は読み切れない。

きつと文化祭当日にも何か企んでいるだろうと思うと、少しばかり不安に似た気持ちも湧いてしまう。

「こんな状態で何かしたって上手く行く筈が無いよ。 まったく、あいつは……」

「……失敗してもいいじゃないの」

華末砂が笑いながら言うのを見て、琢磨はポカンとした表情にな

った。

「お母さんはね、何でも挑戦してみたらいいと思うの。琢磨くらの年代の失敗は、後でいい思い出になるものよ？ そりゃあ成功した方がいいだろうけど、お友達と何かに夢中になったって記憶は、いつまで経っても色褪せない物だしね」

「でも……」

やるからには上手くやりたいのが人情である。

例えそれがお遊び程度の物だったとしても、上手く行くのと行かないのでは大きな差がある。

「誘ってくれたのは真一郎君？」

「うん。知り合って半年近く経つのに、未だにあいつだけは読み切れない」

それを聞いて、華末砂は優しげな笑みを浮かべた。

「困ったもんだよ、本当に……。涼も巻き込まれて困惑している様子だった」

「でも、琢磨だって一緒にやりたいんでしょう？」

「え？」

華末砂の言葉に、琢磨は驚いたような顔をした。

一緒にやりたいと思っている？ 自分が？

「だって、本当に嫌なら琢磨は断る筈だもの。涼君も同じじゃないのかな？」

「いや、それは、俺が断ったら迷惑をかけてしまう人達がいるからで……涼だってそうだと思うよ」

「それは琢磨が自分を納得させる為に考えた理由でしょ？」

華末砂はクスクスと笑いながら、琢磨の向かいに正座した。

「剣術を始めた時にもそうだったものね。お父さんは身体が弱くて出来ないから、僕が代わりにやるんだって言って……」

「……」

「でも、本当は琢磨自身が好きだから。だから始めたし、続けているんでしょ？」



「……………」

確かにそうなのかもしれない。嫌ならいつだって辞められるのだ。

自分の時間を削り、同年代の者達が当たり前に行っている事もせず、ただ稽古に打ち込んでいるのは、取りも直さずそれが好きだからだろう。

決して祖父に強要されたからではない。

「琢磨が自分の事を『僕』じゃなく『俺』って言うようになったのは、小学校に入学してすぐだったかしら？」

「……………うん、多分そうだと思う」

「決意の表れだって、お父さんは言ってたわね」

「決意の表れ？」

「今までの自分とは違う自分になるんだ……………そういった感情が入ってるんだろって。お父さん、嬉しそうだったわ」

小学校に入る前の琢磨は少々引っ込み思案で、周りに溶け込むのが苦手だった。

優しいと言うよりは臆病で、何に対しても消極的な面が見られたものだ。

それが剣術の稽古を始めてから少しずつ変わって行った。

何か一つでも自信のある物が出来ると、人はその態度から変わって行くのだ。

「最初は無理だって、お母さんは思ってたんだけどね。琢磨には

剣術なんて向いてないって」

「うん……………自分でも、そう思っていたよ」

「でも、全然そんな事無かった。稽古をしている時の琢磨は、まるで別人みたいに生き活きしてるもの。……………隔世遺伝なのかしらね？」

琢磨の父、翔磨は、元々身体の弱いせいもあって、剣術どころか運動はからっきし。

代わりに芸術方面に才能を発揮し、その絵はなかなかの評価を得

ている。

手のかからない、大人しい赤ん坊だった琢磨を見て、将来は翔磨と同じ芸術方面に進むだろうと華末砂は考えていた。

だが、天賦の才と言うべきか。三歳の誕生日に祖父の弦磨から贈られた竹刀を、琢磨は見事に振って見せたのだ。

恐らく祖父が木刀を振る様を見て、自然に覚えてしまったのだらう。

「やってみなければ判らない……ね？ 思い切ってやっごらんなさい」

「……そうだね」

あれこれ言い訳する前に、やってみればいいのだ。

笑顔で言う華末砂を見て、琢磨は静かに頷いた。

「とは言つもの……」

翌日から始まった練習で、やはり当然の如く、琢磨は苦勞していた。

「両手両足をバラバラに動かすなんて、なかなか出来るものでは……」

何とか真一郎に言われたようにしようとするのだが、そうそう簡単に出来る筈も無く、練習場所として借りている体育館には、何もギクシャクとしたドラムが響いている。

どうにか基本的なリズムは刻めるようになったものの、それ以外の事をしようとする途端に手足が付いて行かなくなってしまふのだ。

「待て待て待て、ストップだ琢磨！ そこは三連だよ」

「え？ 三連？」

一応、前以って一通りの事は教わっているが、それですぐ出来れば苦勞は無い訳で……。

「スネアだけで回したって駄目なんだって。フロアタムも使えよ」

「そう言われても、そこまで手が回らん」

「そこを回すのがドラマーの務めだ。いいか？ もう一度やって見せるから、頭に叩き込んで身体にフィードバックしろ」

「簡単に言っつな……」

琢磨からスティックを受け取ると、真一郎は軽く腕を回して『ドドドン』と連続してリズムカルに叩いた。

琢磨の物とは違って、その音はスムーズに発せられている。

「この後シャツフルが入るから間違えるなよ？ タツカタツカと跳ねるように叩くんだからな」

「シャ……シャツフル？」

他にも真一郎の口からは、『裏打ち』『キメ』『二拍三連』

と、琢磨の聞いた事の無い言葉がポンポン出て来る。

それを覚えるだけでも苦勞しそうだ。

「おい真、フュージョンじゃねえんだから、そんな刻み使わなくていいだろ？」

少し狂ってしまったギターの音を合わせながら涼が言った。

「エイトビートの基本リズムだけでいいんじゃないか？ それに少

しロール混ぜりゃ、それなりに聞こえるしさ」

「いやいや、琢磨の見せ場も作ってあるんだから、そこでドーン！

と派手に魅せたいじゃん」

「見せ場って……ドラムソロやらせんのか？」

「勿論！ いまいち地味で目立ってない琢磨を前面に出す、いい機会だからな」

琢磨の為を思っているのか、それとも単に面白がっているだけなのか。

涼としては後者だと受け取ったのだが、当の琢磨はそれどころではないようである。

「ええつと……ここで右手でこちらを叩き、すかさず左手でこちらを叩く……」

シャドーボクシングならぬシャドードラミングの真っ最中だ。

どうやらかなり真剣にやっているようで、涼達の会話も耳に入っていないようだ。

「それに合わせてバスドラを……っと、どうもここでタイミングがずれるな……」

だが、何事も一朝一夕には行かない物のようである。

「これは家でも反復練習の必要があるな。しかし、ドラムセットなど持ち歩けんし……真、何か練習方法は無いか？」

「ああ、それなら電話帳でも雑巾でも、それをドラムに見立てて叩きやいいんだよ。配置は頭に入ってるだろ？」

「そんな物でいいのか？」

「それが基本だ。恵まれた環境でやってる素人なんていないぜ」  
要は思い通りに手足が動かせればいいのだから、何もフルセットのドラムを用意する必要は無いのだ。

どうも練習する対象が無いといけないような気がしてしまうのが素人の思考らしい。

「おっと、もうこんな時間か。 済まん、俺は稽古に行かねばならん」

「何だ、もうか？」

「済まん真、剣術の稽古はサボる訳にはいかんのだ。 ドラムの練習は家でやっておく」

「ま、しょうがねえか。 琢磨の祖父ちゃん、おっかねえからな」

以前、琢磨の稽古を見に行った時、いつもの調子で悪戯心を起こした真一郎は涼とチャンバラを始めてしまい、弦磨にどやしつけられた。

おまけに、

「そんなに竹刀が振りたければ、ワシが相手をしてやるっ」

と言われ、足腰立たなくなるまで打ち込みをさせられたのだ。

当然、真一郎の竹刀が弦磨に当たる事などある筈も無く、外れる度に一撃を入れられ、全身アザだらけになったのは言うまでも無い。だが、単にお仕置きの為だけにやった訳ではなく、どうやら真一

郎に何かを感じたらしい弦磨は、幾通りかの技を見せたりもしていた。

「あん時は三日間、身体中痛くて、便所に行くのもしんどかったからなあ……」

「あまり冗談の通じる人ではないからな、今後は気を付ける事だ。ではな」

スティックとペダルを鞆に収めると、それを小脇に抱えて、琢磨は軽く手を上げながら体育館を出て行った。

「うーん……三人合わせて練習出来る機会は、かなり制限されそうだな。何か考えとかねえと」

「おい真、それよりまだ詞が出来てねえだろ。そっちはどうすんだ？」

「ああ、それはお前が書け」

「俺がやんのかよ!？」

「当たり前だろ？俺は曲を作ったんだから、歌詞を作るのはお前の役目だろうが。たったの三曲だ、ちゃちゃっと書いてしまえ」

「ならお前が書けよ……」

とは言っても、真一郎が一度言い出したら聞かない事は涼も承知している。

他の人間ならともかく、涼の都合など真一郎の頭の中には入っていないのだ。

「涼にはボーカルもやってもらうからな」

「何でだよ!」

「琢磨はドラムで手一杯だし、俺様は他に色々やる事があって忙しいのだ。それに、歌詞を書いた奴が歌った方が気持ちがおもる」

「何だかんだ言い訳してるだけで、ハナから俺にやらせるつもりだつたんだろ……」

「おお、いつに無く鋭い。解ってんなら文句言わずにやれ」

「まったく……」

だが、真一郎に書かせたら、歌詞の内容がお笑いの方向へ行つて

しまう確率が高い。

メロディラインは悪くないのだから、それではあまりにも曲が不憫である。

「取り敢えず今日はお開きだな。明後日には琢磨も時間が取れるらしいから、それまでに一つだけでも考えとけよ、涼」

「はいよ……」

「それで、涼ちゃんが歌詞を考えてるんだ？」

おかずを盛り付けた皿をテーブルの上に置きながら雛子が言った。独り言ではなく、テーブルの向かい側には涼が難しい顔をして座っている。

今夜は環が地方へ出ている為、雛子が宇佐奈家の夕食を作っているのだ。

「ああ。まったくよ……真の野郎、全部段取り組んじまってから言うんだからなあ……」

そう言う涼は、何行か走り書きをした紙をクシャクシャと丸めてゴミ箱へと投げた。

帰宅してからずっと考えているのだが、なかなか良い歌詞が浮かんで来ないのだ。

幾つかのフレーズを書いては消し、また書いては丸めてしまうという行為を繰返すばかりだ。

「あそこまで組まれちまってたら、断るに断れねえよ」

「涼ちゃんの性格、すっかり掴んでるね」

雛子はクスクスと笑いながら言った。

事前に相談などしようものなら、涼はさっさと逃げてしまうだろう。

どうにもならない状況を作り出してからなら、余程の事でも無い限り涼は引き受ける。

無愛想ではあっても、基本的にはお人好しなのだ。

「なあヒナ、何かいいアドバイスくれよ。全然フレーズが浮かばねえんだ」

「そう言われても……わたし、歌詞なんて考えた事無いし」

「お前、ドラマの主題歌とか流行の歌とかかって、よく聴いてるだろ？ そういうところからでいいからさ、引っ張って来てくれよ」

「……それって盗作じゃない。駄目だよ、ちゃんと自分で考えなきゃ」

「人聞きの悪い事言うなよ。インスパイアと言ってくれ」

「涼ちゃん、言い訳が真君化してるよ？ さ、片付けて夕飯にしよう。考えるのはその後ね」

「そうだな、取り敢えずエネルギーを補給するか」

いそいそと食器を準備する涼を、雛子は楽しそうな表情で見つめている。

小学生の頃、涼には殆ど友達がいなかった。

毎日のように喧嘩してばかりで、ちっとも自分から折れようとなないのだから、それも当然である。

でも、中学生になった途端、二人も親しい友人が出来た。これは驚くべき進歩と言ってもいいだろう。

しかも、涼にも負けないくらいクセがある二人だというのに、コンビネーションもなかなか良い。

それに……。

「ねえ、涼ちゃん」

食事が始まってすぐ、雛子が口を開いた。

「ん？」

「海に行った後、利恵ちゃんと会った？」

「……何で楽しい夏休みに、必要以上にあいつの顔を見なければならんのだ」

「え？ だって……」

勢いに押されたとは言え、ハッキリと断ってもいないのだから、現段階で涼の恋人の座に納まっているのは利恵である。

雛子はそう考えていたのだが……。

「いいか、ヒナ。ちゃんと考えるとは言ったけど、俺はまだあいつと付き合うとか、そういう事は言っていないんだからな」

「でも、それじゃ……」

「いいから！ もうこの話はすんな、解ったな？ それに、今はそれどころじゃねえんだ」

涼は再びテーブルの上に紙を広げると、歌詞の走り書きを始めた。「食べ終わってからにしよう」

「時間が惜しい。明後日までに一つは書かなきゃなんねえんだ。間に合わなかったら、真に何言われるか判ったもんじゃねえからな」

「もう……」

早い話しが、これ以上利恵の話題を出されるのが嫌なのだ。

「一緒に食べてるのに、何だか一人で食事してるみたいなのがする

……」

「考え過ぎだ。俺も目の前で食ってる」

「喧嘩してる訳でもないのに、顔も見ないで食べるのって嫌だなあ

……」

「見たけりゃ勝手に見てろ」

「わたしだけ見てたってしょうがないと思う……」

「ヒナ、おかわり」

雛子の顔を見ないまま茶碗を差し出す涼に少々呆れながら、雛子はこれでもかという程ギツチリご飯を詰め込んだ茶碗を渡すのだ。た。



## 第十六章（前書き）

「永遠の追憶」本編第一部は、

```
http://www.digbook.jp/products|
info.php/products?id/7351?oscs
id"ff3d8bd5d83f041e11a60f121f4
83d8a
```

第二部は、

```
http://www.digbook.jp/products|
info.php/products?id/7448?oscs
id"ff3d8bd5d83f041e11a60f121f4
83d8a
```

にて販売致しております。

公開時の物に加筆・修正を施し、一枚だけですが挿絵を入れてあります。

## 第十六章

「うーん……」

翌日の学校。

廊下で涼が一晩苦勞して考えた歌詞を読みながら、真一郎は難しい顔をしている。

「一、二曲目は悪くねえと思うけど、三曲目はいまいちな」

「これでも駄目かよ……」

一応、一曲に付き二つずつ歌詞を考えて来たのだが、三曲目の歌詞だけは真一郎のお気に召さなかったようだ。

普段、真一郎に言い返す事が多い涼も、メロディや歌詞については素直にその言葉を受け入れる。

古い物も新しい物も、ジャンルにさえも拘りの無い真一郎の意見は、かなりの部分で的確なのだ。

「これでも一番考えたやつなんだぜ？」

「何つーのかな……言葉を飾り過ぎてて、逆に面白がねえんだよ、これ」

「こつちのは？」

「抽象的過ぎて何言ってるんだか解んねえ。オーディエンスに伝わらなきゃ詞の意味がねえ。受け取る側にもよるだろうけど、これはそれ以前の問題だな」

「注文の多い野郎だな」

少し寝癖の付いた頭をガシガシと掻きながら、涼は真一郎から歌詞の書かれた紙を受け取った。

「やれやれ、また考え直しか……」

「まあ、まだ時間はあるしさ。取り敢えず歌詞が出来てるのから練習始めようぜ」

「そうだな。……そう言えば琢磨の奴、家で練習するって言うってたけど、上手く行ってんのかな？」

「人の事よりお前だろ？ 琢磨の出来を心配するより、三曲目の歌詞を考える方が先だろうが」

「へいへい」

文字にはしていないが、少しイメージが固まりかけている物はある。

だが、どうにもそれが形を成してくれない……。

「何か取っ掛かりがありや、まとまりそうなんだけどな……」

「そういうのってさ、探すとなると見つからなかったりするもんだよな。ま、焦らず自然な流れに身を任せてみるよ」

「アバウトな……お前も少しは協力しろよ」

「書き上げた物に対して批評する。そして、それをより良い方向へと導く。それが俺様の仕事だ」

「編集者か、お前は」

「さて、琢磨を拾って体育館に行こうぜ。出来る時にやっとかねえと、合わせる時間が無くなっちまう」

まだまとまらない考えを抱えたまま、涼は体育館へと向かって歩き出した。

「うーん……」

帰宅後、涼は自分の部屋で机に向かい、かれこれ二時間の間ずっと真っ白な紙と睨めっこを続けている。

別に、こういった趣味がある訳ではない。

歌詞が全然浮かんで来ないので悩んでいるのだ。

「どうもピンと来ねえな……」

ギターを抱えて譜面を追ってみる。

奏でている内に、もしかしたら何か思い付くかもしれないと考えたのだが……。

「……だーっ！ 駄目だ駄目だ！」

一瞬、何か閃いたような気がしてペンを走らせてみるのだが、そ

れはすぐに書き損じとして丸められてしまった。

こういった事は一度ハマってしまうと、抜け出すまでに相当な時間を要するものなのだ。

まあ、呆気無く解決してしまう事が往々にしてあるのも事実だが、「大体、曲のタイトルが決まっちゃまってるのも、詰まる原因の一つだよな〜……」

一曲目は 『SCHERZIA PARTE』。

二曲目は 『BAD LUCK』。

そして、問題の三曲目は 『EXTRA ORDINARY

( ) ( ) 』。

各曲のタイトルは真一郎によって既に付けられていた。

勿論、それが変更される事など無い。

「素晴らしい事……楽しい事でもいいのかな？ って言ってもなあ

…… イメージ湧かねえよ」

椅子の背凭れに身体を預けて、涼が少し後ろへ体重をかけた時、「…… だ〜れだ？」

「うわああっ!?!」

突然目隠しをされて、涼の目の前が真っ暗になった。

不安定な体勢の上いきなりの事で、涼は心臓が止まるかと思うくらいに驚いた。

すぐさま臨戦態勢を整えて振り返ると、

「あ〜、ビックリした……」

自分の胸に手を当てて、目を丸くしている利恵がそこに立っていた。

「脅かさないですよ」

「それはこっちの台詞だっ! …… って、何でお前がここにいるんだよ!」

「ん? ああ、お母様が勝手に入っていいって言ったから」

「何がお母様だ。大体この部屋の主である俺の許可を得てないだろうが! とつとと出て行けっ!」

「片道一時間もかけて訪ねて来た恋人に対して、何て冷徹な台詞を吐くんだろう……この人でなしめ」

「誰が恋人だ誰が！ 下らねえ事騙ってねえで、早く出て行けっつーの！ 俺は今、忙しいんだ！」

涼が大きく腕を振ってドアの方を指差すと、利恵はムっとした表情で歩き出し、顔を廊下へ突き出すと、

「お母様ー！ 涼がわたしに変態プレイを強要するんですうーっ！」  
階下の環に向かって大声で叫んだ。

「わーっ！ ふざけんな馬鹿野郎っ！」

涼は慌てて利恵の口を塞ぐと、部屋の中へ引きずり込んでドアを閉めた。

「でっけえ声で何て事口走ってんだ、お前はっ！ 近所にも聞こえちまうだろうがっ！」

焦る涼を涼しい顔で見つめながら、利恵は自分の口を塞いでいる涼の手をツンツンと突付いた。

外せとのアピールだろう。

「……でかい声出さねえって約束するか？」

コックリと頷く利恵を見て、多少疑いを持ちながらも、涼は手を放した。

「いきなり背後から口を塞ぐなんて……もしかして犯すつもりだったの？」

「誰がそんな真似するかっ！」

「わたしは構わないけど、出来ればもう少し段取り踏んでからにしてくれると嬉しいかも」

「あの子……。もう、頼むから勘弁してくれ……」

利恵と向かい合わせに座りながら、涼は頭をガシガシと掻いた。

困った時にやる、涼の昔からの癖だ。

「じゃあ、ここにいてもいい？ 許可してくれたら大人しくしてる」

「……」

「……服切り裂いて叫んじゃおうかなあ〜？」

「あー、もう！ わかったよ、いたけりや勝手にしろ！ でも、お前なんか構ってる暇ねえからな！」

倒れた椅子を引き起こすと、涼は利息を無視する事に決めて、再び机に向き直った。

いつもなら徹底抗戦の構えを見せるところのだが、今はそれどころではないのだ。

「……………」  
時計の秒針の音だけしかない部屋の中で、利息はチョココンと座っている。

大人しくしている事がここにいる条件なので、それを守っているのだ。

「……………」  
しかし、このままじつと座っているだけでは、ここに来た意味が無い。

座るだけなら家でいいし、だいいち涼と話が出来ないのでつまらない。

「ねえ、何してるの？ 宿題？」

大人しくしているのだから、声をかけるくらいはしてもいいだろう。

喋るなどは言われていないのだし。

「……………」  
「明日の予習？ あ、今日の復習かな？」

「……………」  
しかし、涼は一切リアクションを返して来ない。

利息の事を構わないと宣言したのは、どうやら本気のようなのだ。

そこまで真剣になって何をしているのか気になった利息は、ちよこちよここと近付き、涼の肩越しに手元を覗き込んだ。

机の上には数枚の譜面と、真っ白な紙が並べて置かれている。

「譜面……………？ ねえ、これって涼が書いたの？」

「……………」

「涼って譜面読めるんだね。 ……ねえ、ギターがあるけど、弾いたりするの?」

「……………」  
「ねえ、返事くらいしてよお。 わたし、約束通り大人しくしてるでしょ?」

「……………」  
「ねえってばあ、ねえ」  
「……………」

あまりにも返事をしてくれないので、利恵は涼の肩を掴んでユサユサと揺さぶってみた。

だが、涼は徹底して利恵を無視しているらしく、完璧に無反応である。

そんなシチュエーション下で利恵がいつまでも大人しくなど出来る筈も無く……………」

「お前は耳無し法一か、こらあーっ!」  
そう叫ぶと、涼の耳を掴んで思い切り引っ張った。

「いててててっ! 邪魔すんじゃねえっ!」  
「返事くらいしてくれてもいいじゃんかあーっ! さっきから何をしてるんだ貴様ーっ!」

「この野郎! 大人しくしてるって約束はどうしたんだっ!」

「何してるのか教えてくれない涼が悪いんだーっ! 何でそんなに意地悪するんだよおっ!」

「干切れる干切れるっ! わかった、教える! 教えるから放せ!」  
どうにか開放された涼は、真一郎に頼まれて歌詞を考えているのだが、考えあぐねている事を話して聞かせた。

だが、襲撃される事を恐れて、文化祭については内緒にしておいた。

もし乱入されて、全校生徒の前で彼女宣言などされてはたまったものではない。

「タイトルは? ……フムフム」

「お前が見たつてしようがねえだろ？　かせよ、まだ考えなきゃなんねえんだから」

再びギターを抱えると、もう一度譜面を追って奏でてみる。

今までに聴かされた真一郎の曲とは違って、珍しく曲調が静かで柔らかい。

（ふうん……？　改めてちゃんと弾いてみると、意外にいい曲だな……あいつにしちゃ珍しいや）

弾いている内に、いつしか涼の頭の中は何も考えていない状態になった。

さっきまでの騒々しさが嘘のように、利恵も大人しく聴き入っている。

「……いい曲だね。　涼が作ったの？」

「いや、真だ」

「ふうん……。　涼、この曲気に入ってるでしょ」

「何で？」

「優しい顔で弾いてるから、きっと好きなんだろうなって  
優しい顔？」

自分は今、どんな顔でギターを弾いていたのだろうか……？

歌詞が浮かばなくて頭を悩ませているというのに、優しい顔などするものなのだろうか？

「難しく考える事無いじゃん」

「へ？」

「自分の周りにいる人の事とか、自分が感じてる普段の事を書けばいいんだよ。　折角それらしいタイトルになってるんだし、そんな歌詞ならその曲にも合うと思うよ？」

「俺の周りの人間……？」

何か……涼の頭の中で、ボンヤリとはあるがイメージが湧きか  
けた。

今まで感じていた物とは違う何か……。

「そ！　例えばあ……わたしの事とか。　どう？」



「駄目だ……。今の一言でイメージが綺麗サツパリ消えた……」

「失礼ね！ 何だよ！」

「いくら俺でも、そんな惨い事は言えない」

「泣かす……いずれ必ず泣かす！」

涼はクスッと笑うと、拳を握る利恵の頭に手を置いて乱暴に動かした。

「ちょ、ちょっとお！ やめてよ、髪がグシャグシャになっちゃうでしょ！」

「……ありがとな」

「な、何よ急に……」

「大分遅くなっちゃったから、そろそろ帰れ。今日は送ってやるから」

「もしかして、わたし本気で邪魔？」

「そうじゃねえよ。……今日はな」

再び利恵の頭を軽くクシャクシャとやると、文句を言う利恵の先に立って、涼は部屋から出た。

環に挨拶をして宇佐奈家を出ると、外はもうすっかり暗くなっており、空にはいくつかが星が瞬いていた。

バス停まで歩く途中、立派な桜の木のある公園の脇まで来た所で、  
「しかし……お前も変わってるよな」

今まで無言で先を歩いていた涼が立ち止まり、不意に口を開いた。  
「何が？」

利恵も合わせて立ち止まり、涼の隣りに並んだ。

「普通、こんな事する奴いないだろ？ いきなり彼女になる！ って宣言したり、俺が無視しても押しかけて来たり……下手すりゃストーカーだぞ」

「あは、そうかもね。でも、わたしメゲない性質だから」

「俺が本気で怒ったらどうするんだ？ つーか、お前を嫌う可能性を考えないのか？」

進んで他人と関わろうとしない涼にとって、利恵の行動は理解不

能である。

いくら気に入ったからといっても、自分なら決してしないような事を、利恵は当たり前のようにやるのだから。

「涼に対しては考えた事無い」

利恵はニコニコして、涼の顔を見ながら言った。

「何で？」

「何だかんだ言っても、わたしを無理矢理追い出そうとしないから」

「……」

確かに、最近は利恵が涼の家にいる事が不自然に思えなくなっている。

逆に、時々無意識に探している事もあるくらいだった。

「いくら何でも、相手が本気で嫌がるような事はしないよ。……」

まあ、多少迷惑になっちゃう事はあるかもしれないけど」

「自覚はある訳だ？」

「当たり前でしょ？ だから涼と手を繋ぎたくても我慢してるんじゃない。涼ってさ、基本的にそういうの嫌いでしょ？ 何となく判るんだ」

「……」

確かに、これだけ騒ぐ割には、利恵は必要以上に涼とくっ付こうとはしない。

適度な距離を保ちつつ、それでも決して離れて行かないのだ。

「なんか……見事にお前の策略にはめられてるような気がして来た

……」

「いいじゃない。　　いっそ一生はまっつてよ」

「アホ」

再び涼は歩き出した。それに続いて利恵も歩き出す。

少し微妙な距離……近過ぎず、離れ過ぎてもない。

少し手を伸ばせば、すぐに届く距離。

（何でだろうな……何となく、居心地がいいって感じがするのは……

…)

そう……それは、いつも雛子が心がけている距離と同じだ……。

「一生か……ま、それも面白いかもな」

「ん？ 何か言った？」

「何も言わねえよ」

「嘘だ。今、絶対に何か言った」

「耳鳴りがしてんじゃねえのか？ 耳鼻科行け」

「わたしは健康だ！ 耳だつて素晴らしくいいんだぞ！」

「そうか。じゃあ大事に使えよ、一生もんなんだから」

「こら、誤魔化すな！ 何て言ったのか教える！」

「あゝ、うるせえ……」

少しスピードを上げた涼に遅れまいと、利恵も歩く速度を上げた。さっきよりもほんの少しだけ、二人の距離が近くなったようだった。

翌日の放課後。 体育館では涼達のバンドの練習が行われていた。

三曲目まで通して演奏し終わったところで、真一郎が口を開いた。

「なかなかいい感じに書けたじゃん、これならOKだな。 琢磨、

どうよ？」

「ああ、俺もこれでいいと思うぞ。 聴いていて楽しい気分になる。

こつこつ曲を主体でやるのなら、今後も参加して構わん」

どうにかこつこつに書き上がった歌詞。

曲に乗せてみたところ、どうやら真一郎の満足のいく物に仕上がっているようだ。

琢磨も何とか基本的な事は出来るようになり、それほど高度なテクニクは使えないものの、途中で演奏が止まってしまうような事は無くなった。

「昨夜一晩かかったからな……これでダメだつて言われたら、俺は暴れるぞ」

「けど、聴いてて思ったんだけどよ」

「何だよ？」

真一郎は、そこでニヤッと笑い、

「これ……俺も知ってる奴の事書いてねえか？　なぐんかそんな気がするんだけどなあ……」

と言った。

「な、何の事だ？」

「ああ、俺もそう感じたぞ。　言葉の端々で普段の情景が連想されたからな。　ただ、所々解らん部分もあったが……」

「琢磨は想像力が豊かなんだな。　だからそういう連想が出来るんだ、うん」

「うぷぷ。　琢磨の目は欺けても、俺様は誤魔化されんぞ。」

……で？　誰の事を書いたんだ？　ん？」

「さ、さあ！　もう一回練習しようぜ！　早いとこ形にしちまわねえとな！」

「そ〜かそ〜か、遂に観念したか！　じゃあ、文化祭には是非招待しなくちゃな」

真一郎は、ここぞとばかりに涼を苛め始めた。

これ以上無いくらいの上質のネタを、真一郎が使わない筈が無い。……なら、俺はバンドコンテストには出ねえ。　つーか、当日は

学校に来ねえ。　お前とは一生口きかねえ」

「言つと思つた……解つたよ、内緒にしとく」

「おい、練習しないのか？　体育館を借りられる時間は限られているのだから、もっと有効に使わねば勿体無いぞ」

「ああ、悪い。　んじゃ、最初からやろうぜ」

「どうだった？」

目の前に置かれたマグカップを手に取り、自分の口に運びながら  
利恵は言った。

「うん、みんな凄く上手だったよ。お客さんにも大好評だったみたい」

「そう。良かった」

ココアの甘い香りを楽しんでから、一口飲む……美味しい。

普通に淹れたのではなく、何か一つか二つくらい工夫をしてあるのだと思われる味だ。

これならお店で出しても違和感が無いだろう。

勿論、利恵の周りでこういった物を出せるのは、環か雛子しかない訳で……。

「涼ちゃん、授業中にも考え込んでたらしくて、先生に随分怒られてたみたいだからね」

利恵の向かいに座り、自分もココアを飲みながら雛子は笑った。

ここは佐伯家、雛子の自室である。

今はこうして小さなテーブルを挟んで、利恵と二人のお茶会の真っ最中だ。

「そういった噂って、やっぱりすぐにヒナちゃんの耳に入るの？」

「わたしだけじゃなくて、ほぼ全校生徒に知れ渡るかな？ ほら、

真君、涼ちゃんと同じクラスだから」

「それじゃ涼のすぐ傍に、広報カーに直結された盗聴器と監視カメラがあるようなもんだね、それ」

「あはは……確かにそうかも」

確かに、涼や琢磨に関する面白ネタは、すぐにあちこちに流されてしまう。

と言っても、どれも笑って済まされる程度の物なので喧嘩になるような事は無いが、それでも真一郎が二人に追い掛け回される光景は、既に翔峡中学名物になってしまっているのも事実だ。

「利恵ちゃんも見に来れば良かったのに、文化祭。楽しかったよ？」

「うん……それも考えたんだけどさ、やっぱり嫌がると思って」  
どうやら文化祭については、雛子の口から利恵の耳に入っていた

ようだ。

まあ、雛子に口止めしなかったのだから、当然と言えば当然である。

もつとも口止めたところで、逆に雛子に説教されてしまうのがオチだろうが……。

「そんな事無いと思うけどなあ？ 利恵ちゃん、気を遣い過ぎだよ」「ま、来年はお邪魔するよ。その頃までには、涼を完璧に落としてみせるから」

自信満々に言う利恵を見て、雛子は少しだけ笑った。

正直に言えば、利恵の口からそういう類の言葉を聞いた時、ちょっと寂しいような、切ないような、複雑な気持ちにはなる。

けれど、それが自分の選んだ道なのだからと、雛子は決してそういう感情を表には出さない。

そう……それは自分で決めた事なのだから……。

「そしたら一緒に見て回ろっね、利恵ちゃん。わたし、色々と案内してあげる」

「うん、楽しみにしてるよ。あ、うちの文化祭は来週だから、良かったら遊びに来てよ」

「うん、絶対に行くよ」

同じ相手を想い、同じ気持ちを抱えた二人のお茶会は、けれど穏やかに、和やかに……。

そして……。

擦れ違つ女子生徒達が、みんな涼達を見てクスクスと笑う。

いや……女子ばかりでなく男子の中にも、あからさまに大笑いしている者達がいる……。

「いや、優勝出来なかったのは残念だけど、特別賞貰えて良かったな、琢磨」

「……黙れ」

「曲の評判も良かったし、みんなに気に入って貰えて良かったよな、涼」

「……うるせえ」

学校の廊下で人目を避けるようにしている涼と琢磨は、何故かかなり不機嫌な様子だ。

先日行われた文化祭でのバンドコンテスト。

真一郎の言うように、惜しくも優勝こそ逃がしたものの特別賞は貰えたし、何より生徒達からの評判も良かったというのに、二人は真一郎とは対照的に浮かない顔をしているのだ。

と言うのも……。

「あ、色男だ！」

「ねえねえ、今度はいつ色男やるの？ あたし絶対に聴きに行くから、ちゃんと教えてね！」

「よう、またやってくれよな、色男。期待してるぜ！」

三人でいると、決まってそう声をかけられるようになってしまったからなのだ。

「ありがと〜皆さん！ ご期待に沿えるよう、今後も精進しますよ〜！」

「この野郎は……！」

「ふざけた名前でエントリーしおって……！」

そう、涼達のバンド名は『色男』。

勿論、二人がそんな名前を付ける筈も無く、命名したのは真一郎である。

当然、その事は当日まで伏せられていた。

「まあまあ、いいじゃん。一発で覚えてもらえたんだしさ、気にしない気にしない」

「卒業まで、ずっとあんな呼び方されるんだぞ！ お前は平気でも、俺は死ぬ程恥ずかしいわっ！」

「いや、下手をすれば一生……この手の事は同窓会でも話題にされ

るだろう。悪夢だ……」

「ああ、成る程。いや、そこまでは考えなかったな」  
「考えろっ!」

「真に任せるべきではなかったな、涼……」

ともかくにも、涼達の文化祭は無事に終了した。

だが、翌週行われた利恵の学校の文化祭に行ったのは、雛子と真一郎の二人だけだった……。



## 第十七章

頭痛と寒気と全身の節々の痛み。これは実際にフルコースで喰らうと、思った以上の辛さがある。

それに、喉が痛くて咳も出るし、妙に鼻がムズムズして……。

「へっくクシヨイツ！」

「きゃあ！……もう！クシャミする時は口に手を当てるか、顔をそむけるかしなさい！」

モロにクシャミの直撃を受けた雛子は、手にしたタオルで顔を拭きながら抗議した。

「ワザとじゃねえんだよ……身体が思うように動かねえから間に合わなかったんだ」

「じゃあ、暑いとか息苦しいとか文句言わないで、マスクしたまま寝なさい！」

「病人に冷たく当たるなよ、ヒナ……ゲホゲホ！」

ベッドの中で涙目になりつつ、涼は情けない声で雛子に訴えた。

今度は、ちゃんと口に手を当てられたので、雛子に叱られる事は無かった。

「あゝ、参った……」

滅多にひいた事の無い風邪をひき、涼は心底参っていた。

普段健康な人が病気になる、未体験の症状に襲われる為に心の準備が出来ず、ダメージが大きいのである。

「あ、体温計鳴ってる。はい、出して」

涼の手から体温計を受け取ると、雛子は液晶画面に視線を落した。

「三十九度……下がらないなあ……」

普段は寝込むような事は無いのだが、今回の風邪は性質が悪いらしく、涼の熱は一向に下がる気配を見せない。

医者から解熱剤も貰ってはいるのだが、あまり目立った効果は無い。

体力があるから余裕があるように見えるが、身体はかなり衰弱している筈である。

氷枕を敷き、氷嚢をおでこに当ててあるのだが、ここまで高熱が続くなら、腋の下や大腿部にも氷を当てる必要があるかもしれない。

「……なあ、ヒナ」

「ん？」

「あいつ、何か言ってたか？」

「あいつって？ …… ああ、利恵ちゃん？」

一応、利恵の学校の文化祭に、涼は遊びに行くつもりだったのだ。利恵にしつこく言われたせいもあるが、翔峡中学での文化祭を内緒にしていた事で、気が引けていた為もある。

たまには利恵が喜びそうな事をしてやってもいいかな？ くらいに考えたのだ。

しかし、運悪く前日から風邪をひいてしまい、結局行けずじまいだったのである。

やはり慣れない事をするものではないな……と、涼は心底思った。

「凄く心配してたよ？ ねえ、どうしてお見舞い断っちゃったの？」

「恩を売りつけられるのはまっぴらだからな」

「またそういう事言う……」

利恵だけでなく、琢磨と真一郎の見舞いも、涼は断っていた。

風邪をうつしては申し訳無いという気持ちからだった、それをそのまま言うのは照れ臭いのだ。

当初、利恵の学校の文化祭には行かずに看病しようとした雛子だったが、

「いいって。 そんな事したら、またあいつがうるせえだろうが。」

俺は大丈夫だから行って来い」

と、涼にしつこく言われて、止む無く真一郎と共に行く事にしたのだ。

「あゝ……腰が痛え……」

熱があるせいだろう、身体中の関節が悲鳴を上げているような感

じだ。

そのせいで寝返りを打つ気力すら湧かない。ずっと同じ姿勢でいるせいで、余計に腰が痛むのだ。

「くそ……。ヒナ、何か作ってくれよ。腹一杯食って体力回復してやる……」

「駄目だよ、涼ちゃん。身体が弱ってる時にたくさん食べると、消化で体力を使っちゃうから却って良くないの」

「こついう時にだけでいいから、真くらいの強靱な消化器官が欲しいな……」

雛子がチラリと時計を見ると、十一時を少し回ったところだった。薬も飲ませなければならぬし、そろそろ昼食の支度をしなくてはいけないだろう。

本来ならば親がするべき事だろうが、生憎と環が仕事を休めず、こつして雛子が涼の世話をしているのだ。

……まあ、それは大して珍しくも無い事だが。

「それじゃ、何か軽い物作って来るから、大人しく寝ててね」

と、雛子が部屋から出ようとする時、

「ヒナ、リクエスト、いいか？」

しゃがれた声で涼が言った。

「何？」

「分厚いサーロインと丼飯。サイドオーダーはベークドポテトにチーズとサワークリームとチャイブスと刻んだベーコンを乗せてくれ。それから山盛りのサラダにコーヒー」

「全部却下！ わたしの話し、聞いてなかったの？ 軽い物じゃないや 駄目なの！」

「……じゃあ、コーヒーだけでもいいから」

「風邪ひいてる時のコーヒーは駄目！ 昨日も言ったでしょ？ まったくもう……」

雛子は呆れ顔のまま部屋を出て行った。

「ちくしょう、コーヒーも飲めねえのかよ……ゲホ！」

幸いにも食欲は減退していないので、涼としては栄養補給を最優先事項と考えたのだが、どうやらそれはいけないらしい。

おまけに大好きなコーヒーも飲めないと来ては、さすがに精神的にも辛い物がある。

そのシヨックかどうかは判らないが、意識が朦朧として来たような気がする。

やがて三十分ほど経った頃、雛子が土鍋を持って部屋へ戻って来た。

「涼ちゃん、身体起こせる？」

一旦、土鍋を机の上に置くと、ベッドの傍へ折りたたみ式の小さなテーブルを寄せて、雛子はその上に土鍋を乗せた。

「ん……何とか……」

「雑炊作って来たから、食べてお薬飲もう」

「雑炊かよ……」

「……文句言うなら自分でやりなさい」

涼は不満気に言ったが、土鍋の蓋を開けると途端に表情が変わった。

「すっげえいい匂いがする……」

しょうがと醤油の匂いが涼の食欲をそそる。

鶏肉とニラが入っていて、それを卵で閉じてあるのだが、見た目にも美味そうである。

やはり雛子を作っただけあって見映えがいい。

「腕は通さなくていいね」

雛子は掛け布団の上に乗せたままになっているドテラを、涼の肩にかけた。

そして、おもむろにレンゲを手にとり、

「フーフーしてあげようか？」

「ふざけんな……貸せよ」

真一郎なら自分から頼みそうだが、風邪で弱っていてもそこは涼の事、そういう言葉には乗らないのだ。

雛子はクスクスと笑いながら、涼にレンゲを手渡した。

暫し無言のまま黙々と食べ、薬を飲んだ後、涼は少し眠ると言ってそのまま目を閉じた。

「さて、じゃあ片付けちゃおうかな」

空になった土鍋を持って、雛子は部屋を出て行った。

とりあえず一旦は自宅に戻るとして、この後はどうしようか？

夕飯を作りに来るのは勿論だが、掃除機などをかけて騒がしくするのはどんなものだろうか？

二階にはそれほど大きく聞こえないだろうけど、せつかく眠っているのに起こしてしまつては良くない。

今の涼は静養するのが一番の急務なのだから。

「今日のところは、わたしも大人しくしてる方がいいかな？」

幸い今日はお天気も良いので、洗濯物を干しっ放しでも心配無い。

土鍋を洗いながら夕食の献立を考えつつ、雛子はとりあえず各所の乾拭きだけでもしておこうと思った。

そして、時間は静かに流れた……。

何となく良い匂いを嗅いだような気がして、涼の意識が徐々に現実の世界へ戻つて来た。

妙に身体が軽いような感じだ……今まで感じていた辛さが薄らいでいる。

それに、何だか心が落ち着いているような気がする……とても寝心地が良いのだ。

「……？」

小さい頃に、これと同じ感覚を味わった事がある。

やはり風邪をひいて寝込んでいた時だった。

その時は、確か……。

柔らかい物を感じてそちらに顔を向け、やがて薄っすらと開けた

目には、暗闇だけが忍び込んで来た。

「真っ暗だ……雨戸がしまってるのか？」

手探りで、頭の方にあるスイッチを探す。

ベッドの縁に、小型のライトを取り付けてあるのだ

小さなスイッチを探し当てて押すと、その小ささに見合う小さな音がして、同じくらいに小さな明かりが灯った。

そして、その、ほの白い中に映し出されたのは……。

「……何やってんだ、こいつは」

隣りですやすやと眠る利恵の顔だった。

さすがにまだ完全復活していない為、いつものようにベッドから飛び起きる事も出来ず、

「起きろよ……ったく、人が具合悪くて寝てる時に……」

涼は利恵の肩を突付くように揺さぶった。

だが、完全に深い眠りに落ちているのか、利恵は全然目を覚まさない。

「随分寝たような気がするなあ……今、何時だ？」

起こすのを諦めた訳では無いが、とりあえず現状を確認するのが先だ。

上半身だけ起こして、枕元に置いてある腕時計に目をやると……。

「……一時？」

七時に夕飯を摂ったのだから、昼である筈がない。

時計が狂っていないのであれば、今は深夜の一時である。

と、その時、部屋のドアが静かに開いた。

「あ、涼ちゃん、起きてたの？」

「ヒナ……こいつ、何でここにいるんだ？」

「やっぱり心配で、家でジッとなんてしてられないんだって」

「いや、そうじゃなくて、何で俺のベッドに潜り込んでるのかって訊いてんだよ」

雛子はクスクス笑いながら、洗面器を持って涼の傍まで近付いた。「利恵ちゃん、ずっと涼ちゃんに付きっ切りだったんだよ。汗拭

いたり、氷嚢の氷やら氷枕やら取り替えたり……凄く一生懸命だった。お蔭で他の用事が出来たから助かった」

「……」  
そのせいで疲れて、こんなにグツスリと眠っているのか……と、涼はちよつと申し訳無いような気持ちになった。

いくら体力があると言っても中学生の女の子だ、疲れて当たり前だろう。

ましてや病人の世話など、そんなに何度もした事がある訳も無い。「お家の方には、わたしの家に泊まるって言っているから、心配しないだね」

「だ、誰が心配なんぞするかっ！」

「シーツ！ 利恵ちゃん、起きちゃうでしょ」

「起こさなきゃ駄目だろうが。こんな所で寝かせて、風邪がうつたらどうすんだよ」

「ん……そしたら、涼ちゃんが看病してあげないとね。今日はずっと面倒見てくれてたんだから」

「そういう事じゃなくて……！」

「シーツ！」

ちよつと責めるような雛子の視線に、涼は黙らされてしまった。

どうも子供の頃から、この視線には弱いのだ。

「ところで、どう？」

「何が？」

「体調。熱、まだあるかな？」

言われてみると、まだ若干のダルさは感じるが、酷いとまでは行かない程度だ。

関節の痛みも殆ど無いし、喉の痛みも和らいでいる。

涼がそう言つと、

「じゃあ、今夜一晚グツスリ眠つたら大丈夫かもね」

雛子は微笑んだまま、部屋を出て行こうとした。

「お、おい、ヒナ！ こいつ、どうすんだよ！」

「変な事しちゃ駄目だからね？　また風邪が酷くなっても知らないよ？」

「アホか！　問題はそこじゃねえだろ！」

「一晩くらいいいじゃない。そのまま寝なよ」

「あんな……！」

「いいから寝かせてあげて。　利恵ちゃん、本当に疲れてるんだから。　わたしは一階にいるから、何かあったら内線で呼んでね。」

「じゃ」

そう言つと、雛子は涼のいう事になど耳を貸さなのまま、ドアを閉めてしまった。

ベッドの横の折りたたみ式テーブルの上には、もう用済みになってしまった洗面器とタオルが置かれたままになっている。

「……」

涼が困つたような視線を落しても、利恵は相変わらず穏やかな顔で眠つたままだ。

「何を幸せそうな顔してやがんだ、こら」

涼が鼻を摘むと、利恵は少しだけ眉間に皺を寄せて、鬱陶しそうにその手を払つた。

だが、依然として目を覚ます気配は無い。

少し冷えたのか、くしゃみをしそうになって、涼は慌てて自分の鼻を抑えた。

「つたく……しょうがねえな」

そのまま布団に潜り込むと、少しだけ利恵の方へ寄つて、掛け布団から利恵が出ないようにした。

何の警戒心も無いまま眠っている利恵の顔を暫く眺めると、

「……ありがとよ」

一言だけ言つて、涼はクルリと背中を向けた。

その後、数分もしない内に再び眠りについた涼は何故か、幼い頃に雛子と一緒に眠つた時の夢をみた……。



## 第十八章

抱き付くつもりは無かった……それは本当だ。

だが、真一郎に押されたとは言え、結果的に抱き付いてしまった事に変わりはない。

そして、それを密かに嬉しく思う心があった事も事実だ……それは認める。

だが……。

「あ、何だ琢磨君か……驚いちゃった。どうしたの？ いきなり」

「さっ！ さ、さ、さ、佐伯っ！？」

学校の廊下で真一郎に突き飛ばされ、倒れ込んだ先に雛子の胸があった。

それは本当に偶然で、決して琢磨が意図的に倒れ込んだ訳ではなかったのだ。

けれど……。

「琢磨君も、こんなお茶目するんだね。ちょっと意外だったな」

「ち、違っんだ！ 今のはわざとではなくて、その……事故で……」  
琢磨が慌てて両手を振りながら言うと、

「……嘘吐き」

どこことなく厭な印象を受ける笑みを浮かべながら、雛子は言った。  
「本当はこうしたかったんでしょ？」

雛子の両腕が伸びて来て、琢磨をその胸に抱きしめた。

『ふにゅん』と柔らかい物が琢磨の顔を包み込む……。

「ち、違う！ 俺はそんな事は考えていない！」

「嘘」

「嘘じゃない！」

「じゃあ、どうしてそんなに嬉しそうな顔してるの？」

嬉しそうな顔？

今、自分はどんな顔をしているのだろう……？

「さつきから全然抵抗しないし……それって嬉しいからでしょ？」  
確かにそうだ……。

どうして抵抗しないんだ？  
どうして……。

「琢磨君、他にはどんな事して欲しい？ 何でもしてあげるよ？」  
何でも……？

「琢磨……」  
ゆっくりと雛子の顔が近付いて……。

「……！」

思い切り開いた琢磨の目に飛び込んで来たのは、見慣れた天井と、  
何やら複雑な表情を浮かべた母、華末砂の顔だった。

「お……お母さん……？」

「大丈夫？ 琢磨。 珍しくうなされてたみたいだけど……変な夢  
でも見たの？」

「夢……？」

布団の上上半身を起こし、今さつきまで見ていた夢を思い出し  
てみた。

どんな夢だったろう……はっきりとは思い出せない。  
うなされていたのだから、厭な夢だったのだろうか？

「……何となく記憶には残っている感じなんだけど、よく憶えてい  
ないみたいだ」

ちらりと時計を見てみると、今日はいつもよりも寝てしまった事  
が判った。

普段は目覚ましを使わなくても六時には目が覚めるのに、今は八  
時を回ってしまっている。

ちなみに、今日は日曜日なので学校はお休みである。

「夢ってそういう物なものね。 もう起きる？ なら、今日はいい  
お天気だから、お布団を干しましょう」

「はい。 お父さんは？」

「今日は体調がいいみたいで、六畳間に入ってるわ。 いいモチー

フが見つかったんですって」

琢磨の父、翔磨がアトリ工代わりに使っている六畳間は、普段は書斎として使われている。

まあ、書斎と言っても翔磨と琢磨が読む本をしまっただけのごく普通の部屋だ。

「さ、顔を洗って、ご飯を食べなさい。居間に支度してあるから」

「はい」

パン！ と一度だけ自分の頬を叩くと、琢磨は布団から出てすぐに着替えを済ませる。

そして背筋をしゃんと伸ばし、自分の布団を肩に担いで、キッチンとした足取りで部屋を出て行く。

そんな琢磨の行動には、寝起きと言っても一部の隙も無いように見える。

華末砂はそれを見て、時々無性に寂しくなる事がある。

確かに琢磨はしっかりした子だし、真面目で親孝行だ。

だが、あまりにも杓子定規な生活態度は、却って琢磨の可能性を奪ってしまう事になりはしないだろうか？

そのせいで、小学生の頃は友達らしい友達もいなかったのだから。

「宇佐奈君と掃部関君。それに佐伯さんか……」

何度が遊びに来た、中学生になってすぐに出来た友達。

琢磨は大層彼らの事を気に入っているようだが、果たして本当に琢磨の良い友人になってくれるのだろうか……。

「……心配し過ぎね」

翔磨の親族に昔から少し苦労させられて来た事もあって、他人との付き合いに臆病になっているのだろう。

両親共に一人っ子の華末砂には親類と呼べる存在が無く、そういった関係に少々不慣れな部分があるのだ。

それに大学時代の友人と言っても、翔磨を中心にして繋がっているようなものなのだから。

「しっかりしなきゃね、お母さん」

華末砂も琢磨の真似をして自分の頬をパン！ と叩くと、少し強く叩き過ぎたのか、ちよつと頬を摩りながら琢磨の部屋を出て行った。

「お父さん」

食事を終え、片付けを済ませた琢磨は、六畳間でカンバスに向かっている翔磨に声をかけた。

「ん？ ああ、琢磨か。食事は済んだのか？」

「はい。何か良いモチーフが浮かんだみたいだつて、お母さんが言っていたけど……」

翔磨の肩越しに覗いてみるが、そこには真つ白なカンバスがあるだけだ。

準備は済んでいるようだが、何かを描いた様子は無い。

「ああ、そうだ。だが、まだラフも描いていないよ」

「お父さんにしては珍しいね。いつもはすぐに描き始めるのに」

琢磨は油絵の具と油が匂う六畳間が好きだ。

小さい頃から嗅いでいるその匂いは、イコール父の匂いであり、当たり前を感じられる物だ。

それに、臥せている事が多かった父が元気な時にだけ、この匂いが嗅げるのだから、琢磨にとって嬉しい匂いなのである。

「ああ。今回の今までの物とは少し違うんだ」

そう言つて、翔磨は絵の具を溶かし始めた。

翔磨は主に植物性の油絵の具を使う。

何となく動物性の物の匂いが好きになれないのだそうだ。

乾燥油にも拘りがあるらしく、市販のオイルは使わず、必ず自作のサンシツクンドオイルを使う。

未加工のオイルを陽の光に晒すと同時に、空気にも触れさせて作るのだが、これがかなりの手間を食つ。

幅の広いガラス容器に水を入れ、その上に薄く油の層が出来るよ

うにし、水と油を度々かき混ぜるのだ。

しかも、それを二〜三ヶ月以上晒す。

それをしながら、翔磨は頭の中で絵の構成を決めて行くのだ。

「タッチを変えるの？」

「いや、題材そのものが違うというだけさ」

翔磨が描くのは主に静物画で、動物や人物などは滅多に描かない。少し考えるように自分の顎を摩ると、翔磨は綺麗に道具を並べ始めた。

「よく油絵は難しいって聞くけど、お父さんはそう感じた事は無い？」

油絵を描く基本的な方法は、顔料をリンシードオイル、またはポピーオイルで練った物を、テレピン油、リンシードオイル、樹脂などで溶き、板やカンバスに白い下塗りを施し、その上に筆などで描く。

水彩画と違って色々な手間がかかる為、琢磨にはそれが難しさと繋がって思える。

「そりゃあ思うさ。だが、小学生にだって油絵を描いている子がいるくらいだからね。要は何が自分に向いているかって事だけさ」

「成る程……」

「琢磨だって、剣術を難しいと思う事があるだろう？ それと同じだよ」

話をしながらも、翔磨の視線はカンバスに向いている。

どこにどんな線を引くか、あれこれ考えているのだろう。

「……済まないな、琢磨」

「何が？」

「わたしが浦崎流を継げれば、お前には普通の生活をさせてやれたんだが……」

「……それでも結局は俺が継ぐ事になったでしょ？ 早いか遅いかの違いだけだよ、お父さん」

浦崎家の子供は琢磨だけ……つまり、翔磨が跡を継いだところで、

結局は琢磨にお鉢が回って来るのだ。

「いや……そうだな……」

浦崎流を自分が継いだなら……それは、翔磨が健康体であつたら  
という前提だ。

もしも自分が健康であつたなら、子供は琢磨一人ではなかつたか  
もしれない。

さっきの言葉にはそういった意味合いも込められていたのだが、  
それは言つても仕方無い事だ。

翔磨はそれ以上の台詞を飲み込んだ。

「琢磨、今日も稽古か？」

「今日は会合があるとかで、お祖父さんからの稽古は無いよ。休  
むか自分で稽古をするか、好きにしるつて言われてる」

「そうか……なら、今日は休んで遊びにでも出かけたらどうだ？」

あまり根を詰めて稽古するのもどうかと思つし、折角の休日に家に  
こもっていたんじゃないだろう？」

「え？」

稽古を一日休んだら、取り戻すのに三日かかる。これは祖父か  
ら常々言われている事だ。

たとえ休日と言えど、琢磨の頭の中には稽古を休むという考えは  
ない。

それに、急に出かけると言われても、琢磨には何をしても良いか解  
らない。

「いいよ。どうせ休むなら、ちゃんと身体を休めないよ。それ  
に、今日はお父さんが絵を描くのを見ていたんだ」

「おいおい、じつと見られていたら描けないよ。わたしは人に見  
られていると集中出来ないんだ」

道具を準備しながら、翔磨は苦笑した。

「お前、友達が出来たと言っていたらどう？ 電話してみたらどう  
だ」

小さい頃から剣術の稽古ばかりで、ロクに遊ぶという事をしなか

った琢磨に友達が出来た。

それも、かなり癖のある子だという事で、翔磨は大変嬉しく思っていた。

どうせ友達になるなら、一癖も二癖もある方がいい。そちらの方が断然、面白いに決まっている。

琢磨も同年代の子に比べたら充分に変わっているのだし、その方が馴染むのも早いだろうと思っっているのだ。

「でも、急に言ったら迷惑だよ。みんなにも予定があるだろうし」「それを確認する為の電話じゃないか。琢磨、友達というのは、そういう関係の人の事を言うんだぞ？」

「そ、そうなの？」

どうにも今まで友達付き合いという物をして来なかった琢磨には、その辺の事はよく理解出来ないようだ。

何しろ小さな頃から行く場所と言えば、学校の他には道場しか無いようなものだったのだから。

「その人との親しさにもよるが、変な遠慮は却って良くない。お前から誘いをかけるというのも、大事な事だ」

そう言われて、琢磨は少し考えてみた。

確かに以前と比べれば、誰かと一緒に過ごす時間が増えはしたが、あくまでも涼や真一郎に誘われて、それに付いて行くというだけだった。

それでは友達付き合いをしているとは言えないのかもしれない。

自分からも能動的に動いてみる必要があるだろう……と琢磨は思った。

「……そうだね、電話してみるよ」

「ああ、そうするといい」

琢磨が六畳間を出ると、翔磨はすぐにキャンバスに筆を走らせ始めた。

どうやら女性の絵を描くようだ。

「驚いたぜ。まさか、お前から電話が来るとは思ってたからな」

二人分のコーヒーを淹れて自分の部屋に戻って来た涼は、クスクスと笑いながら言った。

涼はトレーナーにジーンズと普段通りにラフな格好だが、琢磨の方はきちんとアイロンのかけられたワイシャツにスラックスといった具合で、二人の性格の違いが現れた服装である。

「そ、そんなに意外だったか……？」

本当は真一郎に電話しようと思ったのだが、折角の休日に説教だけして終る結果になりかねないと思い、持ち上げた受話器を置いたのだ。

「まあな。ほれ、飲めよ」

琢磨にマグカップを手渡すと、涼は琢磨の体面に胡坐をかいて座り、コーヒーを一口啜った。

さすがにコーヒー好きという事もあって、涼もなかなか上手くコーヒーを淹れる事が出来る。

香りと味に満足したのか、涼は軽く頷いている。

だが、琢磨は……。

「……苦い」

どうにもその味に馴染めないのか、一口飲んで顔を顰めている。

「涼、砂糖とミルクをもらえないか？」

「何だよ琢磨。お前、甘党か？」

「いや、特にそういう訳ではないんだが……涼はいつもこのまま飲んでいるのか？」

「酸味と苦味を味わうのに、砂糖とミルクなんて入れたら味が判らなくなっちゃうだろ？」

「そ、そういうものなのか……」

もう一口飲んでみる……が、やはりこの苦さには馴染めそうにない。



お茶の渋味は美味しいとさえ感じる事が出来るのだが、どうにも  
コーヒー独特の香りと味が、琢磨には合わないようだった。

涼から砂糖とミルクをもらい、よくかき混ぜてからもう一度飲んでみた。

幾分マシになったものの、やはり自分から進んで飲もうとは琢磨には思えなかった。

「今日はおば……いや、環さんも家にいらっしやるのだな」

一瞬 『おばさん』 と言いつうになつて、琢磨は慌てて言い直した。

先日の真一郎の惨状を見ている事もあつて、勢い慎重にならざるを得ないのだ。

何しろこの家の主なのだから、どこで聞かれるか判つたものではない。

おまけに地獄耳な上に神出鬼没だし……。

「ああ、日曜だしな。 地方へ行くんでもなけりや、休日は大抵家にいるよ」

「そうか。 ……とところで、いきなり押しかけて来てしまったが、本当に何も予定は無かつたのか？」

「ねえよ。 あつたら来ていいなんて言えないだろうが」

「それはそうなのだが……ほら、お前には恋人がいるのだろう？ その人と出かける予定でもあつたのではないかと思つてな」

「恋人？ ……ああ、あいつの事が」

涼は頭をガシガシと掻いた。

真一郎のせいで、琢磨はすっかり利恵の事を涼の恋人と思ひ込んでいるようだ。

もっとも、仲間内でそう思っていないのは、涼一人だけかもしれないが。

「琢磨、改めて言つとくぞ？ あいつと俺はただの知り合いで、恋人なんかじゃねえ」

「そうなのか？ では、お前は那人との交際を断つたのだな？」

「え？ いや……そういつ訳でも……」

「何だ、まだきちんと返事をしていないのか？」

「ああ……」

「まったく……そんな事でどうするんだ。先日、俺が言った事を忘れたのか？」

琢磨はただでさえ真っ直ぐな背筋を更にピン！ と伸ばして、涼に説教をし始めた。

「相手のある事だから、返事は早めにしなければいけないと言っただろう。お前にも考える時間は必要だったろうが、もういい加減返事をしなければいかん」

「そ、そりゃあ解ってるんだけど、こつ……何て言うか、何をどう言っただけ……」

「受け入れるか拒絶するか、二つに一つではないか。時間をかけたところで、その選択肢が増える訳でも減る訳でもなかつた」

「まあ……な……」

琢磨のいう事はいちいちもつともで、涼としては反論の余地が無い。

言っているのが真一郎や環なら何か言い返すところだが、琢磨が相手だと何故か逆らう気になれない。

きつと琢磨が真面目で、真摯な態度だからだろうな……と、涼は分析しつつ現実逃避していた。

「涼、聞いているのか？ 曖昧な態度はいかんぞ」

「はいはい、聞いてますつて。何だよ、今日は俺に説教する為に来たのか？」

「これは説教ではなく、友人としての忠告だ。やはりこつといった事はきちんとしないといかん。俺にはこつといった経験は無いが、それだけは言える」

結局、真一郎がいなくても説教する事になってしまっているのだが、琢磨はそれには気付いていないようだ。

どうにも涼と真一郎に対しては、何か一言を言わないといられないな

いようになつてしまつたらしい。

「ヒナにも顔合わす度に言われてるんだから、せめてお前くらいは言わずにいてくれよ……」

「佐伯……?」

雛子の名前を聞いた途端、琢磨の顔が赤くなつた。今朝方見た夢を、いきなり思い出したのだ。

起きた直後は忘れていたのに、どうして今、突然思い出したのだろうか? あの柔らかな感触を……。

「うわわわっ!」

琢磨は大慌てで顔を左右に振り、頭に浮かんだイメージを追い払おうとした。

だが、一度浮かんでしまつた物は、そう簡単には消えない。

「琢磨、どうかしたか?」

「い、いや! 何でもない! 気にするなっ!」

「何慌ててんだよ」

「ああああ慌ててなどいない! お前の気のせいだ! 見間違いだ! 勘違いだ! 見間違いも甚だしいぞ!」

「あからさまに怪しいだろ、その挙動は……顔、真赤だし」

「あ、赤いだと!? な、ならば、それは血行が良い証拠であつて、俺が健康だという事だ! お前は俺が健康だと不満なのか!」

琢磨は勢い良く立ち上がると、涼を指差しながら捲し立てた。

「言つてる事が滅茶苦茶だぞ、お前……」

何故か興奮している琢磨を見ながら、涼はゆっくりとコーヒーを啜つた。

真一郎に対して何か言う時には、もっと理路整然と正論を述べるのにと思ひながら。

「いいから黙れ! もう何も言うな! 男は無駄口を叩かないものだと昔から相場が決まつている! 然るに、昨今の若者は……!」

「お前が一人で喋つてるだけだつての……ちよつと落ち着けよ」

「お、俺は落ち着いている! 落ち着きが無いのは真だけだ! そ

もそも、あいつは……!」

「とりあえず座れ。今、お茶淹れて来てやるから大人しく待つてろ」

どうにも琢磨が舞い上がってしまったので、ここは一息つかせる必要がある。

普段はお茶を常飲していると言いつし、きっと慣れないコーヒーのせいで興奮が収まらないのだろう。

涼はそう考え、少し濃い目のお茶を入れてやろうと思った。

「……失敗した」

涼が部屋を出て少しすると、さすがに琢磨も若干落ち着きを取り戻し、先程までの自分の行動を振り返る余裕が出て来た。

ドアを背にしてクツションに腰を下ろすと、両方の頬をパンパンと叩き、顔を左右に振った。

「思い切り動揺してしまつた……まだまだ精神修行が足りていないという証拠だな」

しかし……と琢磨は考えた。

たかが夢を思い出しただけで、何故あそこまで動揺してしまつたのだろうか？

確かに、自分には女性に対する免疫が無く、女性に関する事柄で冷静さを欠いてしまう事は認める。

だからと言つて、夢の事であそこまで我を失ってしまうなど、どう考えてもおかしいではないか。

「原因は何だ……?」

琢磨は冷静に自己分析を始めた。

発端は今朝方見た夢なのだから、まずはその内容がどんな物だったか思い出す必要がある。

夢の内容……そうだ。

学校の廊下で真一郎に押されて、雛子に抱き付いてしまつた一件……それが微妙に違う形で夢に現れたのだ。

『本当はこうしたかつたんでしょ?』

夢の中の自分は、雛子の胸に顔をうずめて嬉しがっていた……？  
つまり自分は、常日頃からそれを望んでいる……？

「否！ 断じてそのような事は無い！ 俺は……！」

『じゃあ、どうしてそんなに嬉しそうな顔してるの？』

嬉しそうな顔……？

夢の中の自分はどんな顔をしていたのだろうか……？

『琢磨君、他にはどんな事して欲しい？ 何でもしてあげるよ？』

何でも……？ 『何でも』 とは何だ？

「俺は……一体何を求めているんだ？」

「お茶でしょ？」

「！？」

背後で聞こえた声に、琢磨は思い切り驚いて飛び上がった。

勿論、本当に飛び上がった訳ではなく、それくらいビックリした  
という事である。

「どうしたの？ 琢磨君。そんなに驚いて」

「さ、さ、佐伯！？ ど、どうしてここに……！？」

初めて見た雛子の私服姿……それは琢磨の目にとても新鮮に映っ  
た。

涼と違って寒さには強い雛子は、余程寒くならない限り、あまり  
厚着はしない。

今日は白いファーアンサンブルニットにスカートと軽装だ。

「さつき表で涼ちゃんに会ったの。 そうしたら琢磨君が来てるっ  
て言うから、遊びに来たんだ」

「お、表で？ りよ、涼はどこへ行ったんだ！？」

まさかこの場で雛子と二人きりにされてしまうとは思っていなか  
った為、琢磨は内心焦っていた。

そんな状態が続いたら、まともな会話など出来はしない。

「お茶菓子買いに行くって言った。 お茶だけ持って行くなんて

お前は馬鹿かって、おば様に言われたんだって」

雛子はクスクス笑いながら、琢磨の前に小さなテーブルを出し、

お茶の準備を始めた。

その動作の一つ一つはとても自然で、手馴れた感じを受ける。

「わたしが行こうか？　って言ったんだけど、わたしじゃ歩くのが遅いから、余計に時間がかかるって。　で、帰って来るまでの間、琢磨君の相手をしてってくれて言われたの」

雛子は涼のベッドを背にする形で、琢磨の右側に腰を下ろした。

座る場所を特に決めていない訳では無いのだが、小さな頃からの習慣で、涼の部屋では自然にそこへ座る癖が付いているのだ。

「そ、そうか……済まん」

淹れられたお茶を一口飲んでから、琢磨が言った。

だが、そのお茶の味がどういいう物か、琢磨には全く判らなかった。

「何が？」

「いや……お、俺の相手など退屈なだけだろう。　さ、佐伯の時間を無駄にさせて、申し訳無いと……」

「琢磨君、変」

自分もお茶を飲みながら、雛子は言った。

紅茶やコーヒーも好きだが、今はこの場に琢磨しかないのと同じ物を飲んでいるのだ。

「わたしは琢磨君が来てるって聞いて、それでここへ来たんだよ？」

「え？　だ、だが、涼に俺の相手を頼まれたと……」

「だからあ、表で会った時に涼ちゃんがそう言っただけだよ。　元々ここには来るつもりだったの」

「そ、そうか……済まん」

「また謝ってる」

雛子はクスクスと笑った。

何故だろう……こうしている瞬間が楽しいと琢磨は感じていた。

ごく普通に他愛も無い話をし、それで相手が笑ってくれる事が嬉しい。

涼や真一郎と話している時とはまた違う楽しさ……。

「琢磨君、今日はお稽古お休みなんだね」

「あ、ああ。　そ、祖父が会合に出ているのでな。　それで、ち、父にも言われて、こちらにお邪魔させてもらったんだ……」

「お父さんに？　何て言われたの？」

「せ、折角の休みなのだから、家に籠っていないで友達と交流を深めると……」

雛子との会話に楽しさを感じながらも、どうしても語尾が弱々しく、しばみがちになってしまふ。

母の華末砂以外の女性と話す時は、いつもこうだ。

まったく情けない……と琢磨は思った。

「そうだね、わたしもその方がいいと思うよ？　琢磨君、それでも稽古ばかりで、自分の時間が少ないんだし」

「そ、そんな事は無い」

細かい手の震えを雛子に悟られないように気を付けつつ、琢磨は湯飲みを両手で掴み、

「稽古は自分の意思でしている事だ。　誰かに強制されてしているのではない。　だから、俺は自分の時間を犠牲にしているなど思った事は一度も無い」

一度、二度と湯飲みを傾けてお茶で喉を潤すと、琢磨は続けた。

「稽古をして強くなり、祖父に認めてもらえるようになる……それが、今の俺の一番の目標なんだ。　そうする事で、俺もまた自身身を認める事が出来るようになる」

「……？　自分自身を認めるって？」

「あ、いや、認めると言うか……その……」

情けない自分を変える事が出来るかもしれない……とは言えなかった。

しかしこればかりは、いくら稽古を積んだところで難しそうである。

何しろ性格や性癖という物は、一朝一夕に変えられる物ではないのだから。

琢磨は残りのお茶を一気に飲み干すと、

「す、済まない、もう一杯もらえるか？」

完全に収まらない動揺を隠すように、少し慌てた感じで湯飲みを差し出した。

だが、それがいけなかった。

勢い良く差し出したせいで手が滑り、湯飲みが手から抜けてしまったのだ。

当然、湯飲みは雛子に向かって飛んで行く訳で……。

「きゃっ！」

飛んで行った湯飲みは、見事に雛子の胸を直撃した。

「あ……す、済まん、佐伯！ 大丈夫か！？」

「うん、大丈夫大丈夫。空になってたし、軽く当たっただけだから」

自然と、琢磨の目は湯飲みの当たった部分に行く。

勿論、琢磨の中に変な考えなど全く無かった。

しかし、その視線の先にあるのは……。

「湯飲み、洗ってくるね」

雛子はそう言うと、すっと立ち上がって部屋を出て行った。

その後を一瞬遅れて、仄かに良い香りが動いた。

何となく甘いような、それでいて酸っぱいような、何とも不思議な香りだった。

「化粧品匂いではないな……シャンプーか石鹸だろうか？」

正座をして、琢磨は呆けたように考えていた。

動悸が治まらない……風邪をひいた時のように顔が熱いのが判る。

「こ、これは一体……？」

雛子が部屋に入って来た時からそうだ。

落ち着こうとすればする程、気持ちに反して落ち着きが無くなっ  
て行く。

……いや、それは嘘だと琢磨は思った。

正確には、初めて雛子と言葉を交わした時からずっとだ。

目立たぬように、ひっそりと教室の隅にいた時とは違い、今では



クラスメイトとも話をするようになった。

女子が相手だともってしまふのは相変わらずだが、それでも雛子を目の前にした時のような反応はしない。

それは自分でも気付いていた事だった。

「自分に嘘は吐けんな……俺は、きっと佐伯が好きなのだろう……」  
だからこそ、今朝のような夢を見たのだ。

琢磨は大きな溜息を吐くと、そのまま顔を伏せてしまった。

「し、しかし……だからと言って、何をどうすればいいんだ？」

こういった経験など皆無の琢磨にとって、この感情をどう処理すべきなのかなど考えつく筈も無い。

誰かに相談すると言っても、親しい友人は涼と真一郎、それに雛子だけだ。

だが、当然、相談相手として雛子は除外である。

涼もどうやらその手の事には疎いようだし、そうなると残っているのは真一郎だけだが……。

「……ガソリンをかぶって火事現場へ突入するようなものだな」

という事は、誰にも相談出来ないという事である。

自分で考え、自分で行動する以外、どうしようもない。

「難しい……」

それはそうだろう。

ただ好きになったというだけで、具体的に何をどうしたいのかが判っていないのだから、何をどうしようもない。

切ない溜息だけが、琢磨の口から零れる……。

「どうしてそういうのしか頭に浮かばないのかなあ……」

再び背後から聞こえた雛子の声で、琢磨は一瞬ギクツとした。

自分の考えている事を見透かされたような気がしたのだ。

だが、雛子がそう言った相手は……。

「何だよ、何かおかしいか？」

「涼ちゃんが買って来たのって、スナック菓子ばかりじゃない。

それはお茶請けじゃなくて、おやつだよ」

「いいじゃねえか別に。それに琢磨は甘党じゃねえって言うしさ、それなら塩気のあるもんの方がいいだろ？」

「甘党とか、そういう事じゃなくて………だったら、お煎餅の方がいいと思わない？ お茶なんだし」

「年寄りじゃねえんだから。それに、俺はポテチが食べたかったんだ」

「結局、自分の好みだけじゃない………何これ、他のは殆どカレー味ばかり」

「もう買って来ちまったんだから文句言うなつての。おう、琢磨、待たせたな。どれでも好きなのを開けて食べよ」

ドサドサと無造作にテーブルの上へ菓子を落すと、涼は琢磨の向かい側へドツカリと腰を下ろした。

「もう！ そんな出し方する人がいますか！」

言いながら、雛子も先程と同じ場所へ腰を下ろす。

そしてすぐに琢磨の湯飲みにお茶を注ぎ始める。

勿論、テーブル上に広げられた、邪魔な菓子袋を片付けながらだ。

「ベタな返して申し訳無いが、ここにいる」

「わたしはギャグで言ってるんじゃないのっ！ いくら友達だからつて、そういう所はちゃんとしなさい！」

「最近、口やかましさが増したな、ヒナ」

「言われるような事ばかりするからです！」

目の前で展開する光景を、琢磨はただ啞然として見ていた。

何とも違和感の無い、本当に自然な会話だ。

特に雛子の口調は、琢磨に対する時のそれとは明らかに違う。

「あ、さっき飲みかけで出て行っちまったんだっけ………ヒナ、コーヒー淹れ直して来てくれよ」

すっかり冷めてしまったコーヒーの入ったカップを差し出しながら涼が言った。

「たまには自分でやりなさい」

「そう言わないでさ、な？ やっぱヒナが淹れた方が旨いし」

「まったく……こんな時ばかり口が巧いんだから……」

ぶつぶつ言いながらも、雛子はコーヒーを淹れに席を立った。結局は本心から嫌だと思っっている訳では無いのだ。

「参ったな……これでは敵わん……」

琢磨は軽く微笑むと、少し顔を伏せた。

雛子とこんな風に話す事など、琢磨には出来そうも無い。

「何だよ、好みの煩い奴だな。やっぱり煎餅の方がいいのか？」

「え？ あ、ああ……そうだな、お茶にはやはり煎餅だろう」

「年寄りくせえな……」

ガサガサとポテトチップの袋を漁りながら涼が言うと、琢磨は何かを思い出したように自分の膝をポンと叩いた。

「ところで涼、先程の話の続きだが」

「ん？ さっきの続き？」

「きちんと返事をしろという話だ」

「何だよ……その話はいって」

「良くはない。……何故お前は返事をする事を躊躇っているんだ？」

「え？」

躊躇っている……そう言われて、涼は不思議な気持ちがあった。

確かにそんな感情が無い訳でもない事に、今、気付いたのだ。

「佐伯がいるからか……？」

「おいおい、俺とヒナはそういう関係じゃないって。お前まで真

みみたいな事言っつなよ」

「では、何故返事をしてあげないんだ」

「何故って……」

だが、何故かと改めて訊かれると、明確な回答が出来ない。

受け入れてしまう事、それ自体には何の問題も無いし、難しくもないように思える。

断ってしまう事だって、それ程面倒でもないし、むしろそうする事によって色々と煩わされる事だって無くなるのだから結構な事だ

ろう。

けれど、それで利息という存在が消える事を考えると、何となく寂しいような、複雑な感情が顔をもたげて来るのも事実だ。

「彼女だって、いつまでもそれだけを待っている訳にもいくまい。」

お前は相手の時間も使っているのだという事を考えた事があるか？」

「……」

「無為な時間を使わせてはいかん。人が使える時間は限られているんだ。無駄に使って良い時間など、一秒たりとも無いんだぞ？」

「……俺さ、正直言ってそういう経験が無いから、何をどう言っているのか解んねえってのがあるんだよ。だから……」

「それは俺にも解る。俺もお前と同様、そういつた経験が無いからな。だが、求められた答えを相手に告げる事に、経験の有無は関係無かるぞ」

「そう端的にぶった斬られてもなあ……」

「要はお前の心の方向性が定まっていけないという事なのだろう？ならば今ここで、その方向を決める」

琢磨は目の前に置かれていた湯飲みを掴むと、グイッと一息に飲み干した。

「……随分と美味しいお茶だな」

さすがに今度は手も震えておらず、お茶の味もしっかりと判った。それだけ落ち着いているという事だ。

「お袋が前に講師をした大学が、契約農家から取り寄せてるんだって言うってたな。ま、俺にはどのお茶も同じに感じるけど」

「ほう？ さすが環さんは拘っておられるのだな……いや、そういう話ではなくてだな」

「解ってるって。……俺も、全然考えてねえって訳じゃねえんだ。最近じゃ、あいつの事も少しは解って来たからさ」

「そうか……」

「けど、お前に言われてやっと踏ん切りがつきそうだ。それもい

いかなって、ちょっと考えてたしな……」

「お前がどのような返事をするかまでは訊かん。だが、いずれにしても誠実に対応する事だけは忘れんようにな」

琢磨の言葉に、涼は軽く頷いた。

『それもいいかな』 という涼の言葉の意味は解らなかったが、それでもそれに曖昧な気持ちは感じられなかった。

涼の素直な気持ちがこめられていると感じられたのだ。

「コーヒ―淹れて来たよ。 はい、琢磨君にはこれ」

涼の前にカップを置くと、雛子は琢磨の前に菓子盆を置いた。

そこには、あられや煎餅などといった、お茶のお供が入っている。

「解った？ 涼ちゃん。 お茶菓子っていうのは、こつやっ出て出す物なの」

「そりゃ客に出す時だろ？」

「琢磨君はお客様です！」

言い合う二人を横目に見ながら、琢磨はあられを一口に入れた。醤油の味が、少ししょっぱく感じた……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4336a/>

---

～永遠の追憶～ Days of recollection

2010年10月17日04時57分発行